北埋調報 92

千歳市

キウス5遺跡
キウス7遺跡(2)
ケネフチ8遺跡

—北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成6年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

北理調報９２　『キウス５遺跡・キウス７遺跡・ケネフチ８遺跡』正誤表

頁	行	誤	正
記号等の説明	１２行		交点の記号の名称は21ページの図「グリッドの呼称」を参照のこと。これは、キウス７・ケネフチ８遺跡に関しても踏襲するものとする。
１０３	３行	図Ⅲ－59－1～8	図Ⅲ－59－1～9
	１７行	図Ⅲ－59－9～28	図Ⅲ－59－10～29
	２４行	b-2類（9～13）	b-2類（10～14）
１０５	３行	b-3類（14～24）	b-3類（15～25）
	１４行	b-4類（25～28）	b-4類（26～29）
	１８行	図Ⅲ－59－29～35	図Ⅲ－59－30～36
１０３・１０５	本文中		Ⅰ・Ⅱ群土器の記載にある図Ⅲ－59の遺物番号のうち4～35は一つ繰り下がって5～36となる。
１０５	２３行	図Ⅲ－62	図Ⅲ－61
１０６	２４行	図Ⅲ－65	図Ⅲ－64
１０８	４・２１行	図Ⅲ－65	図Ⅲ－64
	２１行	Ⅲ－66－45～54	45～54
１１１	１行	図Ⅲ－69	図Ⅲ－68
	４行	図Ⅲ－69～77	図Ⅲ－68～75
	１２行	図Ⅲ－69	図Ⅲ－68
１１２	２０行	図Ⅲ－70～77	図Ⅲ－69～75
	２１行	図Ⅲ－70－1～4	1～4
１１６	２６行	図Ⅲ－72～76	72～76
１２３	５行	（２）石器	（２）石器（図Ⅲ－76～81）
１２３・１２６・１３１	本文中		分類の右に記載されている図番号はすべて削除。掲載遺物番号と図版番号のみとする。 例：石核（図Ⅲ－79－49、図版Ⅲ－38）
１３５	本文中	図Ⅲ－88	図Ⅲ－85
	本文中	図Ⅲ－89	図Ⅲ－86
	本文中	図Ⅲ－90	図Ⅲ－87
	本文中	図Ⅲ－91	図Ⅲ－88
	本文中	図Ⅲ－92	図Ⅲ－89
	表Ⅲ－15	図Ⅲ－84	図Ⅲ－85
	本文中	図Ⅲ－85	図Ⅲ－86
	本文中	図Ⅲ－86	図Ⅲ－87
	本文中	図Ⅲ－87	図Ⅲ－88
	表Ⅲ－16	図Ⅲ－88	図Ⅲ－89
１６６	３１行	位置　X-2	位置　X-25・26
１７５	頁全体		別紙と差し替えてください。
２００	本文中	図Ⅴ－9	図Ⅴ－8
	本文中	図Ⅴ－10	図Ⅴ－9

特徴　Ⅴ層で確認した。不整形で周りに炭化物の範囲２ヵ所あり。
遺物　出土していない。
時期　縄文時代
LF-107（図Ⅳ-16）　LP-104の上位にある。
位置　P-28-b　　規模　1.28×0.71／0.08m
特徴　Ⅴ層の調査をほぼ終えた時点で不整形の暗色落ち込み(LP-104)の中に位置する焼土を確認した。上面がやや盛り上がり、中央部の厚い堆積を見せる。下位のLP-104覆土との境界が画然としており、焼土には腐植質の土が斑状に混ざっていることなどから、別の場所で形成された焼土が廃棄されたもののように思われる。焼土の上手に接して炭化材を多く含む腐植質土の堆積が見られる。
遺物　炭化材混じりの腐食質土の中からⅣ群ｂ類土器が１点だけ出土している。
時期　縄文時代晩期中葉以前の遺構であり、同後期中葉以降のものの可能性が高い。
LF-108（図Ⅳ-16）
位置　Y-27-a･d　　規模　0.66×0.50／0.06m
特徴　標高約31.8mのⅥ層上面で検出された焼けの弱い不整形の焼土である。同じレベルの周囲包含層に遺物は少ない。
遺物　出土していない。
時期　縄文時代早～晩期後葉
LF-109（図Ⅳ-16）
位置　W-26-c　　規模　0.40×0.34／0.08m
特徴　LH-102の覆土上位、LP-103･104に近接する不整形の焼土である。LP-103の上位レベルにあり周囲には縄文時代晩期後葉の遺物が出土している。赤化も弱く範囲も不明瞭なことから二次的なものの可能性がある。
遺物　出土していない。
時期　縄文時代晩期後葉
LF-110（図Ⅳ-16）
位置　W-27-b･X-27-a　　規模　0.36×0.28／0.02m
特徴　TP-102の覆土上位に位置する不整形の焼土で、断面はTP-101の図に付してある。赤化も弱く範囲も不明瞭なことから二次的なものの可能性がある。
遺物　出土していない。
時期　TP-102を掘込んだ以降から縄文時代晩期後葉。
e.炭化物集中
不整形で範囲不明瞭なものが多く、調査範囲中央の台地上から北向き斜面に分布する。この範囲の遺物は少なく人為的な関わりを示す痕跡も薄いことから、有為と判断されるものについて記した。
LC-103（図Ⅳ-16）
位置　R-33-a～d　　規模　1.32×0.52m
特徴　集中範囲が比較的明瞭なものである。標高約37.0mの台地縁辺下位で検出されており、炭化物は斜面下方にやや流れ落ちている。
遺物　出土していない。
時期　縄文時代早～晩期後葉

北埋調報92

千歳市

キウス5遺跡
キウス7遺跡（2）
ケネフチ8遺跡

―北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成6年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

1. キウス 5 遺跡： ＬＣ－22 出土玉類

2. キウス 5 遺跡：カゴ状繊維製品

1. キウス5遺跡：旧河道土層断面　NE→

2. キウス5遺跡：槌状木製品

1. キウス5遺跡：旧河道調査状況　NW→

2. キウス7遺跡：土層断面　NW→

例　言

1　本書は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが、平成６年度に実施した北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設用地内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。

2　本書の執筆は鬼柳　彰、花岡正光、皆川洋一、西脇対名夫、中山昭大、編集は皆川洋一が行った。整理作業の担当者は下記のとおりである。

土器・石器－皆川洋一
木製品－中山昭大
遺構－西脇対名夫
自然遺物－西脇対名夫
写真－中山昭大
火山灰分析－花岡正光

文責者は文末に記した。

3　各種分析等は下記に依頼した。

螢光Ｘ線分析　京都大学原子炉実験所　藁科哲男（依頼中）
種子同定　北海道大学　吉崎昌一
^{14}C年代測定　京都産業大学　山田　治

4　樹種の同定（炭化木材を除く）については、農林水産省森林総合研究所の平川泰彦氏にお願いした。

動物遺存体の同定については、千歳市教育委員会の高橋　理氏にお願いした。

5　調査にあたっては、下記の諸機関、各氏から指導・助言をいただいた。（順不同・敬称略）

千歳市教育委員会
千歳市埋蔵文化財センター
文化庁　坂井秀弥
通商産業省地質調査所　宝田晋治
文化財調査員　鍛冶俊幸
ソウル大学　任　孝宰
京都大学原子炉実験所　藁科哲男
北海道大学　吉崎昌一、林　謙作、椿坂恭代
静修女子大学　長崎潤一
立命館大学　家根祥多
千歳市教育委員会　大谷敏三、田村俊之、高橋　理、豊田弘良、松田淳子、遠藤啓視
恵庭市教育委員会　上屋真一、松谷純一、佐藤幾子
石狩町教育委員会　石橋孝夫、工藤義衛
知内町教育委員会　高橋豊彦
江別市教育委員会　野中一宏
札幌市教育委員会　秋山洋司
横山英介

記号等の説明

1. 遺構の表記には以下に示す記号を用いた。
   H：住居跡　HP：住居跡に伴うピット　HF：住居跡に伴う焼土もしくは炉　P：土壙
   SP：小ピット　TP：Tピット　F：焼土　C：炭化物集中　FC：フレイク・チップ集中
   なおTa-c火山灰より上位の遺構はU、またTa-cより下位（段丘面Ⅰ上）もしくはⅤ-1層（段丘面Ⅲ・Ⅳ上）の遺構にはL、Ⅴ-3層の遺構にはK、さらにⅤ-5層の遺構ではCの文字を遺構記号に冠して遺構の形成された層位を区別した。
2. 遺構図中の細数字は標高（単位m）である。
3. 平面図の方位記号は真北を示す。遺構や遺物出土状況の平面図は調査方格（グリッド）を縦横の基準としてAラインが図の天、1ラインが図の左に来るように作成した。
4. 平面図中の＋は調査方格（グリッド）の交点を示す。交点の傍らに記した記号（M-273、G-275-a、S-271-b-4など）はその交点の右下に位置する区画の名称に一致している。
5. 図の縮尺は概ね次のように統一した。また例外なくスケールバーを添えて縮尺を明らかにしてある。
   土層断面図：50分の1　遺構図：40分の1　遺物出土状況図：50分の1　遺物出土状況詳細図：10分の1　土器実測図：3分の1または4分の1　土器拓影：3分の1　剥片石器類・土製品・石製品実測図：2分の1　礫石器類実測図：3分の1または4分の1
6. 遺構図・遺物出土状況図では次のような記号によって遺物の出土位置を示している。
   ●：土器　★：剥片石器　▲：その他の剥片石器類
   ✱：礫石器　■：礫・礫片　▼：その他の遺物
   なお必要に応じて白抜き記号を併用したが遺物の内容は同じである。
7. 文中での遺構の規模は「確認面での長軸長×短軸長／床（底）面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深」の要領で記した。一部壊されているものは現存長を（）で示し、不明の場合は－の記号で示した。
8. 土層の色調は『新版標準土色帳』(小山・竹原　1967) に従って記載した。
9. 土層の記述には下記の記号、略称を用いた場合がある。
   樽前a降下軽石堆積物：Ta-a　白頭山-苫小牧火山灰：B-Tm　樽前c降下火砕堆積物：Ta-c
   恵庭a降下軽石堆積物：En-a　恵庭a降下軽石堆積物起源のローム層：En-L
   恵庭a降下軽石堆積物のうち未風化の軽石礫：En-P
10. 遺構覆土等における土壌・堆積物の混在状態を下記のように表現した場合がある。
    A＋B：AとBがほぼ等量に混じる。
    A＞B：AにBが少量混じる。
    A≫B：AにBが微量混じる。
11. 石器・土製品・石製品等の大きさは最大長、最大幅、最大厚の順で記し、破損しているものについてはその数値を（）で括ってある。

目　　次

挿図目次

Ⅰ章　概要

Ⅱ章　地形、地質、土層の概要

Ⅲ章　キウス5遺跡

Ⅳ章　キウス7遺跡

Ⅴ章　ケネフチ8遺跡

表目次

Ⅰ章　概要

Ⅱ章　地形、地質、土層の概要

Ⅲ章　キウス５遺跡

Ⅳ章　キウス７遺跡

Ⅴ章　ケネフチ８遺跡

Ⅵ章　自然科学分析

口絵目次

図版目次

Ⅲ　キウス５遺跡

Ⅳ　キウス7遺跡

Ⅴ　ケネフチ８遺跡

Ⅰ　調査の概要

1．調査要項

事業名　：　北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査
委託者　：　日本道路公団札幌建設局
受託者　：　財団法人 北海道埋蔵文化財センター
調査期間　：　平成６年４月１日～平成７年３月31日

遺跡名	登載番号	所　在　地	調査面積	現地発掘期間
キウス５遺跡	A-03-093	千歳市中央852－18ほか	3,000㎡※	５月６日～１０月２９日
キウス７遺跡	A-03-265	千歳市中央852－31ほか	1,600㎡	５月６日～１０月２９日
ケネフチ８遺跡	A-03-264	千歳市協和1172－1ほか	830㎡	９月１９日～１０月２９日

※キウス５遺跡の調査面積3,000㎡のうち、1,730㎡は上層のみ調査終了。

2．調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長	寺山　敏保	（平成６年５月31日退任）
〃	伊藤　一夫	（平成６年６月１日就任）
専務理事	永田　春男	（平成６年５月31日退任）
〃	佐藤　哲人	（平成６年６月１日就任）
業務部長	中野　真吾	
調査部長	森田　知忠	
調査第１課長	鬼柳　彰	（発掘担当者）
主　任	花岡　正光	（　〃　）
〃	皆川　洋一	（　〃　）
文化財保護主事	西脇　対名夫	
〃	中山　昭大	

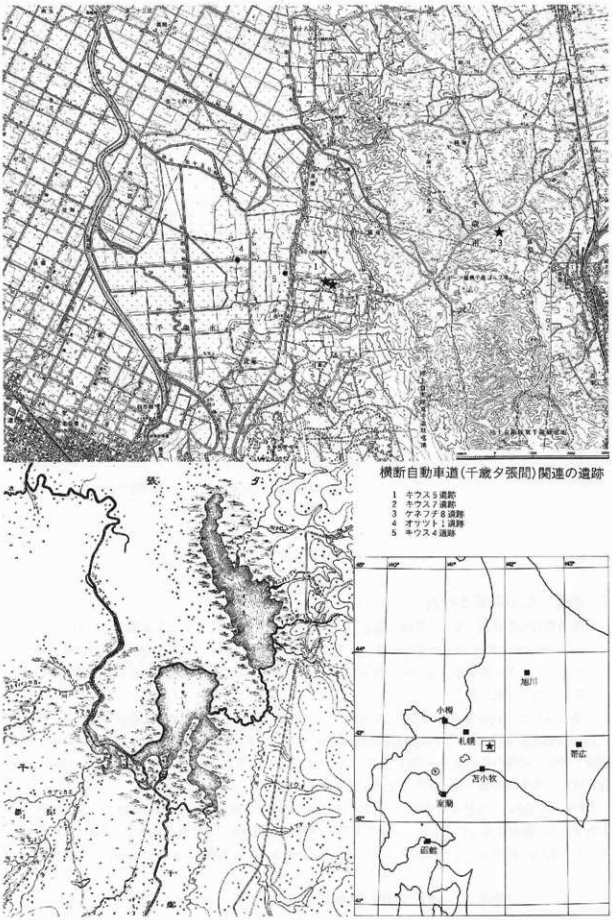
3．調査に至る経緯と経過

北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設工事予定地内にあって、工事計画の変更が不可能であることから、記録保存のための発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は、千歳市に10ヵ所、恵庭市と由仁町にそれぞれ２ヵ所、夕張市に３ヵ所の計17遺跡が確認されている。発掘調査は工事の優先順位に従って、昨年度から実施に移されている。

昨年度は北海道教育委員会の指示により、当センターが千歳市のオサツ－１遺跡とキウス７遺跡の一部の発掘調査を行った。今年度は恵庭市教育委員会がユカンボシＥ９遺跡、由仁町教育委員会が川端遺跡と川端２遺跡の発掘調査を実施、当センターも昨年度に引き続いて、キウス７遺跡の西端部のほか、新たにキウス５遺跡の一部とケネフチ８遺跡の調査を行った。

《キウス５遺跡》　当初計画では、キウス川右岸の2,700㎡と西方の丘陵斜面9,800㎡を発掘する予定であったが、調査に入ってまもなくキウス川右岸の調査範囲が低湿地性遺跡であり、遺物包含層の深さが予想の数倍に達することが明らかになったため、計画を大幅に変更、西方斜面部の調査を先送りとした。

低湿地部の調査範囲は、川岸まで遺物包含層が広がっていたことから300㎡拡大した。今年度はカル



図Ⅰ－１　遺跡の位置

（この地図は国土地理院の発行した５万分の１地形図「恵庭」・「追分」、および北海道仮製五万分一図「長都」（明治29年発行）を使用したものである。）

パートボックスの工事が行われる調査区東半部の発掘を終えたが、西半部は上層のみの調査に留まった。本書では、調査が完了した範囲（1,270㎡）について報告する。

所在確認調査によると、本遺跡は横断道用地内のキウス川右岸から国道337号まで、東西におよそ1㎞以上の範囲に広がっている。このうち西半部の範囲確認調査はまだ終了していない。

《キウス7遺跡》　昨年度は東半部の5,613㎡を調査した。今年度の調査区は工事用道路が敷設されるキウス川左岸の丘陵上で、昨年度の調査区から西方に約200m離れている。調査予定面積は1,300㎡であったが、遺構・遺物の分布範囲が予想より広がることが判明したため、最終調査面積は300㎡増加した。昨年度の報告書には一部未報告部分があるが、これについては周辺の未調査区の発掘が終了した後に報告する予定である。本書では今年度発掘した範囲についてのみ報告する。

本遺跡は横断道のパーキングエリアにあたり、調査対象面積は今年度までに調査を終えた範囲を含め26,000㎡あまりにおよんでいる。

《ケネフチ8遺跡》　本遺跡の調査は今年度当初には予定されていなかったが、遺跡のすぐ東側を通る道路のボックス工事が急がれることから、急遽、当センターで調査を実施することになったものである。範囲確認調査の結果から、調査対象面積は1,000㎡となっていたが、削平されている部分があったため170㎡の減となった。

（鬼柳　彰）

4　調査結果の概要

（1）キウス5遺跡

調査区は馬追丘陵中を流れるキウス川の右岸。縄文時代に谷を埋めて形成された沖積層と段丘上の一部を発掘した。遺物包含層は樽前ｃ降下軽石層を挟むⅢ層とⅤ層の黒色土である。低湿地部では両層とも次のとおり細分される。

表Ⅰ－1　遺跡別検出遺構一覧

	キウス5遺跡※	キウス7遺跡	ケネフチ8遺跡
住居跡（H）	4	4	0
土壙（P）	10	6	0
小ピット（SP）	5	0	0
Tピット（TP）	0	4	4
焼土（F）	30	14	2
炭化物集中（C）	63	64	0
フレイク・チップ集中（FC）	1	0	0
集石	1	0	0
計	114	92	6

表Ⅰ－2　遺跡別出土遺物一覧

	キウス5遺跡※		キウス7遺跡		ケネフチ8遺跡	
	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層
土器	2,745	10,128	234	1,626	3	1,211
石器等	741	3,219	614	146	4	140
礫・礫片	439	1,590	64	361	0	104
土製品	24	33	0	0	0	0
石製品	6	4	0	2	0	1
金属製品	0	8	0	0	0	0
木製品	0	10	0	0	0	0
自然遺物	有	有	有	有	0	有
現代の遺物他	0	17	0	0	0	1
計（自然遺物を除く）	3,955	14,999	912	2,135	7	1,457
総計（自然遺物を除く）	18,954点		3,047点		1,464点	

※キウス5遺跡は本年度報告範囲の遺構数・遺物数である。遺物は浮遊選別で抽出したものがあるが、これは表Ⅲ－17に掲載した。

Ⅲ－1層（撹文時代）、Ⅲ－5層（縄文時代晩期）、Ⅴ－1層（縄文時代晩期）、Ⅴ－3層（縄文時代後期後半）、Ⅴ－5層（縄文時代早期～中期）。低湿地部の各包含層中からはそれぞれの時期の流路が検出されており、多量の流木が出土している。

発掘した遺構は竪穴住居跡7軒、土壙19基、焼土57ヵ所、集石6ヵ所、剥片集中3ヵ所、炭化物集中地点132ヵ所である。竪穴住居跡のうち2軒は晩式にちかい土器を伴っており、縄文時代早期に構築された遺構と推定される。ほかの5軒のうち3軒は縄文中～後期、2軒は晩期のものと推定される。土壙は早期のものが1基、ほかは晩期とみられる。焼土は段丘面上に多く、炭化物集中地点は低湿地部の各層で確認された。

遺物は約1万9千点。土器片の半数以上は縄文時代晩期のもの。次いで、後期後半の手稲式、ホッケマ洞式、堂林式が多い。ほかに、統縄文時代の後北C_2－D式や撹文時代のものとみられる須恵器が出土している。石器は黒曜石製の剥片石器が主体である。礫石器では縄文晩期に特徴的ないかり石、石製品には翡翠製玉、土製品には土製玉類がある。

低湿地部の流路跡から多量の流木に混じって出土した木製品には、槌状木製品3点（縄文後期・晩期）とカゴ状の繊維製品2点（縄文中期）がある。ほかに、焼けた木、種子や昆虫、貝の遺体なども見つかっており、縄文時代の環境を窺うことが可能である。

（2）キウス7遺跡

調査区はキウス川右岸の尾根先端部の傾斜地。川を挟んでキウス5遺跡に対峙している。遺物包含層はⅢ層とⅤ層の黒色土およびⅥ層の暗褐色土である。

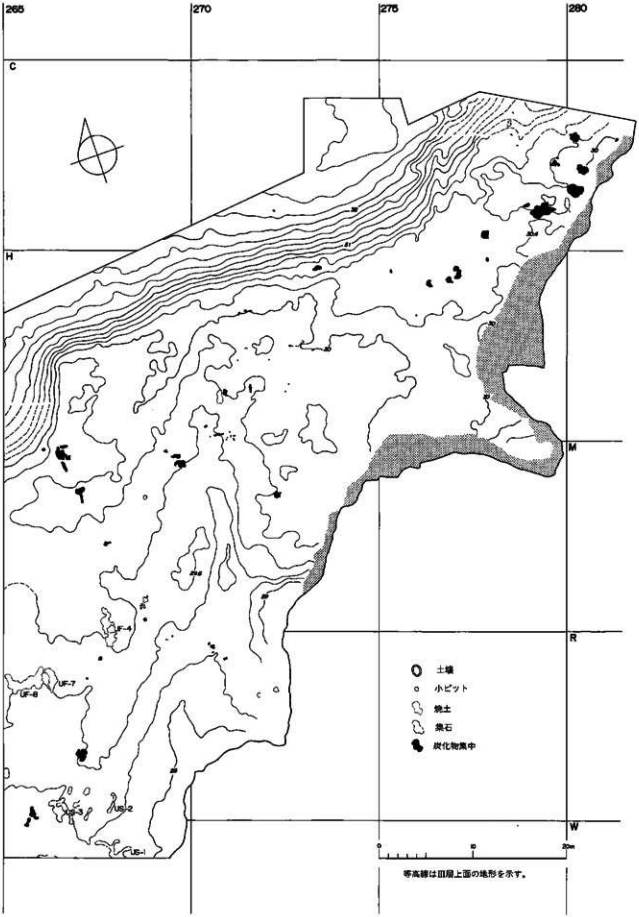
発掘された遺構は竪穴住居跡4軒、土壙6基、Tピット4基のほか焼土、炭化物集中である。住居跡はいずれも緩斜面に位置している。出土遺物からこのうち3軒は縄文時代後期、1軒は晩期の遺構と考えられる。土壙のうち1基は、手稲式土器が出土したことから縄文後期後半の墓とみられる。

出土遺物は縄文時代早期から撹文時代におよんでいるが、多くを占めるのは縄文時代後・晩期の土器や石器である。土器は早期のコッタロ式、後期の手稲式、晩期のタンネトウL式、統縄文の後北C_2－D式、撹文土器がある。剥片石器には石鏃、ポイント、ドリルなど、礫石器には石斧、たたき石、台石などがある。

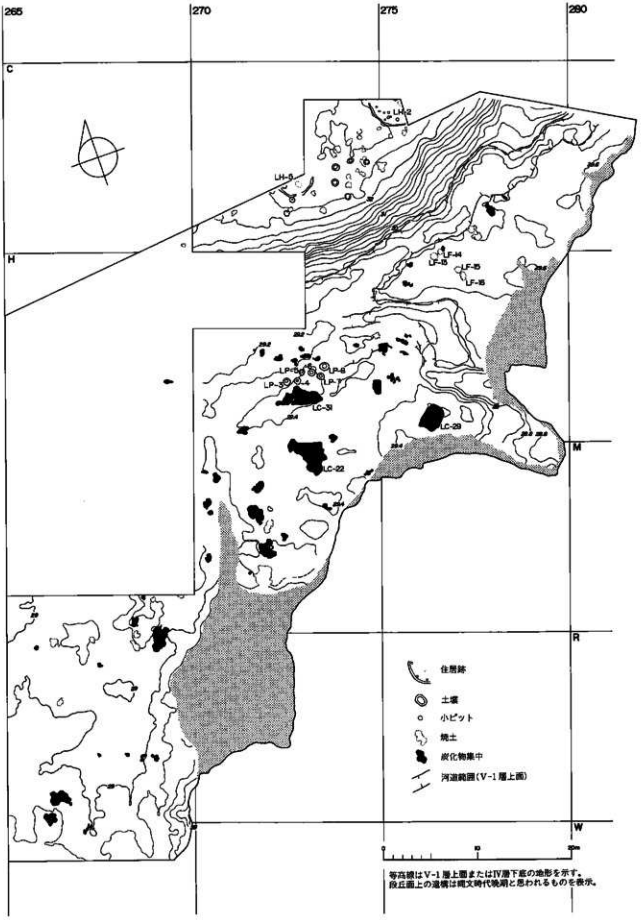
（3）ケネフチ8遺跡

馬追丘陵を西流する瀬川左岸の尾根先端部に立地。遺物包含層は樺前c軽石層を挟む黒色腐植土（Ⅲ層・Ⅴ層）である。遺構は尾根頂部の平坦面で発掘された焼土2ヵ所と斜面で確認されたTピット5基。いずれも縄文中期頃の遺構と推定される。焼土の一つから焼けた黒曜石剥片が出土した。Tピットの壙底面では杭跡が1～3本見つかっている。

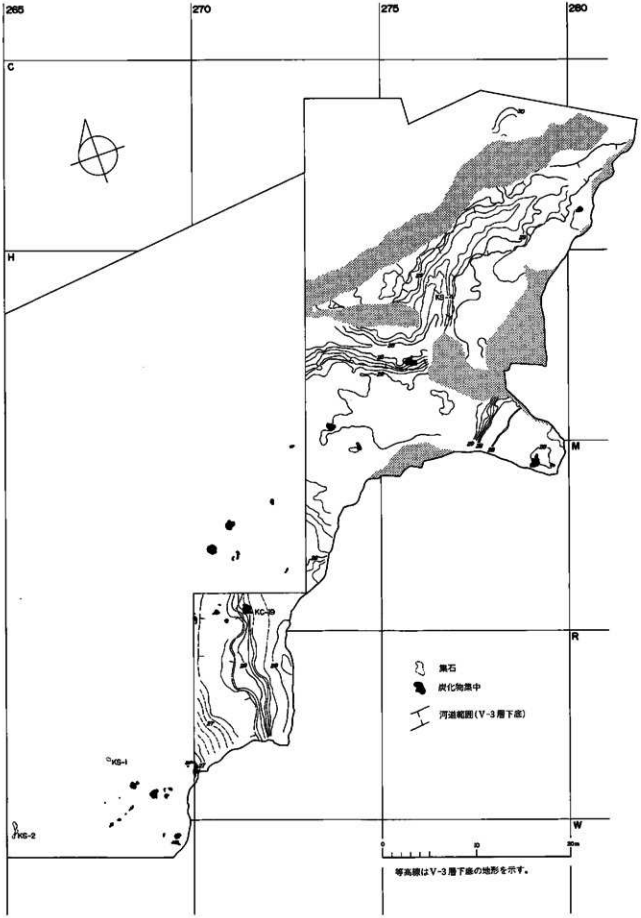
出土遺物は、土器片および剥片を含む石器類など合わせて1,500点である。Ⅲ層とⅣ層上位では縄文時代晩期のタンネトウL式土器、Ⅴ層下位では中期の円筒上層式・天神山式土器が出土した。石器は石鏃・たたき石などが比較的多い。焼土の位置や遺物の分布傾向から、遺跡の主体部は土取りされた尾根の北半部にあったものと推定される。（鬼柳　彰）



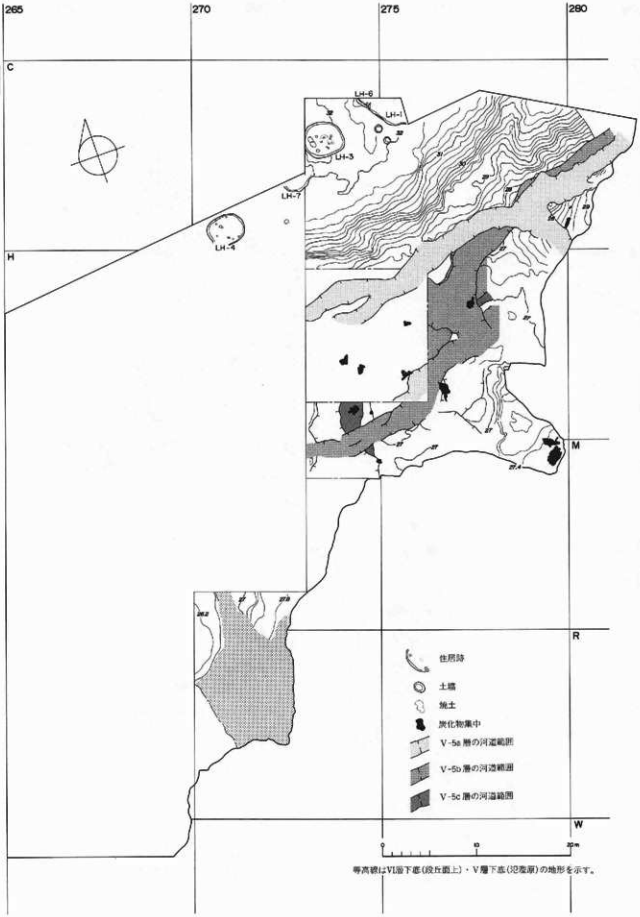
図Ⅰ－2　キウス５遺跡　Ⅲ層の調査



図Ⅰ－3　キウス5遺跡　Ⅴ－1層の調査



図Ⅰ－4　キウス5遺跡　V－3層の調査



図Ⅰ－5　キウス5遺跡　Ⅴ－5層の調査

5　遺物の分類

(1) 土器

Ⅰ群　縄文時代早期に属するもの。

a類　貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。

b類　縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群。

b－1類　東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に相当するもの。

b－2類　コッタロ式に相当するもの。

b－3類　中茶路式に相当するもの。

b－4類　東釧路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群　縄文時代前期に属するもの。

a類　縄文の施された丸底、尖底を特色とする土器群。

a－1類　網文式土器に相当するものと、結束のない羽状縄文の施された丸底を特色とするの。

a－2類　春日町式、中野式など、縄文の施された尖底を特色とするもの。

b類　円筒土器下層式、植苗式に相当するもの（今回は出土していない)。

Ⅲ群　縄文時代中期に属するもの。

a類　円筒土器上層式に相当するもの。

b類　a類以外のもの。

b－1類　天神山式に相当するもの。

b－2類　柏木川式に相当するもの。

b－3類　北筒式（トコロ6類)、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

Ⅳ群　縄文時代後期に属するもの。

a類　余市式、入江式に相当するもの。

b類　船泊上層式、手稲式、銚潤式、エリモB式に相当するもの。

c類　堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

Ⅴ群　縄文時代晩期に属するもの。

a類　大洞B式、上ノ国式に相当するもの。

b類　大洞C_1式、大洞C_2式に相当するもの。

c類　大洞A式、大洞A´式、タンネトウL式に相当するもの。

Ⅵ群　続縄文時代に属するもの。

Ⅶ群　擦文時代に属するもの。

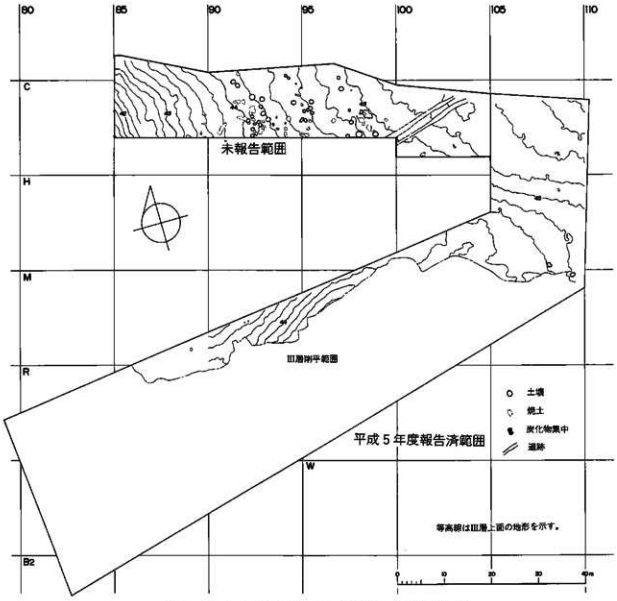
(2) 石器・石製品

器種別の大分類にとどめ、記号による細分は行っていない。剥片石器には石鏃、石錐、ポイントもしくは両面加工のナイフ、スクレイパー類、楔形石器などが、礫石器には磨製石斧、たたき石、すり石、砥石、石皿・台石などがある。ほかに石核、剥片・石屑、加工痕のある剥片（Rフレイク)、刃こぼれ状の使用痕のある剥片（Uフレイク）および焼礫、有意と考えられる礫、自然礫がある。石製品には翡翠製・緻覆岩製の玉がある。

(3) 土製品

土玉類、オロシガネ状土製品などがある。

(4) 木製品・繊維製品・樹皮製品など



図Ⅰ－6　キウス7遺跡　Ⅲ層の調査（平成５年度）

槌状・櫂状の木製品、抉入木製品のほか少数の加工材がある。ほかにカゴ状繊維製品、筒状樹皮巻などが出土した。これらはすべて、旧河道跡で出土したものである。

（5）自然遺物

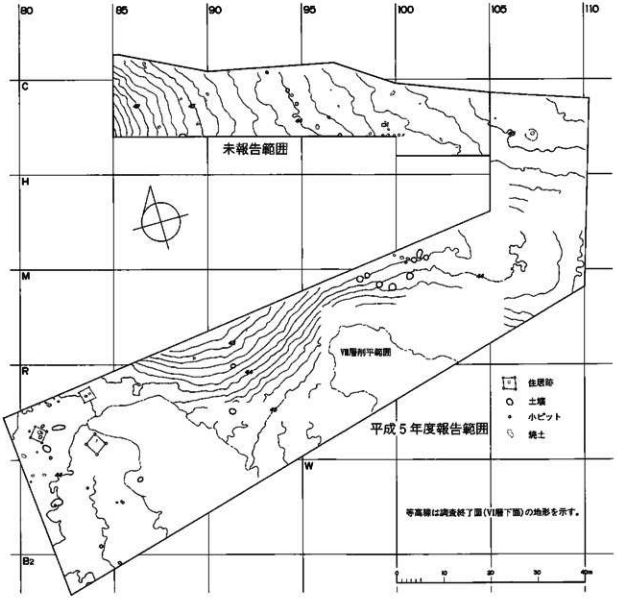
明瞭な加工の見られない生物遺体を自然遺物とした。動物遺体・植物遺体・菌類遺体が見られる。

動物遺体は脊椎動物（魚類・哺乳類）の内骨格、節足動物の外骨格、軟体動物（二枚貝類）の殻皮などがある。

植物遺体は木材やイネ科の稈などを主とする営養器官（炭化したものを含む）、被子植物種子（炭化したものを含む）などがある。特に木材・稈は大量に堆積して泥炭を形成している。

菌類遺体は担子菌類の子実体などがある。

脊椎動物の骨格・軟体動物の殻皮、種子、炭化木材に関しては、遺構から出土したものの一部について、種名・属名の同定を依頼し（Ⅵ章2・3節）、あるいは試み（Ⅵ章4節）ている。包含層出土の遺体については現在のところ種名・属名の同定をおこなっておらず、数量も本書では報告していない。



図Ⅰ－7　キウス７遺跡　Ⅴ層の調査（平成５年度）

なお焼けた遺体を人工遺物とすべきであるとの意見もあったが明確に判断することができなかった。遺構出土の焼けた遺体については重量を計り表示した場合がある（表Ⅲ－16・17）。　（鬼柳　彰）

II. 地形・地質・土層の概要

遺跡周辺の地形分類を図II-1に示す。遺跡周辺には、丘陵、谷底平野、古砂丘、扇状地、沖積低地が発達している。丘陵地には数本のリニアメントが認められる。幌加から協和へ伸びるリニアメントを境にしてその東側と西側とでは地形を異にしている。東側は標高約60ｍの定高性を示す丘陵で、開析の進んだ段丘と考えられる。西側は標高約20-100ｍで、馬追丘陵の一部をなしている。泉郷から南南東に伸びるリニアメントは泉郷断層である (活断層研究会　1991)。馬追丘陵は背斜・向斜構造の良く発達した新第三系から成り、遺跡周辺では、川端層、馬追山層、追分層、由仁層の礫岩、砂岩、頁岩から構成されている (地質調査所　1980)。キウス7遺跡とケネフチ8遺跡は丘頂から丘腹斜面にかけて立地している。

丘陵地内には狭長な谷底平野が認められる。キウス5遺跡は谷底平野部に位置するが、谷底部には段丘が発達し、段丘面は少なくとも四面認められる (図II-1)。これらの段丘面を、上位から下位へ段丘面I、…、IVと区分した。

古砂丘はキウス5・7遺跡の南西に、扇状地は馬追丘陵西端に認められる。この古砂丘は支笏カルデラ起源の軽石流堆積物Spflの風成二次堆積物から成り、砂丘上には丸子山遺跡が立地している。瞼瀬川沿いには沖積低地が発達している。

これらの地形面を覆って数層のテフラが認められる。とくに恵庭岳起源の降下軽石En-a、樽前山起源の降下軽石Ta-aの発達が良い。コムカラ峠の西方約500m地点では、支笏カルデラ起源の降下軽石Spfa 1とSpfa 21) が堆積し、これらを覆ってSpflの薄層が達している。Spflの直上にはこれの風成二次堆積物が認められる。

遺跡における土層の概要と発掘上の層区分を図II-2に示す。この図は主にキウス5・7遺跡の地質から作成しているが、En-a以上はケネフチ8遺跡にもほぼ共通である。各土層の概要は次のとおりである。さらに詳細な土層区分については各遺跡ごとに述べられる。

Ⅰ層　：現表土。軽石混じりの黒色粘土質腐植土。層厚約4cm。

Ⅱ層　：樽前山起源の降下軽石Ta-a。砂質のテフラを主体とし、約10枚のフォールユニットから成る。下部と上部は礫質で粗粒となる。層厚約40cm。

Ⅲ層　：黒色粘土質腐植土。粒径0.5cm＞の岩片・軽石を頗る多く含む。層厚10-15cm。白頭山起源のB-Tm の薄層 (層厚1cm＞) が認められる。縄文時代晩期～中世の遺物包含層。 谷底部では泥炭から成る。

Ⅳ層　：樽前山起源の降下岩片Ta-c。粒径0.5cm ±。層厚8cm。曽屋・佐藤 (1980) のTa-c1である。

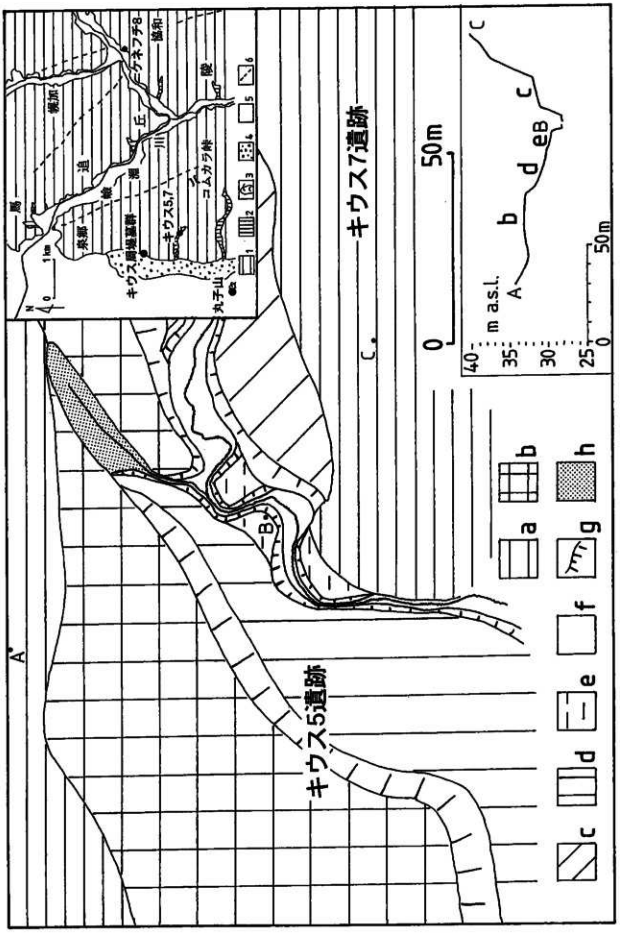
Ⅴ層　：黒色～赤黒色粘土質腐植土。層厚7-12cm。上部には粒径0.5cm ±の岩片を 頗る多く含む。縄文時代早期～同晩期の遺物包含層。谷底部では泥炭から成る。

Ⅵ層　：暗褐色粘土質腐植土。層厚約5cm。縄文時代早期の遺物が出土することがある。

Ⅶ層　：褐色ローム。本層直下のEn-aの軽石を含む。層厚約20cm。

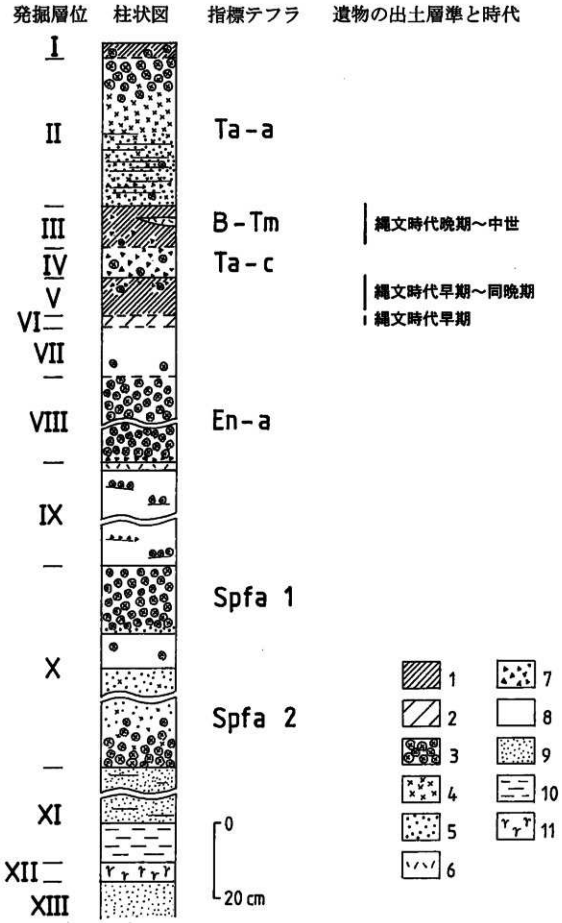
Ⅷ層　：恵庭岳起源の降下軽石En-a。粒径0.5-3cmの明褐色の軽石から成る。基底部に岩片から成る薄層を伴なう。層厚約150cm。

Ⅸ層　：風成二次堆積物。下部は砂質、上部はローム質で軽石・岩片の薄層を挟み、ラミナが発達する。



図Ⅱ－1　遺跡周辺の地形分類図

1:丘陵　2:谷底平野　3:台地丘　4:崖状地　5:沖積低地　6:リニアメントと丘陵斜面　b:段丘面Ⅰ　c:段丘面Ⅱ　d:段丘面Ⅲ　e:段丘面Ⅳ　f:現氾濫原　g:段丘面　h:未分類



図Ⅱ－2　遺跡における土層柱状図

1：黒色～赤黒色腐植土　2：暗褐色腐植土　3：礫質軽石　4：砂質軽石　5：砂質テフラ　6：シルト質テフラ　7：岩片　8：ローム　9：水成砂　10：水成粘土　11：泥炭

X層　：2層の降下軽石とその間のロームを一括した層。下位の軽石層はSpfa 2で黄色を呈し、石英の独立結晶粒が多い。上方へ細粒化し、下半部は粒径0.5cm、上半部は粒径0.2cmである。上位の軽石層はSpfa 1でにぶい黄色を呈し、粒径0.5cm＞で基底部に灰色の砂質テフラを伴なう。両軽石層とも風化が著しい。

XI層：未固結の砂・粘土。層厚約70cm。本層以下は丘陵の構成層である。

XII層：木質泥炭。層厚約20cm。

XIII層：青灰色の粘土質砂。層厚不明。

---

1) 胆振団体研究会 (1990) は、Spfa 2をクッタラ火山起源のKt-b1に対比している。

文献

胆振団体研究会　1990 「クッタラ火山の火砕堆積物―支笏火山のテフラの層序の検討とテフロクロノロジー―」『 地球科学』44巻　pp.95-112

活断層研究会　1991 『新編日本の活断層―分布図と資料』　東京大学出版会

曽屋龍典・佐藤博之　1980 『千歳地域の地質』地域地質研究報告 (5万分の1図幅)　地質調査所

地質調査所　1980 『20万分の1地質図札幌』

Ⅲ　キウス５遺跡

１　立地と環境

北海道島の西部および東経141°から142°の間には石狩湾から勇払平野に至る札幌―苫小牧低地帯が広がり、島の主部と南西部の境界をなしている。この低地帯は支笏火山の形成した火砕岩台地によって千歳市南部を分水嶺に日本海側と太平洋側とに分かたれているが、日本海斜面のうち特に扇状地の発達しないその南東部では分水嶺近くまで非常に低平であって、千歳川から東方にはかつて広大な湿地帯が形成されていた。戦後干拓事業が本格化するまでは千歳川に接して長都沼、その東に馬追沼が連なり、東方に連なる馬追丘陵の麓近くまで湿水地帯が広がっていた。キウス川は丘陵の西斜面からこの湿原へ注ぐ小河川の一つで、丘陵の前縁から谷筋に沿って、上流近くまで遺跡の分布が確認されている。（図Ⅲ-1）。今回の調査地点はキウス川の谷を約１km東方へ入った右岸にあって、北緯42°52′30″、東経141°43′40″付近、地籍は千歳市字中央852-18ほかである。

「キウス」は現在の字中央付近に当たる旧字名である。明治29年の北海道假製五万分一圖には現在のキウス川に「キウシ」とあり（図Ⅰ-1）、アイヌ語ki-ush-i（芽-多く生える-所）のカナ表記とみられている。この図ではキウシの川尻は丘陵の前縁を出た所で消えており、湿原の中に明瞭な流路をなしていなかったらしい。近代以前においても、おそらく一時的な増水時を除いて千歳川方面から舟によってキウス川を遡ることは不可能であったと思われる。假製五分一圖で「キウシ」の南隣に川に「チプエ」とあるのは、あるいはchip-e（舟を-そこで）という言葉で始まる地名の下略形であって、その後に例えばyanke-ush-i（陸に揚げるのが-常である-所）のような言葉が続いたのかもしれない。

表Ⅲ－１　土層別遺構数

	Ta-c 層上位の遺構（U）	Ta-c 層下位の遺構（L・K・C）	計
住居跡（H）	0	4	4
土壙（P）	0	10	10
小ピット（SP）	5	0	5
焼土（F）	3	28	31
炭化物集中（C）	18	45	63
フレイク・チップ集中（FC）	1	0	1
集石（S）	0	1	1
計	27	88	115

表Ⅲ－２　遺構出土遺物数

	遺構	土器	石器類	土製品	石製品	自然遺物	計
Ta-c 層上位	UF	0	0	0	0	有	0
	UC	0	2	0	0	有	2
Ta-c 層下位	LH	642	399	0	2	有	1,043
	LP	192	150	0	0	有	342
	LF	256	197	24	0	無	477
	LC	61	16	0	4	有	81
	KC	1,587	35	0	0	有	1,622
	KS	1	381	0	0	無	382
	CC	6	0	0	0	無	6
	計	2,745	1,180	24	6	－	3,955

※浮遊選別法で得られた遺物は表Ⅲ－17に掲載した。

表Ⅲ－３　包含層層別出土遺物一覧

	土器類			石器類					石製品	土製品	金属製品	現代の遺物	自然遺物	計
	縄文	擦文	陶器類	剥片石器	礫石器	剥片石器等	石核類	礫等						
Ⅰ層	1	0	9	0	0	0	0	1	0	0	1	1	無	13
Ⅱ層	2,237	0	1	88	22	592	0	136	0	9	1	3	有	3,089
Ⅱ層（旧河道）	885	0	1	19	11	142	5	150	0	0	0	1	有	1,214
Ⅳ層	589	0	0	16	1	75	0	22	0	0	0	0	無	703
Ⅴ層	3,683	0	0	130	23	1,529	4	115	3	17	0	0	有	5,504
Ⅴ層（旧河道）	2,517	0	0	49	72	148	1	1,149	1	7	0	0	有	3,944
Ⅵ層	99	0	0	6	4	179	0	10	0	0	0	0	有	298
Ⅶ層	5	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	無	11
排土	10	4	1	2	0	6	0	4	0	0	2	2	無	31
表採	4	2	4	1	1	1	0	0	0	0	3	0	無	16
攪乱	49	0	4	15	0	57	0	2	0	0	0	10	無	137
不明	23	0	0	2	0	12	0	1	0	0	1	0	有	39
計	10,102	6	20	328	135	2,746	10	1,590	4	33	8	17	－	14,999

キウス川とその北の無名川との間に広がる緩斜面には古くから国指定史跡キウス周堤墓群の存在が知られており、横断自動車道の路線決定にともなって道教委と道路公団との間で協議がおこなわれた経緯がある。結果的に自動車道は周堤墓群南のキウス川の谷筋を通過することとなり、本年度から右岸のキウス５遺跡の発掘に着手する運びとなった。今回報告する範囲は自動車道がキウス川を跨ぐボックスカルバート工事の用地にあたり、縄文時代の氾濫原に形成された包含層（標高約27～30m）が調査の主な対象となった。

2　調査区の設定

(1) 方格設定と測量の基準

昨年度から始まったキウス７遺跡の調査と同様に、キウス５遺跡でも調査範囲の区画と平面位置の測量のために高速道路のセンターラインを基準とする方格（グリッド）割りをおこなった。センター杭STA.135＋00から138＋00付近まで道路のセンターラインは完全な直線である。これとこれに直交しSTA.137＋00を通る直線とを基線として4m間隔の方格を設定した。方格の区画線には建設予定の道路の下り車線側から上り車線側へ向かってアルファベット、千歳市側から夕張市側へ向かってアラビア数字による呼称を与え、STA.137＋00を通る区画線をMラインおよび200ラインとした。センター杭SAT.137＋00・138＋00の座標値とSTA.137＋00からSTA.138＋00へ向かう方向角は次の通りで（日本道路公団札幌建設局提供）、各座標値は平面直角座標系第ⅩⅡ系（建設省告示第952号）中の数値である。

STA.137＋00　　X=－124,606.2818　　Y=－42,806.8008
STA.138＋00　　X=－124,638.9318　　Y=－42,712.2811
STA.137＋00からSTA.138＋00への方向角　　109°03′23.23″

方格の交点に設置した杭には区画線名の組み合わせによって「M200」のように呼称し、4m四方の各グリッドにも下り車線側と千歳市側を画する区画線の名称よって杭と同様の呼称を与えた。従ってM200のグリッドの下り車線側・千歳市側の隅にある杭がM200杭と呼ばれることになる。さらに必要に応じて各グリッドを2m四方のグリッドに区画し、反時計回りにa・b・c・dの呼称を与えた（図Ⅲ-2）。

遺跡の東部では道路のセンターラインと方格の基線とが僅かにずれており、立ち木の伐採に際して道路工事用地内に山積みされた枝や切り株のためにSTA.137＋00付近の基線を延長することも困難であったので、座標計算にもとづいて方格杭M270およびM275を設置し、前者から後者を視準した直線を基線として方格割りをおこなった。方格杭M270・M275の座標値、およびこれらの設置に当たって基準としたセンター杭STA.139＋60の座標値とSTA.139＋60からSTA.139＋40に向かう方向角は下記の通りである。

M270　　X=－124,697.7018　　Y=－42,542.1457
M275　　X=－124,704.2318　　Y=－42,523.2417
STA.139＋60　　X=－124,691.1395　　Y=－42,561.0384
STA.139＋60からSTA.139＋40への方向角　　288°59′31.78″

なお実際の方格杭設置作業は1mm・20″単位デジタル表示の光波トランシットによっておこなったので、杭の位置には座標値・方向角入出力の精度に起因する誤差が生じている。

水準測量については本年度のキウス７遺跡の調査と同様に道路公団が工事のためにセンター杭STA.140＋80付近に設置した基準点T-17（標高31.975m）を原点とした。

(2) 調査範囲

北海道教育庁文化課による埋蔵文化財包蔵地範囲確認調査の結果、キウス5遺跡では道路工事用地のうちSTA.138＋00付近下り車線側から西方の部分（「B地区」と仮称）と、STA.38＋40付近上り車線

側から東方の部分（「A地区」と仮称）とが発掘調査必要範囲とされた。本年度当初の調査計画ではB地区のSTA.136＋60から138＋80付近9,800㎡とA地区のうちキウス川ボックスカルバート工事用地2,700㎡が調査範囲であったが（図Ⅲ-2）、工事工程上の要請で先に着手したA地区の調査に予想外の時間を要したためA地区の調査は見送られた。

A地区の調査はSTA.139＋60以東、建設省保有であった旧キウス川河川敷地およびその南側の旧私有地のうち、用地南端を走る工事用道路（盛土）敷部分を除いた2,700㎡を範囲として開始された。調査の便宜上、調査範囲の南限を工事用道路敷に僅かにくい込む方格のXラインまでとしたこと、また調査の進展にともない現キウス川に向かって遺跡範囲が若干拡大したこと、さらに工事計画の修正にともない9月末から旧河川敷地より北側の一部を調査範囲に加えたこと[注]などによって、最終的な調査実施範囲はC～Xライン間、265ライン以東のうちの3,000㎡となった。（図Ⅲ-2右下）。

Ⅰ章4節に述べた通り、本年度はボックスカルバート工事にともなう切土範囲付近のみについて発掘調査を終了し、道路公団に引渡しをおこなった。引き渡し範囲はQライン以北・273ライン以東とQライン以南・270ライン以東の合わせて1,270㎡であり、本章ではこの範囲の調査成果について報告する。

3　土層

(1) 基本層序（図Ⅲ-5参照）

遺跡の主体となる縄文時代から中世にかけての遺物包含層に関しては、昨年度のキウス7遺跡の調査で採用された土層の区分を踏襲した。キウス7遺跡とほぼ共通した層序の見られる本遺跡段丘面Ⅰ（本書Ⅱ章参照）部分での各層の概要は以下の通りである。

Ⅰ層：黒褐 (5YR 2/1) 色細～中礫混じり粘土質砂。層厚10～30㎝で下限は曖昧。現表土。Ⅱ層が上位から土壌化したもので礫・砂は降下軽石である。稀に近代以降の陶磁器や鉄・ガラス製品を含む。

Ⅱ層：灰白 (10YR 7/1) 色細～中礫混じり砂。層厚20～50㎝、下限は画然。1739年降下の樽前a降下軽石堆積物（曽屋・佐藤　1980、Ta-a層）である。無遺物。

Ⅲ層：黒 (7.5YR 1.7/1) 色細礫・砂混じり粘土質シルト。層厚10㎝前後、下限判然。主にⅣ層が土壌化したものと考えられ礫・砂の多くは角張った岩片である。層の上部にB-Tm火山灰が1～3㎝の層厚で認められる場合があるが連続性は悪い。新千歳空港工事用地内の遺跡に見られる第1黒色土層（ⅠB層）に対比される。縄文時代晩期から続縄文時代、中世までの遺物を含む。

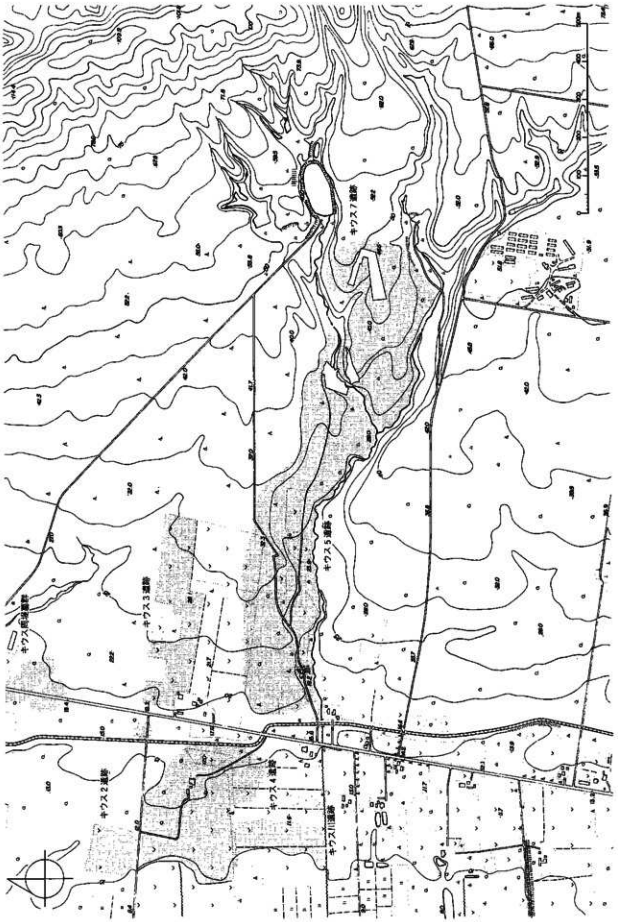
Ⅳ層：褐 (7.5YR 4/4) 色粘土質細礫～砂。層厚5～10㎝、下限は判然。樽前c降下火砕堆積物（曽屋・佐藤　1980、Ta-c層）である。礫・砂は主に角張った岩片で、花岡（本書Ⅱ章）はTa-c1に対比している。稀に縄文時代の遺物を含む。

Ⅴ層：黒褐 (7.5YR 2/2) 色細礫・砂混じり粘土質シルト。層厚20～40㎝、下限は曖昧である。細礫は上部に多く、主にⅣ層から落ち込んだ岩片とみられる。新千歳空港工事用地内の遺跡に見られる第2黒色土層（ⅡB層）に対比される。縄文時代早期から晩期までの遺物を含む。

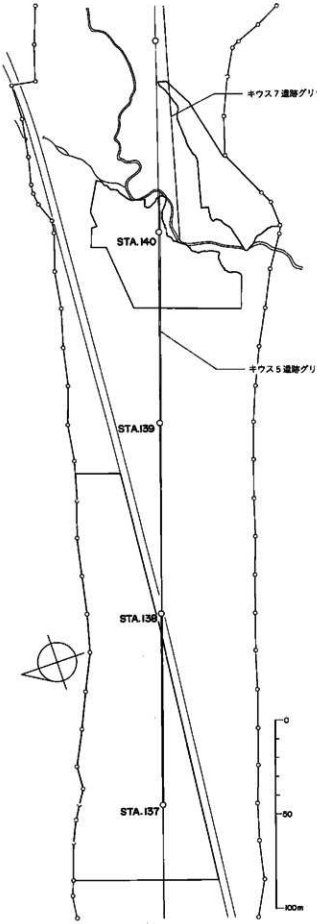
Ⅵ層：黄褐 (10YR.5/6) 色細～中礫・砂混じり粘土質シルト。層厚10～30㎝、下限は曖昧である。稀に縄文時代早期の遺物を含む。丘陵斜面に位置するキウス7遺跡ではⅥ層より下位にⅦ

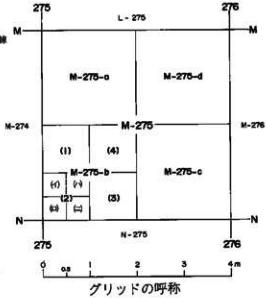
脚注）

当初の工事計画では用地取得上の事情から、旧河川敷地以南の範囲で切土をおこなう予定であったが、用地取得と埋蔵文化財包蔵地範囲確認調査の進展にともない公団側から切土範囲を若干拡張することが要請されたものである。これによってC・D-273～275区付近の約100㎡が発掘調査範囲に追加された。

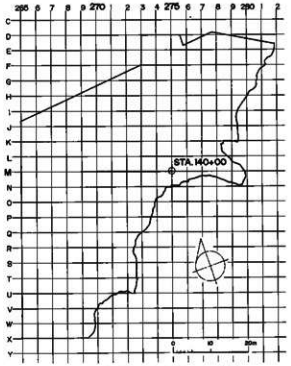


図Ⅲ－１　遺跡周辺の地形





グリッドの呼称



平成6年度調査区のグリッド設定

図Ⅲ－2 調査区の設定

層（曽屋・佐藤　1980の「恵庭ａ降下軽石堆積物」、En-a）・Ⅹ層（曽屋・佐藤　1980の「支笏降下火砕堆積物１・２」、Spfa１・Spfa２）などの降下堆積物層が認められるが、段丘面Ⅰの範囲では今のところこれらを確認していない。Ⅵ層の下位にはⅧあるいはⅩ層に由来すると思われる軽石礫を含んだ堆積物があり、これを仮にⅦ/Ⅸ層と呼んでおく。Ⅶ/Ⅸ層の下位にはさらにⅩⅡ・ⅩⅢ層が認められる。

Ⅶ/Ⅸ層：色調・粒度には幅があり、にぶい黄褐（10YR 5/4）色砂混じり粘土質シルト（上部）、淡黄（5Y 8/3）色粘土と灰黄（2.5Y 6/2）色砂の互層（中部）、にぶい黄橙（10YR.6/4）色細～中礫（軽石）質砂・オリーブ灰（2.5GY 5/1）色砂混じり粘土質シルト・灰（5Y 4/1）色粘土混じり砂の乱雑な堆積（下部）などが観察される。層厚は確認できないが、段丘崖部分での観察から2m程度かそれ以上あるとみられる。下限の状況未確認。人工遺物は出土していない。段丘面Ⅰを構成する段丘堆積物である可能性がある。

ⅩⅡ層：黒褐（2.5Y 3/1）色粘土質シルト（泥炭質）・緑灰（5G 5/1）色砂質粘土～シルトなどの互層。層厚は未確認、下限の状況も明確ではない。曽屋・佐藤（1980）の「千歳泥炭層」、あるいは次のⅩⅢ層とともに「伏在海成更新統」に相当する可能性がある。

ⅩⅢ層：オリーブ灰（2.5GY 5/1）色シルト質粘土～粘土質砂。砂で満たされた断面円形、径３cmほどの竪穴状の構造が多く見られる。生痕化石であろう。隣接地の工事による断面では層厚４m以上あり、下限の状況は不明である。佐々・森谷（1956）の「野幌層」、曽屋・佐藤（1980）の「伏在海成更新統」などに相当するものとみられる。

(2) 低位の段丘部分の層序

縄文時代にはキウス川の氾濫原であったとみられる段丘面Ⅲ・Ⅳ（本書Ⅱ章参照）の範囲では、Ⅲ～Ⅴ層に相当する時期の堆積物が3m余りの厚さに達しており、泥炭質ないし腐植質の土壌と無機質の河成堆積物との互層が見られる。これらを次のように分層した。

Ⅲ-1層：黒褐（7.5～10YR 2/1）色粘土質シルト。層厚10～20cm。下限は比較的画然としており、河成の堆積物とも考えられる。分布範囲は段丘面Ⅳから段丘面Ⅲの現河道寄りにかけてで、Ⅲ-2層とほぼ同じ。場所によって層の下部に1～2cmの厚さでB-Tm火山灰とみられる灰白色のシルト層が見られるが、連続性は良くない。焼土・炭化物集中・集石などの遺構が形成され、確認できる範囲では遺構はB-Tmより上位にある。稀に縄文時代の遺物が出土。大型の生物遺体は認められない。

Ⅲ-2層：色調・粒度に幅がある。H-276区付近ではにぶい黄褐（10YR 4/3）色細礫混じりシルトないしオリーブ褐（2.5Y 4/3）色中礫混じりシルト質砂。礫は主に軽石質である。R-272区付近では黄灰（2.5Y 4/1）色ないし黄褐（2.5Y 5/3）色砂質シルトと黒褐（7.5YR 3/2）色粘土質シルトの互層。下限の画然とした河成の堆積物。分布と層厚については本章４節で述べるが、河道外でも30cm以上の厚さを有する場合がある。調査範囲北部の粗粒のものと、南部の細粒の堆積物とは必ずしも一連のものではないかも知れない。人工遺物・大型の生物遺体とも認められない。

Ⅲ-3層：黒（7.5YR～2.5Y 1.7/1）色シルト質粘土～粘土質シルト。層厚5cmから20cm、下限は判然。Ⅲ-4層が上位から土壌化したものとみられ、段丘面Ⅲ・Ⅳの全面に連続的に分布。Ⅲ-1・2層の分布範囲外では上部に1～2cmの厚さでB-Tm火山灰とみられる灰白色のシルト層が見られる場合がある。層の上部で焼土・炭化物集中・集石などの遺構が確認されるがⅢ-1層の分布範囲外にほぼ限られる。縄文時代の遺物が稀に出土。大型の生物遺体は認められない。

Ⅲ-4層：上部は黒（2.5Y 2/1）色粘土質シルトと褐灰（10YR 4/1）～灰白（10YR 7/1）色シルト質粘土の

互層で、下部へ向かって黄褐 (10YR 5/6) ～褐 (10YR 4/6) 色の細～中礫 (主に軽石) 混じりシルト質砂・黒褐 (10YR 3/2) 色細礫質砂など粗粒の部層が主体となる。下限は画然とし、層厚は10㎝から場所によって1ｍに達する場合がある。段丘面Ⅲ・Ⅳの全面に連続的に分布するが、現河道に近い位置ではほとんど上部の細粒部分のみからなる。分布と層厚については次節でも述べる。少なくとも下部は河成の堆積物と考えられ、E～F-276区付近では堆積面が保存されている可能性がある。層の上部は一次的な堆積物のうちの細粒部分が再堆積したものかも知れない。人工遺物・大型の生物遺体は認められない。例外的に段丘面Ⅰ前縁の段丘崖部分で層の下底付近から縄文時代晩期の遺物がかなり出土したが、本層の堆積時に下位の包含層を削剥した結果とみられる。

Ⅲ-5層：暗赤褐 (5YR 3/2) 色シルト質粘土ないし黒褐 (7.5YR 3/2) 色細礫～砂質粘土、泥炭質。細礫はⅣ層のものに似た岩片が主である。層厚1㎝から30㎝、段丘面Ⅲ奥部に連続的に分布し、Ⅳ層上面の凹地に発達する (本章4節)。またD-278区付近の緩斜面では黒 (無彩色 2/1) 色の砂混じりシルト質粘土が5㎝程度の厚さでⅣ層を覆って堆積しており、Ⅲ-5層と同時期のものとみられる。泥炭は主にヨシと思われる草本から構成される。しばしば木材を含むが株はほとんどなく、焼けた木材や木製品が散在して検出される。縄文時代晩期後葉の遺構 (炭化物集中・フレイク・チップ集中)・遺物があり、淡水貝などの動物遺体も見られる。遺物の大半は層の下底近くで出土した。

Ⅳ層：　旧河道の上位など凹地においては段丘面Ⅰ上で見られるより厚く、30㎝以上に達する場合がある。この場合層の上部は主に褐灰 (10YR 4/1) 色・暗褐 (10YR 4/4) 色などの細礫 (軽石がめだつ) 質砂、下部は暗赤褐 (5YR3/6) 色細礫質砂で、両者の境ににぶい黄褐 (10YR 4/3) 色の薄いシルト質砂層が介在。凹地部分以外ではこの細粒の部層以下だけが見られる。層の上部で稀に縄文時代の遺物や木材が出土する。上部の軽石に富む部分はTa-cに含めてよいかどうか疑問もあり、Ⅲ層の一部とすべきかも知れない。この場合にぶい黄褐色の細粒部分は降下堆積物の上面に二次的に形成された風成層と考えられる。

Ⅴ-1層：Ⅴ-2層の堆積後、Ta-c降下以前に形成された土壌ないし表層の堆積物をまとめる。河道以外の部分では黒褐 (7.5YR 2/2～3/1) 色シルト質粘土、下限判然、層厚1～5㎝。河道内では暗黄灰 (2.5Y.4/2) 色・暗オリーブ灰 (2.5GY 4/1) 色・黒褐 (2.5Y 3/2) 色などの軽石礫混じりシルト質砂で、下底付近は軽石以外の細・中礫が顕著になる。河道内ではしばしば泥炭質の部分を交えるが、あまり発達したものではない。分解の進んだ植物遺体に木材を交え、ヨシなどの草本や樹木の株はめだたない場合が多い。本層では縄文時代晩期後葉の遺構・遺物、また主に河道内で昆虫・樹木などの生物遺体が見られる。

Ⅴ-2層：灰黄褐 (10YR 4/2) 色・にぶい黄橙 (10YR 7/3) 色などの粘土、暗灰黄 (2.5Y 5/2) 色・にぶい黄褐 (10YR 5/4～4/3) 色などの軽石礫混じり砂、黒褐 (10YR 3/2) 色シルト質粘土などの互層。層厚20～60㎝、下限は画然としている。Q-271区付近ではほぼ純粋に河成の堆積物と思われるが、H-276区付近ではより細粒となるとともにやや泥炭質の部層や黒 (10YR 2/1) 色の埋没土壌と思われるものを含む。層の上部では粘土質の部層の中に炭化物 (主に木材片) の薄い層が形成される場合がある (図Ⅲ-6)。人工遺物・大型の生物遺体はほとんどない。

Ⅴ-2/3層：O・P-271～273区付近で確認された堆積物で、Ⅴ-2層に覆われⅤ-3層を不整合に覆っている。段丘面Ⅳを構成する主要な堆積物であるとみられる。暗灰黄 (2.5Y.5/2) 色・灰 (5Y 4/1) 色などの砂と褐灰 (7.5YR 5/1～10YR 4/1) 色・灰黄褐 (10YR 5/2) 色等の粘土の互層。層厚は70㎝前後、下底にはオリーブ黒 (5Y 3/1) 色の細・中礫 (軽石を含まない円礫) 質砂が見られ、河道内の堆積物であることを示す。Qライン付近の断面では層内に地滑り痕と思われる不連続面が認められる。場

所によってⅤ-1層同様炭化材片の薄層が含まれている（図Ⅲ-6）。下底付近でⅣ群c類土器、中位でⅤ群c類土器が出土。生物遺体は稀に木材を含む程度である。Ⅴ-2層に覆われ、しかもⅤ群c類土器が出土することから少なくとも一部は縄文時代晩期後葉の堆積物であると考えざるを得ないが、多少問題を残す。本層の性格については本章５節旧河道部の項で再度触れたい。

Ⅴ-3層：Ⅴ-4層の直上に形成された黒（10YR 1.7/1）～黒褐（2.5Y 3/2）色のシルト質粘土、これと概ね同時期とみられる河道内の堆積物、およびこれらを覆って広く分布する黒褐（7.5～10YR 3/2）色ないし黒（7.5YR 2/1）色で泥炭質の粘土質シルト層を総称する。河道以外の部分では層厚５～10㎝、下限判然。段丘面Ⅲの全域にわたって分布するが、段丘面Ⅳの範囲に存在するかどうかは確定できなかった（本章５節旧河道部の項参照）。河道内では暗灰黄（2.5Y 4/2）色・灰オリーブ（5Y 4/2）色・暗オリーブ灰（2.5GY 4/1）色などの軽石礫混じり砂と黒褐（10YR～2.5Y 3/2）色、泥炭質の粘土質シルトの互層を主体に軽石を交えない細礫質砂の薄層を挟み、下底では中礫・粘土塊などを交えた粗粒砂層となる。縄文時代後期後半の遺構（炭化物集中・集石）と遺物がⅤ-4層直上の黒色土や河道の堆積物中で確認される。木材や種子などの植物遺体は砂層部分でやや稀となるものの層の全体を通じて多く、昆虫などの遺体も見られる。なお現地調査中には便宜的に層上部の泥炭質部分をⅤ-3a層、河道内で顕著な砂質の堆積物をⅤ-3b層、また層下部のより腐植に富み遺物の目につく部分をⅤ-3c層と区別して遺物の取り上げをおこなった場合もあるが、異なる地点間で対比が可能であるとの確信が得られないので層序の区分としては採用しない。

Ⅴ-4層：にぶい黄（2.5Y 6/4）色・暗灰黄（2.5Y 4～5/2）色などの軽石礫混じり砂と褐灰（10YR 5/1）色・暗灰黄（2.5Y 4/2）色などのシルトの互層に黒褐（10YR～2.5Y 3/2）色粘土質シルト（泥炭質）の薄層を挟む。層厚は40～90㎝、下限の画然とした河成層で、場所によって河道跡と思われるものを含んでいる（図Ⅲ-3Kライン付近、図Ⅲ-4Hライン付近）。Ⅴ-3層と同じく段丘面Ⅲの範囲に広く見られ、段丘面Ⅳ部分でははっきりしない。人工遺物は確認されていないが、泥炭質の部層中に炭化物（木材片）の集中が見られる場合がある（図Ⅲ-3）。また河道内とみられる部分では木材が出土する。

Ⅴ-5層：黒褐（10YR 3/2）色の粘土質シルト（泥炭質）と暗オリーブ灰（5GY 4/1）色砂・暗灰黄（2.5Y 4/2）色軽石礫混じり砂などの互層。各部層の下限は画然として主に河成の堆積物とみられ、しばしば河床の残留堆積物とみられる細・中礫（軽石を含まない円礫）質砂層を含む。段丘面Ⅲの範囲に広く見られ、段丘面Ⅳ部分については不明確である（本章５節旧河道部の項）。層厚は60㎝から場所によって2m以上に達し、さらに分層が可能であるが、河道跡が切り合っていて異なる地点間での部層の対比は難しい。今年度の調査では河成堆積の休止期を示すと考えられる連続性のよい泥炭質・腐植質の部層、およびそれらと同時期と思われる河道跡に対して以下のように名称を与え、層準の目安とするにとどまった。

Ⅴ-5a層：河道外の部分では暗褐（7.5YR 3/3～4）色、泥炭質のシルトで、場所によっては灰オリーブ（5Y 4/2）色の粘土質シルトや砂との互層となって２枚以上に分かれる。下限は画然、層厚5～10㎝。5b・5c層に比べて赤味が強い印象を受ける。堆積面はI-277区付近で標高28.4m前後。河道内では厚く砂礫質となるほか、K-275～276区付近では河道状の凹地内で泥炭質の堆積が厚さ40㎝に達している（図Ⅲ-3）。273ライン以東ではほぼ段丘面Ⅲの全域に連続的な分布が認められる。縄文時代中期後半の遺構（炭化物集中）・遺物を少数確認しており、河道内では木材が出土する。

Ⅴ-5b層：5a層と次の5c層の間に位置する複数の泥炭質ないし腐植質の層を一括したものである。それぞれが連続性のよい堆積物であるかどうか確認できなかったが、I-277区付近では河道の重複と堆

積面の標高差から上下4枚の層が区別され、それぞれⅤ-5b1・b2・b3・b4層と仮称して調査をおこなった。

Ⅴ-5b1層：黒褐 (10YR 3/2) 色粘土質シルト (泥炭質)。河道以外の部分は層厚5㎝程度、下限画然。堆積面はI-276付近で標高28.2m前後。河道内では砂礫との互層となる。少なくとも276ライン以東、Jライン以北では連続的に確認できる。河道内で炭化物集中が1例確認され、カゴ状繊維製品を含む縄文時代中期後半の遺物が出土。木材も河道から豊富に出土している。

Ⅴ-5b2層：黒褐 (10YR～2.5Y 3/2) 色または黒 (10YR 2/1) 色のシルト質粘土。やや分解の進んだ泥炭質、あるいは腐植質。河道外の部分では層厚5㎝程度で下限画然。I-277区付近で堆積面の標高は28.0m前後。河道内では砂礫との互層となり、木材を多く出土。人工遺物は下位の包含層から混入したと思われる縄文時代早・前期土器片などを除いて確認していない。図Ⅲ-4のⅤ-5b：11・12層は本層に相当するとみられる。

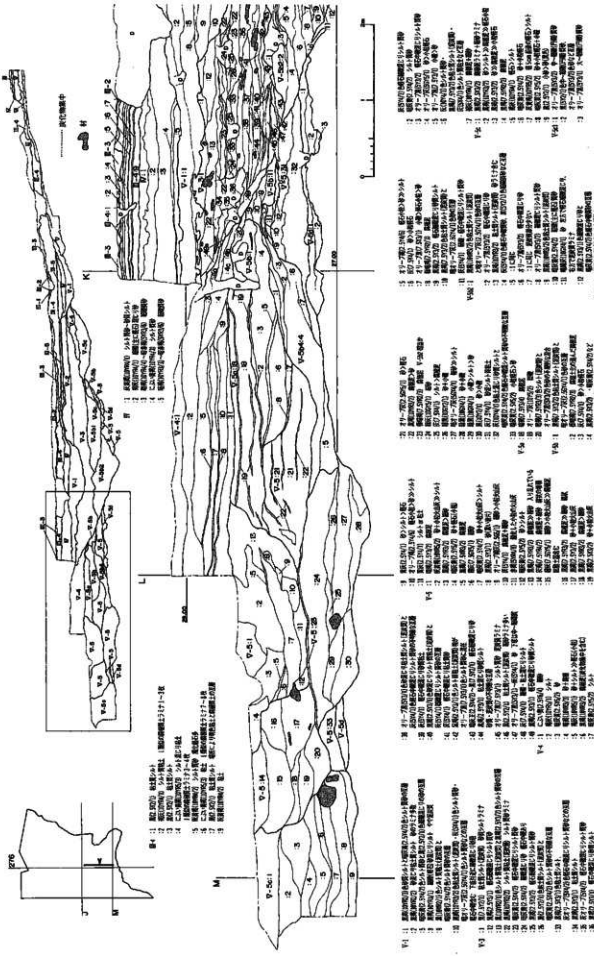
Ⅴ-5b3層：黒褐 (10YR 2/2～3/1) 色シルト質粘土。腐植泥あるいは黒泥。層厚5～10㎝、下限は判然、上位から土壌化したもののようにも見える。I-277区付近での堆積面は標高27.8m前後。H～J-276・277区で確認できるが広がりは不明、この層に相当する河道も見つかっていない。遺構・大型の生物遺体は確認されない。縄文時代中期前半の土器が稀に含まれているようである。図Ⅲ-4のⅤ-5b：16・17層は本層に相当するとみられる。

Ⅴ-5b4層：黒 (10YR～2.5Y 2/1) 色シルト質粘土、いくらか泥炭質。河道以外の部分では層厚5㎝程度、下限は画然としている。I-277区付近での堆積面は27.7m前後。河道内では礫混じり砂・シルト質砂などとの互層となり木材が多く含まれる。H～K-276・277区内で連続的に確認できるが広がりは不明。遺構は確認されず、河道内で縄文時代中期の土器がわずかに出土した。図Ⅲ-4ではⅤ-5b：18層が本層に相当するとみられる。

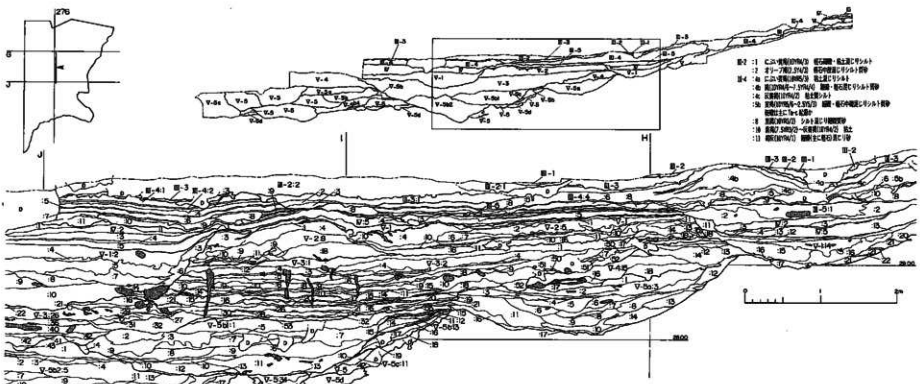
Ⅴ-5c層：上部は黒褐 (7.5YR 3/1) 色シルト混じり粘土 (泥炭質)、下部は黒褐 (10YR 3/1) 色粘土。ともに下限は画然、両者を合わせた層厚は5～10㎝で薄い暗オリーブ灰 (2.5GY 4/1) 色の砂層を挟む場合がある。河道内では軽石礫混じりの砂との互層となる。堆積面の標高はI-277区付近で約27.4m。少なくともH～Mライン間、273ライン以東の範囲で広く認められるが、段丘面Ⅳの部分には分布しない。縄文時代前期前半の土器をわずかに含んでいる可能性がある。木材は河道内で出土するほか、幹の部分など大型のものは河道外でも遺存している場合があった。

Ⅴ-5d層：オリーブ黒 (5Y 3/1～2) 色ないし黒 (5Y 2/1) 色の細～大礫質砂。礫は円礫で軽石である。川がⅩⅢ層を侵蝕した際に河床に残留した粗粒物質とみられ、複数の河道の河床礫が複合したものと考えられる。とはいえ段丘面Ⅲ・Ⅳのほぼ全域にわたって10～30㎝の比較的均一な層厚で連続的に分布しており、後に上位から攪乱されている部分があるにしても大まかには遺跡付近でキウス川による谷の侵蝕が停止し、埋積に転じた時期を示す堆積物と考えることができるであろう。縄文時代早期末の遺物が少数出土、土器は摩耗している。上面で大型の木材が稀に出土するのを除けば、生物遺体は確認されない。

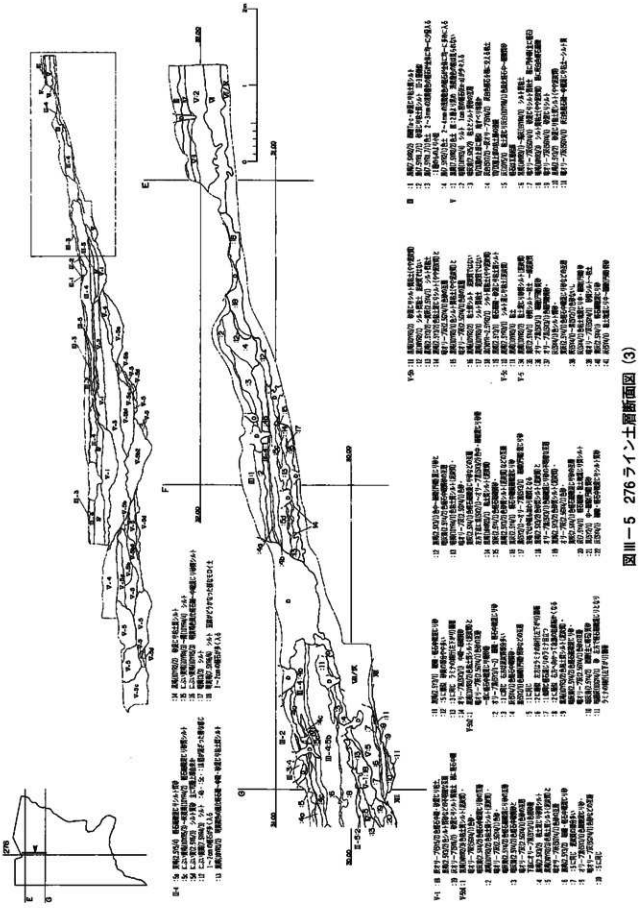
以上旧河道とその周辺部分の層序、特にⅤ-4層以下の部分についての記述は不徹底なものであり、今後の調査の継続によって修正される点も多いと思われるので特にお断りしておきたい。



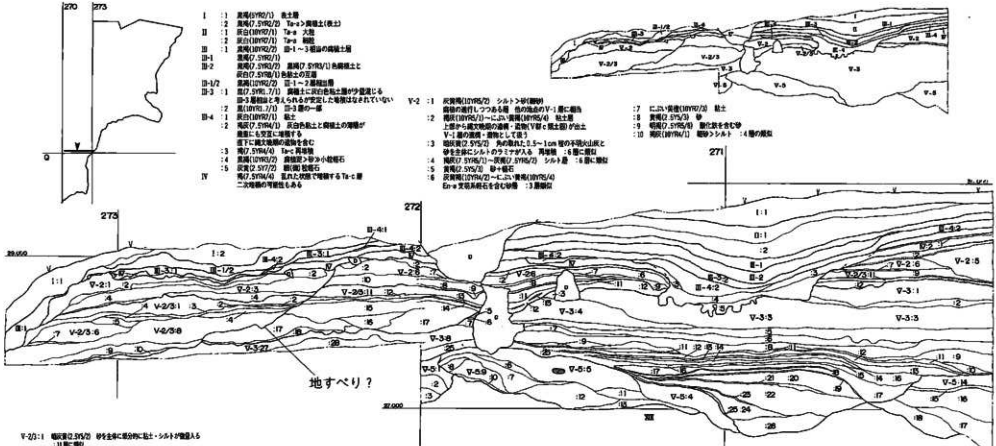
図Ⅲ－３　276ライン土層断面図（1）



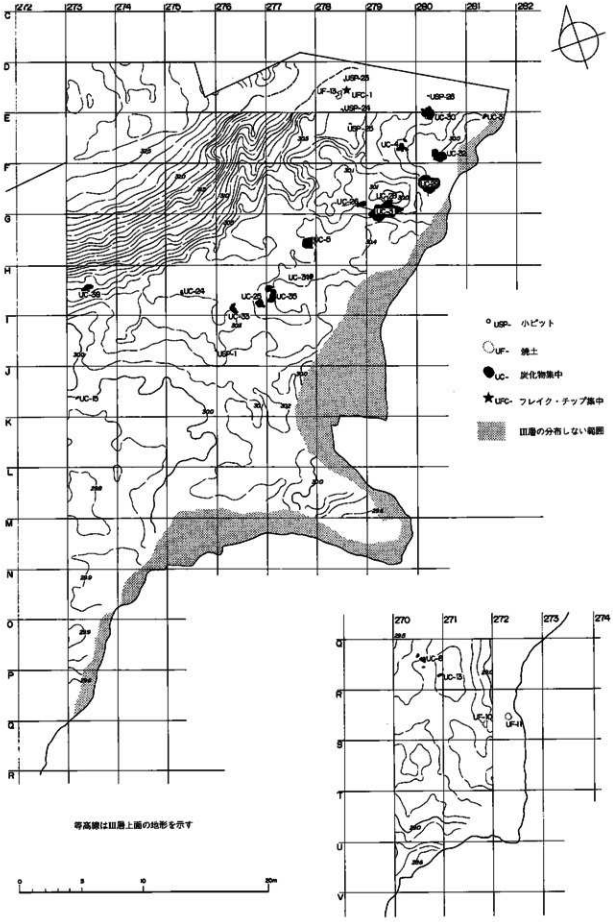
図Ⅲ－4　276ライン土層断面図（2）



図Ⅲ－５　276ライン土層断面図（3）



図Ⅲ－6　Qライン土層断面図


272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
USP-23
UF-13
UFC-1
USP-26
USP-24
USP-25
UC-30
UC-32
UC-31
UC-6
UC-24B
UC-24
UC-35
UC-33
UC-15
USP-1
UC-8
UC-13
UF-10
UF-11
270
271
272
273
274
S
T
U
V
○ USP- 小ピット
○ UF- 焼土
● UC- 炭化物集中
★ UFC- フレイク・チップ集中
Ⅲ層の分布しない範囲
等高線はⅢ層上面の地形を示す
0
5
10
20m

図Ⅲ－７　Ⅲ層遺構位置図

4 .Ta-c 上位の調査

(1) 遺構

a. 焼土

UF-10 (図Ⅲ－8)

位置 S-271-c UF-11 に隣接する。

規模 0.87 × (0.56) ／0.08m

特徴 Ⅲ-1層の調査中に炭化材の集中を認め、同じ位置のやや下位で小規模な焼土を検出した。Ⅲ-2層上面が焼土化している。ほぼ同じ面で東へ2m足らずの位置にUF-11が確認されており、近接した時期のものである可能性が高い。

遺物 炭化材以外の遺物は確認されていない。

時期 縄文時代晩期後葉以降。推定されるⅢ-1層の形成年代は撚文時代以降である。

UF-11 (図Ⅲ－8)

位置 S-272-a.b UF-10 に隣接。

規模 0.55 × 0.50 ／0.08m

特徴 Ⅲ-2層上面で確認した。UF-10のような炭化材の出土は認められないが、この位置で焼けたものと考えられる。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代晩期後葉以降。UF-10 同様撚文時代以降のものである可能性が高い。

UF-13 (図Ⅲ－8)

位置 D-278-b.c UFC-1 の下位にある。

規模 0.72 × (0.36) ／0.04m

特徴 Ⅲ-5層に対応するとみられるⅣ層直上の腐植質土中で確認。フレイク・チップ集中 UFC-1 の土壌を1～3㎝ほどの厚さで採取したところ、フレイク・チップの密集地点から少し西へずれた位置に骨片を多く含む焼土が現れた。掘り込みを伴わない薄い焼土で、ほとんどⅣ層上面に接して形成される。焼土と周辺に散在する骨片混じりの土壌を全量採取して浮遊選別をおこない、多量の微細遺物を採取した。また浮遊選別によって得た炭化材片 10.0g を試料として ^{14}C年代測定を依頼した (Ⅵ章1節)。

遺物 浮遊選別の結果Ⅴ群c類土器1点、黒曜石製フレイク・チップ20点、礫片1点が見出された (表Ⅲ-17)。フレイク・チップの数はそれほど多くなく、この焼土と UFC-1 との共時性には疑問が残る。脊椎動物遺体 (焼骨) は14g余りが選別され、イヌ科哺乳類が同定されている (Ⅵ章2節)。植物遺体ではタデ属・マタタビ属種子が確認され (Ⅵ章3節)、また炭化材片3点について樹種の同定を試みた結果、コナラ属・カエデ属材の存在が推定された (Ⅵ章4節)。

時期 縄文時代晩期後葉。^{14}C 年代測定結果は 2200 ± 80y.B.P. (KSU-2438)。

b. 小ピット (図Ⅲ－9)

Ⅲ-2層上面で1基 (USP-1)、Ⅲ-4層上面で4基 (USP-23～26) の小ピットを確認した。後者はⅢ-1・2層の分布範囲外にあり、USP-1 と層位の上で区別することはできない。

位置 D～F・278～281ライン間の段丘崖斜面の裾部分に4基があり、USP-1のみ旧氾濫原中に孤立している。

規模 USP-1 : (0.14 × 0.10) ／0.14 × 0.12 ／0.52m

USP-23 : (0.16 × 0.10) ／ (0.12 × 0.08) ／0.07m

USP-24 : (0.28 × 0.10) ／ (0.25 × 0.10) ／ 0.12m
USP-25 : 0.22 × (0.10) ／ (0.22 × 0.12) ／ 0.17m
USP-26 : (0.16 × 0.06) ／ (0.11 × 0.05) ／ 0.07m

特徴　USP-23～26は浅く不整形の落ちこみで、黒褐色の腐植土で埋まっている。自然の攪乱である可能性を否定できない。USP-1はわずかに傾いた深い柱穴状で、覆土は壁面から崩落したものらしく軟である。立ち腐れた柱・杭の痕跡と考えられる。
小ピット相互、また他の遺構との切り合いはない。

遺物　出土していない。土壌の浮遊選別は実施しておらず、微細遺物の有無は不明である。

時期　縄文時代晩期後葉以降。B-Tm火山灰との先後は不明である。

c. 炭化物集中

Ⅲ層では18箇所の炭化物集中が確認された。表Ⅲ-5にその一覧を示す。いずれも旧汀線原部分に位置しており、段丘面上や段丘崖部分にはない。これらはその層位によって、1) Ⅲ-1層に形成されたもの(UC-3・8・13・15・24～26・38)、2) Ⅲ-3層下部ないしⅢ-4層のもの(UC-4・5)、3) Ⅲ-5層のもの(UC-33～35)に区分して扱うことができる。Ⅲ-1・2層の分布しない範囲で検出された炭化物集中の大半(UC-28～32)はⅢ-3層の上部に位置しており、Ⅲ-1層の炭化物集中と同層準のものとして捉えることができる。以下主にそれぞれの層準における傾向について記述する。個別の遺構の位置・規模・形状・遺物等については表Ⅲ-5・16・17、図Ⅲ-7・9・10を参照して頂きたい。なお図Ⅲ-9・10には浮遊選別によって微細遺物の有無を確認した炭化物集中のうちから一部を掲げ、その他は図Ⅲ-7にその位置と形状の概略のみを示してある。

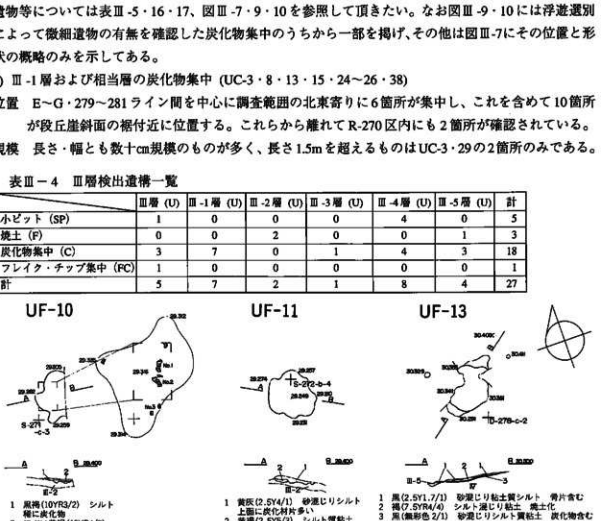
1) Ⅲ-1層および相当層の炭化物集中 (UC-3・8・13・15・24～26・38)

位置　E～G・279～281ライン間を中心に調査範囲の北東寄りに6箇所が集中し、これを含めて10箇所が段丘崖斜面の裾付近に位置する。これらから離れてR-270区内にも2箇所が確認されている。

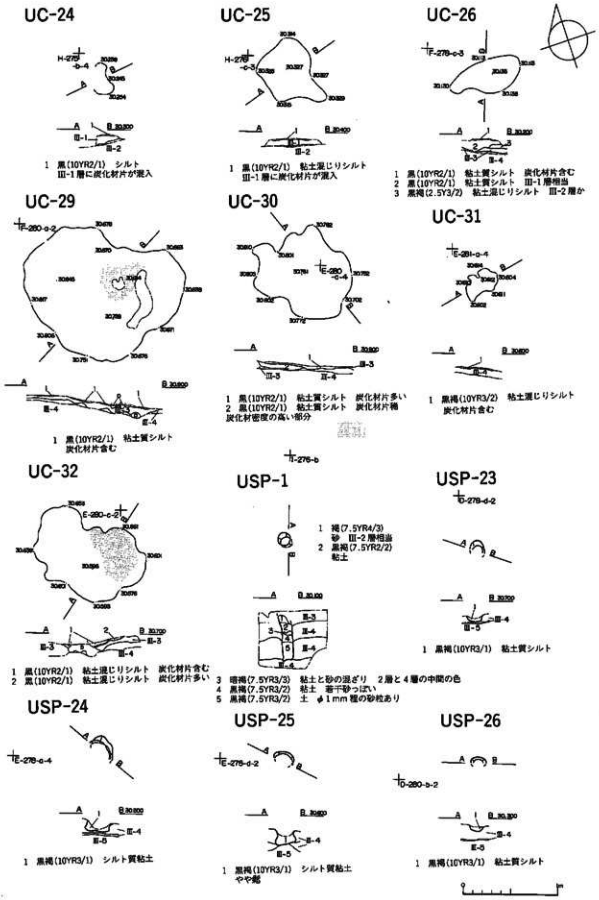
規模　長さ・幅とも数十cm規模のものが多く、長さ1.5mを超えるものはUC-3・29の2箇所のみである。

表Ⅲ－４　Ⅲ層検出遺構一覧

	Ⅲ層 (U)	Ⅲ-1層 (U)	Ⅲ-2層 (U)	Ⅲ-3層 (U)	Ⅲ-4層 (U)	Ⅲ-5層 (U)	計
小ピット (SP)	1	0	0	0	4	0	5
焼土 (F)	0	0	2	0	0	1	3
炭化物集中 (C)	3	7	0	1	4	3	18
フレイク・チップ集中 (FC)	1	0	0	0	0	0	1
計	5	7	2	1	8	4	27



図Ⅲ－８　Ⅲ層の焼土



図III－9 III－1 層の炭化物集中・小ピット

ただし腐植質土中で集中範囲を確定する作業には困難がともなう。断ち割って確認したものでは厚さは1～8㎝の範囲にある。炭化物を含む土壌の厚さが5㎝以上に達する場合でも、密集部分は比較的薄い (3㎝未満) のが普通である。

特徴　いずれも材片を主とする炭化物が集積したもので掘り込みを伴わない。原形をある程度保った炭化材を含む例 (UC-3・13・15) もある。Ⅲ-1層は冠水した痕跡も特にないので、多くは人為的に形成されたものであろう。他の遺構と重複した例はない。UC-28はUC-3の下位で確認されている。

遺物　発掘作業中に確認した遺物はUC-3出土の礫2点があるのみである。土壌を採取して浮遊選別を実施した9箇所についても残渣から人工遺物は見い出されていない (表Ⅲ-16・17)。UC-26・30については炭化種子の同定を依頼した (Ⅵ章3節) が、種子は確認されなかった。UC-3・8・26の炭化材の観察を試み、トネリコ属・モクレン属・コナラ属材などの存在を推定した (Ⅵ章4節)。

時期　土器・石器類を交えないこと、またⅢ-1・2層自体も土器・石器類の一次的な包含層ではないと考えられること、Ⅲ-1層中にB-Tmに似た火山灰層が認められることなどから擦文時代より新しい時期のものである可能性が高い。1739年より古い。

2) Ⅲ-3層下部・Ⅲ-4層の炭化物集中 (UC-4・5)

位置　E-279区・G-277区に各1箇所。Ⅲ-1層の場合と同じく段丘崖斜面の裾に近い位置にある。

規模　長さ・幅とも1m未満。ただしUC-5は確認が遅れ本来の規模は不明である。

特徴　掘り込みを伴わない。Ⅲ-3層下部から4層にかけては焼土・集石等他の遺構が全くなく遺物も乏しいこと、河成の堆積物とみられるⅢ-4層の性格などから、人為的なものでない可能性もある。

遺物　発掘中には確認されず、浮遊選別をおこなったUC-5についても残渣中に人工遺物を見い出していない (表Ⅲ-16・17)。

時期　推定されるⅢ-3・4層の年代から縄文時代晩期後葉より新しく、B-Tm火山灰降下よりは古い。

3) Ⅲ-5層の炭化物集中 (UC-33～35)

位置　Ⅲ-276・277区に3箇所が存在する。段丘面のうち泥炭層の発達しない微高地に形成されている。

規模　規模はⅢ-1層のものと差がない。

表Ⅲ－5　Ⅲ層の炭化物集中一覧

遺構名	グリッド	層位	規模(単位m)	浮遊選別	人工遺物	備考
UC-3	F-279-b・F-279-c・G-279-a	Ⅲ-1	2.82×1.48／記録なし	試料なし		
UC-4	E-279-c	Ⅲ-4上面	0.90×0.64／0.01	試料なし		
UC-5	G-277-c	Ⅲ-4上面	(0.86×0.78)／0.09	残渣選別	なし	
UC-8	R-270-a・R-270-c・R-270-d	Ⅲ-1	0.88×0.42／0.04	未実施		
UC-13	R-270-c	Ⅲ-1	0.34×0.23／0.02	試料なし		
UC-15	J-273-a・J-273-b	Ⅲ-1	0.56×0.48／記録なし	試料なし		
UC-24	H-275-b	Ⅲ-1	0.34×(0.24)／0.02	残渣選別	なし	図Ⅲ-9
UC-25	H-276-c	Ⅲ-1	0.78×0.68／0.02	残渣選別	なし	図Ⅲ-9
UC-26	F-278-c	Ⅲ-1	0.79×0.36／0.01	浮遊・残渣とも選別　同定	なし	図Ⅲ-9
UC-28	F-279-b	Ⅲ-3	0.38×0.34／0.01	残渣選別	なし	
UC-29	F-280-a・F-280-b	Ⅲ-3	1.70×1.42／0.01	残渣選別	なし	図Ⅲ-9
UC-30	D-280-b・E-280-a	Ⅲ-3	1.14×0.90／0.08	浮遊・残渣とも選別　同定	なし	図Ⅲ-9
UC-31	E-281-a	Ⅲ-3	0.41×0.27／0.01	残渣選別	なし	図Ⅲ-9
UC-32	E-280-b・E-280-c	Ⅲ-3	1.24×0.90／0.04	残渣選別	なし	図Ⅲ-9
UC-33	H-276-b	Ⅲ-5	0.82×(0.65)／0.04	浮遊・残渣とも選別　同定	なし	図Ⅲ-10
UC-34	H-277-d	Ⅲ-5	0.44×0.30／0.02	残渣選別	縄片	図Ⅲ-10
UC-35	H-276-c・H-276-d・H-277-a・H-277-h	Ⅲ-5	1.36×0.92／0.02	残渣選別	なし	図Ⅲ-10
UC-38	H-273-a・H-273-b	Ⅲ-1	0.98×0.54／0.01	未実施		

特徴　掘り込みを伴わない。遺物に乏しいがⅢ-5層は氾濫による堆積物を含まないとみられ、人為的な集積とみて問題ないであろう。炭化物集中相互、あるいは他の遺構との切り合いはない。

遺物　発掘中に確認できた遺物はない。3箇所とも土壌を採取して浮遊選別を実施した。残渣から見い出された人工遺物としてはUC-34の礫片があるのみである（表Ⅲ-17)。浮遊物も含めて選別したUC-33ではタデ属・マタタビ属・ブドウ属種子が同定されている（Ⅵ章3節)。

時期　縄文時代晩期後葉と考えられる。

d.フレイク・チップ集中

UFC-1　(図Ⅲ－11)

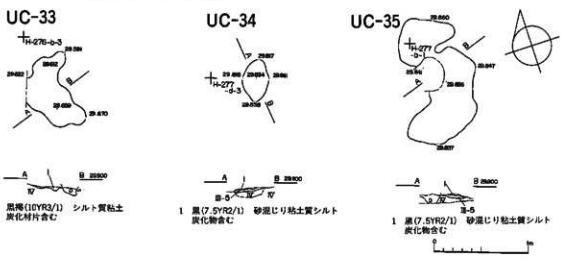
位置　D-278-b～d　UF-13に隣接し、そのわずかに上位にある。

規模　0.78×0.51／0.02m (D-278-c-1区付近の遺物密度の濃い部分)

特徴　D-278区付近ではⅢ-4層の下位にⅢ-5層に対応するとみられる黒色の腐植質土が分布している。この層を調査中にフレイク・チップの集中を確認し、確認面で集中の平面形と上面の標高を記録した後、集中とその周囲の50cm四方の細グリッド10方格について2cm程度の厚さで土壌を採取し、浮遊選別をおこなって遺物を得た。

遺物　1.41mm目の篩による浮遊選別残渣の選別により、総数819点の黒曜石製剥片石器類、土器23点などが見出された（表Ⅲ-17)。剥片石器類の大半は小グリッドc-1内に分布している。細部調整のある遺物では石鏃2点・Rフレイク1点がc-1-ロ・c-2-イ区から見出されている。フレイク・チップは概して小さく、細部調整の産物が主であるように見受けられるが、c-1-ロ・c-2-イ区では遺物数の割に黒曜石製遺物の重量が大きく、やや大型の遺物が多いことを示す。黒曜石製遺物のうち表面が白く曇り、あるいは発泡して火を受けたことを示すものが78点認められた。隣接して焼土UF-13が存在することと関連するかも知れないが、必ずしもUF-13に近いグリッドで被熱した遺物が多いわけではない。微細なフレイク・チップを焚火に投じた形跡は同じ晩期中葉の遺構であるⅤ-1層の焼土LF-2・15・16でも認められるところである。

土器片は分類できる範囲ではⅤ群c類であるが、黒曜石製遺物の集中地区で特に多いわけではない。また動物遺体では焼骨・淡水貝の殻皮と思われるものがあり（未同定)、植物遺体では炭化材のほか炭化・不炭化の種子があるが（表Ⅲ-17)、いずれも石器類の集中との関連は明らかでない。炭化種子としてはタデ属、また不炭化のものからはマタタビ属・ブドウ属が同定され、とくにブドウ属の点数は多い（Ⅵ章3節)。



図Ⅲ－10　Ⅲ－5層の炭化物集中

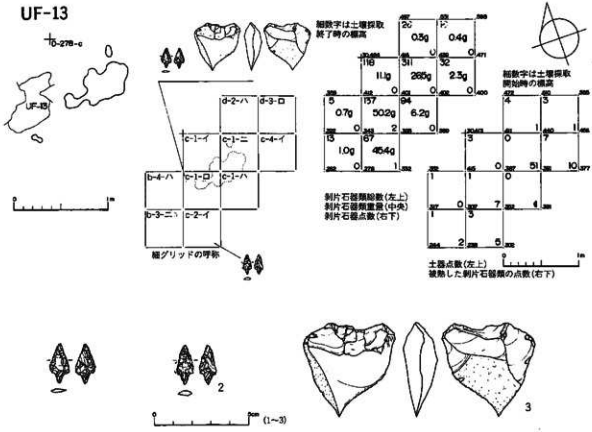
1と2は素材となる剥片に簡素な整形加工を施した有茎の石鏃である。いずれも主剥離面を残しており、基部以外の整形が中途なことから未製品もしくは製作途中で遺棄された可能性がある。3は角礫の風化面を持つ厚みのある剥片を使用したRフレイクで、加えられた打撃や剥離面からみて石鏃等の材料となる剥片を採取したフレイクコアーの可能性もある。

時期　縄文時代晩期後葉とみられる。

(2) 旧河道部

今回の調査範囲はキウス川河岸の段丘にあたり(Ⅱ章参照)、特に花岡の区分による段丘面Ⅲ・Ⅳの範囲では河成の段丘堆積物を挟みながら縄文時代以降の遺構や遺物包含層が累重しているのを見ることができる。また当時キウス川の氾濫原であったとみられるこの部分では各時期の河道跡が確認され、旧河道内からは木製品や淡水貝・昆虫遺体、未炭化の樹木・種子など低湿な堆積環境によって保存された遺物・遺体が出土している。このような旧河道内・河道周辺の堆積環境と遺構・遺物の関係について、本書では特に項を設けて説明することとした。

本項では段丘面Ⅰ上のⅢ層に相当するTa-c火山灰降下以後、Ta-a火山灰降下以前の時期を扱う。段丘面Ⅲ・Ⅳの範囲におけるこの時期の堆積物をⅢ-1層からⅢ-5層までの5層に区別したが(本章3節)、このうち旧河道そのもの、または氾濫原の堆積物が確認されたのはⅢ-2・Ⅲ-4の2層である。また最下位のⅢ-5層は河成とは言えないが河道周囲の低湿な環境に形成された泥炭質の堆積物である。これら3層の状況について以下順に説明する。



図Ⅲ－11　Ⅲ－5層のフレイク・チップ集中

a. Ⅲ -2 層の旧河道 (図Ⅲ -12)

S-269～270 区に設定したトレンチでⅢ -2 層によって埋積された河道が確認されている (図Ⅲ -12 右下)。無遺物層であるため河道内の発掘はおこなっていないが、Ⅴ -1 層を切り込んだ河道の平面形をたどると Q-272 区から西へ向かい、S-269 区付近で方向を変えて南方へ流れているらしい。Ⅲ -2 層自体は河道外にも広がり、特に蛇行する河道の外側に当たるSライン以北ではシルト質の堆積物が 267 ライン付近まで及んでいる。一方蛇行の内側に当たるとみられるUライン以南ではほとんど河道外に氾濫した形跡がない。

上記の河道とは別に、軽石を主とした礫を含むやや粗粒の堆積物がLライン以北を中心に見られ、場所によって 30㎝以上の厚さに達している (図Ⅲ -12 左上)。これを形成した河道と思われるものは見当たらない。後述するⅢ -4 層の一部のような扇状地堆積物ではないかと思われるが確実でない。発掘範囲南部の河道付近の堆積物とは年代が異なる可能性もあるが、いずれもⅢ -3 層とした黒色土を直接覆っているので併せてⅢ -2 層として扱った。

本層では各地区を通じて生物遺体はほとんど認められない。年代的にはB-Tm と Ta-c の間に位置することは間違いないものの、人工遺物がなく年代測定の試料となる遺体も採取できなかったので詳細は不明である。

b. Ⅲ -4 層の旧河道 (図Ⅲ -12)

本層の下部を構成する砂～細礫質の堆積物は段丘面Ⅰ前縁の段丘崖に沿って帯状に厚く堆積し、平均して 40㎝以上、場所によって約 1m に達している。水成のものであるが、付近に河道を認めることはできない。M～Q-270 区にⅢ -4 層によって埋積された河道が見られるものの (図Ⅰ -3)、上流へ長く続かずに終わっている。

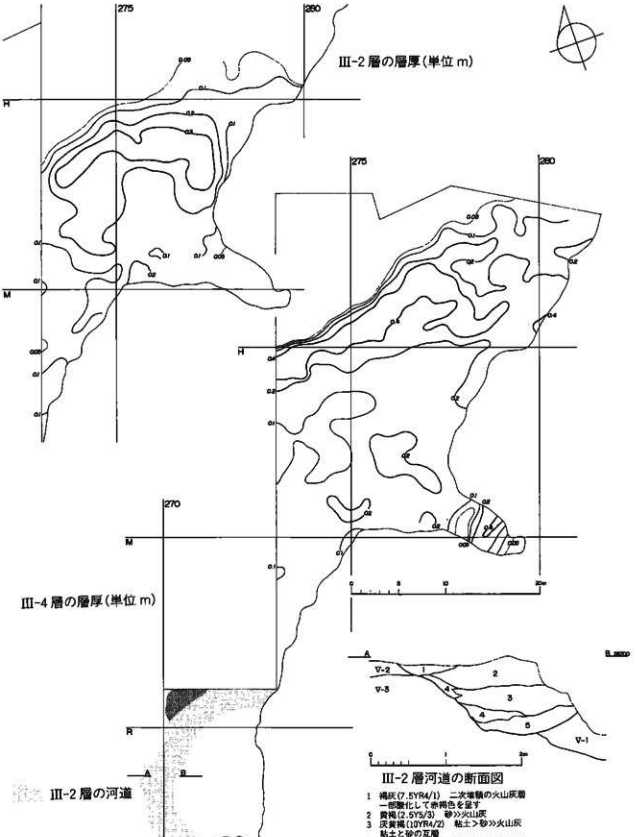
E～F-276 区付近には段丘崖の斜面を覆って本層の堆積面とみられる平坦面が残っており (図Ⅲ -5) 標高 31.0m 以上に達するが、ここから段丘崖に沿って西方へ向かうにつれて上面の標高は急激に低下し、J-270 区付近ではほぼ段丘面Ⅲの中に没してしまう。現在では調査範囲の東側にキウス川に合流する小さな支流があり (図Ⅳ -1)、その上流で谷がせき止められて池状の水面が形成されている。恐らくは過去にも同様な状況があって、そのようなせき止めが急激に崩壊して流出し、谷の出口で堆積したものがⅢ-4 層下部の粗粒部分なのではないかと思われる。一種の扇状地堆積物、もしくは沖積錐と呼ぶべきものであろう。

Ⅲ -4 層の上部を占める粘土～シルトと腐植質土の互層は広い範囲にわたって平坦な堆積を見せており、段丘面Ⅲ・Ⅳの全体が度々冠水したことを示している。しかし泥炭が形成されていない点から考えて河道に隣接した後背低地のような状況ではなく、既に段丘化していたのであろう。段丘面が長期間完全に水没していた場合にも類似の堆積物が形成される可能性はあるが、Ⅲ -4 層上部にしばしば炭化木材片の集積が見られること (本章 3 節) は水底の堆積としては説明しにくい。一時的な湛水で浮遊した炭化物が水が引いて取り残されたと考えるのが自然である。樹皮だけを残して分解した木材なども出土する。

本層も人工遺物を含まず、年代測定もおこなっていないので年代の詳細は不明である。

c. Ⅲ -5 層の旧河道 (図Ⅲ -13～15)

おもにヨシなどの草本に由来するとみられる泥炭ないし泥炭質の砂礫で、Ⅴ -1 層の河道に対応するⅣ層上の凹地に形成されているが、発達は段丘面Ⅲの最も奥まった部分に限られ、同面の前縁や段丘面Ⅳには分布しない。本層と同時期の河道が確認できないこと、標高の低い段丘面Ⅳに発達しないことか

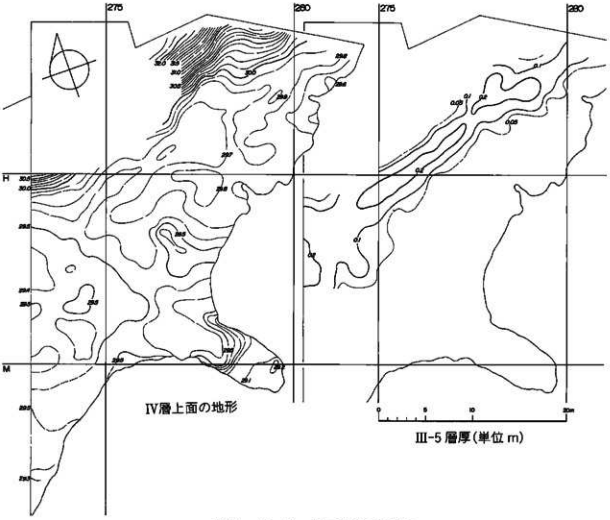


図Ⅲ－12　Ⅲ－2・4層の旧河道

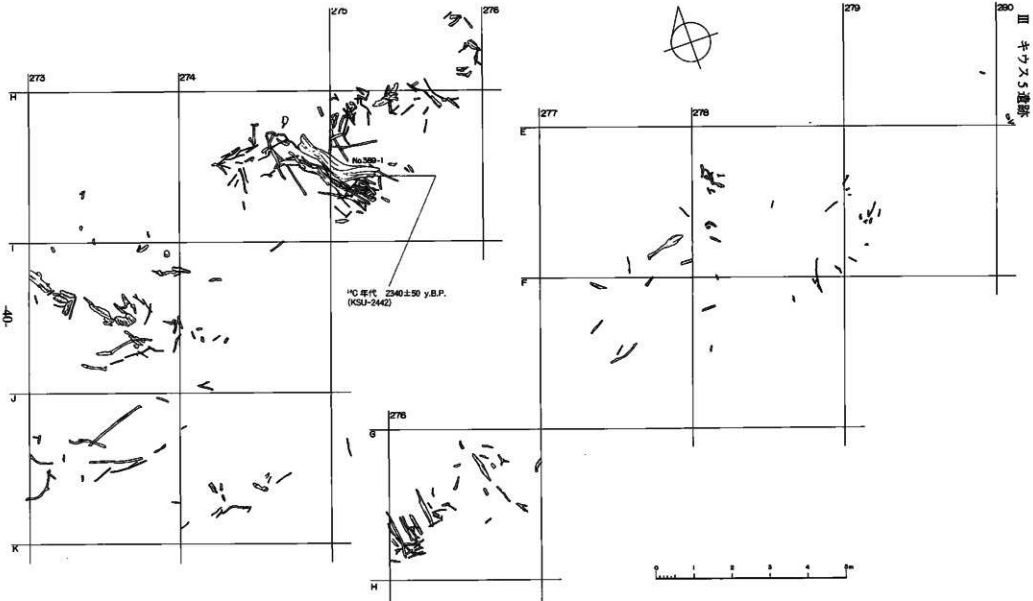
ら考えて、この泥炭は段丘崖からしみ出す水分に依存して形成されたものであろう。坂口豊 (1974 : 7) の分類した「アングル (崖下) 泥炭地」に相当する。層中の木材の長軸方向は地形の傾斜に一致する場合が多く (図Ⅲ-14)、明らかな流水の影響は認めにくい。層の下底付近で淡水貝殻表面の膜が少量出土した

層の下部では縄文晩期後葉の土器、また稀に木製品が確認される(今回報告範囲では槌状木製品1点)。焼けた木材もしばしば出土するが集中することはなく、同じ層の遺構や他の遺物との関連を認めることができない (図Ⅲ-15)。

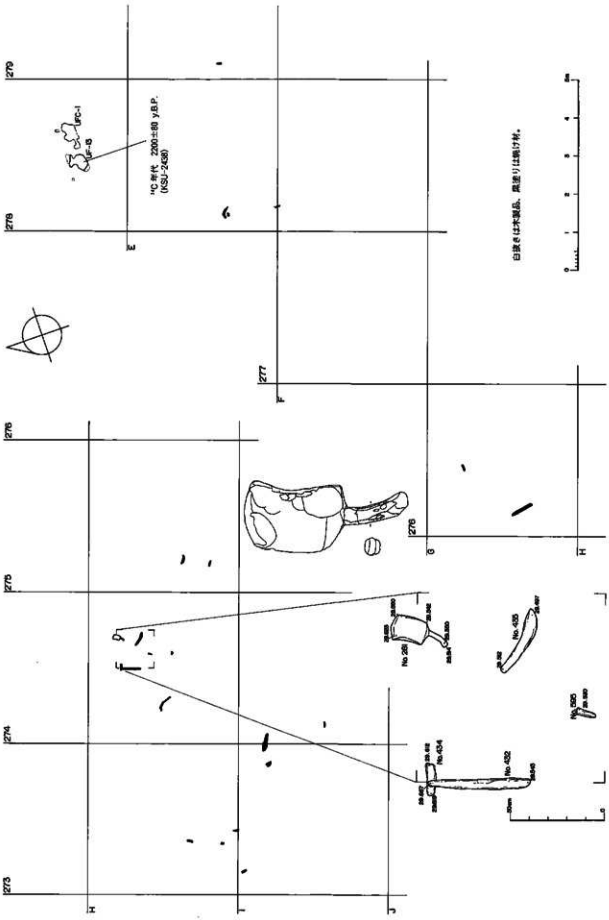
本層中の木材から 2340 ± 50y.B.P. (KSU-2442)、本層と連続的に形成された黒色土中の焼土 (UF-13) の炭化木材片から 2200 ± 80y.B.P. (KSU-2438) の ^{14}C 年代が測定されている (図Ⅲ-15、Ⅵ章1節)。層序や遺物の年代からもTa-c降下後間もなく形成されたことが推定できる。Ta-cの堆積によって地表に広く透水層が生じ、明瞭な河道が形成されにくくなったために、凹地部分で流水に妨げられることなくヨシなどの群落が発達したものであろうか。樹木の株は全く認められず、当時の景観としては丈の高い草に密に覆われた湿地が推定される。人が立ち入る機会が多かったとは考えにくいので、遺物や焼け材などのかなりの部分は段丘崖の上から偶然転落したものではないかと思われる。



図Ⅲ－13　Ⅲ－5層泥炭層の分布



図Ⅲ－14 Ⅲ－5層全木材出土状況図



図III－15 III－5層木製品・焼け材出土状況図

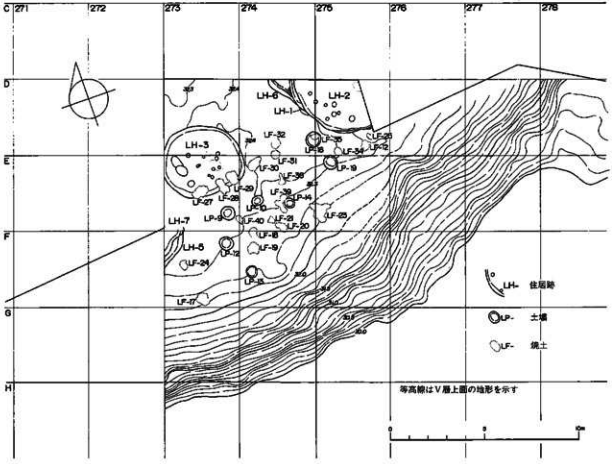
5.Ta-c下位の調査

(1) 遺構 (図Ⅲ－16～20)

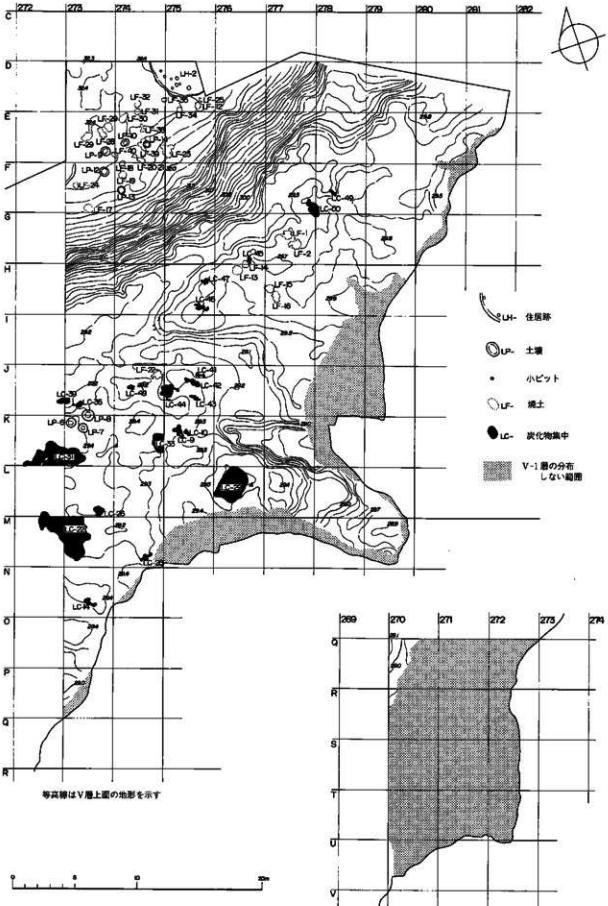
縄文時代早・中・後・晩期の遺構が見つかっている。早期は晩式土器の時期と考えられる住居跡 (LH－3) と土壙 (LP－19) が段丘上で見つかっており、この時期のものは千歳市周辺では珍しく貴重な資料である (図Ⅲ－16)。中期は炭化物集中が旧河道部で見つかった。これらの多くは中期後葉の恐らく柏木川式土器相当の時期と思われる (図Ⅲ－19,20)。後期は住居跡 (LH－6) と土壙 (LP－18) が段丘上から、集石 (KS)・炭化物集中 (KC) が旧河道部から見つかっており、余市式土器とホッケ間式土器の時期である (図－16,18)。晩期は住居跡 (LH－1・2) が段丘上から、土壙と焼土が段丘と旧河道部、炭化物集中が旧河道部から見つかっている。これらは晩期中葉～末の時期で、遺構や遺物の量から見て本遺跡で最も生活や活動等の痕跡の密度が高い時期でもある (図Ⅲ－16,17)。なお、段丘上の北側調査範囲間際で見つかった重複する住居跡 (LH－1・2・6) は、何れもその大半の部分が次年度以降の調査対象区に位置すると予想されたが、調査の原因となるカルバートボックス工事の掘削範囲に接近していることから必要最小限の調査を行ったものである。そのため掘削部から最も遠い位置にある炉跡等は、検出に止めそのまま埋め戻している。

	V層 (L)	V -1 層 (L)	V -3 層 (K)	V -5 層 (C)	計
住居跡 (H)	4	0	0	0	4
土壙 (P)	7	3	0	0	10
焼土 (F)	20	8	0	0	28
炭化物集中 (C)	0	22	11	13	46
集石 (S)	0	0	1	0	1
計	31	33	12	13	89

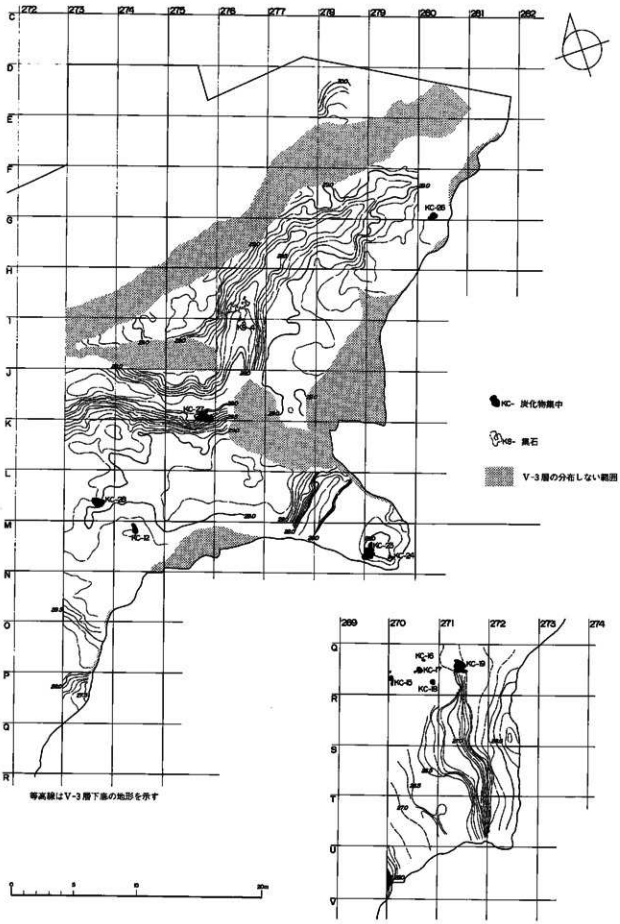
表Ⅲ－6　V層検出遺構一覧



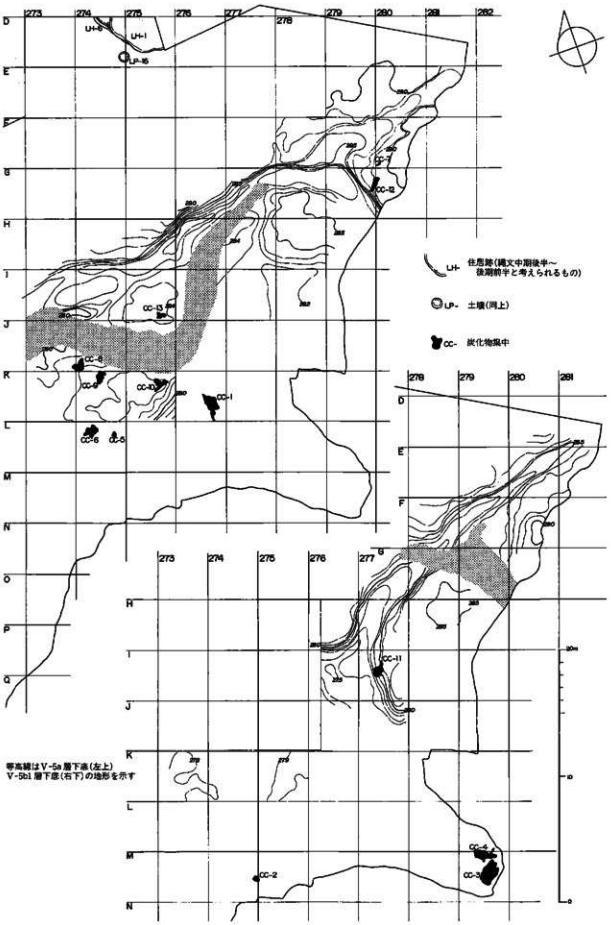
図Ⅲ－16　V層遺構位置図（段丘面Ⅰ上）



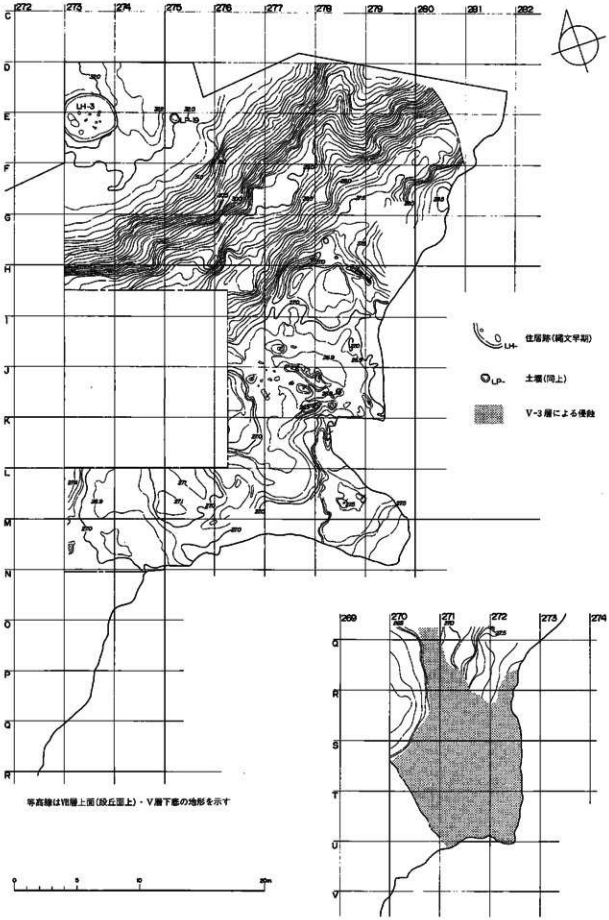
図Ⅲ－17 V－1層遺構位置図



図Ⅲ－18　Ⅴ－３層遺構位置図



図Ⅲ－19 Ⅴ－5層遺構位置図 (1)



図Ⅲ－20　Ⅴ－5層遺構位置図(2)

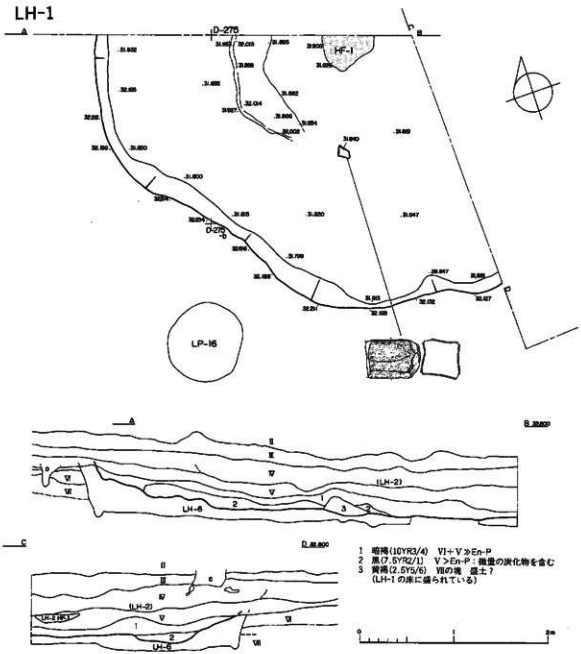
a. 住居跡

LH－1（図Ⅲ－21・22、図版Ⅲ－15・16）

位置　D－274・275　規模　(3.06) × (2.81) ／ (3.00) × (2.69) ／0.42m

特徴　Ⅲ層上面で認められた窪みの調査で確認した住居跡である。先行して設けたトレンチの土層断面では見つけられず、窪みを掘り下げた段階で検出した明瞭な焼土や周辺の遺物、それらのレベルから床面・壁の検出を試み住居跡と判断した。LH－6の覆土中に掘り込まれており、壁や柱穴の確認は困難であった。

緩やかな凹凸のある床面の中央付近と考えられる位置には炉跡と考えられる焼土が見つかっている。そこから西側に約50m離れた位置にはEn-a（Ⅶ層）を主体とする固く締まった盛土様のものが見つかっている。断面は炉跡に向かって尖る三角形で、床面が掘り込まれた後に造られてい

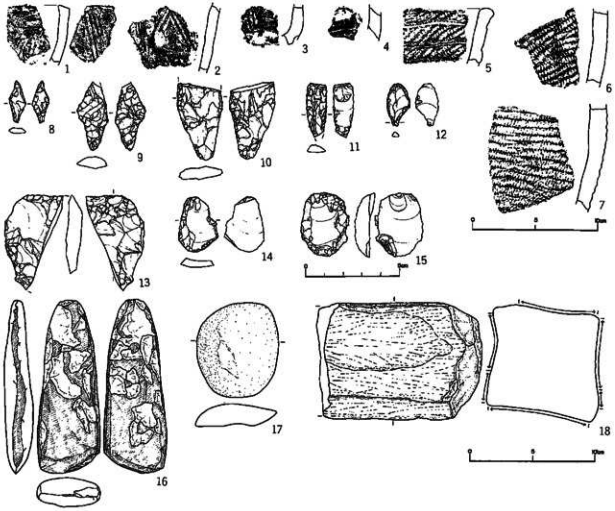


図Ⅲ－21　LH－1

る。未調査区に続くが炉跡を取り巻く様に配置がなされているように思われることから何らかの構造物の可能性がある。壁は明瞭な検出が難しく結果として土層断面図に見られるだらだらした立ち上がりとなった。恐らく埋没途中のLH－6の窪みを利用したと考えられ、元来しっかりした掘り込みがなされなかったか、あるいはLH－6の覆土が脆弱で崩落したと思われる。

遺物　合計165点の遺物が出土した。図示した5～7、17、18がほぼ床面と考えられる位置から出土しており、これらから時期を後期前葉とした。覆土からはⅠ群a類（1～3）、Ⅰ群b-4類（4）、Ⅳ群a類（5～7）、Ⅴ群c類等の土器が出土しているが、この中でⅠaは比較的量が多く、LH－6を掘り込んだ時に同期の遺構を壊しそれが混入したと考えられる。剥片石器は石鏃（89）、ポイント（10）、ドリル（11,12）、スクレイパー（13～15）、くさび形石器等が出土している。剥片・石屑などは角礫様の黒曜石の原石の風化面を持つものが多数出土した。礫石器は図示した石斧（16）、すり石（17）、砥石（18）が出土したが礫の類も含めてこれ以外なく量的には乏しい。

1～3は器面に条痕様の模様が認められる口縁・胴部・底部である。模様は端の狭い篦状の道具を等間隔で使用したかサルボウ貝等の殻状の道具で器面に調整等を施したもので晩式土器に相当すると考えらえる。1は口縁が内向する器形で、内側にやや張り出す角形に近い口唇断面が特徴である。条痕文状の模様は表裏の両面に認められ、条痕の方向は表面の口縁部が横、その下位と内面が斜めがかった縦である。2は底部に近い胴部、3は底部の破片である。焼生前の指の整形と思われる凹凸が表裏の両面に顕著で、表面には条痕文状の模様が認められる。内（裏）面には炭化物



図Ⅲ－22　LH－1の遺物

が胎土中にまで入り込んだ状態で付着している。4は撚糸文状の縄文が施された東釧路Ⅳ式土器の胴部小片である。5～7は地紋に深鉢型土器の口縁部と胴部で、胎土中には砂粒が多数含まれる。5は断面が外側に向ってやや張り出した丸型の口唇と平行する蛇行気味の沈線が三本入っている。7の縄文は多縄である。

8は刃部と考えられる部分の整形だけをした有茎石鏃の未製品、9はやや大型のもので先端部から右翼にかけて破損している。10は製作途中で先端部が欠損したポイントである。11は棒状のもので先端が欠損している。12は剥片にドリルの先端部だけを作出したもので裏面は無加工ある。刃部には摩耗が認められる。13は両面が加工されたナイフもしくはポイント片である。14,15は掻器である。14は剥片の小片に最小限の剥離を加えてたもの、15は厚みのある剥片の上下の両端に刃部を作出したもので左右の側縁には原石の風化面が残されている。16は剥落部を修復してやや傾いた両刃の刃部を作出したものである。17は円礫の破片を使ったすり石、18は四面を使用した多面の砥石である。

時期　上位に晩期中～後業（LH－2）、下位に後期前業（LH－6）の各住居跡と重複し、床面に相当するレベルから余市式土器が出土したことからLH－6より新しい後期前葉と考えられる。

LH－2（図Ⅲ－23・24）

位置　D－274・275　規模（2.71）×（3.30）／（2.63）×（3.19）／0.14 m

特徴　LH－1の上位に位置する住居跡である。Ⅳ層に相当するTa-c主体の腐植土を除去した段階で炉跡と考えられる赤化の弱い焼土とそれに近接して晩期後業の復元可能な土器を検出した。掘り込みは浅く明瞭ではないが、LH－2と同様にこの窪みを利用した住居跡と考え調査した。床はⅤ～Ⅶ層の土壌が混在するLH－1の覆土中に作られており、その面に柱穴状の不明瞭な円形のプランが8箇所ほど認められたが断面等の確認は困難であった。

遺物　合計354点の遺物が出土している。土器の主体は晩期後業のタンネトウL式に相当するもので、これ以外には早・後・晩期のものが出土している。剥片石器は石鏃とRフレイク、礫石器はたたき石と台石が出土している。

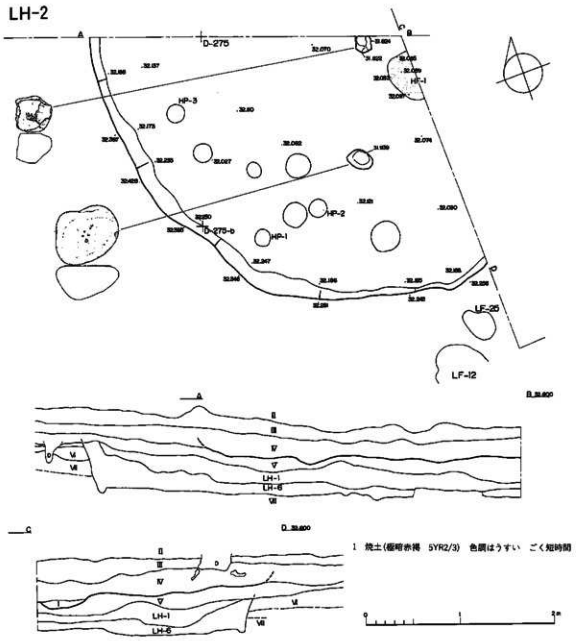
1～4はⅠ群a類土器で、口唇の内面側が内に向かって張り出す口縁部（1,2）、胴部（4）、底部（3）である。凹凸のある器面には条痕状の模様があり、1・4は表裏の両面にみられる。これらはLH－6が壊したⅠa期の遺構のものと考えられる。5は斜行縄文の器面に縦横の雑な沈線で施文したⅣ群a類土器である。6・7はⅣ群c類土器の口縁と底部である。6は山形突起部で断面が角形の口唇上には器面と同じ斜行縄文が施され、器面には細い沈線による施文が横と斜めに入る。7は僅かに上げ底気味である。

8は小型の鉢形もしくは椀形の土器である。口縁の一部が他よりも高く作られておりその部分の口唇上には縄線文と棒状の工具による刻みが入る。地文に斜行縄文が施される胴部から底部に向かう部分の角度の変換位置には横冠する張り付け様の粘土の盛り上がりが見られる。9は深鉢型の土器である。口唇には指先を使った刻みが巡っており、無文の器面には調整の痕と考えられる無数の擦痕が認められる。10・11は同一個体の浅鉢型土器である。10は表面の剥落した口縁の突起部で頂部の刺突を取り巻く縄線が施され、その直下には表面からの貫通孔、内面には深く短い縦の沈線が施される。11は低い突起を持つ口縁部である。断面が切り出し型の口唇上には2本縄線と沈線が施され、器面には口縁直下の無文帯、その下位に条が縦気味の縄文が施される。12は深鉢型土器の口縁部である。断面が角形の口唇には棒状の道具で斜め当てた刻みが入り、器面には条が縦方の縄文が施されている。胎土中に多数の小礫を含有する。13は楕円形の底部を有す

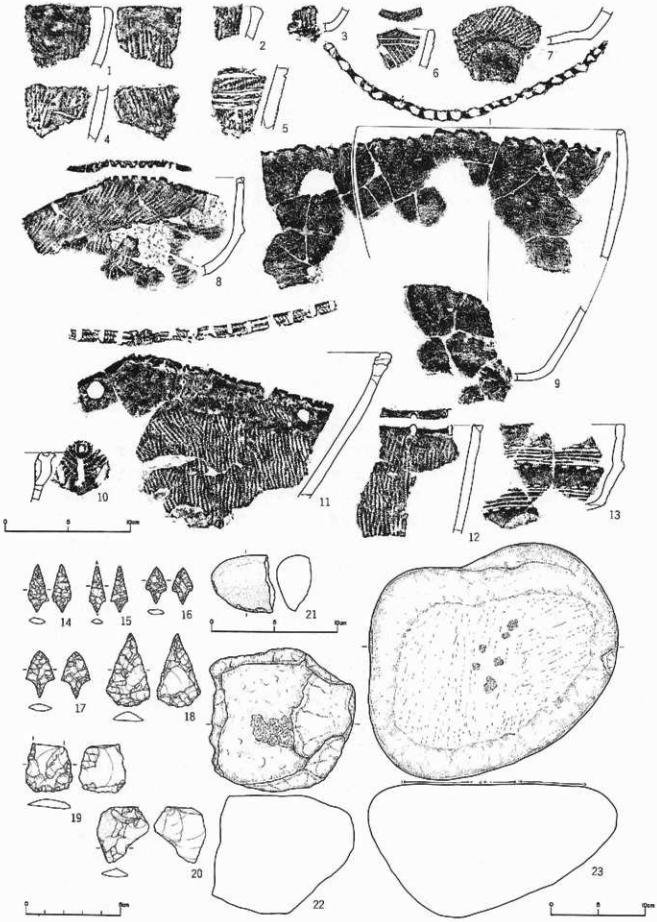
る小型の鉢形土器である。口唇の断面は角形で器面には無文帯と数条の横冠する沈線とこれに平行する刺突列からなる文様が施されている。底面にも中心に波紋状の沈線と刺突列それ以外に斜行縄文が施文されている。11と13の一部は旧河道部のⅤ-1層からも出土している。

14～17は有茎石鏃で14～16は二等辺三角形の茎部を作出した黒曜石製のもの、17は再加工した円みのある先端部と尖った長めの茎部を持つ頁岩製のものである。18は珪質頁岩製で大型の無茎石鏃、19はその未製品と考えられる。荒く雑な剥離で整形されており、裏面には主剥離面が残される。20は角礫の風化面を持つ剥片の表面左側縁を刃部とした黒曜石製のRフレイクである。21は円礫片の一辺を使用したたたき石片である。22・23は台石で、22は焼けた角礫の平坦部を使用したもの、23は大型の円礫の面を大きく擦ったものである。

時期　床面の土器から縄文時代晩期後葉と考えられる。



図Ⅲ－23　LH－2



図Ⅲ－24 LH－2の遺物

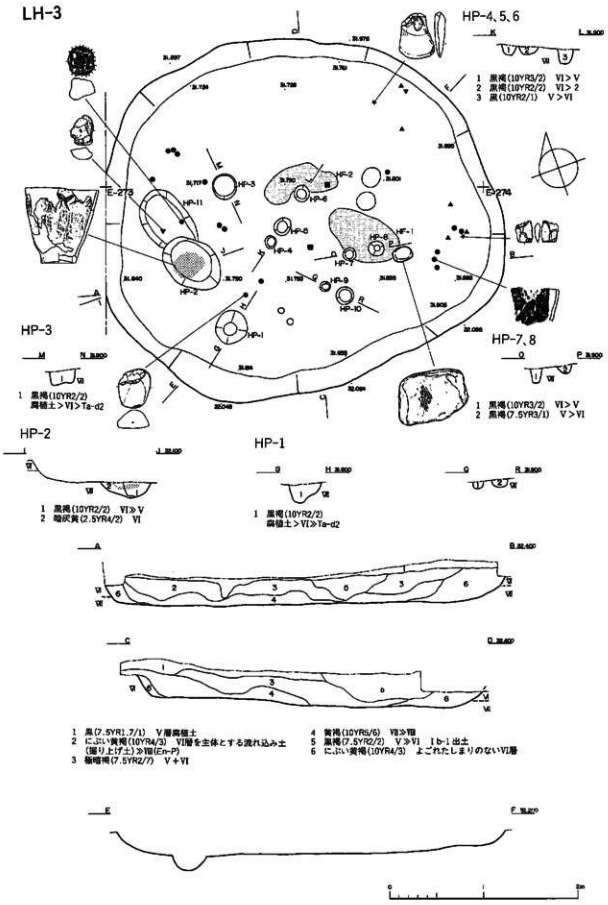
LH－３（図Ⅲ－25・26）

位置　D－273・274,E－273・274　規模　(4.24)×3.74／3.90×3.38／0.36m

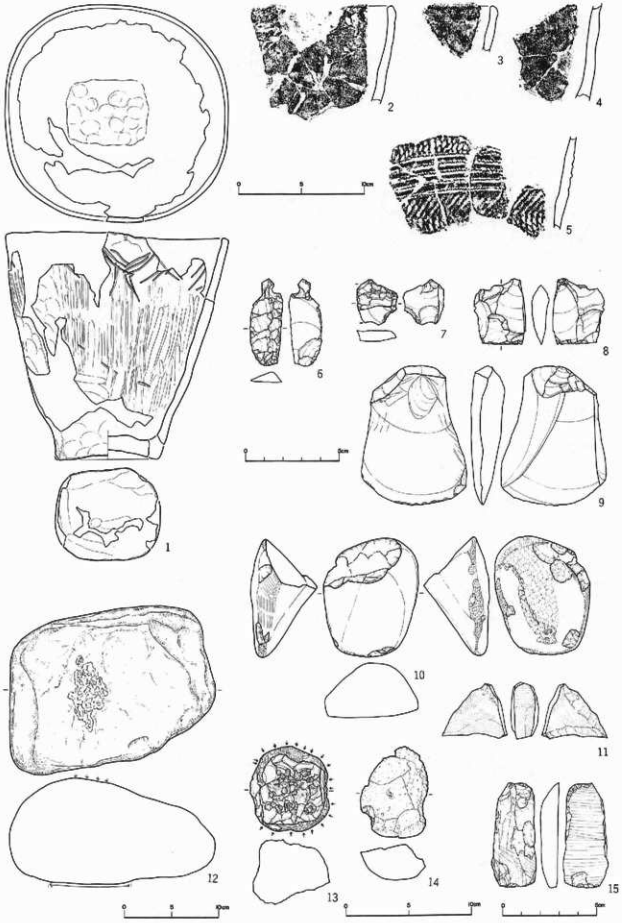
特徴　Ⅵ層上面で平面が円形の汚れたEn-aロームを主体とする土壙のプランを検出した。覆土にⅤ層の腐植土があまり混入しないことから、掘り込み面はⅥ層に近いⅤ層下位と考えられ、Ⅴ層腐植土を比較的多く含む覆土5層からⅠ群b-1類土器の少量の繼まりが出土していることから、それよりも古い時期の遺構である。平面は楕円がかった円形で、床はⅦ層まで掘り込んだ堅く平坦なもので、壁はそこから緩やかに広がりながら立ち上がる。床面からはHF－1・2の焼土とHP－1～11の土壙が見つかっている。HF－1・2は床中央のやや東よりで検出した炉痕と思われる範囲であるが、本住居跡の床付近には段丘縁辺のⅦ層中に広く存在する赤色の酸化土壌のラミナが顔を出しており、このうち特に赤化の著しい部分をHF－1・2とした。これを炉痕とするには疑問が残るためここでは可能性があるとしておきたい。HP－2・11は西側壁に近い床で検出した重複する小型の土壙である。HP－2の覆土の上位からは復元土器（1）の底部を除く部分、HP－11の壙底からは2点の礫石器等が出土している。その他のHPは柱穴様の小ピットで床の中央から南側の壁にかけての面に検出されている。ここで注目したいのは覆土に含有される$Ta\text{-}d_2$である。他ではⅦ層中にごく希に見られる程の量であるが、各HP覆土には多数混入する。住居跡が放棄された後に$Ta\text{-}d_2$が降下しそれが入り込んだ可能性がある。

遺物　覆土44点、床面74点、各HP172点の合計290点が出土した。早期後半の遺物が出土する覆土1・2層以外の252点は本住居跡に伴うと考えられ、内訳は土器234点、剥片石器3点、礫石器2点、剥片石屑9点、礫等9点、石製品1点の組成である。

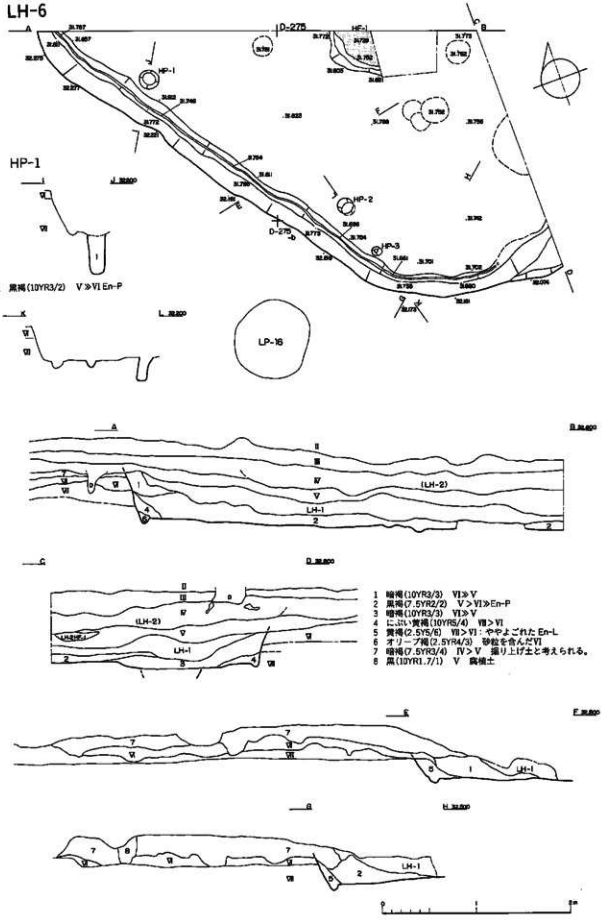
1～4はLH－3の主体となるⅠ群a類土器で所謂「暁式土器」である。1はHP－2とその周辺の床面から出土した深鉢型の土器である。器形は上から見た口縁の輪郭が円に近い楕円形と推定され、胴部は口縁に向かって開き底部付近でやや絞り込まれ底部の端が部分的に張り出す。底面は隅丸の長方形を呈しこの長軸がアーチを描いている。口唇の断面は丸形で一部に内側に張り出す円みのある角形も見られる。整形時の指の凹凸が目につく胴部の器壁は比較的薄く、底部は内側が底面と同じアーチを描く厚い作りである。また、内部の底面には指先の刺突による窪みが多数認められる。内外面で面の状態が異なり、表と底の面は滑らかな仕上げがなされており内面は砂粒が浮き上がってざらつき、薄く炭化物が付着している。文様は胴部の全面に幅の広狭がある2種の篦状の道具による条痕状の模様もしくは整形時の調整が認められ、口縁部には1～3本の沈線による「横冠するジグザグ」もしくは「連続する山形（三角？）」を基本の意匠する文様が描かれていたと推定される。2・3は口唇の断面が円い無文土器の口縁部、3は口唇がやや内側に傾く。4は底部に近い胴部で無文である。5は覆土1層で出土した土器で今回Ⅰ群b-2類とした器壁の薄い深鉢型土器の胴部である。短縄文、組紐圧痕文等のⅠ群b-1類的な施文がなされる文様帯が見られる。6は覆土2層から出土したメノウ製のつまみ付ナイフである。主に下辺の刃部を掻器として使用している。7は黒曜石製のRフレイク、8はメノウ製で剥片の相対する端に打撃痕が認められることからくさび形石器としたが、同一地点から同じ母岩の剥片が数点出土しておりバイポーラで剥片を採取したときの痕跡かもしれない。9は玄武岩質の剥片の下端に僅かな剥離を施して刃部としたスクレイパーである。刃部にはかなりの磨滅が認められる。10は泥岩の円礫を使用した断面三角のすり石器の石器である。左側縁から下辺にかけてがすり面で右側縁には敲打した痕が認められる。11は表裏の両面と側縁を使用した砥石片である。12はHF－1に接近した床面から出土したチャート製の台石である。13はメノウ製のたたき石、14は軽石で図の面が平坦なことから


LH-3
HP-4、5、6
1 黒褐(10YR3/2) Ⅵ>Ⅴ
2 黒褐(10YR2/2) Ⅵ>2
3 黒(10YR2/1) Ⅴ>Ⅵ
E-273
E-274
HP-1
HP-2
HP-3
HP-4
HP-5
HP-6
HP-7
HP-8
HP-9
HP-10
HP-11
HP-3
1 黒褐(10YR2/2)
腐植土>Ⅵ>Ta-d2
HP-7、8
1 黒褐(10YR3/2) Ⅵ>Ⅴ
2 黒褐(7.5YR3/1) Ⅴ>Ⅵ
HP-2
1 黒褐(10YR2/2) Ⅵ≫Ⅴ
2 暗灰黄(2.5YR4/2) Ⅵ
HP-1
1 黒褐(10YR2/2)
腐植土>Ⅵ≫Ta-d2
1 黒(7.5YR1.7/1) Ⅴ層腐植土
2 にぶい黄褐(10YR4/3) Ⅵ層を主体とする流れ込み土
(掘り上げ土)≫Ⅶ層(Eh-P)
3 褐暗褐(7.5YR2/7) Ⅴ+Ⅵ
4 黄褐(10YR5/6) Ⅶ≫Ⅶ
5 黒褐(7.5YR2/2) Ⅴ≫Ⅵ Ⅰb-1出土
6 にぶい黄褐(10YR4/3) よごれたしまりのないⅥ層

図Ⅲ－25 LH－3



図Ⅲ－26　LH－３の遺物


LH-6
HP-1
1 黒褐(10YR3/2) V≫VI En-P
LP-16
(LH-2)
LH-1
1 暗褐(10YR3/3) VI≫V
2 黒褐(7.5YR2/2) V>VI≫En-P
3 暗褐(10YR3/3) VI>V
4 にぶい黄褐(10YR5/4) VII>VI
5 黄褐(2.5Y5/6) VII>VI：ややよごれたEn-L
6 オリーブ褐(2.5YR4/3) 砂粒を含んだVI
7 暗褐(7.5YR3/4) IV>V 掘り上げ土と考えられる。
8 黒(10YR1.7/1) V 腐植土

図Ⅲ－27 LH－6

すり石的な用途に使用していたと考えられ、これらはHP－11の壙底から出土した。15は蛇文岩風の石材を使用した擦り切りの小残片状の石製品である。全面に研磨を施しており特に裏面には精緻な平坦面を磨き出している。また、縦軸の相対する縁に敲打した痕跡が見られることから、「くさび」的な目的に使用された可能性もある。

時期　縄文時代早期中葉

LH－6（図Ⅲ－27・28）

位置　D－274・275　規模　(2.86) × (2.70) ／ (3.60) × (3.13) ／0.54m

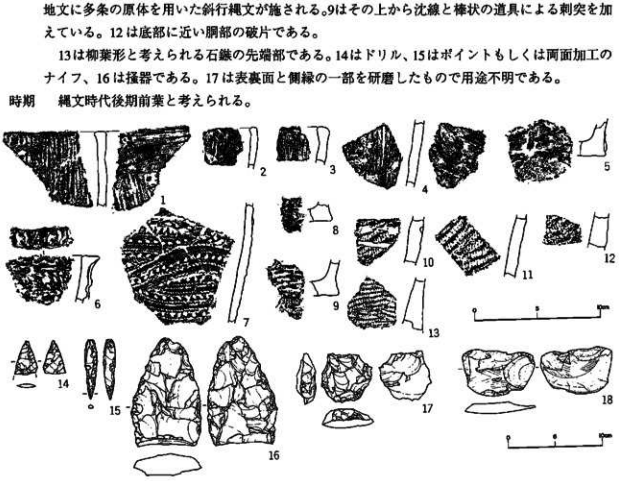
特徴　平面形が楕円と推定される大型の住居跡である。Ⅶ層に作られた床から壁は急激に立ち上がり壁際の床には周溝がもうけられている。柱穴はその内側に配置されており、北壁の際の床から一段低くなった部分から炉跡と考えられる焼土が見つかっている。本住居跡の周囲には掘り上げ土が広がっている。

遺物　床面からは土器14点、剥片石器1点、剥片石屑等41点、礫5点の合計61点、掘り上げ土からは土器56点、剥片石器4点、剥片石屑103点、礫7点、石製品1点の合計171点が出土した。

1～5はⅠ群a類の土器で、1～3は口唇の断面が内側に張り出す口縁部、4が胴部、5は底面がアーチを描く底部である。条痕文状の模様は1～4に見られ、特に1は表面のが縦方向、裏面は口唇直下が横方向その下位に縦方向の模様がつく。2は器壁が特に薄く小型の器形と考えられる。6～8はⅠ群b－2類土器の同じ深鉢形土器の口縁、胴部、底部である。口唇は断面が外に張り出し、胴部が膨らみ底部下端がやや張り出す器形である。器面には短縄文、組紐圧痕文、縄端圧痕文、斜行縄文等を施文後に縄の押圧を加えた紐状の粘土を貼付している。9～12はⅣ群a類土器で、地文に多条の原体を用いた斜行縄文が施される。9はその上から沈線と棒状の道具による刺突を加えている。12は底部に近い胴部の破片である。

13は柳葉形と考えられる石鏃の先端部である。14はドリル、15はポイントもしくは両面加工のナイフ、16は掻器である。17は表裏面と側縁の一部を研磨したもので用途不明である。

時期　縄文時代後期前葉と考えられる。



図Ⅲ－28　LH－6の遺物

b. 土壙（図版Ⅲ－17）

LP－6　（図Ⅲ-29）

位置　K-273-d　規模 0.38×0.38／0.21×0.16／0.07m

特徴　LP-6～8はⅤ-1層流路によって形成された微高地状に立地しており、規模、時代もほぼ同時期のものと思われる。平面形は円形で、一カ所出っ張りがある。Ⅴ-2層を掘り込んでつくられており、覆土は3枚に分けられる。

遺物　フローテーション法により覆土からマタタビ属、ブドウ属、キハダ属、ミズキ属の種子が検出されたが微量でしかも未炭化であることから後世の混入物であろうと思われる。

時期　縄文時代晩期後葉

LP－7　（図Ⅲ-29）

位置　K-273-a　規模 0.37×0.32／0.14×0.13／0.07m

特徴　平面形は楕円で断面は段を有する。Ⅴ-2層を掘り込んでつくられており、最深部はⅤ-3層まで達している。覆土はⅤ-1層の腐植土である。

遺物　フローテーション法により覆土からヒユ科、マタタビ属、ブドウ属、ミズキ属の種子が検出されたが微量でしかも未炭化であることから後世の混入物であろうと思われる。

時期　縄文時代晩期後葉

LP－8　（図Ⅲ-29）

位置　J-273-c,K-273-c,d　規模 0.48×0.44／0.24×0.20／0.08m

特徴　平面形は円形で、Ⅴ-2層を掘り込んでつくられている。覆土はⅤ-1層の腐植土である。

遺物　フローテーション法により覆土からヒユ科の未炭化種子31粒、カヤツリグサ科の未炭化種子119粒、そしてマタタビ属、タラノキ属、キハダ属、ブドウ属、ミズキ属の未炭化種が微量検出された。

時期　縄文時代晩期後葉

LP－9（図Ⅲ－28）

位置　E-273-c　規模　0.71×0.70／0.42×0.37／0.18 m

特徴　平面が不整円形で掘りの浅い小型の土壙で性格は不明である。遺物は覆土上位で多く出土している。

遺物　1～4はⅤ群c類とした土器の口縁部である。1は深鉢形土器の口縁に横位5本の平行沈線をいれ円弧文を施したもので、口唇断面は切り出し形である。2は浅鉢形土器の口縁である。口唇の断面は鋭い切り出し形で器壁は薄い。表面には条が縦気味の縄文が施される。拓本左側には補修孔が見られる。3・4は小型の鉢もしくは浅鉢と考えられ、3は平坦部の狭い角形の口唇上には同じ縄による縄線文、直行する押圧文、刻み等が施されている。5は黒曜石のフレイクコアーの一部を掻器としたもの、6は表裏の右側縁に剥離を施したスクレイパーである。

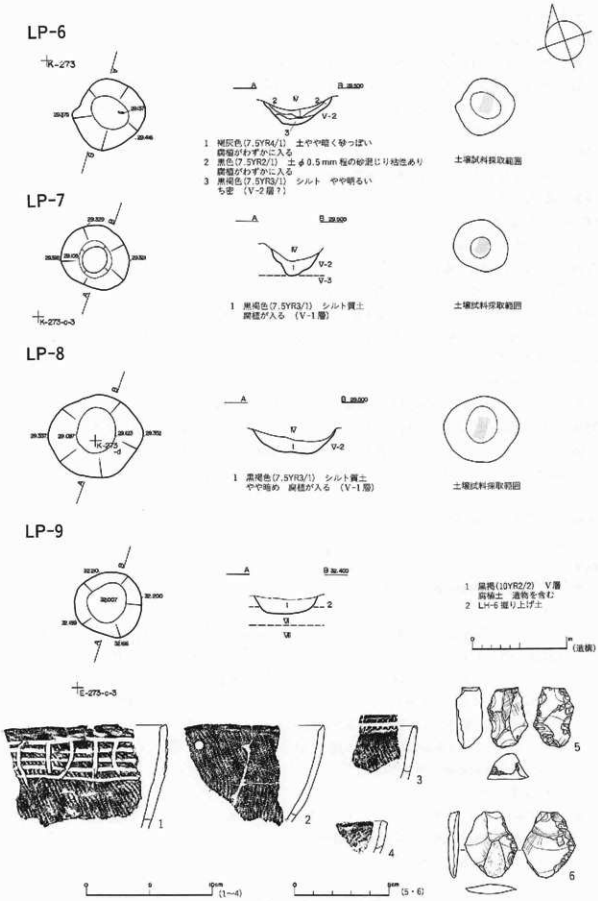
時期　縄文時代晩期後葉と考えられる。

LP－10（図Ⅲ－29）

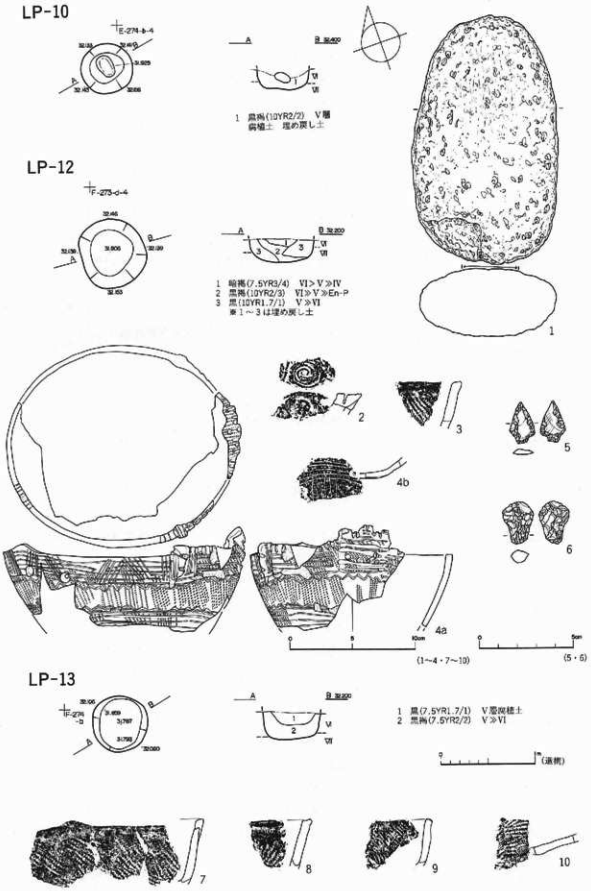
位置　E-274-b　規模　0.55×0.52／0.36×0.30／（0.18）m

特徴　平面が楕円形の土壙で、Ⅴ層中のLH-6掘り上げ土より上位から掘り込まれている。覆土はⅤ層腐植土を埋め戻したと考えられ、上位からは台石（1）が出土している。やや小型だが墓の可能性がある。

遺物　1は台石としたもので、多孔質の扁平円礫の表裏面を使用している。


LP-6
K-273
A
B 28.500
V-2
1　褐灰色(7.5YR4/1)　土やや暗く砂っぽい
2　黒色(7.5YR2/1)　土 φ0.5mm 程の砂混じり粘性あり
腐植がわずかに入る
3　黒褐色(7.5YR3/1)　シルト　やや明るい
ちぎ　(V-2層？)
土壌試料採取範囲
LP-7
K-275-c-3
A
B 29.500
V-2
V-3
1　黒褐色(7.5YR3/1)　シルト質土
腐植が入る　(V-1層)
土壌試料採取範囲
LP-8
K-275
A
B 29.000
V-2
1　黒褐色(7.5YR3/1)　シルト質土
やや暗め　腐植が入る　(V-1層)
土壌試料採取範囲
LP-9
E-273-c-3
A
B 30.400
1　黒褐(10YR2/2)　V層
腐植土　遺物を含む
2　LH-6 掘り上げ土
(遺構)
1
2
3
4
5
6
(1～4)
(5・6)

図Ⅲ－29　V層の土壌（1）


LP-10
E-274-a-4
1 黄褐(10YR2/2) V層
偽層土 焼け炭し土
LP-12
F-275-c-4
1 暗褐(7.5YR3/4) VI>V≫IV
2 黒褐(10YR2/3) VI≫V≫En-P
3 黒(10YR1.7/1) V≫VI
※1～3は埋め炭し土
(1～4・7～10)
(5・6)
LP-13
F-276
1 黒(7.5YR1.7/1) V層炭焼土
2 黒褐(7.5YR2/2) V≫VI
(遺構)

図Ⅲ－30 V層の土壙 (2)

時期　縄文時代晩期中葉～後葉と考えられる。

LP－12（図Ⅲ－29）

位置　F-273-d　規模　0.72×0.48／0.67×0.45／（0.24）m

特徴　平面が不整円形の性格不明の土壙である。掘り込み面はⅤ層中で、覆土は埋め戻し土と考えられる。覆土中から出土したⅤc土器は周囲の包含層のものと接合する。

遺物　Ⅴ群c類土器15点、石鏃・ドリル各1点が出土した。2は浅鉢形土器の口縁に付けられた突起部である。口唇上の円い平坦部には棒状の道具による刺突とそれを渦状に囲む縄線文が施されている。表面には縦に貼付粘土紐の一部が認められる。3は浅鉢形土器の口縁部である。口唇の断面は角に円みのある角形で、表面には縄文が施されている。4aはF-273Ⅴ層出土のものと復元した浅鉢形の土器、4bはその底部である。口唇の断面は角形で、表面の文様は条が縦気味の縄文を施した後に底面を含む全面に細い沈線を基調とした文様が施されている。口縁部には大きく張り出す突起部が一カ所とそれ以外に小さな三角状のものが配置されている。大きな突起部は装飾が著しく口唇上に棒状の道具による刺突と縄線文、口唇の表側の縁には間隔の狭い刻み、表面の横冠する細かい沈線の文様帯には生き物の目鼻を模した様な貫通、未貫通の穴が開けらる。これとほぼ相対する反対側の器面には補修孔状の貫通孔が三カ所穿たれている。5は表裏に剥離面した石鏃で刃部及び基部の作出も完全ではない。未製品かもしれない。6は肉厚の剥片を加工したドリルで、石材の黒曜石には白色の不純物が多く見られる。

時期　縄文時代晩期中葉～後葉と考えられる。

LP－13（図Ⅲ－29）

位置　F-274-a・d　規模　0.60×0.52／0.58×0.43／（0.27）m

特徴　平面が不整円形の性格不明の土壙である。掘り込み面はⅤ層中である。覆土2層は埋め戻し土の可能性がある。

遺物　Ⅴ群c類土器79点、剥片石屑5点が出土している。Ⅴc土器は覆土1層で46点、2層で33点だが、どちらも接合困難な細片が大半である。7は鉢形土器で口縁部に小突起が付く。口唇の断面は切り出し形もしくは角形で、表面には縄文が施される。胎土中に小礫を多数含む。8～10は浅鉢形土器で、8・9は地文が縄文の口縁部、10は底部である。

時期　縄文時代晩期中葉～後葉と考えられる。

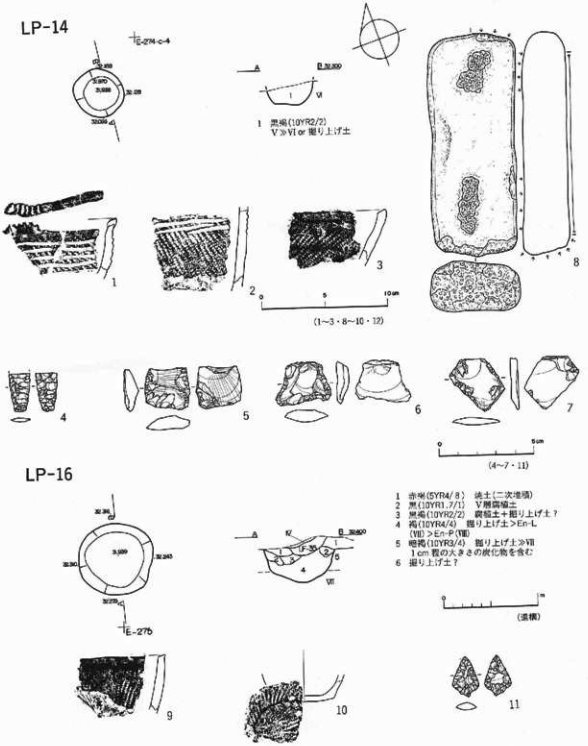
LP－14（図Ⅲ－30）

位置　E-274-c　規模　0.54×0.49／0.36×0.35／（0.26）m

特徴　平面が不整円形の土壙である。掘り込み面はⅤ層中で、覆土からは多数の遺物が出土した。これらの多くは接合困難な細片のⅤcや剥片石屑類等、少量のⅠb-2や早期の石鏃等も混じっており、所謂「ゴミ穴」の可能性がある。

遺物　1・2は同一個体と考えられる深鉢形土器の口縁部とその直下の胴部である。口唇の断面は角形で口唇上に縄が押圧される突起部を有し、地文の縄文を施した後に数条の浅い沈線を口縁に沿って巡らしている。3は浅鉢形土器の口縁部である。口唇の断面は鈍角な切り出し形で表面には縦気味の縄文が施されている。4は柳葉形の石鏃片で折れた後に焼成を受けている。5～7はスクレイパーである。いずれも、剥片に最小限の剥離を加えて刃部を作出している。8は短冊形の礫の上下端を使用したたたき石である。また表裏の扁平部分には砥石として使用した痕や窪み石状の凹部も認められる。

時期　縄文時代晩期中葉～後葉と考えられる。


LP-14
E-274-c-4
A
B 32.800
1
VI
1　黒褐(10YR2/2)
V≫VI or 掘り上げ土
1
2
3
0
5
10cm
(1~3・8~10・12)
8
4
5
6
7
0
5cm
(4~7・11)
LP-16
32.300
32.200
32.100
32.000
E-275
A
B 32.800
IV
1
2
3
4
5
VII
1　赤褐(5YR4/8)　地土(二次堆積)
2　黒(10YR1.7/1)　V層腐植土
3　黒褐(10YR2/2)　腐植土＋掘り上げ土？
4　褐(10YR4/4)　掘り上げ土＞Em-L
(VII)＞Em-F(VII)
5　暗褐(10YR3/4)　掘り上げ土≫VII
1cm 程の大きさの炭化物を含む
6　掘り上げ土？
0
1m
(遺構)
9
10
11
LP-19
E-27C
32.500
32.400
32.300
32.200
32.100
32.000
A
B 32.800
1
2
3
VII
1　黒褐(10YR2/2)　V層腐植土
2　褐褐(10YR3/3)　VI＞V埋め戻し土
Ⅰaが主土
3　VI or 掘り上げ土
12

図Ⅲ－31　V層の土壙（3）

LP－16（図Ⅲ－30）

位置　D-274-c・D-275-b　規模　0.82×0.76／0.60×0.58／（0.38）m

特徴　平面が不整円形で壙底の円い土壙である。掘り込み面はⅤ層中のLH-6掘り上げ土の上方である。覆土の上位には縄文晩期と考えられるLF-35が位置しているが本土壙との関連は薄いと思われる。覆土4層はⅤ層腐植土をほとんど含まず層中には散らばった炭化物が認められることから埋め戻し土の可能性もある。

遺物　9～11は覆土1～3層で出土したものである。9は浅鉢形土器の口縁部である。口唇の断面は角の明瞭な切り出し形で表面には条が縦気味の縄文が施されている。10は浅鉢形土器の底部で表と底の面に縄文が施される。器壁が薄いことから小型の器形と推定される。11は有茎の石鏃である。尖頭部のみが丁寧に整形されており、側縁には柄への装着の痕と考えられるものが見られる。

時期　縄文時代後期前葉と思われる。

LP－19（図Ⅲ－30）

位置　E-275-a　規模　0.75×0.75／0.53×0.44／（0.28）m

特徴　平面が不整円形で壙底の円い土壙である。掘り込み面は3層上方で、埋め戻されていると考えられる覆土2層の下位からはⅠa土器を含む遺物が出土している。

遺物　12は接合したⅠaの口縁部である。口唇の断面が内側に張り出し表裏の面には縦方向に付けられた貝殻条痕文状の模様が見られる。

時期　縄文時代早期前葉と考えられる。

c. 小ピット

旧氾濫原部分のⅤ-1層の上面で、径5～10cmの円形、深さ5cmからそれ以下の小さな凹みが散見された。やや集中して確認されたI-274-d区ではその位置を記録した（図Ⅲ-17)。いずれも水成の堆積物と思われる細粒砂～シルトで埋まっている。人為的なものかどうか判断できなかった。またⅤ-3層の河道内で出土した木材のうちにはほぼ直立しているものが見られたが（本節 (2) 項・図版Ⅲ-9)、それらに加工はなく、周囲に掘り方が認められることもなかった。

d. 焼土（図版Ⅲ－18・19）

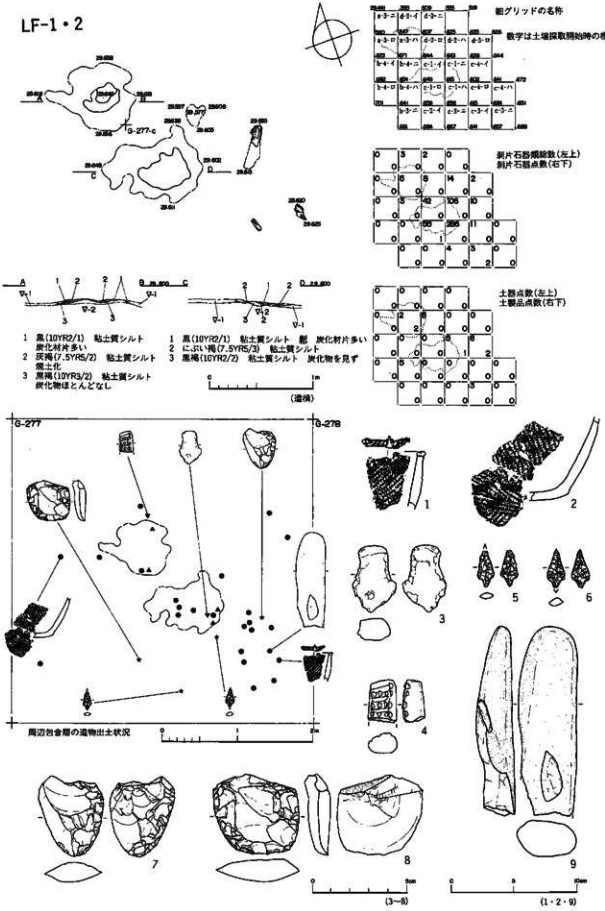
LF－1・2（(図Ⅲ-32）

位置　G-277-a,b (LF-1)、G-277-b,c (LF-2)。Ⅴ-1層河道Bの傍らにある。

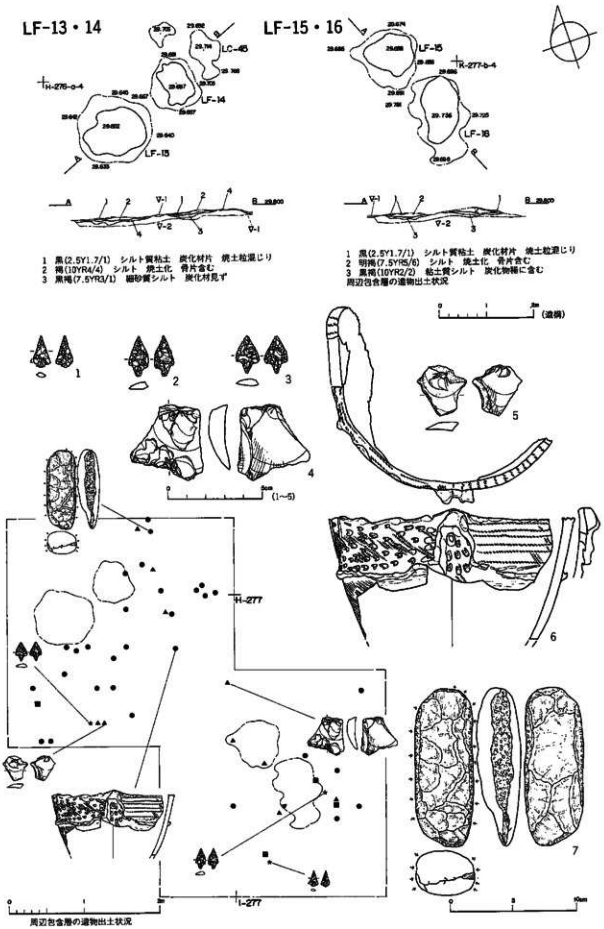
規模　0.96×0.63／0.04m (LF-1)、1.07×0.82／0.03m (LF-2)。

特徴　Ⅴ-1層の上面で二基の焼土が隣接しているのを確認した。薄い焼土の上面に炭化材片の広がりがあり (1層)、焼土の下位は環元のためか黒褐色となった層 (3層) が見られる現地性の焼土。ほぼ同じ規模の焼土二基が隣接して形成される例はLF-4・5 (次年度以降報告予定)、13・14、15・16などでも見られ、Ⅴ-1層の焼土の特徴の一つと言える。

遺物　焼土の周囲、特にLF-2の東南側に縄文時代晩期の遺物が散布していたので、G-277区内のⅤ-1層を範囲としておおむね拇指頭大以上の遺物の出土位置を記録した (図Ⅲ-32中段)。また焼土を中心に0.5m四方の細グリッド25区画からⅤ-1層の土壌を全量採取し、浮遊選別をおこなった。現地で記録した遺物としてⅤ群c類土器・石鏃・スクレイパー・すり石などがあり (表Ⅲ-14)、またLF-2東南側の2カ所で比較的原形を保った炭化材を認めた。浮遊選別では残渣のみ選別を終えたが、土器29点、石鏃1点、石器片2点、フレイク・チップ554点、玉を含む土製品5点のほか淡


LF-1・2
G-277-c
細グリッドの名称
数字は土壌採取時始時の標高
剥片石器類数(左上)
剥片石器点数(右下)
土器点数(左上)
土器品点数(右下)
1 黒(10YR2/1) 粘土質シルト 炭化材片多い
2 灰褐(7.5YR5/2) 粘土質シルト 焼土化
3 黒褐(10YR3/2) 粘土質シルト 炭化物ほとんどなし
1 黒(10YR2/1) 粘土質シルト 炭 炭化材片多い
2 にぶい褐(7.5YR5/3) 粘土質シルト
3 黒褐(10YR2/2) 粘土質シルト 炭化物を見ず
(遺構)
G-277
G-278
周辺包含層の遺物出土状況
(3~8)
(1・2・9)

図Ⅲ－32 Ⅴ層の焼土 (1)


LF-13・14
LF-15・16
LC-45
LF-14
LF-15
LF-16
H-276-a-4
H-277-b-4
1 黒(2.5Y1.7/1)　シルト質粘土　炭化材片　焼土粒混じり
2 褐(10YR4/4)　シルト　焼土化　骨片含む
3 黒褐(7.5YR3/1)　細砂質シルト　炭化材見ず
1 黒(2.5Y1.7/1)　シルト質粘土　炭化材片　焼土粒混じり
2 明褐(7.5YR5/6)　シルト　焼土化　骨片含む
3 黒褐(10YR2/2)　粘土質シルト　炭化物補に含む
周辺包含層の遺物出土状況
(遺構)
(1～5)
H-277
I-277
周辺包含層の遺物出土状況

図Ⅲ－33　Ⅴ層の焼土 (2)

水貝の皮を見出した (表Ⅲ-16・17)。LF-13～16等で確認された脊椎動物遺体 (焼骨) は認められなかった。剥片石器類はほとんど黒曜石製であるが、浮遊選別残渣にはメノウ (?) 製フレイク・チップ4点も含まれていた。フレイク・チップのほとんどはLF-2のあるG-277-c-1区内の4方格から見出され、肉眼で焼けが確認されるものがかなり多い。LF-2の南側で石鏃・石器片 (石鏃尖端とみられる) が出土していることも考え合わせて、LF-2の南側で敷物の上で石鏃の細部調整作業がおこなわれたこと、生じた小さいフレイク・チップが焚火のなかに投じられ、未製品・失敗作がその場に残されたことなどが推測できる。LF-1付近には石器類がほとんどないが、土製玉の出土が注意される。焼成粘土塊は少数ながら両方の焼土付近から出している。

1・2はⅤ群c類土器である。1は鉢形土器の口縁部で小さな突起を持つ口唇の上には縄の押圧が施されている。2は深鉢形土器の底部である。3は土製品の破片もしくは土器口縁の突起部と考えられる。俯瞰した形状は小判形で、片面には半裁竹管状の道具を使用した沈線と刺突で構成された文様が施されている。4は焼成粘土塊である。5・6は石鏃で幅が厚く刃部の稜線は凹凸が見られる。7は表裏面の右側縁を刃部とした削器、8は下側縁に断面が鈍角な剥離を施した掻器である。9は縦長礫の扁平部分を使用したすり石である。

時期　縄文時代晩期後葉。

LF－12 (図Ⅲ－34)

位置　D-275-c。LF-25に隣接。　規模　0.64×0.52／0.09m。

特徴　Ⅴ層の調査中に確認した。旧河川敷部分と旧私有地との境界に位置したため2回に分けて調査し、Ⅴ層の上面から形成された現地性の焼土であることを断面で確認できた。焼土化はⅥ層上面に達している。焼土の全量を採取して浮遊選別をおこなった。

遺物　現地で確認した遺物はⅤ群c類土器14点・土製玉20点・石鏃1点・台石1点などで土製品の多さが特徴的である (表Ⅲ-14)。浮遊選別でも焼成粘土塊2点・フレイク・チップ42点ほかが見出されたが動物遺体は確認できなかった(表Ⅲ-17)。炭化種子の同定を依頼したが種子は確認されなかった (Ⅵ章3節)。

1～4は貫通孔を持つ土製の玉で今回は破片も含めて14点が出土した。1は胴部中央がややくびれた鼓形、2・3・6は卵形、4・7は短い筒形と各々形態が異なる。形態から装飾品とできるが今回の調査ではいずれも焼土に伴って見つかっており祭祀色も濃いと考えらえる。6～9も土製品であるが、粗い整形を施した後に焼成したもので性格は不明である。これらは焼土周辺からしか出土せず意図的に焼き上げられたものかも不明である。5は浅鉢形土器の突起部を持つ口縁である。口唇には縄線文と沈線が施文されており内面の肥厚部分に串状の道具で多数の刺突を施している。突起の頂部下には内面からの貫通孔が穿たれている。10は丹念に整形された石鏃、11は台石である。

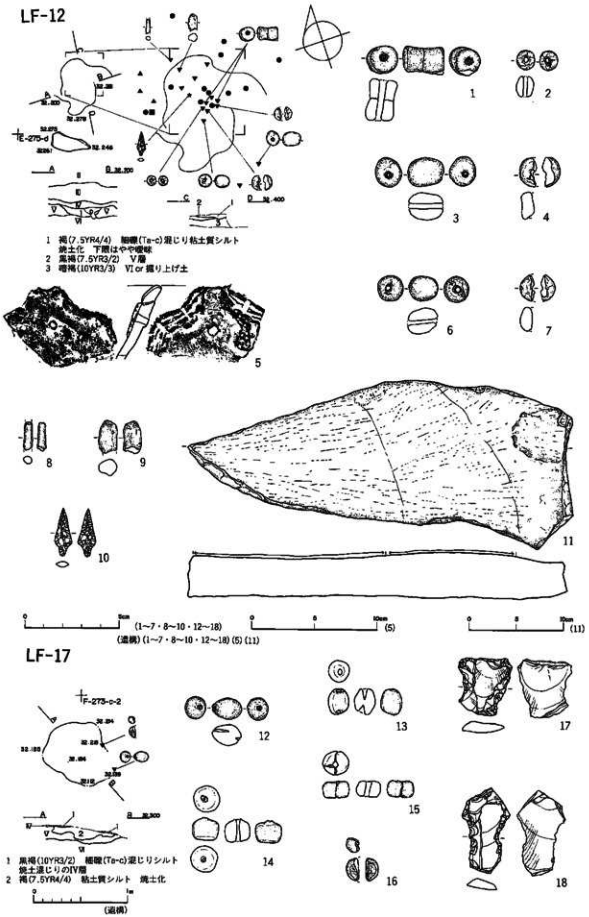
時期　縄文時代晩期後葉。

LF－13～16 (図Ⅲ－33)

位置　H-276-a,d (LF-13)、G-276-c・H-276-d (LF-14)。

規模　0.81×0.73／0.08m (LF-13)、0.58×0.51／0.07m (LF-14)。

特徴　Ⅴ-1層上面で確認、流路Bの南側の岸近くに隣接して形成される。LF-14はLF-13よりやや小さいが北東側に小規模な炭化物集中 (LC-45) をともなう。いずれも薄い焼土層の上面に炭化物が散布し (1層)、下位には炭化物の目につかない黒褐色土層の浅い落ち込み (3層、環元層？) がみられる点はLF-1・2、15・16などに同じである。遺構の周辺に縄文時代晩期遺物の散布がみられたので、周囲3×3mのⅤ-1層を範囲としておおむね拇指頭大以上の遺物の出土位置を記録した。ま


LF-12
E-275-d
1 褐(7.5YR4/4) 細礫(Ta-c)混じり粘土質シルト
焼土化　下層はやや礫状
2 黒褐(7.5YR3/2) Ⅴ層
3 暗褐(10YR3/3) Ⅵ or 掘り上げ土
(1~7・8~10・12~18) (5) (11)
(遺構) (1~7・8~10・12~18) (5) (11)
LF-17
F-275-c-2
1 黒褐(10YR3/2) 細礫(Ta-c)混じりシルト
焼土混じりのⅣ層
2 褐(7.5YR4/4) 粘土質シルト　焼土化
(遺構)

図Ⅲ－34　Ⅴ層の焼土 (3)

た焼土中に焼骨片を認めたので覆土を全量採取して浮遊選別をおこなった。LF-14の浮遊選別で得た炭化材片10.0gを試料として^{14}C年代測定を依頼している（Ⅵ章1節）。

遺物　発掘中にLF-13・14覆土と周辺の包含層から出土した遺物はⅤ群c類土器49点、石鏃1点、磨製石斧1点などである（表Ⅲ-14）。また浮遊選別で回収された人工遺物にLF-13・14とも土器・焼成粘土塊・フレイク・チップがあり、焼成粘土塊はかなり多い（表Ⅲ-17）。剥片石器類はいずれも黒曜石製で、LF-14の浮遊選別では198点とやや多数のフレイク・チップが得られている。動物遺体では脊椎動物遺体（焼骨）が少量あり、サケ科魚類が同定された（Ⅵ章2節）。またLF-14では淡水貝の表皮が認められた。植物遺体ではLF-13でタデ属・マタタビ属・ミズキ属、LF-14でクルミ属の炭化LF-種子が同定されており（Ⅵ章3節）、LF-14では未炭化のブドウ属種子も見い出された。またLF-14の浮遊選別で得た炭化材片5点を検鏡してトネリコ属・カエデ属・ミズキ属・コナラ属材を同定している（Ⅵ章4節）。

時期　縄文時代晩期後葉。LF-14出土炭化材片の^{14}C年代は2350±60y.B.P（KSU-2439）である（Ⅵ章1節）。

LF－15・16（図Ⅲ－33）

位置　H-276-d、H-277-a,b（LF-15）、H-277-b（LF-16）。

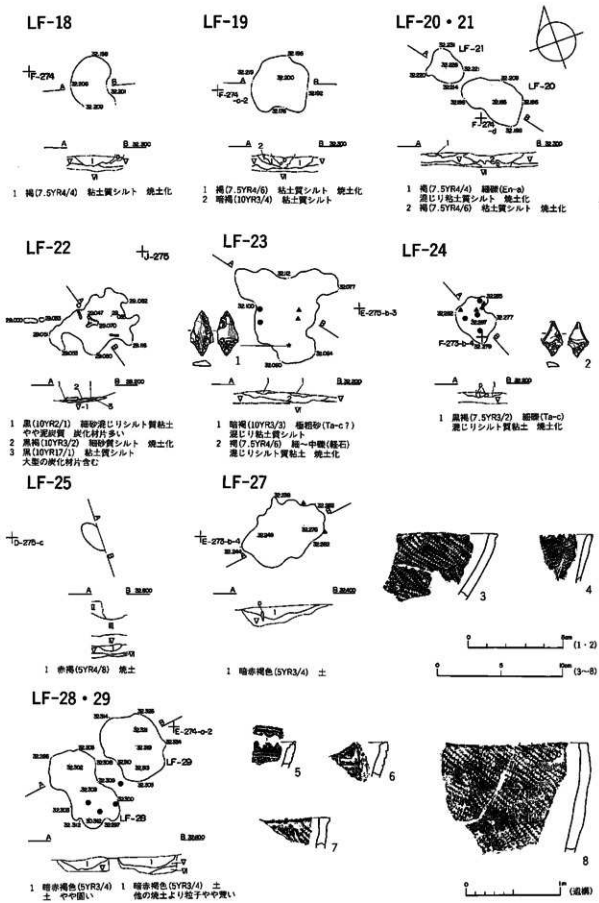
規模　0.72×0.64／0.07m（LF-15）、0.93×0.60／0.08m（LF-16）。

特徴　Ⅴ-1層上面で南北に並ぶほぼ同規模の焼土を確認。ともにLF-1・2、13・14と同様焼土層の上面に薄い炭化物層（1層）、下位に黒褐色土層（3層）が見られる現地性の焼土である。焼土（2層）中には焼骨片を含む。覆土と周囲3×3mのⅤ-1層出土の遺物（拇指頭大以上）の出土位置を記録し、覆土は全量採取して浮遊選別に付した。

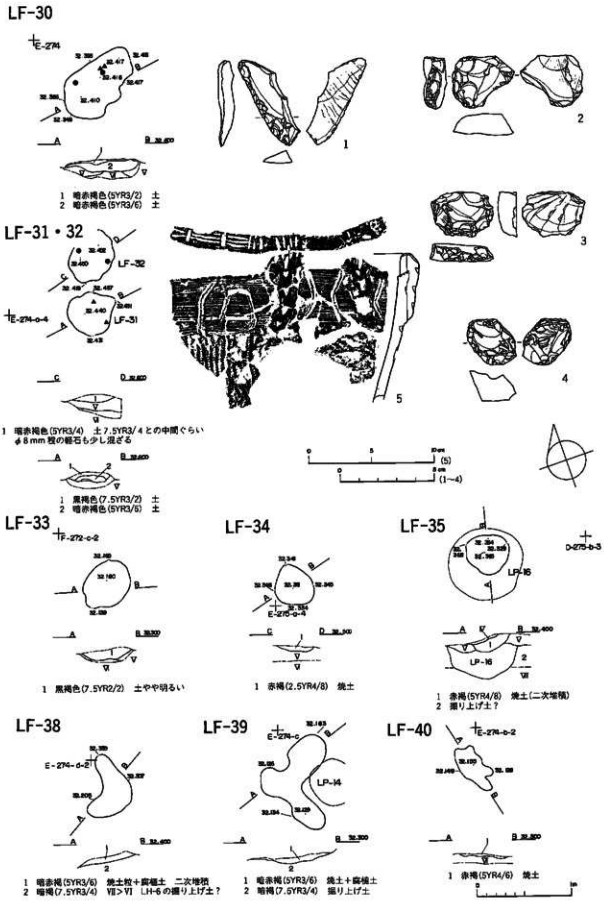
遺物　発掘中に2基の焼土の覆土と周辺包含層から出土した遺物はⅤ群c類土器8点、石鏃2点、Rフレイク1点、フレイク・チップ5点、礫片3点。また浮遊選別ではⅤ群c類土器1点、土製玉1点、焼成粘土塊15点、剥片石器片1点、フレイク・チップ359点ほか（LF-15）、,剥片石器片1点、フレイク・チップ206点、礫片145点ほか（LF-16）が見出された（表Ⅲ-17）。剥片石器類はすべて黒曜石製で、LF-2の場合と同じく剥片石器製作で出たフレイク・チップを焼土に投入している可能性がある。LF-16出土の礫片の材質はいずれも珪岩で、剥片石器制作のためのハンマーから生じたものかも知れない。脊椎動物遺体ではシカ・サケ科魚類が同定されたほか、淡水貝の表皮が認められた（Ⅵ章2節）。植物遺体ではLF-15・16ともタデ属・マタタビ属、またLF-16ではクルミ属種子が同定され（Ⅵ章3節）、LF-15覆土の炭化材ではコナラ属材の存在が推定されている（Ⅵ章4節）。

1～3は石鏃である。1は基部と張り出した肩の部分が欠失している。2・3は胴部に未加工の部位が見られる。これらは尖頭部と基部の整形が比較的進んでいる傾向が見られ、未製品もしくは一定の装着の方法がなされた完成品と思われる。4・5はRフレイクでいずれもネガティブな面に刃部を作出している。6は深鉢形土器で俯瞰した形が楕円形と推定される。口縁部の文様は、内側には貫通孔が開けられた「∩」字形の粘土紐の張り付けで1/4に区切られ、そこに縄線文と刺突文が交互に施されている。上部に2種類の縄線文が施される口唇の断面は外にやや張り出した角形である。口唇の外側と粘土紐上には指様の圧痕が施される。7は全面に敲打の残る石斧である。僅かに磨かれた刃部は磨耗が著しく、剥離の痕が見られることから刃部を再生したと考えられる。

時期　層位と出土遺物から縄文時代晩期後葉と判断される。


LF-18
F-274
1　褐(7.5YR4/4)　粘土質シルト　焼土化
LF-19
F-275-a-2
1　褐(7.5YR4/6)　粘土質シルト　焼土化
2　暗褐(10YR3/4)　粘土質シルト
LF-20・21
LF-21
LF-20
F-276
1　褐(7.5YR4/4)　縞状(Ea-a)
混じり粘土質シルト　焼土化
2　褐(7.5YR4/6)　粘土質シルト　焼土化
LF-22
J-275
1　黒(10YR2/1)　細砂混じりシルト質粘土
やや更炭質　炭化材片多い
2　黒褐(10YR3/2)　細砂質シルト　焼土化
3　黒(10YR17/1)　粘土質シルト
大型の炭化材片含む
LF-23
E-275-b-3
1　暗褐(10YR3/3)　極粗砂(Ta-c7)
混じり粘土質シルト
2　褐(7.5YR4/6)　縞～中礫(縞石)
混じりシルト質粘土　焼土化
LF-24
F-273-b-1
1　黒褐(7.5YR3/2)　細礫(Ta-c)
混じりシルト質粘土　焼土化
LF-25
D-275-c
1　赤褐(5YR4/8)　焼土
LF-27
E-275-b-4
1　暗赤褐色(5YR3/4)　土
(1・2)
(3～8)
LF-28・29
E-274-a-2
LF-29
LF-28
1　暗赤褐色(5YR3/4)　土　やや固い
1　暗赤褐色(5YR3/4)　土
他の焼土より粒子がやや荒い
(遺構)

図Ⅲ－35　Ⅴ層の焼土 (4)



図III－36 V層の焼土 (5)

LF－17（図Ⅲ－34）

位置　F-273-b,c。段丘面の前縁に近い位置にある。　規模　(0.74) × 0.65 ／ 0.12m。

特徴　Ⅴ層上面で確認したが、南東部の端は検出に失敗。上部にはⅣ層の砂礫のもぐり込みが見られる(1層)。Ⅴ層下底近くまで焼土化している (2層)。覆土を全量採取して浮遊選別をおこなった。

遺物　発掘中にはⅤ群c類土器10点、土製玉2点、Rフレイク2点、フレイク・チップ19点が出土。浮遊選別では土器40点、焼成粘土塊13点、剥片石器片1点、フレイク・チップ450点などが選別されたほか、土製玉7点の発見が注目される (表Ⅲ-17)。剥片石器類はすべて黒曜石製である。なお遺構直上のⅢ～Ⅳ層中から相当多数の黒曜石製フレイク・チップが出土したが、それらは本来LF-17関連の遺物であった可能性がある。12～16は土製の玉である。12・13は卵形のもので、でいずれも孔が小さくが貫通していないと思われる。14～16は短い筒形である。17・18はRフレイクである。刃部は小さな弧の連なりで構成されている。これらの刃部断面は鈍角で下端が細かく破砕しており縦方向に使用されたと考えられる。17は全体の光沢が失われており焼成を受けていると考えられる。

動物遺体は発見されていない。植物遺体ではクルミ属種子が報告されている (Ⅵ章３節)。

時期　Ⅴ群c類土器・土製玉の出土から縄文時代晩期後葉と考えられる。

LF－18（図Ⅲ－35）

位置　E-274-b、F-274-a。LF-19の北東側に隣接。　規模　(0.50) × 0.45 ／ 0.11m。

特徴　Ⅴ層調査中に確認、南端部を小トレンチで破壊した。比較的厚く中央が深い現地性の焼土である。覆土全量について浮遊選別を実施した。

遺物　遺物はすべて浮遊選別によって見出され、フレイク・チップ36点がある (表-17)。このうち1点がメノウ (?) 製、他は黒曜石製であった。動物遺体は発見されていない。植物遺体は炭化材のみが見られる。

時期　縄文時代晩期後葉以前。

LF－19（図Ⅲ－35）

位置　F-274-a。LF-18の南西に隣接。　規模　0.67 × 0.67 ／ 0.12m。

特徴　Ⅴ層調査中にLF-18とほぼ同一平面で確認。LF-18同様厚く焼土化し中央が深い。覆土の全量を採取し浮遊選別を実施した。

遺物　すべて浮遊選別で発見。土器55点、焼成粘土塊7点、黒曜石製フレイク・チップ108点がある(表Ⅲ-17)。土器は主にⅤ群c類かと思われるが細片である。動物遺体は淡水貝表皮が僅かに選別され、植物遺体としては炭化していないマタタビ属・ニワトコ属種子が報告されている(Ⅵ章3節)。

時期　縄文時代晩期後葉以前。晩期後葉の可能性が高い。

LF－20・21（図Ⅲ－35）

位置　E-274-b (LF-20)、E-274-b,c・F-274-d (LF-21)。

規模　0.72 × 0.42 ／ 0.11m (LF-20)、0.42 × 0.34 ／ 0.05m (LF-21)。

特徴　Ⅴ層調査中にLF-18・19とほぼ同一平面で確認、断ち割って2基の焼土が隣接していることを確認した。LF-20は中央が深いが下位に攪乱が認められ本来の形状かどうか確認できない。LF-21は薄い小規模な焼土である。ともに覆土全量について浮遊選別を実施。

遺物　浮遊選別で確認したものが全てである。LF-20で土器28点、焼成粘土塊2点、フレイク・チップ257点など、LF-21ではフレイク・チップ85点ほかが見出された (表Ⅲ-17)。分類の確実な土器片

としてⅢ群b-1類 (LF-20) がある。フレイク・チップのほとんどは黒曜石製であるがLF-20では頁岩(?)製のものも6点見られた。動物遺体は確認されていない。植物遺体では炭化材のほかLF-21でタデ属炭化種子が同定されている (Ⅵ章3節)。

時期　縄文時代晩期後葉以前。縄文時代早期の遺物も出土しているが、周辺包含層の遺物出土状況から見てともに晩期後葉の可能性が高い。

LF－22 (図Ⅲ－35)

位置　J-274-d。Ⅴ-1層河道Aの中にある。　規模　0.97×0.65／0.04m。

特徴　Ⅴ-1層河道A上部の、南西側の岸に近い位置で確認。付近ではほぼ同層準でLC-41・42・48などの炭化物集中が確認されている。薄い焼土の上に炭化材片の集中(1層)が覆い下位にも炭化材片を含む黒色土(3層)が見られる。覆土の全量を採取、浮遊選別に付した。

遺物　全て浮遊選別で得られたもので、人工遺物はない。動物遺体では焼骨片が少量あるが未同定。節足動物遺体もあるが炭化しておらず遺構との関係は不明である。植物遺体では炭化したタデ属・マタタビ属種子のほか不炭化のナス科・ヒユ科・カヤツリグサ科・ナデシコ科・マタタビ属・タラノキ属・ミツバウツギ属・キハダ属・ブドウ属・ミズキ属種子が同定されている (Ⅵ章3節)。炭化材は5点を検鏡しコナラ属材の存在を推定した (Ⅵ章4節)。

時期　河道の年代から縄文時代晩期後葉と判断される。

LF－23 (図Ⅲ－35)

位置　E-274-c、E-275-b。　規模　1.22×1.07／0.10m。

特徴　Ⅴ層調査中に確認した。比較的鮮明で中央が深くなる現地性の焼土。覆土は全量を浮遊選別に付した。

遺物　発掘中にⅤ群c類土器8点、石鏃1点、フレイク・チップ2点が出土。また浮遊選別では土器8点、焼成粘土塊4点、フレイク・チップ170点ほかが得られた (表Ⅲ-17)。剥片石器類はほとんどが黒曜石製で、浮遊選別で得たフレイク・チップ1点のみが安山岩(?)製である。1は石鏃である。大部分に剥離面が残されているが、基部と尖頭部は作出がなされており製品と考えられる。動物遺体は発見されず、植物遺体では炭化材・炭化種子(クルミ属)があり、炭化していないマタタビ属・ニワトコ属種子が同定されている (Ⅵ章3節)。

時期　縄文時代晩期後葉以前。出土土器から晩期後葉の可能性が高い。

LF－24 (図Ⅲ－35)

位置　F-273-a,b。LH-5の南東側に隣接。　規模　0.50×0.42／0.05m。

特徴　Ⅴ層の比較的上位で確認した。焼土化はかなり不鮮明で現地性のものではないかも知れない。覆土全量について浮遊選別を実施した。

遺物　発掘中に出土した遺物はⅤ群c類土器12点、黒曜石製フレイク・チップ15点。浮遊選別では土器20点、黒曜石製フレイク・チップ33点、頁岩(?)製フレイク・チップ1点ほかがある (表Ⅲ-17)。2は焼土中から浮遊選別法で抽出された石鏃未製品である。基部だけが粗く整形されている。

動物遺体は発見されていない。植物遺体では炭化していないマタタビ属種子が報告されたほか (Ⅵ章3節) 炭化材片がある。

時期　縄文時代晩期後葉以前。出土した石鏃未製品の形体から晩期後葉の可能性が高い。

LF－27 (図Ⅲ－35)

位置　E-273-a～d　規模0.44×0.30／0.08m

特徴　斜面の上の平坦地に位置する。LF-27～32は同一レベルでほぼ一直線に並ぶ。Ⅴ層上面、Ta-c直

下で検出した。平面形は不整形である。

遺物　Ⅴ群ｃ類土器片７点、ドリル未製品１点、黒曜石剥片６点（内焼けたもの４点）、計14点が出土している。3・4はⅤ群ｃ類土器の口縁部である。器形はどちらも浅鉢形で、3の口唇断面は角形で表面には３段複節の原体による縄文が施されている。4は上面に刻みの入る突起部を有するもので、他の口唇上には縄の押圧が、縄文を地文とする表面には数条の不明瞭な平行沈線が付されている。

時期　縄文時代晩期後葉

LF－28（図Ⅲ－35）

位置　E-273-c,d　規模　0.47×0.26/0.06m

特徴　Ⅲ層上面Ta-c直下で検出した。平面形は不整形で、二つの焼土の重なったものと思われるが、調査の不備のため新旧関係は不明である。

遺物　5～8はⅤ群ｃ類土器の口縁部である。器形は5～7が小型の浅鉢、8が深鉢である。5は断面が切り出し形の口唇で、その上面に縄線文、表面側には縄による斜め目の刻みが施されている。縄文が施文される表面には数条の不明瞭な細い沈線が付されている。6は山形突起の肩部分で、口唇の断面は円く表面には沈線が付されている。7は断面が表側に張り出す口唇を持ち表面には縄文が施される。8は口縁が内側に窄まる形のもので、口唇の断面は角形、表面には縄文が施される。

時期　縄文時代晩期後葉

LF－29（(図Ⅲ－35）

位置　E-273-d　規模　0.37×0.37/0.06m

特徴　Ⅴ層上面Ta-c直下で検出した。平面形は不整形である。

遺物　フローテーション法によりクルミ属の炭化種子片が0.02g検出された。

時期　縄文時代晩期後葉

LF－30（図Ⅲ－36）

位置　E-274-a　規模　0.44×0.25/0.06m

特徴　Ⅴ層上面Ta-c直下で検出した。平面形は不整形である。

遺物　土器片６点、黒曜石製剥片１点、頁岩製スクレイパー１点の計８点が出土している。1は頁岩製のスクレイパーである。表裏の刃部周辺には使用して出来たと考えられる光沢が認められる。

時期　縄文時代晩期後葉

LF－31（図－36）

位置　D-274-b,c E-274-a,d　規模　0.26×0.24/0.60m

特徴　Ⅴ層上面Ta-c直下で検出した。平面形はほぼ円形である。

遺物　黒曜石製剥片１点が出土している。

時期　縄文時代晩期後葉

LF－32（図Ⅲ－36）

位置　D-274-b,c　規模　0.28×0.22/0.04m

特徴　Ⅴ層上面Ta-c直下で検出した。北側の一部をトレンチで欠くが、平面形は楕円形である。

遺物　土器片５点、黒曜石製スクレイパー２点、黒曜石製剥片２点が出土している。

5はⅤ群ｃ類土器で深鉢形土器の口縁部である。対となる二つの突起の下には、半截竹管様の道具で斜めの刺突が施される「八」の字状の粘土が貼付されている。断面が切り出し形の口唇上面には縄線文・沈線文・縄の押圧文、表面の口縁直下の文様帯には細目の平行沈線を描いてからそ

の上に円弧文を施している。その下位には縄文が施されている。2・3は肉厚の剥片を使用したスクレイパーである。刃部断面は鈍角で下端が細かく破砕しており縦方向に使用されたと考えられる。4はくさび形石器としたものである。肉厚の剥片の相対する上下端に数次の打撃を加えた痕跡があり、打撃された部分には細かい破砕と階段状の剥離が認められる。しかし、これ以外の部分にも打撃を加えた痕があり残核の可能性もある。

時期　縄文時代晩期後葉

LF－33（図Ⅲ－37）

位置　F-272-c　規模　0.29×0.22/0.07m

特徴　丘陵の平坦地から斜面への傾斜変換点のⅤ層上面で確認。平面形はほぼ円形で炭化物もわずかに混ざる。

遺物　なし

時期　縄文時代

e. 炭化物集中（図版Ⅲ－18・19）

計45箇所の炭化物集中が確認された。表Ⅲ-7にその一覧を示す。いずれも縄文時代の氾濫原に当たる段丘面Ⅲ・Ⅳ（Ⅱ章参照）の部分に位置しており、段丘面Ⅰ・段丘崖部分にはない。以下Ⅴ層内の各包含層ごとに傾向を記述する。個別の遺構の位置・規模・形状等については表Ⅲ-7・16・17、図Ⅲ-17～19・37～44を参照して頂きたい。ただし遺物が多くそれらが炭化物集中に共伴することの確実なKC-19については特に個別の記述をおこなう。なお図Ⅲ-37～44には浮遊選別によって微細遺物の有無を確認した例を掲げ、その他は図Ⅲ-17～19に位置と形状の概略のみを示してある。

1) Ⅴ-1層の炭化物集中 (LC-9・10・14・22・26・28・29・31・33・36・39・41～50)

位置　段丘崖の前縁を流れる河道Bから南東側に比較的万遍ない分布が見られる。F～K・274～278ライン間では焼土と入り交じって存在し、J～L・272～274ライン間では土壙群の周囲に見られる。段丘面Ⅲの中央部から河道Bに合流する河道（河道A）内でも、流路堆積物の上部に焼土と並んで炭化物集中が形成されている（LC-41～44・48）。なお岬状に現氾濫原へ突出した段丘面Ⅳの部分には分布しない。

規模　多くはⅢ層の炭化物集中と大差なく長さ・幅とも1m強から数十cm程度、厚さ1～8cmの範囲にある。しかし長さ1.5mを超えるものも6箇所あり、特にLC-22・29・31の3箇所は大きい。

特徴　いずれも掘り込みを伴わない薄い集積である。炭化物のほとんどが材片で、河道A内など低湿な場所に形成されたものでは部分的に炭化した木材を伴う場合があり（LC-39・41・42）、特にLC-41で著しい。

LC-47にはごく薄いが焼土層らしいものが形成されており、現地で焼けたことが確実である。生焼けの材が集まっているLC-41についてもその可能性が高い。一方層序の項で触れたように、Ⅴ-2層中には水成と思われる薄い炭化物の層が認められる（本章3節）。Ⅴ-1層はⅤ-2層が上位から土壌化したものと考えられるので、Ⅴ-2層中の炭化物層がⅤ-1層の炭化物集中として誤認される恐れもないわけではない。特にLC-22・29・31のように目立って規模の大きいものについては問題がある。

遺物　LC-42・43・47でⅤ群c類土器、LC-31で剥片石器類、LC-46・47で珪岩礫・礫片、またLC-22

で玉などの出土が目立つ (表Ⅲ-14)。浮遊選別で得られた微細遺物としてはやはりⅤ群c類土器・黒曜石製フレイク・チップほかがあるが人工遺物の見い出されなかった例も多い (表Ⅲ-16・17)。炭化種子の同定を依頼したLC-10・45～47では、LC-45でマタタビ属・クルミ属が報告されたほか炭化していないマタタビ属 (LC-45・47)・ブドウ属 (LC-10・45) 種子が同定されている (Ⅵ章3節)。また炭化材の観察をおこなったLC-41～45ではコナラ属・ハリギリ属・トネリコ属・カツラ属・ブドウ属・ハンノキ属材などの存在が推定された (Ⅵ章4節)。LC－22の1は礫器としたもので、打ち欠いた礫の一辺に粗い剥離を加えたもので、使用したと考えられる部分には細かい破砕が認められる。2～5は石製品で、2・4・5が平玉、3は翡翠製の曲玉である。LC－31の1は肉厚の剥片を使用したRフレイクである。LC－41～44の1・2はⅤ群c類土器である。1は鉢形土器の口縁部から底部間際にかけてである。断面が切り出し形の口唇上面には縄線文が施され、その表面側には指によると思われる窪みが口縁に沿って付けられている。胴部には縄文を施した後に半裁竹管状の道具の刺突で縁取りした浅い凹の無文帯を作り出している。2は縄文の施された胴部の破片である。

時期　縄文時代晩期後葉。

2) Ⅴ-3層の炭化物集中 (KC-12・15～19・23・24・26～28)

位置　Q-270・271区の旧河道内で5箇所が確認されているほかは散発的である。

規模　長さ・幅とも数十cmから1.5m程度、厚さは断ち割って記録したものでは多くが5cm未満である。Ⅲ層・Ⅴ-1層の炭化物集中の多くと差がない。

特徴　いずれも掘り込みを伴わず、材片を主体とする炭化物の集積である。KC-27では部分的に炭化した木材を伴っている。炭化物集中相互、または他の遺構との切り合いは確認されない。ただしKC-27の断面では間層を隔てて炭化物混じりの層が重複する状況が見られる。複数の集中が重なっていた可能性もあるが、確認することができなかった。KC-15～18・23・24・27など流路堆積物内にある例については、水流などで掻き寄せられた可能性を否定できない。

遺物　KC-19以外で発掘中に確認された遺物としてはKC-12の剥片石器類があるのみである (表Ⅲ-14)。浮遊選別で得られた微細遺物もKC-12・19を別にして少なく (表Ⅲ-17)、KC-23・27で黒曜石製チップがわずかに選別されたにとどまる。KC-12で1024点見い出された黒曜石製チップは遺構中央部の径20cmほどの範囲に集中していたもので (図Ⅲ-40)、ほとんどが細部調整作業の産物とみられる長さ1cm未満の遺物である。焼けた痕跡をもつものが稀に含まれる。

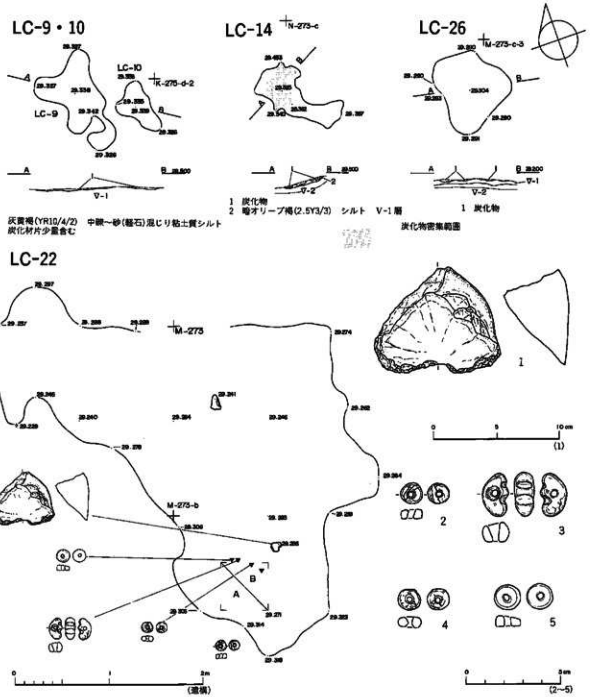
KC-19については浮遊選別の処理を誤り、概ね径2mm未満の土壌を洗い流してしまった。残ったものについて炭化物の同定を依頼したが種子は確認されなかった (Ⅵ章3節)。炭化材片5点の顕微鏡観察をおこない、クワ属・カエデ属・マタタビ属材の存在を推定した (Ⅵ章4節)。

時期　推定されるⅤ-3層の年代から縄文時代後期後半のものと考えられる。浮遊選別で得た炭化材各10.0gを試料として^{14}C年代測定を依頼したKC-23・28ではそれぞれ2560±60y.B.P. (KSU-2441)、3480±90y.B.P. (KSU-2440) という結果が報告されている (Ⅵ章1節)。KC-23の測定値は推定される後期後半の年代よりかなり若い。層序の項 (本章2節) で触れたように段丘面Ⅳとして地形区分された範囲にⅤ-3層が遺存している可能性が低いとすると、KC-23・24はⅤ-3層の炭化物集中に含めるべきではないかも知れない。

KC－19（図Ⅲ－40・41）

位置　Q-271-a・b　　規模　1.35×1.04／0.02m

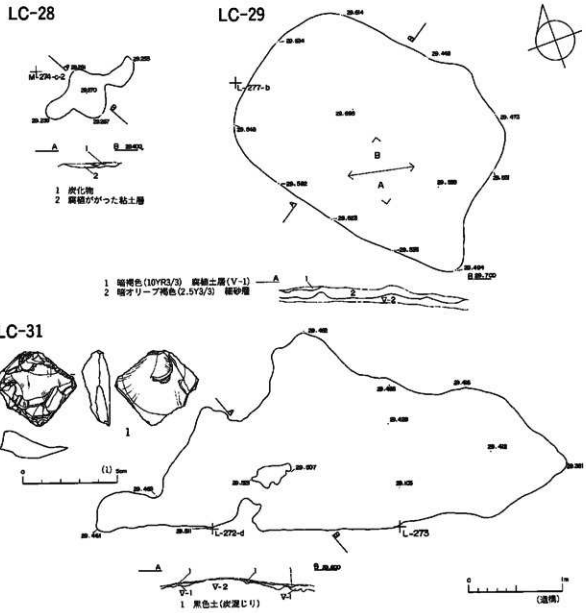
特徴　水性堆積からなる青灰色砂主体の互層中でV-3層に相当する腐植土の薄層から検出した炭化物集中である。炭化・未炭化の小枝状の樹木（樹種不明）や草本類によって構成されており、分布の傾向は礫石器等が集中する部分に遠く周辺で薄い。また、下位の土層にめり込んだ一部礫類の直下には入り込んでいない。遺物は、集中内で礫石器・礫類が、その周辺で復元可能なものを含む土器が出土している。遺物や下位の土層の焼けた痕跡が少ないことから礫石器等を据えてからその上で小規模な火を焚いたこと考えられ、まだ熱い礫や砂や置き火と一緒に埋める「蒸し焼き」様の調理法がなされた可能性もある。この上位は再度河川堆積物で覆われており、極短時間の作



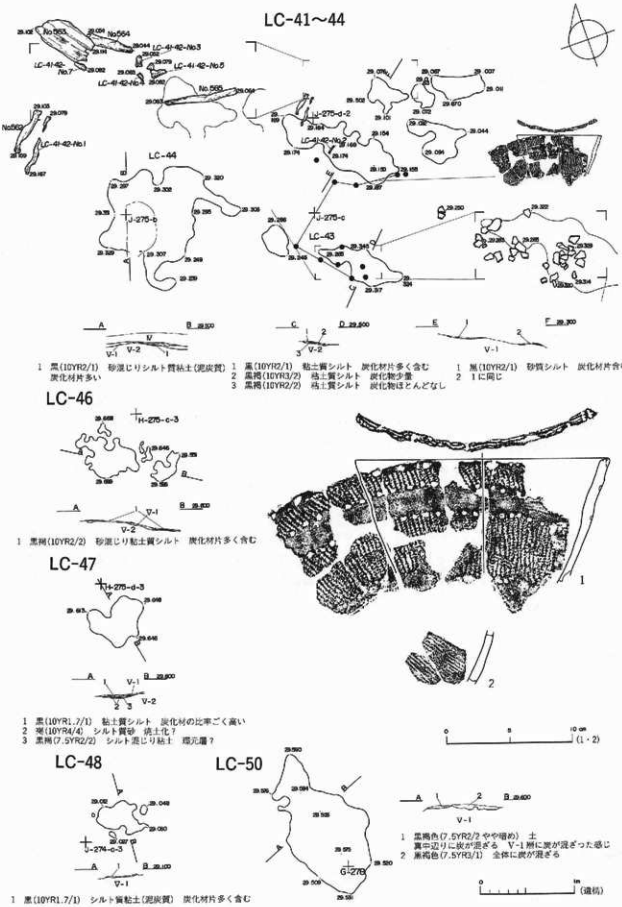
図Ⅲ－37　V－1層の炭化物集中（1）

業場であったと考えられる。

遺物　土器はⅣ群b類土器、石器類は砥石・台石等が有りこの他の礫についても他の場所から搬入した所謂「有意の礫」である。図Ⅲ－40の1は波状口縁の山形突起部先端である。2・3は同じ深鉢形土器の胴部と口縁部である。沈線の施された小型の突起部を有する口縁部で、口唇の断面は内面側に飛び出している。表面には横冠する沈線で区画された各種文様帯が巡っており、上から棒状の道具による連続した刻み、斜行縄文と磨石縄文が施され、胴部の「く」の字状のくびれより下位には縄文と数条の平行沈線が施されている。4はすり石もしくは砥石である。円礫の比較的平らな面を使っている。図Ⅲ-41の1は緩やかな波状を呈した深鉢形土器の口縁部である。口唇と胴部のくびれ部分に入る沈線で区切られた狭い文様体には、大きめの刻みが施されており、羽状縄文は沈線で区画された後に施文されている。表面の剥落が顕著で、胎土中には白色の岩片を含む砂粒が含まれている。4は押しつぶされた状態で出土した深鉢形土器の胴部から底部である。口縁は皆無で表面には斜行縄文が施されている。下位の無文部分は研磨状の調整痕が認められる。2・3・5は台石である。2は円礫を、3・5は板状の砂岩を使っている。3・5の破損はこの場に来てか



図Ⅲ－38　Ⅴ－１層の炭化物集中（2）



図Ⅲ－39　Ⅴ－1層の炭化物集中 (3)

らのものと推定される。

時期　土器から縄文時代後期中葉と考えられる。

3) Ⅴ-5層の炭化物集中 (CC-1～13)

Ⅴ-5層の炭化物集中13箇所は、さらに層位によって区分される。Ⅴ-5層上面のもの (CC-1)、Ⅴ-5a層のもの (CC-5～10・12)、Ⅴ-5aないしb層のもの (CC-2)、Ⅴ-5b1層のもの (CC-11)、Ⅴ-5層とみられるが不明確なもの (CC-3・4)。

位置　Ⅴ-5a層の炭化物集中7箇所は同層の氾濫原中の微高地に、またⅤ-5b1層の1箇所は河道中に位置する(図Ⅲ-19)。その他については層位が不明確であるため微地形との関連についても不明である。

規模　多くが長さ・幅とも数十cmから1.5mほどで、一部長さ2mを超えるものがある状況は他の層の炭化物集中と差がない。厚さは1～4cmを測る。

特徴　やはりいずれも掘り込みを伴わず、炭化物のほとんどが木材片とみられるものである。ある程度形状を残した炭化材を伴う例もある (CC-3)。炭化物集中相互、また他の遺構との切り合いは確認されていない。

Ⅴ-5a層のものは微高地に形成されている点から現地性の焚き火跡である可能性が考えられるが、その他については性格が明瞭でない。

遺物　発掘中にCC-4・10でⅢ群b-1類土器、CC-11でⅠ群b-3類土器がわずかに出土した (表Ⅲ-　)。浮遊選別は全ての遺構に対して実施し、残渣の選別をおこなったが人工遺物を確認できなかった。浮遊物の選別をおこなったCC-9・12では炭化していない状態ではあるがマタタビ属・クラノキ属・ブドウ属種子が同定され、特にCC-9では非常に多数であった (Ⅵ章3節)。炭化材の観察をおこなったCC-9・12ではカエデ属・コナラ属材の存在を推定した (Ⅵ章4節)。

時期　Ⅴ-5a層のものは縄文時代中期後半とみられる。Ⅴ-5層上面のものは中期後半以降後期までの年代幅が考えられる。CC-3・4に関してはⅤ層下底にかなり近い位置で確認されているものの、段丘面Ⅳ部分のⅤ-3層を侵蝕している新しい堆積物の下底が確認できなかったため、縄文時代中期以前のものと確定することができない。2560±60y.B.P. (KSU-2441) の^{14}C年代 (Ⅵ章1節) が報告されたKC-23とのレベル差はわずかである。

f. 集石

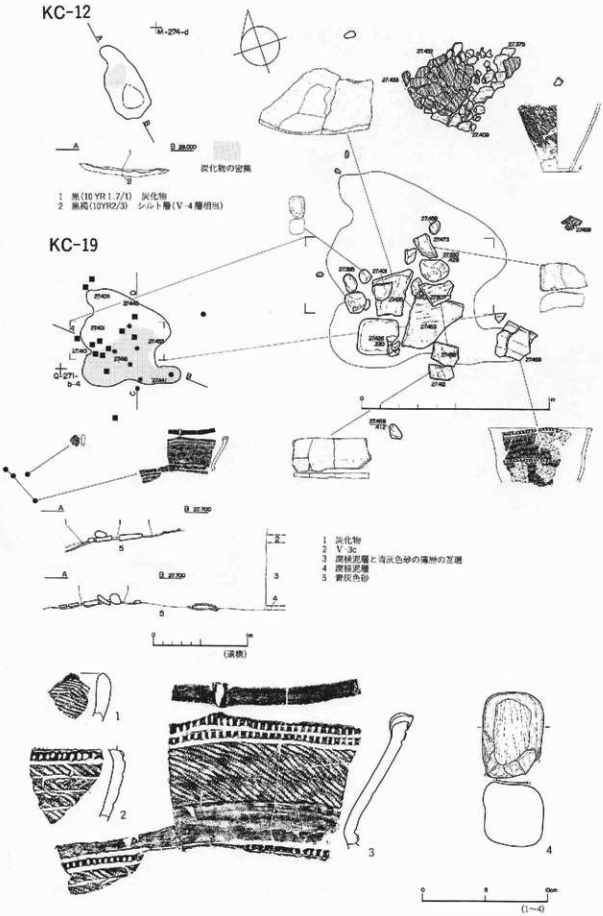
KS－4　(図Ⅲ-42)

位置　H-276-b,c、I-276-a,d。

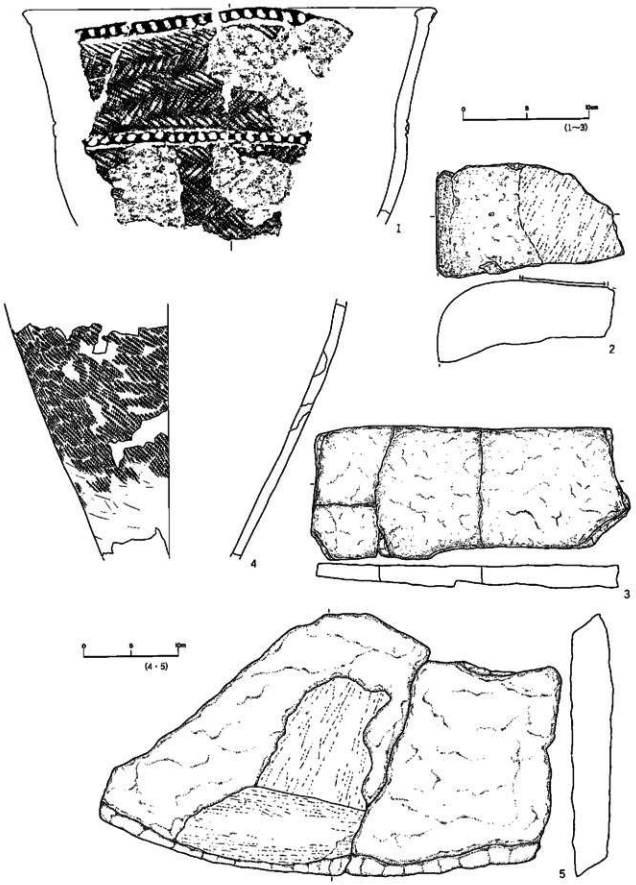
規模　2.01×1.71／0.09m。

特徴　Ⅴ-3層の河道内、河床の砂礫層からその下位の粘土質シルト層にかけて、礫片や周囲河床礫より大型の円礫が多数集中して出土した。その多くに火を受けた痕跡が見られたが、周囲には炭化物や焼土を認めることができなかった。出土状況平面図の作成後、50cm四方の細グリッド14方格に遺物を分け、上下3回にわたって取り上げをおこなった。H-276-b-3-イ区付近と同c-2-イ・ロ区付近に遺物の集中が認められる。

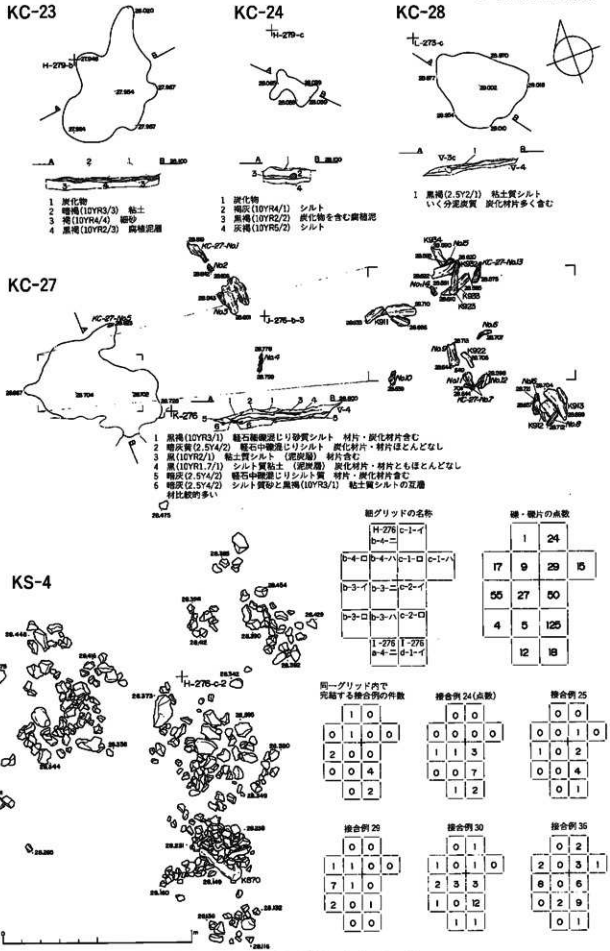
遺物　発掘時の遺物点数はⅢ群b-2類土器1点、チップ1点、礫379点、礫片1点であった (表Ⅲ-14) が、遺物の接合を試みた時点では運搬中の破砕などにより礫・礫片の総数は391点に増加していた。このうち平成7年3月15日現在で206点、36件の接合を確認している。同一の細グリッド内で接合



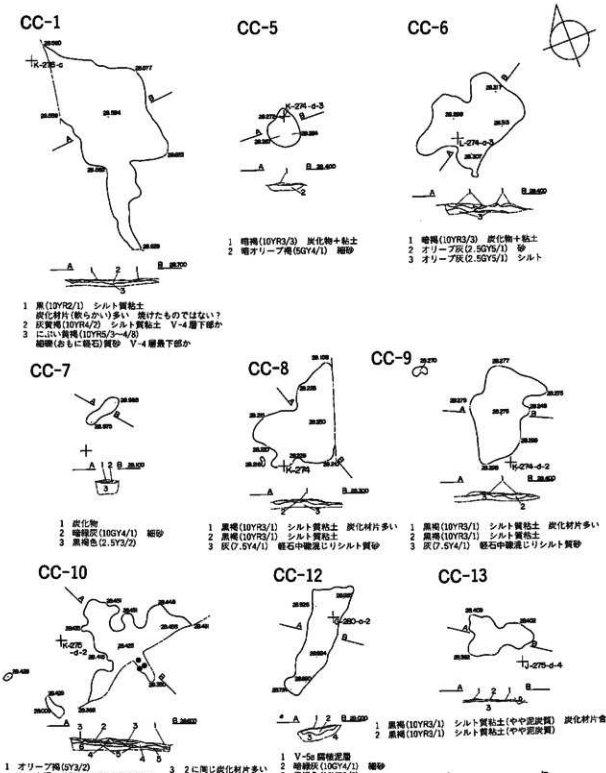
図Ⅲ－40　V－3層の炭化物集中 (1)



図Ⅲ－41　Ⅴ－３層の炭化物集中（2）



図Ⅲ－42 Ⅴ－3層の炭化物集中 (3)・集石



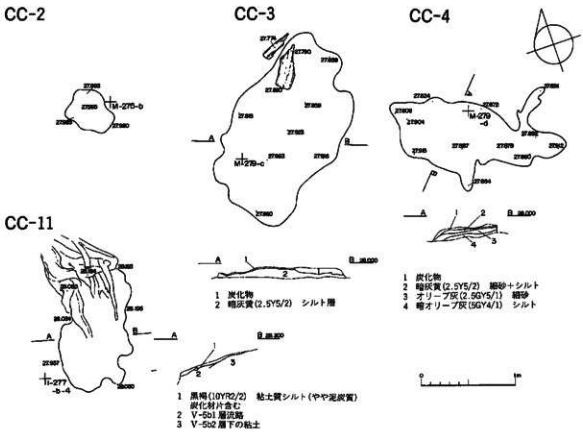
図Ⅲ－43　Ⅴ－5a層の炭化物集中

が完結した例は9件あり、うち4件がH-276-c-2-ロ区のものであるがこれはこのグリッドで最も遺物点数が多いことを反映したものであろう。一方10点以上の遺物が接合した例5件について遺物の出土位置を見ると、特定のグリッドに集中する傾向を示しながらも破片の一部は散在していることが窺われる。

接合した礫36個体の特徴を表Ⅲ-9に示す。いずれも円礫ないし亜円礫で大礫、中には巨礫に近い大きさのものが見られ、また多くが焼けた痕跡を有する。

おそらくこれらの礫はKC-19に見られるように低湿な場所での焚火に用いられ、急に冷やされたために破砕したものであろう。出土状況と接合の結果から、恐らく冷えて半ば破砕した状態の礫を焚火跡から拾い集めて河道に投げ込んだもので、この過程で個体の異なる礫片がいくらか混じり合ったのではないかと想像される。

時期　推定されるⅤ-3層の年代は縄文時代後期後半である。1片だけ出土したⅢ群土器はⅤ-3層の河道がⅤ-5層を侵蝕する過程で混入したものであろう。



図Ⅲ－44　Ⅴ－5層の炭化物集中

表Ⅲ－７　Ⅴ層の炭化物集中一覧

遺構名	グリッド	層位	規模（単位 m）	浮遊選別	人工遺物	備考
LC-9	K-275-a	Ⅴ-1	1.04 × 0.69 ／ 0.02	残渣選別		図Ⅲ-37
LC-10	K-275-a・K-275-d	Ⅴ-1	0.58 × 0.36 ／ 0.02	浮遊・残渣とも選別　同定	なし	図Ⅲ-37
LC-14	N-273-b・N-273-c	Ⅴ-1 上面	0.94 × 0.50 ／ 0.08	残渣選別	なし	図Ⅲ-37
LC-22	L-272-c・M-272-d・M-273-a	Ⅴ-1	4.71 × 3.15 ／記録なし	残渣選別	なし	図Ⅲ-37
LC-26	L-273-c	Ⅴ-1 上面	0.88 × 0.84 ／ 0.03	残渣選別	なし	図Ⅲ-37
LC-28	M-274-c	Ⅴ-1	1.08 × 0.55 ／ 0.04	残渣選別	なし	図Ⅲ-38
LC-29	L-276-a	Ⅴ-1 上面	2.92 × 2.23 ／ 0.01 未満	残渣選別	なし	図Ⅲ-38
LC-31	K-272-b・K-273-b	Ⅴ-1	4.98 × 2.08 ／ 0.03	試料なし		図Ⅲ-38
LC-33	K-274-c	Ⅴ-1 上面	(1.60 × 1.16) ／ 0.01	試料なし		
LC-36	J-273-b	Ⅴ-1 上面	0.74 × 0.58 ／ 0.01	試料なし		
LC-39	J-272-c・J-273-b	Ⅴ-1	1.06 × 0.45 ／ 0.08	未実施		
LC-41	J-275-d	Ⅴ-1	1.90 × 1.04 ／ 0.01	残渣選別	なし	図Ⅲ-39
LC-42	J-275-a・J-275-d	Ⅴ-1	1.33 × 0.49 ／ 0.01	残渣選別	土器（Ⅴc）	図Ⅲ-39
LC-43	J-275-c	Ⅴ-1	0.92 × 0.35 ／ 0.02	残渣選別	フレイク・チップ	図Ⅲ-39
LC-44	J-274-c・J-274-d・J-275-a・J-275-b	Ⅴ-1 上面	1.54 × 1.30 ／ 0.03	残渣選別	なし	図Ⅲ-39
LC-45	G-277-c	Ⅴ-1 上面	0.54 × 0.34 ／ 0.01	浮遊・残渣とも選別　同定	土器（Ⅴc）・フレイク・チップ・土製品	
LC-46	H-275-c	Ⅴ-1 上面	1.09 × 0.57 ／ 0.02	浮遊・残渣とも選別　同定	フレイク・チップ	図Ⅲ-39
LC-47	H-275-d	Ⅴ-1 上面	0.62 × 0.50 ／ 0.01	浮遊・残渣とも選別　同定	礫片	図Ⅲ-39
LC-48	J-274-a	Ⅴ-1	0.60 × 0.40 ／ 0.01	残渣選別	なし	図Ⅲ-39
LC-49	F-278-b	Ⅴ-1 上面	0.61 × 0.15 ／ 0.01	試料なし		
LC-50	F-277-c・F-278-b・G-277-d・G-278-a	Ⅴ-1	1.62 × 0.90 ／ 0.06	残渣選別	なし	図Ⅲ-39
KC-12	M-274-a	Ⅴ-3c 下位	0.85 × 0.41 ／ 0.03	残渣選別	フレイク・チップ	図Ⅲ-40
KC-15	Q-270-b	Ⅴ-3c 下底	0.82 × 0.42 ／記録なし	未実施		
KC-16	Q-270-d	Ⅴ-3c 下底	0.23 × 0.14 ／記録なし	未実施		
KC-17	Q-270-c・Q-270-d	Ⅴ-3c 下底	0.75 × 0.48 ／記録なし	未実施		
KC-18	Q-270-c	Ⅴ-3c 下底	0.45 × 0.40 ／記録なし	未実施		
KC-19	Q-271-a・Q-271-b・Q-271-c・Q-271-d	Ⅴ-3c より下	1.35 × 1.04 ／ 0.02	処理に失敗　選別　同定	土器（Ⅳc）・礫片・土製品	図Ⅲ-40
KC-23	M-278-c・M-278-d・M-279-a・M-279-b	Ⅴ-3c より下	1.52 × 0.92 ／ 0.02	残渣選別	フレイク・チップ	2480 ± 80（KSU-2441）図Ⅲ-42
KC-24	M-279-c	Ⅴ-3c より下	0.52 × 0.44 ／ 0.02	残渣選別	なし	図Ⅲ-42
KC-26	F-280-b	Ⅴ-3c	0.79 × 0.52 ／ 0.03	未実施		
KC-27	J-275-c・K-275-d	Ⅴ-3	1.45 ×（1.20）／ 0.12	残渣選別	フレイク・チップ	図Ⅲ-42
KC-28	L-273-c	Ⅴ-3c	0.99 × 0.77 ／ 0.02	残渣選別	なし	3690 ± 130（KSU-2440）図Ⅲ-42
CC-1	K-276-c・K-276-d	Ⅴ-5 上面	(2.39 × 0.94) ／ 0.01	残渣選別	なし	図Ⅲ-43
CC-2	M-274-c・M-274-d・M-275-b	Ⅴ-5a かb	0.53 × 0.42 ／記録なし	残渣選別	なし	図Ⅲ-44
CC-3	M-279-a・M-279-b・M-279-c・M-279-d	Ⅴ-5?	2.08 × 1.33 ／記録なし	残渣選別	なし	図Ⅲ-44
CC-4	L-279-b・L-279-c・M-279-a・M-279-d	Ⅴ-5?	1.84 × 1.08 ／ 0.03	残渣選別	なし	図Ⅲ-44
CC-5	L-274-d	Ⅴ-5a	0.40 × 0.34 ／ 0.03	残渣選別	なし	図Ⅲ-43
CC-6	L-274-a	Ⅴ-5a	1.22 × 1.04 ／ 0.04	残渣選別	なし	図Ⅲ-43
CC-7	F-280-b	Ⅴ-5a	0.42 × 0.14 ／ 0.02	残渣選別	なし	図Ⅲ-43
CC-8	J-273-c・J-274-b	Ⅴ-5a	1.42 ×（0.85）／ 0.01	残渣選別	なし	図Ⅲ-43
CC-9	K-274-a・K-274-d	Ⅴ-5a	1.04 × 0.70 ／ 0.01	浮遊・残渣とも選別　同定	なし	図Ⅲ-43
CC-10	K-275-d	Ⅴ-5a	(1.34 × 1.09) ／ 0.03	残渣選別	なし	図Ⅲ-43
CC-11	I-277-a・I-277-b	Ⅴ-5b1	1.35 × 0.80 ／ 0.04	残渣選別	なし	図Ⅲ-44
CC-12	G-279-d・G-280-a	Ⅴ-5a	1.30 × 0.41 ／ 0.01	浮遊・残渣とも選別　同定	なし	図Ⅲ-43
CC-13	I-275-c	Ⅴ-5a	0.68 × 0.44 ／ 0.02	残渣選別	なし	図Ⅲ-43

表Ⅲ－8　KC－19出土の礫一覧（図掲載遺物は除く）

番号	長さ	幅	厚さ	重　さ	材　質	焼　　け	備　　考
10	163	137	112	(3110)	泥岩	黒変・ハジケ・ヒビ	円礫
11	237	200	96	(5800)	砂岩	赤変・黒変・ハジケ・ヒビ	円礫・白い付着物
13	(72)	51	43	(235.4)	花崗岩	なし	円礫
14	111	(109)	63	(1058.0)	泥岩	赤変・黒変・ヒビ	円礫
15	100	73	61	550.2	砂岩	黒変	円礫
17	131	96	51	796.9	硅岩	白変・ヒビ	円礫
18	(78)	(77)	(57)	(367.0)	硅岩	ヒビ	円礫片
20	75	55	34	201.5	泥岩	赤変・ハジケ	円礫
21	24	14	9	3.8	硅岩	なし	円礫
22	24	12	12	7.4	泥岩	なし	円礫
23	40	18	14	16.4	硅岩	なし	円礫
24	55	29	27	70.6	砂岩？	赤変？	円礫
25	76	44	30	148.4	泥岩	なし	円礫

表Ⅲ－9　KS－4出土礫一覧

番号	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	焼け	備考
1	109	88	30	440.1	泥岩	赤変・ハジケ	円礫
2	111	69	42	444.2	泥岩	ハジケ	円礫
3	(237)	115	(85)	(1911.4)	安山岩	赤変	円礫片
4	(99)	(84)	(77)	(601.6)	砂岩	赤変・ヒビ	礫片
5	(120)	(62)	(57)	(356.0)	砂岩	赤変・黒変	円礫
6	(58)	(44)	(21)	(75.7)	泥岩	ハジケ	円礫片
7	64	31	17	59.1	泥岩	白変・ハジケ	円礫
8	(93)	(42)	(38)	(225.0)	砂岩	赤変・黒変	円礫片
9	(58)	(44)	(35)	(113.7)	砂岩	ハジケ	円礫
10	(75)	(35)	(47)	(139.9)	砂岩	赤変・ヒビ	円礫片
11	(25)	(15)	(19)	(4.7)	泥岩	なし	亜円礫
12	(64)	(53)	(36)	(171.9)	砂岩		断面三角形すり石片
13	(29)	(19)	(12)	(7.6)	硅岩	赤変	礫片
14	62	60	35	139.5	硅岩	白変	円礫
15	(70)	(61)	(37)	(150.6)	硅岩	ヒビ	円礫
16	(70)	(52)	(37)	(167.0)	泥岩？	白変	円礫
17	(80)	(49)	(42)	(108.5)	硅岩	なし	礫片
18	(50)	(41)	(39)	(79.6)	硅岩	なし	礫片
19	(61)	(49)	(33)	(137.0)	硅岩	赤変	円礫片
20	(57)	(32)	(32)	(109.9)	硅岩	なし	礫片
21	(74)	(40)	(32)	(145.2)	硅岩	なし	円礫片
22	(114)	(52)	(21)	(157.5)	硅岩	赤変・ヒビ	円礫片
23	(100)	(78)	(75)	(667.1)	花崗岩？	赤変・ヒビ	円礫片
24	(133)	(85)	(33)	(689.7)	砂岩	赤変・黒変・ヒビ	円礫片・25と接合
25	(171)	(105)	(68)	(967.6)	砂岩	赤変・黒変	円礫片・24と接合
26	(85)	(36)	(40)	(175.6)	砂岩	赤変	円礫片
27	(87)	(82)	(29)	(294.2)	砂岩	赤変	円礫片
28	(56)	(36)	(22)	(47.7)	砂岩	黒変	円礫片
29	(141)	(74)	(80)	(743.6)	砂岩	赤変・白変・ヒビ	円礫片
30	(142)	(103)	(91)	(1348.9)	砂岩	赤変・ハジケ・ヒビ	円礫
31	(144)	(54)	(62)	(453.8)	硅岩	なし	円礫片
32	(48)	(21)	(18)	(23.8)	硅岩	赤変	礫片
33	(35)	(27)	(15)	(24.4)	硅岩	なし	円礫片
34	(35)	(25)	(14)	(14.2)	硅岩	赤変	礫片
35	(71)	(49)	(25)	(124.1)	硅岩	赤変	礫片
36	(197)	(122)	(121)	(3030)	硅岩	赤変・ヒビ	円礫

(2) 旧河道部

前節 (2) 項に続いて、本項では段丘面Ⅰ上のⅤ層に相当するTa-c火山灰降下以前の時期の旧河道とその周辺の遺物・遺体の出土状況について述べる。段丘面Ⅲ・Ⅳの範囲におけるこの時期の堆積物をⅤ-1層からⅤ-5層までに区別したが (本章3節)、このうち遺物包含層は主にⅤ-1・Ⅴ-3・Ⅴ-5の3層である。各層の状況について以下順に説明する。

a. Ⅴ-1層 (図Ⅲ－45～48)

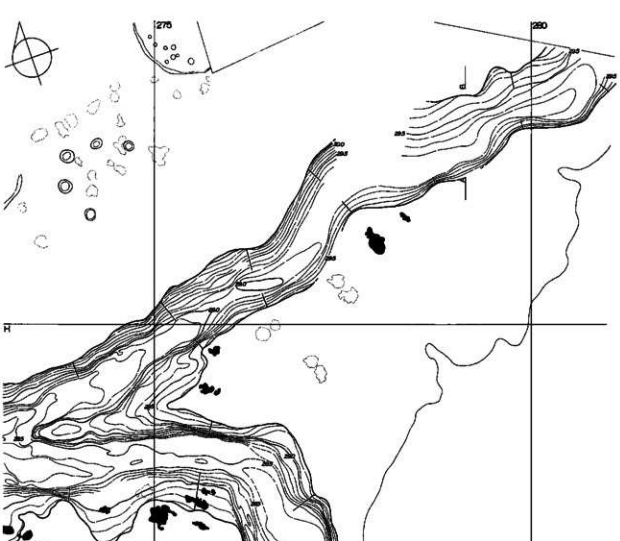
調査範囲の北東部と南西部に分かれて旧河道が確認された。北東部の河道のうちK－278区付近から蛇行してJ－273区付近に至るものを仮に河道A、D－280区付近から段丘崖に沿ってほぼ直線的にI－273区へ達するものを河道Bとする (図Ⅲ－45)。また南西部で確認したものを河道Cとする (図Ⅲ－46)。

河道AとBはI－273区付近で合流している。Ⅴ-1層上面で確認した時点では河道Aの堆積物がBを覆うものと思われたが、断面の観察や木材の出土状況などから両者に明確な年代差がなく、併存した時期があったものと判断した。河道Aは幅4～5m、深さ0.8mほどの規模があり、下部は砂礫質の堆積物が卓越する (図Ⅲ－4)。河道Bは幅3～4m、深さ0.4mほどとやや小さく、河床を除いて泥炭質ないし腐植泥質の堆積物が優勢である (図Ⅲ－4・45)。河道Cは下位のⅤ-3層上面まで重機で掘削して確認したたもので規模は不明であり、またⅤ-3層の河道とほぼ重複していたため明確に捉えることができなかったが、断面の観察によるとⅤ-1層上面からの深さは恐らく1.2m程度、幅も5m前後あったと推定される。下部は砂礫質の堆積物が主体となる (図Ⅲ－46)。

各河道内では縄文時代晩期中葉の遺物が散発的に出土した。土器が多く、剥片石器類は稀である。土器・石器類の大半は河道の下部で出土している。河道Cではやや多くの土器が出土したが特に集中する傾向はない。図Ⅲ－46に示した河道の蛇行の状態は晩期土器の出土位置から推定したものである。また木製品は河道Bで2点が出土したのみで、どちらかといえば浅い位置で確認されているが遺物の比重にもよるのであろう (図Ⅲ－47)。

河道Aでは上部の堆積物の中に焼土・炭化物集中が確認されており、また河道Bの左岸にも焼土・炭化物集中が並んでいるが、これらと河道内の遺物との関連は明瞭でない (図Ⅲ－47・48)。焼け材は河道A・Cではやや稀であるが河道Bで普通に見られ、長軸を段丘崖斜面の傾斜に揃えた例が目につく (図Ⅲ－47・48)。河道周辺の遺構よりもむしろ段丘面Ⅰ上の遺構集中部分との関連を考えさせる出土状況と言えよう。河道B内では多少の湾淡はあるものの上流から下流まで特に偏りのない分布を見せ、特にまとまって出土する傾向はない。長手の材が2～3本並ぶように検出された例が注意される程度である (図Ⅲ－47)。

加工痕や焼け痕のない木材は河道A・B内で多量に出土している。図示していないが河道下部の砂礫質の部分 (河道Cを含む) では長軸を河道の方向に揃えた木材が多く、上部の泥炭質・腐植泥質の部分では河道方向とほぼ直交した状態で出土するものが目立つ。河道A・Bに沿って株が少数出土している。岸から專ら河道の外に向かって根を張っているものが見られるので、河道が流路として機能していた時期に流れに沿って樹木が生育していたことが窺われる。やや広い範囲にヨシ原が広がっていたとみられるⅢ-5層形成当時の状況とは幾分異なった景観が想像される。なお河道Aの一部や河道Cなど、段丘崖の裾を離れるにつれて河道上部の泥炭ないし腐植泥の発達は悪くなり、そこから出土する木材も少なくなる傾向にあるが、これは流れの状態や周囲の植生と関係するのか、あるいは段丘化した後に地下水位の低下によって腐食・分解したものか判然としない面がある。木材以外では昆虫遺体やクルミ核などが散発的に出土した。淡水貝の殻表面の殻皮がⅤ-1層の焼土から幾らか出土しているが (Ⅵ章2節)、河道内では確認されていない。



1　褐灰(10YR4/1)色砂　φ3mm 程
2　黒(7.5YR2/1)色土　En-a(？)軽石(φ3～10mm 程)がわずかに混ざる
3　灰褐(7.5YR4/2)色砂　φ1よりやや細かい
4　黒褐(7.5YR3/1)色土　2に6が混ざるかんじ
5　暗褐(7.5YR3/3)色砂
6　黒褐(10YR3/2)色砂
7　黒褐(7.5YR3/1)色土　4よりやややや暗い　φ5mm 程の軽石が入る
8　黒褐(7.5YR3/2)色シルト　やや灰色がかる
9　褐(7.5YR4/3)色砂　φ3mm～10mm 程の砂
10　黒褐(7.5YR2/2)色砂
11　黒褐(7.5YR3/2)色砂　上部に φ2mm 程の荒い砂も
混じるが全体的に細かい　下部には φ1.2cm の軽石が混ざる
12　暗褐(7.5YR3/3)色砂　やや灰色がかりきめ細かい
13　褐灰(7.5YR4/1)色砂　やや暗め
14　褐灰(7.5YR4/1)色砂
15　褐(7.5YR4/3)色砂　φ3mm 程ときおり φ1cm 程の砂利が入る
16　黒褐(7.5YR3/2)色砂　12よりやや荒いが細かい砂
17　黒褐(7.5YR3/2)色砂　やや灰色がかる　φ1cm 程の軽石が混ざる
18　黒褐(7.5YR3/2)色砂　砂と土の混ざり
19　黒褐(2/2)色シルト　軽石混ざり
20　黒褐(7.5YR3/1)色砂
21　黒褐(3/2)色土

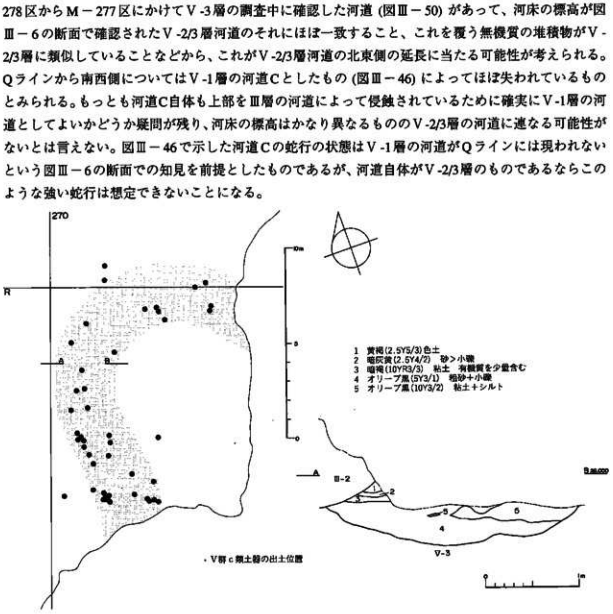
図Ⅲ－45　Ⅴ－1層の河道(1)

河道A出土の木材から2180±60y.B.P. (KSU－2443)、河道A河岸の株から2360±35y.B.P. (KSU－2444)、同じく河道Aの傍らに形成された焼土LF－14の炭化物から2350±60y.B.P. (KSU－2439)の^{14}C年代が測定されており(図Ⅲ－48、Ⅵ章1節)、Ⅲ-5層の^{14}C年代ともほとんど差がない。ここでⅤ-1層の河道としたものがTa-c降下直前に流路として機能していたことを示すとともに、Ta-cの降下を境に河道周辺の環境にかなりの変化が起きたことを物語る数字と言えよう。

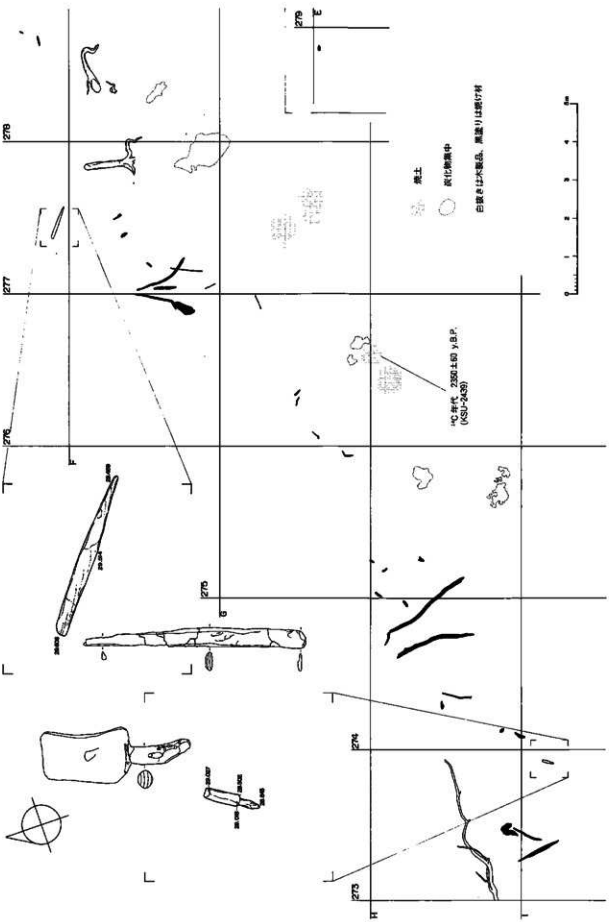
b. Ⅴ－2/3層

P－271～273区の土層断面(図Ⅲ－6)で確認されているⅤ-2/3層はⅤ-3層を不整合に覆っており、河床の砂礫層とみられるものを含むことからもⅤ-3層より新しい河道の堆積物と考えられる。中～細礫・砂・シルト・粘土などの互層で、泥炭・腐植泥など有機質の堆積物は発達せず、また稀に木材が出土する程度で生物遺体に乏しい。現キウス川の河岸に露出しており、河道内へ向かって地滑りを起こしている部分がある。

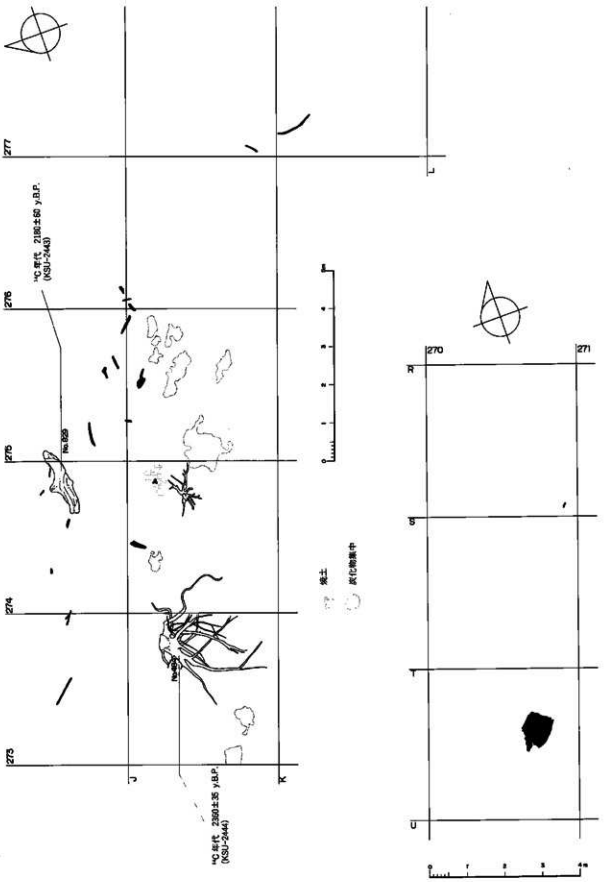
調査に時間をかけられなかったのと、また現河道の侵蝕によって本層の相当部分が失われているらしいことも関係してⅤ-2/3層河道の平面的な規模・範囲や方向を確認することはできなかった。ただしL－278区からM－277区にかけてⅤ-3層の調査中に確認した河道(図Ⅲ－50)があって、河床の標高が図Ⅲ－6の断面で確認されたⅤ-2/3層河道のそれにほぼ一致すること、これを覆う無機質の堆積物がⅤ-2/3層に類似していることなどから、これがⅤ-2/3層河道の北東側の延長に当たる可能性が考えられる。Qラインから南西側についてはⅤ-1層の河道Cとしたもの(図Ⅲ－46)によってほぼ失われているものとみられる。もっとも河道C自体も上部をⅢ層の河道によって侵蝕されているために確実にⅤ-1層の河道としてよいかどうか疑問が残り、河床の標高はかなり異なるもののⅤ-2/3層の河道に連なる可能性がないとは言えない。図Ⅲ－46で示した河道Cの蛇行の状態はⅤ-1層の河道がQラインには現われないという図Ⅲ－6の断面での知見を前提としたものであるが、河道自体がⅤ-2/3層のものであるならこのような強い蛇行は想定できないことになる。



図Ⅲ－46 Ⅴ－1層の河道(2)



図Ⅲ－47 Ⅴ－1層木製品・焼け材・株出土状況図 (1)



図Ⅲ－48　Ⅴ－１層木製品・焼け材・株出土状況図（2）

本層の下底ではⅣ群c類土器がかなり出土するが、侵蝕されたⅤ-3層に由来するものではないかと考えられる。一方堆積物の中ほどからはⅤ群c類土器が出土している。縄文時代後期末から晩期前半の間にキウス川による下刻が進行し、晩期中葉に再び堆積の傾向が強まったものであろうか。M－279区付近でⅤ-2/3層類似の堆積物の下底に認められた標高28.1m前後の平坦面（図Ⅲ－50）はこの晩期前半ごろの下刻で形成され、段丘面Ⅳの基礎をなしている可能性がある。この平坦面の直上で確認された炭化物集中KC－23の炭化材片による^{14}C年代測定の結果は2560±60y.B.P.（KSU－2441、Ⅵ章1節）であって、ほぼ従来の測定から推測される縄文時代晩期前半～中葉の年代に符合している。堆積は晩期の中葉に急激に進み、段丘面Ⅳを構成するⅤ-2/3層の堆積、さらに段丘面ⅢおよびⅤ-2層の堆積を経て終息し、Ⅴ-1層に示される安定した植生の形成がなされたものであろう。

c. Ⅴ－3層（図Ⅲ－49～53）

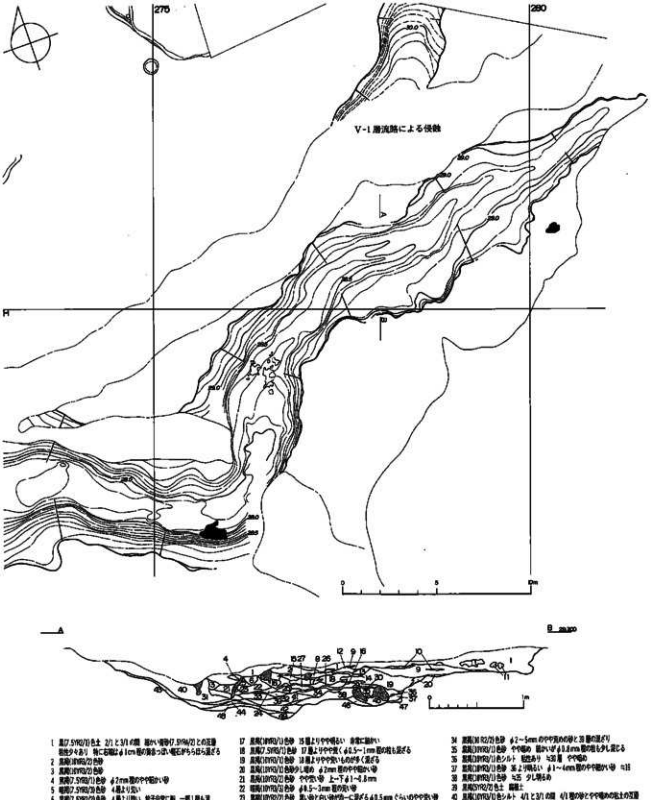
Ⅴ-1層と同様に調査範囲の北東部と南西部に分かれて旧河道が確認された。E－281区付近から蛇行してJ－273区付近に至る北東部の河道を仮に河道A（図Ⅲ－49）、Q－270区付近からT－271区付近へ達する南西部のものを河道B（図Ⅲ－50）とする。また段丘面ⅢとⅣの境のL－278区付近で確認したものを河道Cとする（図Ⅲ－50）。このうち河道Cについては既に説明したようにより新しいⅤ-2/3層の河道である疑いも強いが、調査の時点ではⅤ-3層のものとして扱ったので一応ここで説明を加える。

河道の規模は河道Aで幅5～6m、深さ0.4mから1.2mを測り、下流に向かって深さを増す傾向が顕著である。また河道Bは上部をⅤ-1層やⅢ層などの河道で侵蝕され、下位のⅤ-5層との境界も不明瞭な部分があったが、断面の観察からは幅10m、深さ1.8～2.0mに達する規模の大きなものであったと考えられる（図Ⅲ－6・50）。河道Cは幅約2m、深さ約0.4mと小さい。河床の砂礫層は河道Bでは谷の下底の礫層に達して厚く発達している。河道A・Bではその上位に泥炭質ないし腐植泥質の土壌と軽石礫混じりの細礫～砂の互層が堆積し、さらにその上をやや分解の進んだ泥炭あるいは腐植泥からなる比較的均質な堆積物が0.1～0.8mの厚さで覆っている（図Ⅲ－3・4・6・50）。一方河道Cでは有機質の部層は薄く不連続で、軽石礫混じりの砂・シルトなど無機質の堆積物が主体を占める。

河道B上部の腐植泥質部分には炭化物集中4箇所、また河道A・B中位の腐植泥・砂の互層部分に炭化物集中各1箇所、さらに河道Aの河床に集石1箇所が形成されている。各河道の中位から河床にかけて土器を中心とする縄文時代後期後半の遺物が出土している。河道BのKC－19内および周囲で出土したものを除くと遺構との関連は明確でない。河道Bでは土器の量がやや多いので図Ⅲ－52にその出土位置を示したが、顕著な集中箇所はなくⅣ群b類土器とc類土器が混在する状況である。河道Cでも付近に形成された炭化物集中（KC－23・24）と遺物の関連は認め難く、河道Aでは人工遺物の数そのものがごく少ない。

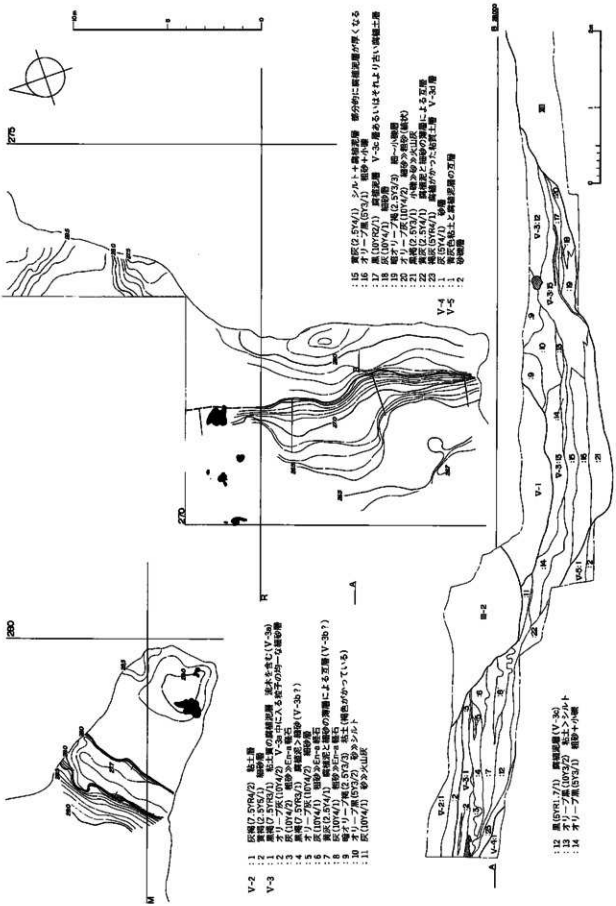
河道Bでは比較的下部（河床の砂礫よりは上位）から5点の木製品が出土している（図Ⅲ－52）。取上番号K691・K692の2点が隣接して出土したのを除くと、木製品相互、あるいは遺構や他の遺物との関連を認めることはできなかった。焼け材の出土もⅤ-1層の河道に比べて稀で、河道A内のKC-27の範囲にまとまって確認されたのを除くとごく散発的な出土状況である（図Ⅲ-51・52）。なお河道Bで樹木の幹の内部が焼けて空洞となったもの（図版Ⅲ－10－7）が出土して、丸木舟未製品の可能性も考えられたが、焼け痕以外に加工の痕跡を認めることができない。

自然のものとみられる木材は河道A・Bで多量に出土している。河道中位の腐植泥・砂の互層部分に多く見られ、図示していないが砂質の堆積物中では長軸を流れの方向に揃えている例が多い。木材以外ではクルミ殻などの種子、昆虫遺体等が散見される。淡水貝の遺体は確認されない。またこれら動植物遺体は河道C内ではほとんど認められない。

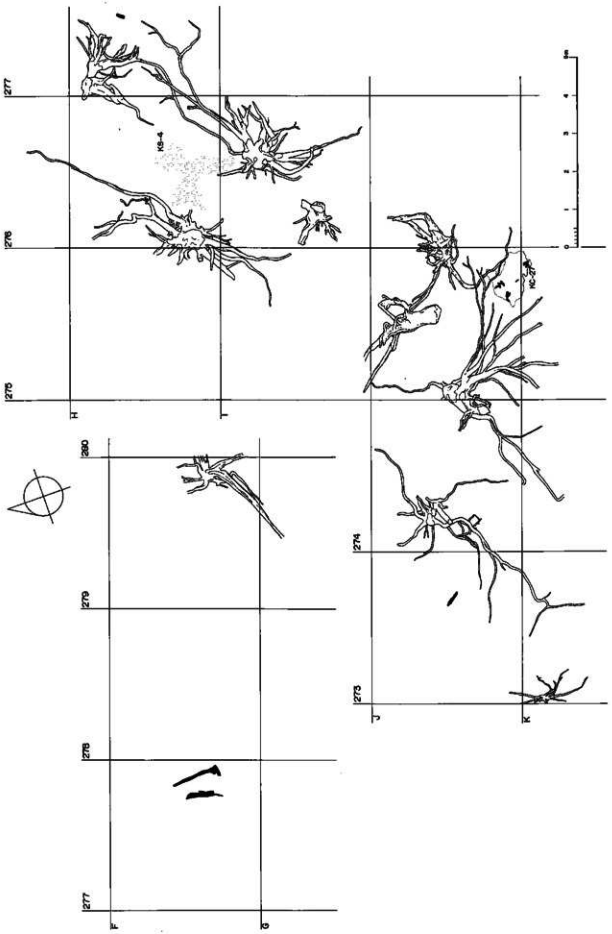


1 黒(7.5YR2/1)色土 2/1と3/1の間 細かい褐砂(7.5YR4/2)との互層 粘性少々あり 特に右端はφ1cm程の黄色っぽい軽石がちらほら混ざる
2 黒褐(10YR3/2)色砂
3 黒褐(10YR3/2)色砂
4 黒褐(7.5YR3/1)色砂 φ2mm程のやや細かい砂
5 暗褐(7.5YR3/3)色砂 4層より粗い
6 黒褐(7.5YR2/2)色砂 4層より暗い 粒子非常に細 一部1層も混
7 極暗褐(7.5YR2/3)色砂 粘性あり
8 黒褐(10YR3/1)色砂 やや赤味を帯びる粗い砂φ1mm~0.8mm
9 黒褐(10YR3/2)色砂 上は比較的細かくφ2mm程 下と端の方はφ3~5mm程のやや粗い砂で色も少々黄色味を帯びる
10 (7.5YR2/1) 土 ≒13層
11 灰黄褐(10YR4/2)色粘土 川の右端の基盤? 粘土と同一物
12 黒褐(10YR3/1)色砂 ≒18層
13 (7.5YR2/1) 土 14層より褐砂が多く入る
14 黒(7.5YR2/1)色土 1層
15 黒褐(10YR3/1)色砂 やや明るい
16 黒褐(10YR3/2)色砂 2より暗 7層と混ざる
17 黒褐(10YR3/1)色砂 15層よりやや明るい 非常に細かい
18 黒褐(7.5YR3/1)色砂 17層よりやや粗くφ0.5~1mm程の粒も混ざる
19 黒褐(10YR3/1)色砂 18層よりやや粗いものが多く混ざる
20 黒褐(10YR3/1)色砂少し暗め φ2mm程のやや細かい砂
21 黒褐(10YR3/2)色砂 やや粗い砂 上→下φ1~0.8mm
22 暗褐(10YR3/3)色砂 φ0.5~3mm程の粗い砂
23 黒褐(10YR2/2)色砂 黒い砂と白い砂が均一に混ざるφ0.5mmぐらいのやや粗い砂
24 暗褐(10YR3/3)色砂 細かい砂
25 褐(7.5YR4/3)色砂 φ0.5~3mm程の粗い砂
26 黒(10YR2/1)色砂 3/1との間 細かい砂わずかに粘性あり 上の方は17層と混ざり色もやや明るめ
27 黒褐(10YR3/1)色砂 やや明るい細かい砂 わずかに粘性あり
28 黒褐(10YR2/2)色砂 35が混じる非常に細かい砂
29 暗褐(10YR3/3)色砂 φ0.5~1mm程の粗い砂
30 黒褐(10YR3/1)色シルト 粘性あり
31 黒褐(7.5YR3/1)色 ≒41
32 黒褐(10YR3/1)色砂 φ0.8mm程の白と黒の粒が均一に混ざる ≒23
33 黒褐(10YR3/2)色砂 φ0.5mm粒のやや粗い砂 ≒22
34 黒褐(10YR2/2)色砂 φ2~5mmのやや粗めの砂と38層の混ざり
35 黒褐(10YR3/1)色砂 やや暗め 細かいがφ0.8mm程の粒も少し混じる
36 黒褐(10YR3/1)色シルト 粘性あり ≒30層 やや暗め
37 黒褐(10YR3/1)色砂 36より明るい φ1~4mm程のやや細かい砂 ≒18
38 黒褐(10YR3/1)色砂 ≒35 少し明るめ
39 黒褐(5YR2/2)色土 腐植土
40 黒褐(10YR3/1)色シルト 4/1と3/1の間 4/1程の砂とやや暗めの粘土の互層 粘性あり 1層を明るくした感じ
41 黒褐(7.5YR3/1)色砂 39層と38層の間の感じ 細かい砂
42 黒褐(10YR3/1)色砂 ≒38 やや暗め
43 黒(10YR2/1)色シルト 2/1と3/1の間
44 黒褐(10YR3/1)色砂 40層にφ5~10mmの黒褐(10YR3/2)色の軽石が混ざる
45 黒褐(10YR3/1)色粘土
46 黒褐(10YR3/1)色砂 45層も若干混ざる φ2~10mmの粗い砂 白っぽいφ2~3mmの軽石も少しはいる
47 黒褐(7.5YR3/1)色土 7.5YR3/1と3/2の間 やわらかい
48 黒褐(10YR3/2)色砂 φ2~10mm程の軽石(10YR4/2)の間に43層が入る
49 黒褐(10YR3/1)色砂 φ3~5mm程の砂利 3/1と3/2の間
V-1層流路による侵蝕

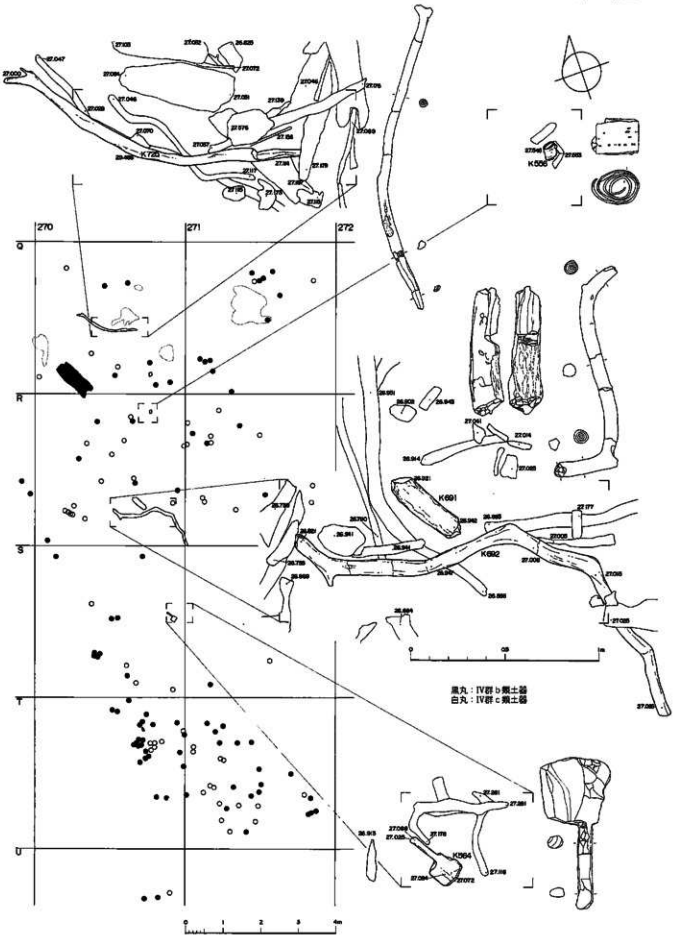
図Ⅲ－49　V－3層の河道（1）



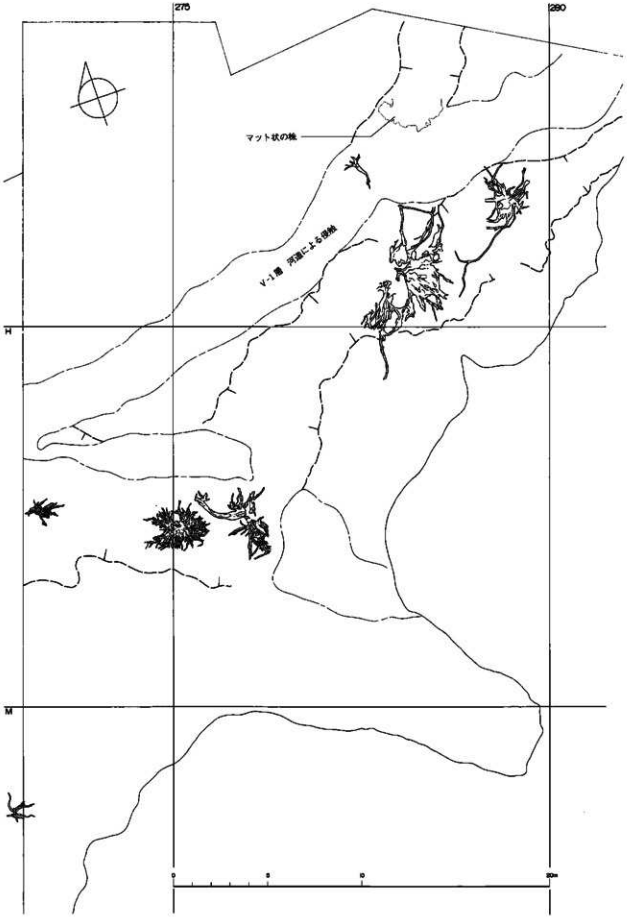
図Ⅲ－50　V－3層の河道 (2)



図Ⅲ－51　Ⅴ－３層焼け材・炭出土状況図（1）



図Ⅲ－52　Ⅴ－3層木製品・焼け材出土状況図（2）



図Ⅲ－53　Ⅴ－3層上部株出土状況図

河道Aの両側には河岸から河道外に向かって根を伸ばした株が並んでおり、蛇行する細い流路に沿って木立が続く状況を想像させる (図Ⅲ－51)。河道Bについては東側の河岸が上位の河道の侵蝕で失われ、西側の河岸は未調査のため不明であるものの、河道中位で多量に出土する木材が河道Aのような河畔の樹木から供給されていたことは想像できる。一方河道A・Bの上部を覆う泥炭ないし腐植泥層では堆積された河道の中央付近に放射状に根を張った株が認められるようになり (図Ⅲ－53)、木材は河道中位よりむしろ減少して、株の周囲に倒れた樹幹の残骸らしいものが中心となる。この泥炭・腐植泥質の堆積物は広く河道外にも形成され、縄文後期後半遺物の包含層を覆って発達している。

Ⅴ-4層の堆積後、恐らく縄文時代後期に入ってからキウス川による谷の下刻傾向が強まり、Ⅴ-5層を中心とする縄文前～中期の堆積物からなる氾濫原が段丘化したであろう。大まかにはこれが段丘面Ⅲの起源と考えられる。段丘面上に形成された炭化物集中KC－28の炭化材片によって3480±90y.B.P.(KSU－2440、Ⅵ章1節) の^{14}C年代が測定されている。Ⅴ-3層の河道Bとしたものは恐らくこの下刻で形成されたキウス川本流の河道であり、その幅が非常に広いのは新たな氾濫原を含んでいるためとみられる。また最奥部で狭く浅くなる河道Aはこの新たな氾濫原から段丘を開析して入り込んだ支谷とみることができるであろう。後期の後半に至って再び谷の埋積が進行し始め、各河道は砂と有機質堆積物の互層を形成しながら埋積されて行く。この過程の当初は河道に沿った段丘面Ⅲ上に森林が成立しており、炭化物集中などの遺構を形成する人間の活動も見られたが、埋積が進行して段丘面Ⅲ付近まで恒常的に地下水位が上昇するようになると森林は消失してその遺体による泥炭・腐植泥層が形成され、砂礫層の伏在によって周囲よりむしろ排水良好となった旧河道上に樹木が生育するようになった (図Ⅲ－53)。このような埋積の進行と水位の上昇にはおそらく下流の馬追沼・長都沼などの水位の変動が関係しているのではないかと思われる。この後、Ⅴ-2/3層の記述で触れたように後期末～晩期前半の下刻が起こるのであろう。

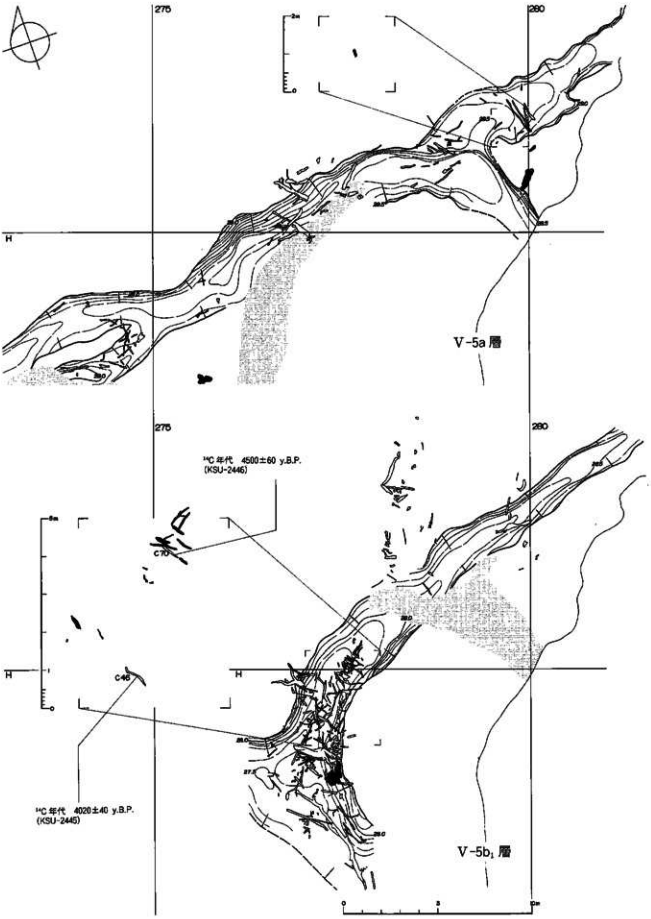
d. Ⅴ-5層 (図Ⅲ－54～57)

Ⅴ-5層の調査は時間的な制約から不徹底な点が多いが、河道についてある程度把握できたⅤ-5a層・Ⅴ-5b1層の状況に簡単に触れておきたい。

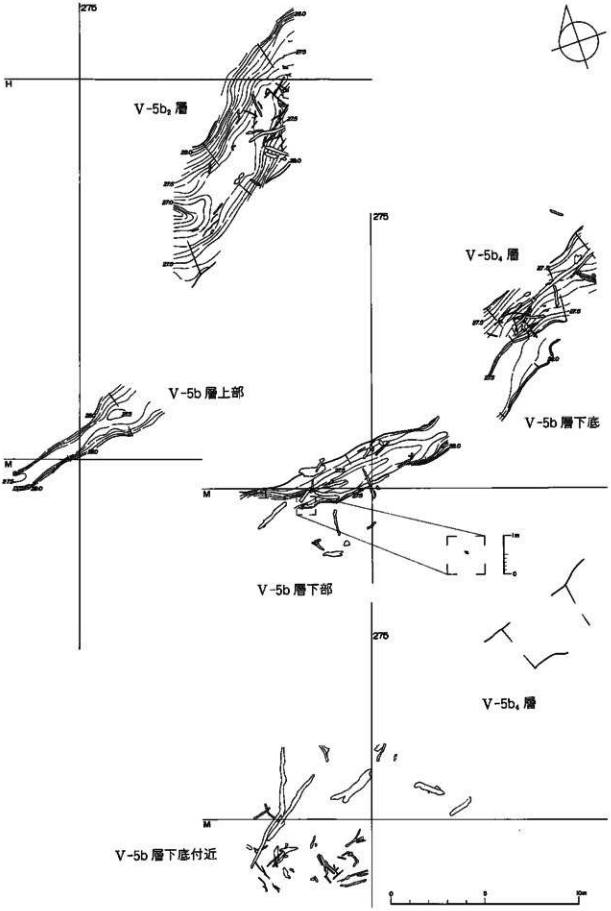
Ⅴ-5a層の河道は段丘崖の前縁に沿ってほぼ直線的に形成され、これに氾濫原の中央部を蛇行する河道がF－278区付近で合流しているものとみられる。河道内の堆積物は砂が優勢で (図Ⅲ－4)、木材の出土は比較的少なく、長軸が流れの方向に平行する傾向がある。段丘崖裾の河道のうち合流点より上流では泥炭質ないし腐植泥質の堆積物の中に河道に直交するように木材が出土しているがやはり量は少ない。河岸に株が見られることもない。人工遺物は僅かで、河床に近い位置から中期後半～後期前半の縄文土器が出土している。

Ⅴ-5b層以下はLライン以北・276ライン以西の調査を制受せざるを得なかったが、Ⅴ-5b1層ではやはり氾濫原中央部を蛇行する河道と段丘崖の前縁を直線的に走る河道とが合流している状況が窺われる。合流点に近い段丘崖裾の河道内で木材が多量に出土しており、特にその比較的上部のやや泥炭～腐植泥質の堆積物の中からは籠状の編物や焼け材の集中が検出された (図Ⅲ－57)。これには縄文時代中期後半のⅢ群b類土器が少量伴い、またこれらに伴出した木材による年代測定結果は、かなり幅があるものの (図Ⅲ－54、Ⅵ章1節) 概ね従来知られている縄文時代中期の^{14}C年代に符合しているとみることができる。

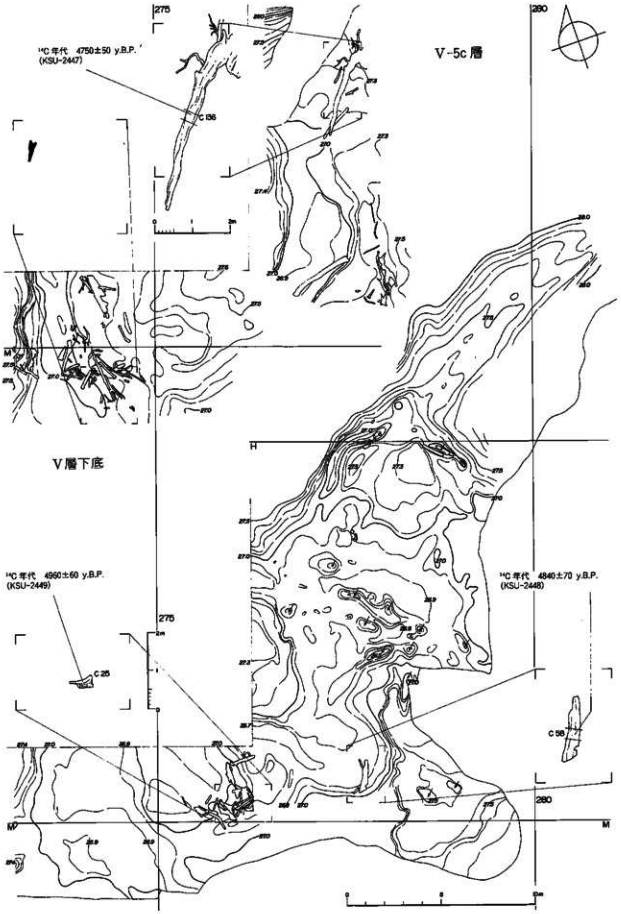
以下さらに断片的に確認される河道そのものや河道の範囲を反映する木材の出土状況を通じて、より下層の氾濫原の状態を部分的に窺うことができる (図Ⅲ－55・56)。例えばⅤ-5b1層 (図Ⅲ－55) やⅤ-5c層 (図Ⅲ－56) では蛇行する河道やそのポイントバー堆積物中の木材と思われるものが認められる。



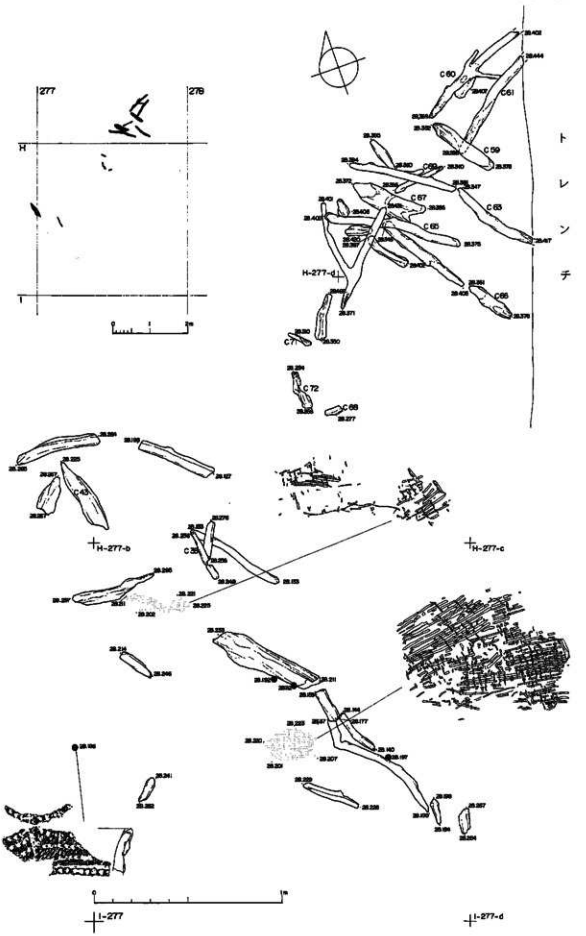
図Ⅲ－54　Ⅴ－5層の河道(1)



図Ⅲ－55　Ⅴ－5層の河道(2)



図Ⅲ－56　Ⅴ－5層の河道(3)



図Ⅲ－57　Ⅴ－5層木製品・焼け材出土状況図

しかしⅤ-5b1層の例を除くと、Ⅴ-5層を通じて人工遺物や焼け材の出土はかなり稀であり(図Ⅲ－54～56)、層中の炭化物集中と関連を示す様子もない。少なくとも今年度の報告範囲ではⅤ-5層の形成された時期に氾濫原中の流路をめぐって盛んな生業活動がおこなわれていたとは考えにくいであろう。

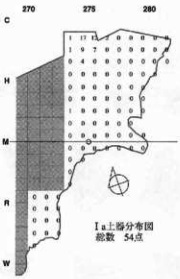
6．遺物

(1) 土器

Ⅰ群a類土器（図Ⅲ－59－1～8・図版Ⅲ－20）

上位の段丘面を中心に53点が出土しており、旧河道では見られない。以下の特徴を備え一つのグループを形成するものと考えられる。器形は深鉢形で規模には大小が見られる。口縁は平縁で、口唇の断面が角形・円形・表面側が円く内面側で内側に張り出すものなどがある。文様は無文のものが多く僅かに沈線の施されるものも見られる。これ以外では表裏に条痕文様のもの（以下「条痕文様」とする）が認められる場合も多い。LH-3の床面から同じタイプの復元土器が出土しており、これらから主に十勝地方で確認されている所謂「暁式土器」に相当すると考えられる。

1は口唇の断面が角形で内面側にやや張り出しが見られる。表面側の口唇直下には平行して走る微隆起線状のものが備わる。2は口唇の断面が表面側で円く内面側が張り出している。3は器壁の薄い小型の土器で口唇の断面は円である。4・6は表面に先端の円い道具で施文した2本の沈線が入る。5・7・8は条痕文様のものが見られるもので、5は小型の土器の底部近くの胴部で、表面に縦方向の条痕文様が見られ、内面には炭化物の薄い付着が認められる。7は施文道具に先端がやや幅広なものを使用しており、それで表裏に施文している。8も表裏に施されているがこれについては条の凹が角を有しており貝殻条痕文の可能性が考えられる。

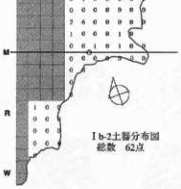


Ⅰ群b類土器（図Ⅲ－59－9～28・図版Ⅲ－20）

b-2・3類は旧河道のほぼ河床付近に限って見つかっており、各分布図から旧河道の流路が復元可能である。これらは上流からの流入であろう。b-4類は段丘上と流路の復元可能な旧河道から出土しているが、後者は二本の撚糸様の縄文を使った施文がなされているため、やや時代が新しいと考えられる。なお、b-1類が段丘上の遺構覆土から出土している。

b-2類（9～13）

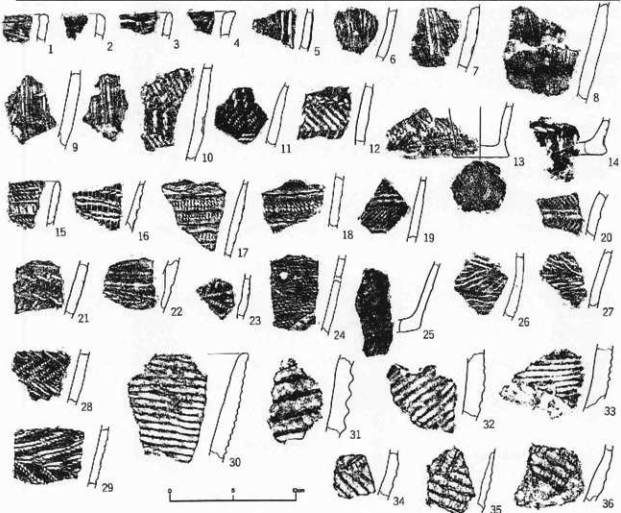
62点が出土しており、これらはコッタロ式土器に相当する。すべて深鉢形を呈すると思われる。9～11が胴部片、12・13が底部である。9・10は縄文と短縄文が、11には縄文が施されている。12は底部の下



図Ⅲ－58　Ⅰ群土器分布図

表Ⅲ－10　包含層上器層別一覧　　※河床直上の遺物数はⅤ－５層の内数である。

	Ⅰa	Ⅰb-2	Ⅰb-3	Ⅰb-4	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱb-2	Ⅱb-3	Ⅱ	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	Ⅳ	Ⅴa	Ⅴc	埋	縄紋系	不明	計
Ⅰ層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	9	0	10
Ⅱ層	1	3	0	1	0	0	2	0	0	1	0	17	20	10	0	0	1,701	0	1	9	1,766
Ⅱ-1層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	424	0	0	1	425
Ⅱ-2層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
Ⅱ-3層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	187	0	0	0	187
Ⅱ-4層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1	0	0	292	0	0	5	302
Ⅱ-5層	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	2	0	0	398	0	1	0	406
Ⅱ-6層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	36	0	0	0	36
Ⅳ層	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	4	2	0	0	570	0	0	0	589
Ⅴ層	32	31	0	1	1	1	2	6	5	1	1	170	57	14	1	0	3,351	0	0	9	3,683
Ⅴ-1層	0	1	0	0	0	0	0	0	4	4	0	12	124	47	0	2	1,057	0	0	4	1,251
Ⅴ-2層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	108	0	0	0	110
Ⅴ-3層	0	2	2	0	0	0	5	6	1	3	0	35	316	44	1	0	24	0	0	1	440
Ⅴ-3c層	0	2	6	2	0	0	2	0	24	1	0	9	217	133	0	0	46	0	0	3	445
Ⅴ-4層	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7
Ⅴ-5層	0	2	16	8	0	7	6	9	21	0	2	13	20	2	0	0	2	0	0	0	108
Ⅴ-5a層	0	6	2	0	0	2	6	35	0	0	3	34	4	0	0	0	2	0	0	1	95
Ⅴ-5b層	0	0	1	0	0	0	0	5	7	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	15
Ⅴ-5b-1層	0	0	0	0	0	0	2	6	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	10
Ⅴ-5b-2層	0	0	10	1	0	4	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	17
Ⅴ-5b-4層	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
Ⅴ-5c層	0	1	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
Ⅴ-5d層	0	0	0	0	0	1	0	0	8	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
(河床直上)	(0)	(1)	(13)	(3)	(0)	(5)	(0)	(0)	(0)	(0)	(2)	(2)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(28)
包層	19	8	0	0	0	0	0	1	0	0	0	16	0	0	0	0	55	0	0	0	99
埋層	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5
盛土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	8	4	1	0	15
表採	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	2	4	0	10
横穴	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	5	2	0	0	0	38	0	4	0	53
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	21	0	0	0	23
計	54	63	41	13	1	16	33	74	66	9	7	330	771	265	2	2	8,321	6	20	34	10,128



図Ⅲ－59　Ⅰ・Ⅱ群土器

端がやや張り出した小型の底部で、結束の羽状縄文とその下位に細目の組紐を使った押圧が施されている。13も小型の底部で張り出した下端の上位には縦と横の短縄文が施文されている。

b-3類（14～24）

41点が出土しており、これらは中茶路式土器に相当する。22以外は深鉢形土器と考えられる。14は口縁部で、口唇の断面が尖り器壁は薄い。表面には微隆起線による区画に短縄文を施している。15～23は胴部の破片である。15は微隆起線を張り付けてから絡条体圧痕文を施文している。16・17は微隆起線と短縄文が施文されているが、前者は横走する微隆起線にほぼ直線なものと蛇行するものが見られ、そのあいだに短縄文が密に施されている。18は微隆起線と斜行縄文、19は微隆起線を境とする羽状縄文、20は微隆起線と綾絡文が施されている。21は上位に撚糸文状の羽状縄文、下位に細目の円軸を使用した絡条体圧痕文もしくは魚骨圧痕文が施されている。下位が魚骨文の場合は東釧路Ⅳ式土器としたい。22は細目の円軸を使用した絡条体圧痕文が横と斜めに施したもので小型の鉢形土器と思われる。23は補修孔のあるもので撚糸文状の羽状縄文が施されている。24の底部は磨耗が著しいが、表面にはかすかに微隆起線がうかがえる。

b-4類（25～28）

13点が出土しており、これらは東釧路Ⅳ式土器に相当する。すべて深鉢形で25～28は撚糸文様の縄文が羽状に施文されるもの、28は二本の撚糸様の縄文を羽状に施している。25の胎土には角閃石が多数含まれている。

Ⅱ群a類土器（図Ⅲ－59－29～35、図版Ⅲ－20）

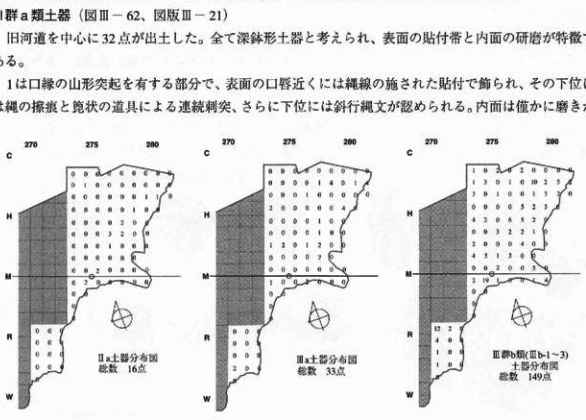
旧河道の河床付近を中心に小破片が16点が出土している。これらは綱文式土器に相当する。

29は口縁、30～35は胴部である。29・31・32は条が比較的細い。30は条の太い縄文が施文されるもので、深く施された条に沿って上からなぞっている。胎土には繊維の混入が認められる。33～35は太い条の羽状縄文が施文されるもので、器壁は本類の中では比較的薄く繊維の混入も少ない。

Ⅲ群a類土器（図Ⅲ－62、図版Ⅲ－21）

旧河道を中心に32点が出土した。全て深鉢形土器と考えられ、表面の貼付帯と内面の研磨が特徴である。

1は口縁の山形突起を有する部分で、表面の口唇近くには縄線の施された貼付で飾られ、その下位には縄の擦痕と篦状の道具による連続刺突、さらに下位には斜行縄文が認められる。内面は僅かに磨きが



図Ⅲ－60　Ⅱ群a類・Ⅲ群土器分布図

施されている。2は縄文の施された口縁部である。3～5は同一個体で表面には貼付と羽状縄文が施される。6は大きさの異なるボール状の粘土塊を口唇に並べたもので、これらには縄の圧痕が施されている。表面の施文は結束の羽状縄文である。7・8は貼付の施された同一個体で、7には貼付に沿って円形の刺突が施されている。

Ⅲ群ｂ類土器（図Ⅲ－63、図版Ⅲ－21）

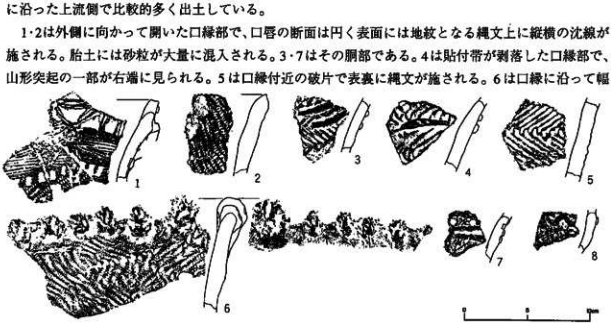
段丘上と旧河道から149点が出土した。天神山式（1～9）・柏木川式土器（10～19）に相当するもので、後者は旧河道で出土した「カゴ状繊維製品」に伴う。

1・7は円い貼り付けのある口縁の山形突起部で、1の口唇上には縄の刻み、表面には半裁竹管による沈線が施されている。2・3も口縁で貼付帯には半裁竹管による沈線が施されている。4～6は刻みの入る貼付帯と縄文施された胴部である。4の縄文は結束の羽状縄文である。8はフジツボ状の貼り付けと半裁竹管による刻みの入った貼付帯のある口縁付近の胴部である。表面には半裁竹管による沈線、竹管による刺突文、縄文などが施されている。9は表面に半裁竹管による沈線と縄文が施された胴部の破片である。10・11・13・14は貼付帯のある口縁部である。10の貼付帯には指先もしくは爪様の刻み、口唇上には縄による刻みが施されている。10・13の表面と内面の口縁付近には縄文が施されている。11の口唇と貼付帯には植物茎の断面のようなもので刺突している。12には口縁と平行する二本の縄線文が施されている。13は半裁した植物茎の断面による刺突が、口唇、貼付帯、口縁に施されている。14の貼付帯は断面が△でその上に篦状の道具で斜めの刻みを施している。15・16は断面が円い口唇に篦状の道具で刻みをいれたもので、表面には縄文が施されている。15の口縁には半裁した植物茎の断面で斜め方向からの刺突列が施されている。17は磨滅の著しい口縁部で、口唇には串状の道具による刺突列が施される。18・19は地紋の縄文の上から沈線を施したものである。20は結束の羽状縄文が施された胴部片である。21は底部の破片で、下端には刺突文、内の底面には明瞭な指の押圧が残されている。22は底面にも縄文が施された底部の破片で、胎土には多くの砂粒が混入されている。23は下端がやや張り出した底部の破片である。

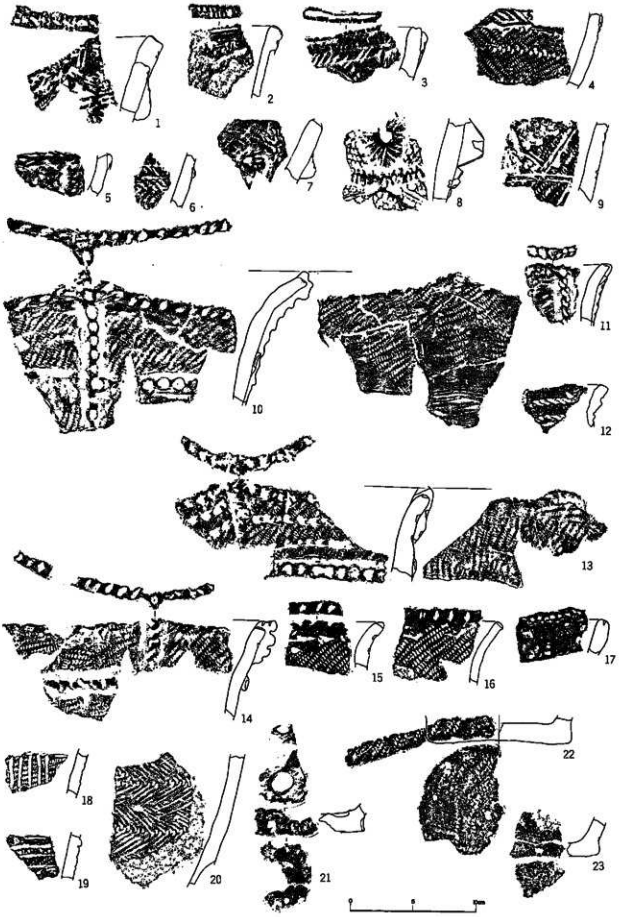
Ⅳ群ａ類土器（図Ⅲ－65－1～12、図版Ⅲ－22）

段丘上と旧河道から331点が出土している。余市式、仮称「手稲砂山式」土器に相当するものが主体で、全て深鉢形土器の破片である。段丘上では余市式の住居跡LH-6周辺が多く、旧河道では段丘縁辺に沿った上流側で比較的多く出土している。

1・2は外側に向かって開いた口縁部で、口唇の断面は円く表面には地紋となる縄文上に縦横の沈線が施される。胎土には砂粒が大量に混入される。3・7はその胴部である。4は貼付帯が剥落した口縁部で、山形突起の一部が右端に見られる。5は口縁付近の破片で表裏に縄文が施される。6は口縁に沿って幅



図Ⅲ－61　Ⅲ群ａ類土器



図Ⅲ－62　Ⅲ群b類土器

の狭い貼付帯が付けられた小型の器形のものである。8の縄文は多条の原体によるものである。9・10は底部の破片である。下端がやや張り出し、内面には炭化物が付着する。11・12は不明瞭な縄文の施される表面に沈線が施されている。

Ⅳ群ｂ類土器（図Ⅲ－65－13～24・26～37、Ⅲ－66－38～44、図版Ⅲ－22・23、Ⅲ－32）

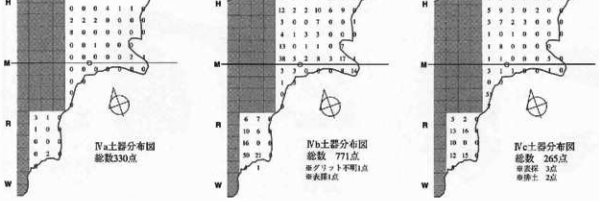
段丘上と旧河道から772点が出土している。主体は低位段丘面に流れていた河道内とその周辺で、ウサクマイC式、手稲式、鉈調式に相当する土器が出土している。これらの遺物が出土するⅤ－3層は比較的安定した時期が継続したと考えられ、火を使用した痕跡(KC-19)等も認められることから「作業場」であったと考えられる。

13は口縁に四カ所の突起部を有する小型の深鉢形土器である。断面が角形の口唇には表面と同じ施文がなされている。表面の文様は条の細い斜行縄文で口縁から胴部中程の膨らみ周辺まで全面に施され、それ以下では疎らになる。器壁は厚く、胎土に砂粒を含む。14・15は口縁部で、14は表裏の面に節の不明瞭な縄文が施されており、断面角形の口唇には半裁竹管状の道具による刺突が施されている。15は同じ様な縄文が表面と口唇に施されている。16は細い沈線の施される口縁部で地紋には縄文が施されている。17・19は太い沈線が施されるもので、17の口縁には連続する三角を描いた文様帯を有する。その下位の膨んだ部分には磨消文と縄文が施される。18・20～24は縄文を地紋とする面に沈線文を施したものである。18・20は波状を呈する口縁部である。21の沈線で囲われた内側には竹管状の道具で刺突を施している。26～32は縄文と磨消が施される口縁である。32の縄文帯には交差する沈線が施されている。33は深鉢状の器形を呈する小型の無文土器である。34～37は縄文の施された口縁部である。38・39は口唇に刻みのあるもので、39の胴部には弧を描く沈線が施されている。40・41は地紋に羽状縄文が施される口縁と胴部である。42～43は底部である。43・44の底面は磨消が顕著である。

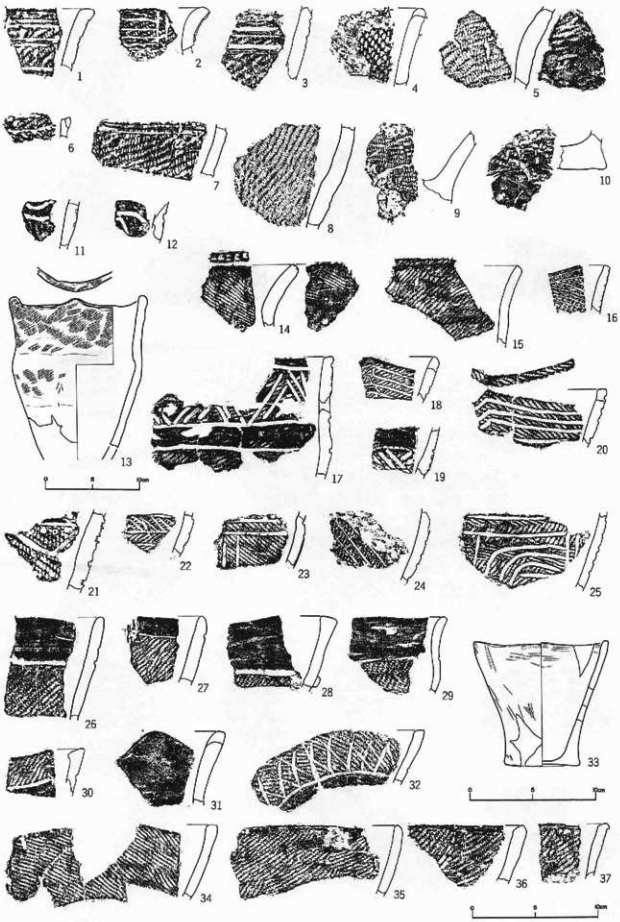
Ⅳ群ｃ類土器（図Ⅲ－65－25、Ⅲ－66－45～54、図版Ⅲ－23・24、Ⅲ－32）

旧河道を中心に265点が出土しており、これらは壹林式に相当する土器である。Ⅳ群ｂ類と同様に低位段丘のⅤ－3層からのものが多い。

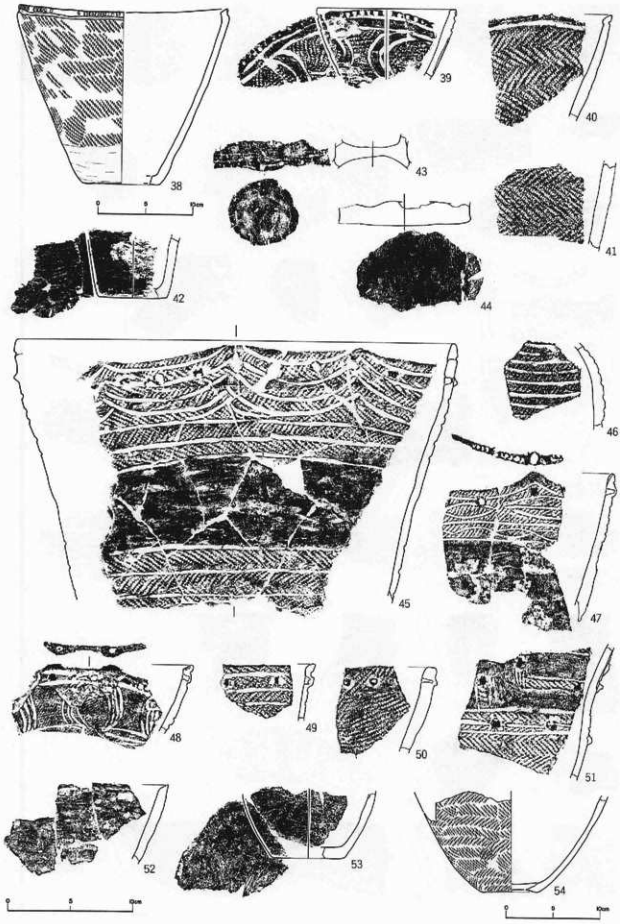
45・47～50は内面からの突瘤が施される口縁部である。器形は48が鉢形、それ以外は深鉢形である。46は壺形土器と考えられるもので縄文を地紋とする面に平行沈線を施している。51は深鉢の胴部で、貼付された瘤の先端が潰されている。52は表面が研磨された無文の口縁で、口唇の断面は切り出し形である。53・54は底部である。53は無文、54は羽状縄文が施され小径の底面は上げ底気味である。



図Ⅲ－63　Ⅳ群土器分布図



図Ⅲ－64　Ⅳ群ａ類土器・ｂ類土器（1）



図Ⅲ－65　Ⅳ群ｂ類土器（2）・ｃ類土器

Ⅴ群a類土器（図Ⅲ－69）

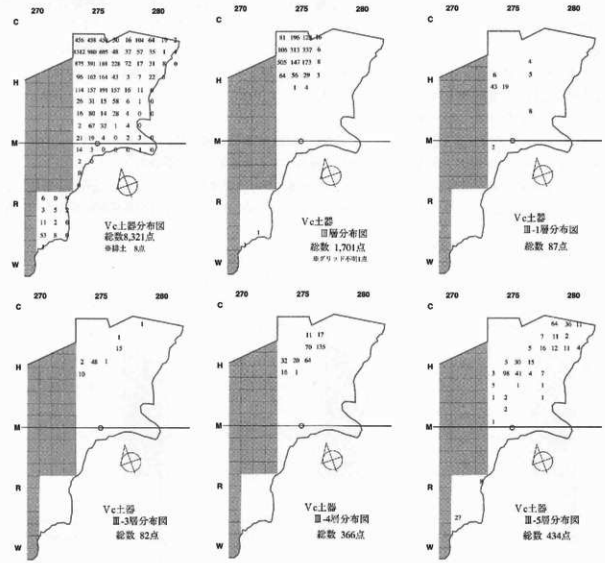
旧河道部から磨滅した小片2点が出土した。不明瞭ながら浅鉢形土器の胴部と考えられる破片には横走する文様帯に爪先もしくは半裁竹管による連続刺突文が認められる。

Ⅴ群c類土器（図Ⅲ－69～77、図版Ⅲ－24～33）

今回の調査で最も多く出土した土器である。土器総数の約82％を占める8,321点が高位段丘面と旧河道・低位段丘面で出土している。Ⅳ層の樽前c降下火山灰を挟んだ上下層のⅢ～Ⅴ層から出土しており、低位段丘面・旧河道では河川堆積物を含む水性の営力で更に数枚の土層に分けられ、それらからも本類は出土している。タンネトウL式、幣舞式などに相当するものを主体に出土しており、これらの時期は供伴する大洞系の土器から縄文時代晩期中葉～後葉と考えられる。これらには、本来的にはⅤ群b類とされる土器群も含まれているが、今回の調査で各時期の大洞系の土器との明瞭な供伴関係は得られなかったため、すべて本類に含めて報告する。

大洞系の土器もしくはその影響を受けるもの（図Ⅲ－69、図版Ⅲ－25・32）

1～4・6は胎土、焼成、文様・器形の意匠などの点で他の大多数の土器との差異が大きい。1は大洞A式の搬入品、2～4・6は道内で作られた大洞C2式相当の搬入品、5は現地もしくはこの周辺で模倣作成されたものと考えられる。



図Ⅲ－66　Ⅴ群c類土器分布図（1）

Ⅲ層出土のもの（3・4）

3・4は高位の段丘面から出土した鉢形土器の口縁部で同一個体である。二つの低い凸部が認められる口唇の断面は先端に円みを帯びた先細りのもので、器壁は薄い。地文に縄文を施した口縁の文様帯は、数条の沈線を主体に小さな突起列と入組文状のものを加えたものである。内面の口唇直下には一条の沈線が施されている。

Ⅴ層出土のもの（1・2・5・6）

1・2・5は高位段丘面、6は旧河道部のⅤ－1層から出土した。1は近接する4つのグリッドから破片が散乱して出土した浅鉢形土器で、底部に近い残存部分から台付と推定されるものである。口縁には羊歯状の突起が着装され口唇上には深めの沈線文が巡っている。表裏面に研磨を施した無地の表面には工字文が認められる。一部に赤色や黒色の漆と考えられる痕跡が認められることから、同様の彩色が全面になされていたと考えられる。2も3つのグリッドに散乱して出土した深鉢形土器である。口唇断面は円みのある角形で、口縁の下位で浅く括れて窄まっており、その肩部分、口唇、口縁直下には二種類の突起からなる列が巡っている。突起は単独で山形を呈するものと二つの瘤からなるものがあり、これらが交互に着装されている。口縁の無文部分は幅の広い浅めの沈線数条を施したもので、胴部には縄文が施される。底部を含む周辺部分は推定復元である。5は浅鉢形土器の口縁から底部の破片である。外側にやや張り出した口唇の上面と直下の内面には沈線が施される。表面には揺らぎのある不明瞭な沈線文と半裁竹管状の施文具による刺突列とが横冠する文様が施されている。器壁は厚く胎土はタンネトウL式などの所謂「在地の土器」のものと類似する。6は壺形の土器である。肥厚した口縁の内面には1～2本の沈線が施され、肩部を中心に連繋入り組み文と沈線が施され、その他は研磨が施されている。

在地系の土器（図Ⅲ－70～77、図版Ⅲ－26～33）

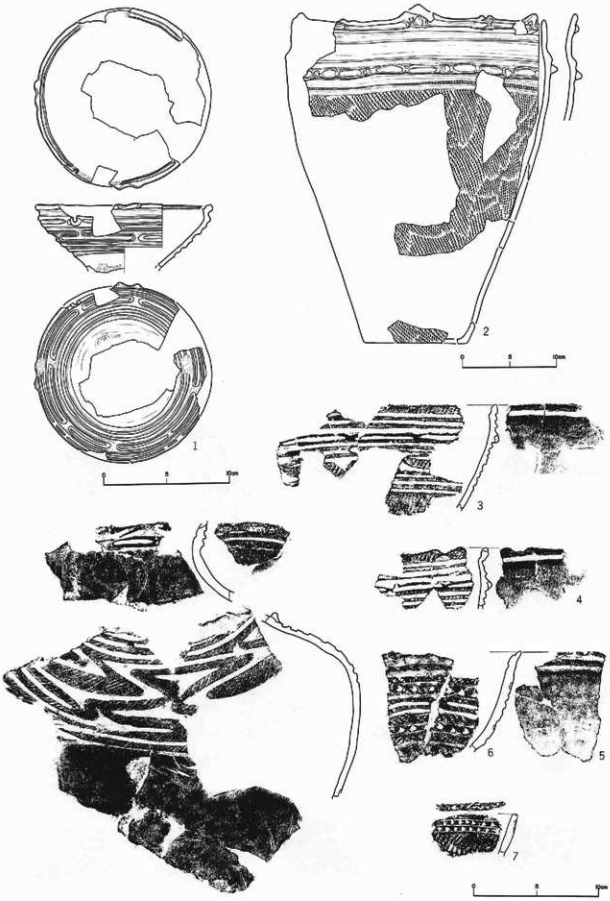
Ⅲ層出土のもの（図Ⅲ－70－1～4）

1,701点が高位の段丘面上から出土した。細片での出土が多数を占め接合率は極めて低い。また、Ⅳ層（Ta-c）を挟んだ下位のⅤ層で出土した個体と接合するものも多く、遺構の掘り上げ土など人為的な要因で下位層のものが上がって来ている可能性がある。器形は深鉢形、浅鉢形などが見られ、総じて小型の部類が多い。文様は縄文を地文に沈線が施文されるものや口唇上に縄線文や各種刻みが施されるものが多い。

深鉢形土器（3）

3は揺らぎの多い不明瞭な沈線で施文した口縁付近の胴部である。

図Ⅲ－67　Ⅴ群c類土器分布図（2）



図Ⅲ－68　Ⅴ群a類土器・c類土器（1）

浅鉢形土器（1・2・4）

1は口唇に二つが対になる突起と縄文が施されるもので、口唇の表側の角に指様の施文具による刻み見られる。2・4は口唇上に一段の縄が押圧されるもので、表面には円弧文が施されている。4は片口の器形で底部間際に半裁竹管の刺突が並ぶ。

Ⅲ－1～3層出土のもの（5～7）

低位の段丘面のⅢ－1層で87点、Ⅲ－3層で82点が出土している。細片でほとんど接合しない。

深鉢形土器（5）

口縁に平行沈線が施されるもので、断面が切り出し形の口唇上にも縄文が施される。口唇の刻みは真横からのものである。

浅鉢形土器（6・7）

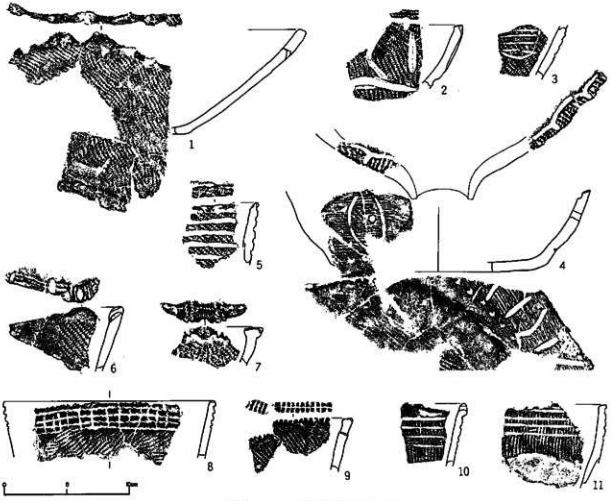
6・7は突起部を持つ口縁部で口唇には一段の縄が押捺される。6には更に棒状の施文具による刻みが施されている。

Ⅲ－4層出土のもの（8～11）

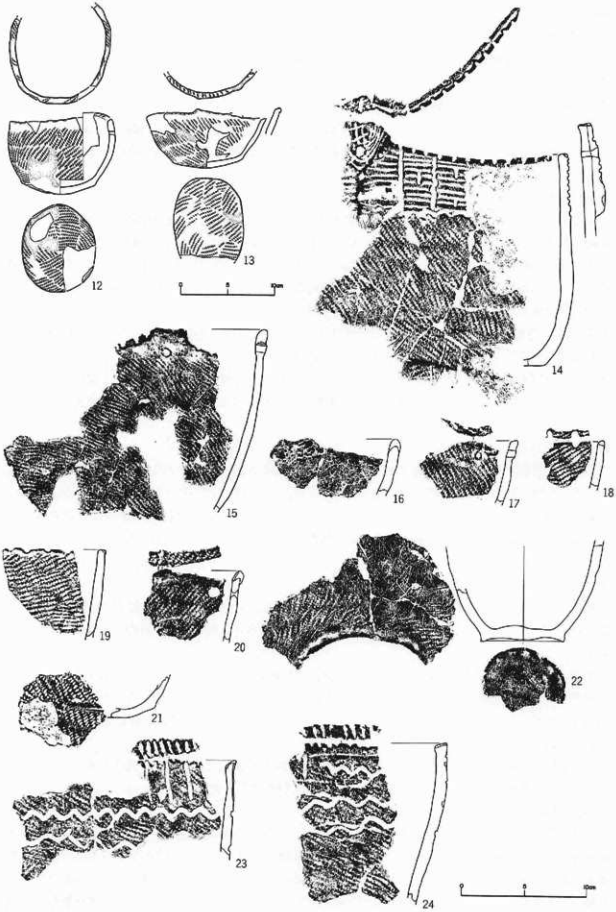
高位段丘の肩から斜面下周辺にかけて存在する堆積層中から366点が出土している。何らかの原因で段丘上から流れ落ちたと考えられる。

深鉢形土器（8・10・11）

8は口縁に縄線による施文がなされるもので、断面が角形の口唇には表面に施されたものと同じ縄文が施されている。10・11は同じ固体の平行沈線が施される口縁部で、口唇には二つが対になる突起が認



図Ⅲ－69　Ⅴ群ｃ類土器（2）



図Ⅲ－70　Ⅴ群c類土器（3）

められる。

浅鉢形土器（9）

口縁に付された突起部部分で、下位には対になる貫通孔が認められる。口唇上に押捺される縄は一段のものである。

Ⅲ－５層出土のもの（12～24）

晩期の旧河道を含む低位の段丘面で434点が出土している。旧河道内のものは接合率も比較的良好で、これらは廃棄された可能性が考えられ。また、旧河道からは土器ともに木製品や焼け材なども出土している。

深鉢形土器（14・15・18・19・22～24）

14は縄の圧痕と貫通孔が施された大型の突起を有するもので、俯瞰した器形は楕円形である。口唇には縄を押圧してから棒状の施文具で斜めの刻みを施している。口縁の文様帯は平行して施された縄線の上から僅かに蛇行する沈線を加えて格子目状にしたものである。15・18・19は棒状の施文具で口唇に刻みをいれた口縁部である。15は二つが対になる突起部を有し、その下位には貫通孔が穿たれている。口唇の刻みは斜めもしくは真上から直行して押しつけるもので、これも俯瞰した形が楕円になると考えられる。19に施文されている横位の縄文は今回出土したものの中では少数の部類にはいる。22はやや上げ底気味の底部である。内面には炭化物の付着が顕著である。23・24は同一個体で、断面が切り出し形の口唇には縄を強く押圧した深い刻みが施されている。口縁には同じ縄による縄線文と沈線文が施されており、後者は横方向に描かれた蛇行沈線文と縄線文との格子目を意識した様な縦の沈線文とが見られる。

鉢または浅鉢形土器（12・13・16・17・20・21）

12・13は小型の土器で、俯瞰した器形はいずれも楕円である。12は平縁の口唇上にも縄文が施されており、長軸方向の一方の器壁に貫通孔を穿っている。13の口唇には小振りな突起が認められ、口唇には縄の押圧が施される。16は無文の口縁部で口唇には二つが対となる突起が認められる。17の縄文は三段複節の原体による。20は突起部を有する口縁部で、表面には茶褐色の物質が付着しており、彩色されている可能性がある。

Ⅴ層出土のもの（図Ⅲ－72～76）

高位段丘のⅤ層で3,351点、低位段丘のⅤ－１層で1,057点、Ⅴ－２～5a層で182点が出土した。Ⅴ－２～5a層で出土したものは全て河道からの出土であり、これらは水流の作用で遺物が下層に沈下したと考えられる。

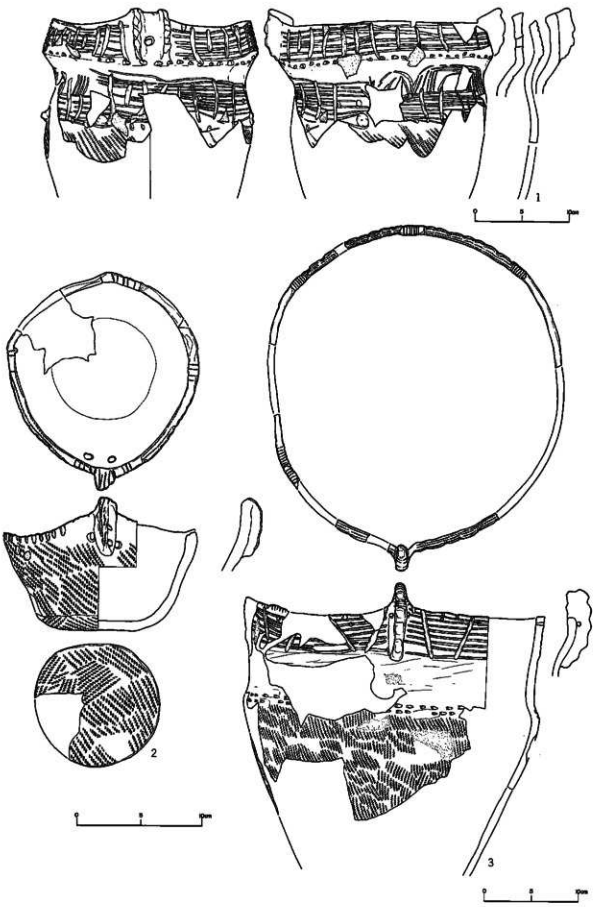
高位の段丘では同じ時期の住居、土壙、焼土が比較的密集して検出されており、土器はこれらの周囲で出土する。低位段丘のⅤ－１層では焼土や炭化物集中が点在しているが、これらと土器との関連は石器類ほど明瞭ではない。旧河道内のものについては流れ込み様のものが多い印象を受けた。

深鉢形土器（1・3～27）

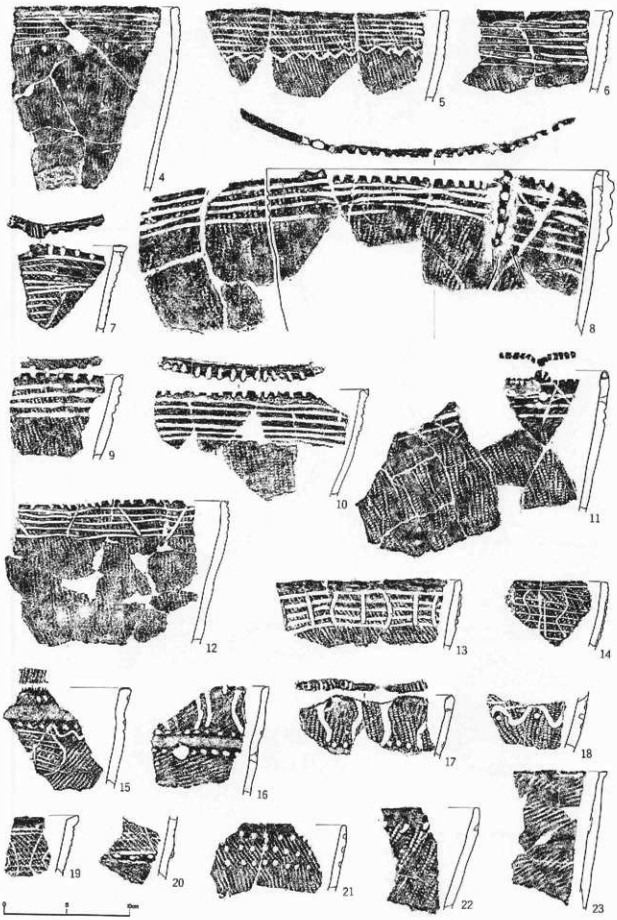
3を最大に口径が20cm前後のものが主体と考えられる。文様は地文に条が立ち気味の縄文を施し口縁部には文様帯が作られる。以下、口縁に施文される文様などから便宜的にa）～e）に分けた。

a）沈線が施文されるもの（1・3～20）

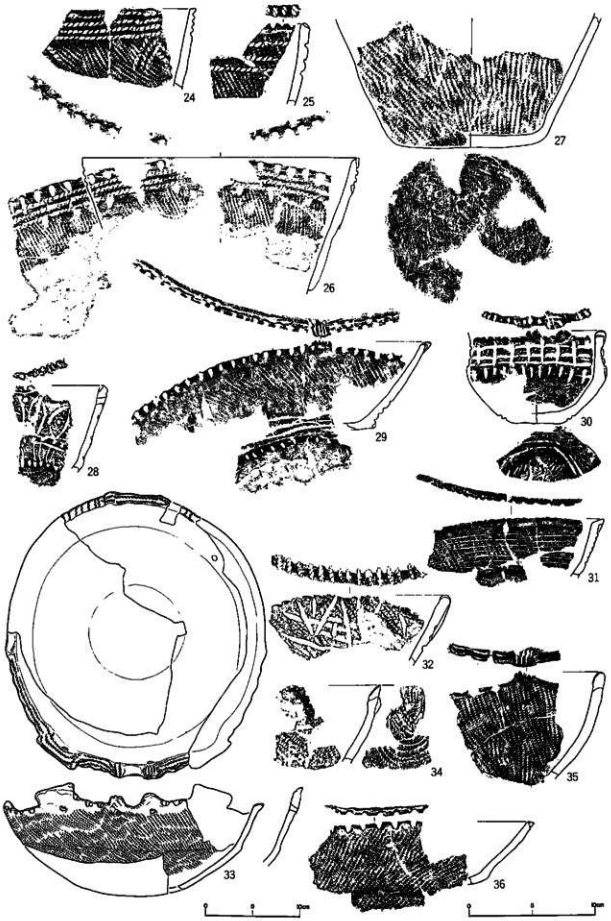
数本の雑な平行沈線が施されるもの（1・3～14）と、所謂「円弧文」を含む縦横の直線・曲線が施されるもの（1・3・11～20）とが認められる。特に後者は口縁のやや下位に刺突列を伴う窟んだ無文帯を有する傾向が強い。これらには更に貼付帯の付されるもの（1・3・8）、口唇に棒状の施文具などで刻みが施されるもの（3・7・10・12）や口唇上に縄が押圧されるもの（3・7・11・15・17）、半裁竹管状の施



図Ⅲ－71　Ⅴ群c類土器（4）



図Ⅲ－72　Ⅴ群ｃ類土器（5）



図Ⅲ－73　Ⅴ群c類土器（6）

文具で刺突文が施されるもの（1・3・4・15～20）などが組合わさる。

1は口縁に縦の貼付帯が見られるもので、無文帯の上下に円弧文が施される。下位の円弧文下辺には豆粒大の貼り付けが巡る。3は縦長の貼り付けが単独で付される比較的大型の深鉢である。口唇に設けられた突起部分と口縁の貼付帯には縄の圧痕が施され、口唇の直下には外からの貫通孔と刺突とが巡る。5の沈線下辺には蛇行する沈線が施される。7・8の口唇に見られる突起の立ち上がりは右側が急激に立ち上がり左は緩やかである。9の口唇上面には胴部と同じ縄文が施される。14は口縁のカーブから片口の器形と推定される。15は口唇の直下に刺突文を伴う無文帯が位置しており、その下位に雑な沈線による円弧文と蛇行沈線とが施される。18～20は口縁と平行して施文された縄線が加わっている。19・20は同一個体である。

b) 刺突が施文されるもの（21・22）

刺突に使われる施文具は竹管状のものとそれを半分にしたと考えられるもの（半裁竹管）とがあり、前者は器面に対して真っ直ぐに深く施文し後者は斜めにやや浅く施文する。刺突文だけが単独で施されるものは少なく、多くは上記の沈線との組み合わせになる。21・22は口唇の断面が先の円い尖り気味のもので、21は沈線や縄線と同様の意匠で刺突列が施されている。施文具は切り口の雑な竹管もしくは胴部に施文した原体の縄端圧痕の可能性もある。22は半裁竹管状の施文具による左斜め下からの深い刺突が施されるもので内面には炭化物の付着が見られる。

c) 縄線が施文されるもの（24～26）

沈線と同様の意匠で施文され、深鉢形のものに施される類例が多い。これは、上記の「雑な平行沈線を使うもの」と同じ傾向である。24～26はいづれもしっかりと押捺された縄線で、24には斜めの縄線、25は口唇に縄による刻みが加わる。26に見られる口唇と縄線文下位の刺突は棒状の施文具による。

d) 縄文が施されるもの（23）

明確な深鉢は今回、23に限られる。外側に張り出した口唇の上面には縄文が施される。表面の縄文は条が横に近い斜めのものである。

e) 底部（27）

破片から推定して底面に円みを持つ不安定なものが多い。27は比較的平坦な部類のものである。

浅鉢形もしくは鉢形土器（28～43・45～53）

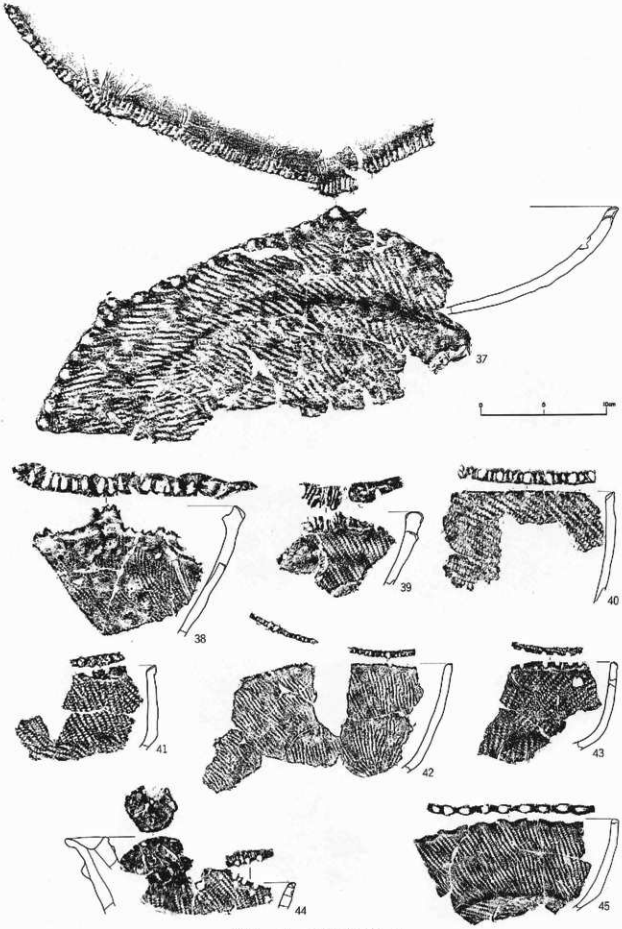
主体となるのは口径が20～30cm程のもので、これ以外では推定で40cmを越える大型のものや10cm前後の小型のものも見られる。俯瞰した形が楕円で、非対称的にデザインされた大小の突起の下位には貫通孔が見られる場合が多い。文様は地文に縄文を施した比較的単純なものがほとんどである。口唇上には縄線と棒状の施文具による刻みが施されるものも多い。以下、口縁に施文される文様などから便宜的にa）～c）に分けた。

a) 沈線が施文されるもの（28～32）

太く深い明瞭な沈線が施されるものと細く不明瞭な沈線が施されるものとがあり、前者はやや小型の器形に多く、後者は深鉢形土器の文様帯に施文される平行沈線に類似する。28はやや密な円弧文の施されるもの、29は底部に近い胴部に雑な平行沈線を施すもので、浅鉢形土器で平行沈線が施される場合この意匠が多く見られる。30は鉢形のもので口縁部文様帯には格子目文状に沈線が施される。28・30・32の口唇には縄を押捺した刻みが入る。

b) 口唇に施文されるもの（33～46）

口唇の上面に施文されるものと口唇の表側の角に施文されるものとが見られる。もしくはその両方が施される場合もある。上面には口唇に沿って長く施文されるものと口唇と直行するように施文されるもの

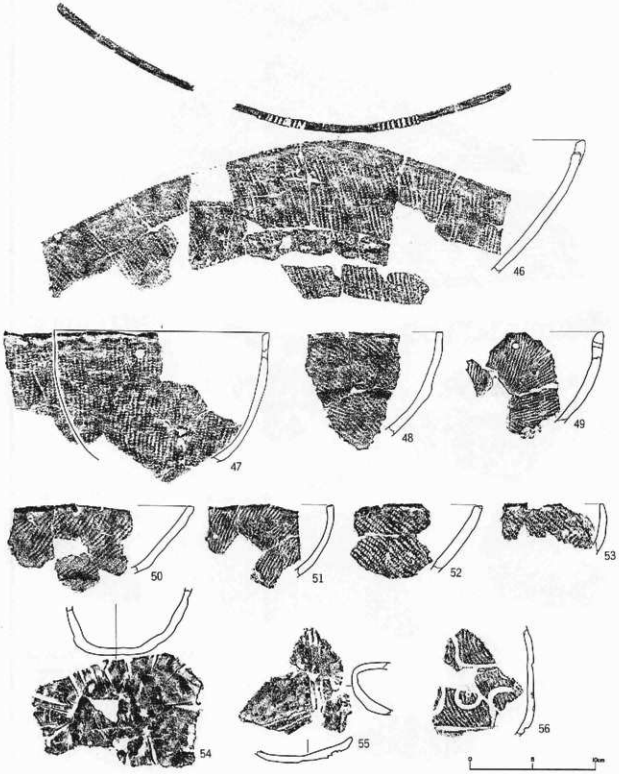


図Ⅲ－74　Ⅴ群c類土器（7）

とがあり、いずれも縄が使われることが多い（33~42・44・46）。これ以外では縄文が施されるもの（43）、指様の施文具による凹凸が施されるもの（45）などがある。表側の角に施文されるものはほとんどすべてが棒状の施文具によるものである。34は縄線が突起部下位の内面にも施されている。44は、注ぎ口に貼付が巡る注口土器の破片である。

c) 縄文が施されるもの（47～53）

平縁で小型の器形に多い。



図Ⅲ－75　Ⅴ群ｃ類土器（8）

特殊な器形の土器（54～56）

54・55は所謂「手づくね」的な不整形の器形で、54は無文、55は不明瞭な沈線が施される。56は沈線が施文されたもので、器形は異形の注口と考えられる。

(2) 石器

a. Ⅲ・Ⅳ層出土石器

石鏃（図Ⅲ78－1～19、図版Ⅲ－38）

1・2は無茎のもので、ともに基部は若干内湾する。3～19は有茎のものである。5・11は周辺部だけを加工したもので、主要剥裏面が残る。17は刃部に抉が入る。8・9は熱を受けている。石材はいずれも黒曜石である。

ドリル（図Ⅲ－78－20・21、図版Ⅲ－38）

20は片面加工の剥片に刺突部を作り出したもの。21はやや棒状の剥片の先端に加工をしたもの。石材はともに黒曜石である。

コンバージェント（図Ⅲ－78－22、図版Ⅲ－38）

薄い棒状の剥片の両側縁を加工して錐状にしたもの。石材は黒曜石である。

スクレイパー（図Ⅲ－78－23～41、図版Ⅲ－38）

23～28は円形または方形に近い剥片に刃をつけたもの、23・27・28は周辺のみの加工である。29～34・36～40は尖頭部を持つもので、縦長剥片の側縁に刃をつけている。35・39は内湾する側面をつくりだしたものである。41は横長の剥片に刃をつけたものである。石材は32・33が珪質頁岩、41が玄武岩で、あとはすべて黒曜石である。

くさび形石器（図Ⅲ－78－42、図版Ⅲ－38）

上端に加撃痕が、下端に階段状剥離が残る、石材は黒曜石。

Rフレイク（図Ⅲ－78－43・79－44～48、図版Ⅲ－38）

43は剥片の縁辺に抉りが2箇所あるもの。44・45は側縁が内湾し、先端部を持つもの。46～48は内湾する側縁を持つもので、スクレイパーとしての用途が考えられる。48は熱を受けている。石材はいずれも黒曜石である。

石核（図Ⅲ－79－49、図版Ⅲ－38）

両極打法による石核である、石材は黒曜石。

石斧（図Ⅲ－79－50、図版Ⅲ－38）

両端の欠けた石斧である。偏平な礫を利用したもので、研磨痕は顕著ではない。石材は緑色泥岩である。

たたき石（図Ⅲ－79－51、図版Ⅲ－38）

偏平な自然礫の4隅に使用痕のあるものである。石材は流紋岩。

すり石（図Ⅲ－79－52、図版Ⅲ－38）

自然礫の真ん中ほどに擦った痕のあるものである。石材は閃緑岩。

砥石（図Ⅲ－79－53、図版Ⅲ－38）

偏平な砂岩の中心に研いだ痕がはっきりのこるもの。

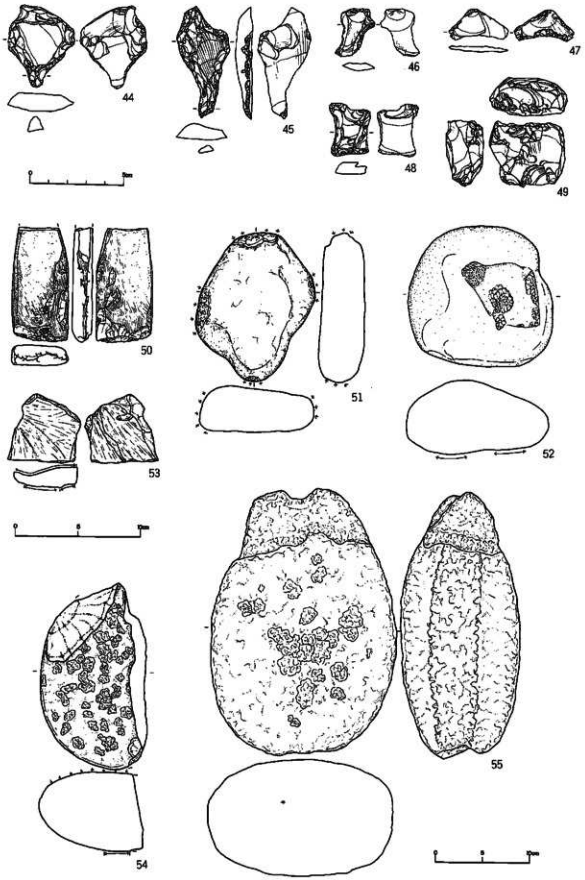
台石（図Ⅲ－79－54、図版Ⅲ－38）

自然礫の表面に敲打痕のあるもので、石材は砂岩である。

いかり石（図Ⅲ－79－55、図版Ⅲ－38）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
5cm

図Ⅲ－76　Ⅲ・Ⅳ層石器（1）



図Ⅲ－77 Ⅲ・Ⅳ層石器 (2)

長軸の上端に逆T字型の浅い溝を持ち、下端に打ち欠きのあるもので両側縁にも敲打による平坦面が認められる。逆T字型の溝は全周している。石材は花崗斑岩である。

b. Ⅴ層出土石器

石鏃（図Ⅲ－82－56～82、図版Ⅲ－39）

56～58は無茎のもので57・58は五角形を呈する。59は上下端とも欠くが、柳葉形のものと思われる。60～81は有茎のもので、かえしの明瞭でないもの（60～62）、かえしの明瞭なもの（63～81）に分けられる。60の基部は折れた後再加工してある。62は素材面を表裏とも残し、側面観は湾曲していることから未製品の可能性もある。63は最大径が中心より上に来るもので、右側縁は素材の球果の部分で欠けている。石材はいずれも黒曜石である。

ドリル（図Ⅲ－82－82～86、図版Ⅲ－39）

82は剥片の周辺部を加工して刺突部を作り出したもの。83・85は剥片のほぼ全面を加工して刺突部を作り出したもの。86は棒状のものである。石材は84が玄武岩、85がメノウで、他は黒曜石である。

ポイント（図Ⅲ－82－87、図版Ⅲ－39）

表は周辺から丁寧に加工が加えられる。石材は珪質頁岩で、スクレイパー的用途が考えられる。

つまみ付ナイフ（図Ⅲ－82－88～91、図版Ⅲ－39）

88は表面と裏の一部を加工したもの、89は片面のみの加工のもの、90は全面加工のもの、そして91は周囲のみの加工のものである。石材は88が珪質頁岩で、他は黒曜石である。

スクレイパー（図Ⅲ－82－92～100・83－101～111、図版Ⅲ－39）

92は両面加工の剥片の縁辺に刃をつけたもの、93～104は円形または方形に近く、縁辺に急角度の刃が付くものである。93・94・97は刃が全周につく。打面の残るものが多くみられる。105は下端部にのみ加工があり、ドリル再加工品の可能性もある。106～110は尖頭部を持つもので、109は両面から加工がみられるが、他は片面のみの加工である。111は縦長剥片の片面の周囲に刃を付けたものである。石材は93・103・108が玄武岩、100・106がメノウで、他は黒曜石である。

くさび型石器（図Ⅲ－83－112～114、図版Ⅲ－39）

いずれも黒曜石製で、上下に剥離痕が観察できる。

Ｒフレイク（図Ⅲ－83－115～120、図版Ⅲ－39）

115・116・118・120は内湾する刃部を持つもの、117・119は先端部に使用した痕のあるものである。石材はいずれも黒曜石である。

石核（図Ⅲ－83－121・122、図版Ⅲ－39）

ともに黒曜石製で、121は直径約8mm程のもの１点と2mm程の丸い加撃痕８点を上面に残す。

石斧（図Ⅲ－84－123～139、図版Ⅲ－40）

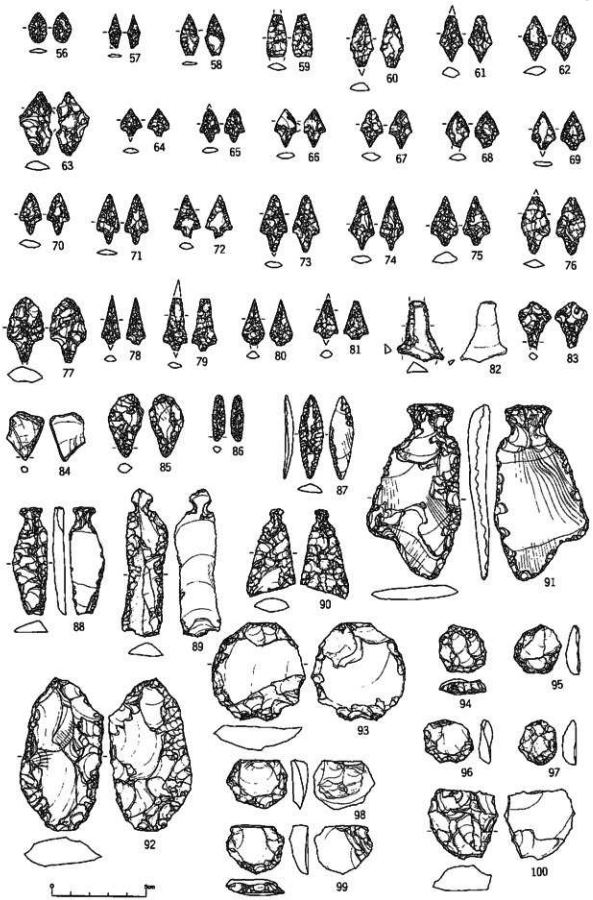
124・125・130・131は刃部がバチ型に拡がるもの、123・126・127・129・130・132～134は短冊型のもの、135～137は刃部のみのもの、138は擦り切痕の残る未製品で139は破損残片である。132・133は側面に敲打痕が残る。124・125・132は片刃のものである。石材は133・136が泥岩、139が片岩、126が蛇紋岩？で、135が不明、残りは緑色泥岩である。

たたき石（図Ⅲ－84－140・141・85－142～144、図版Ⅲ－40）

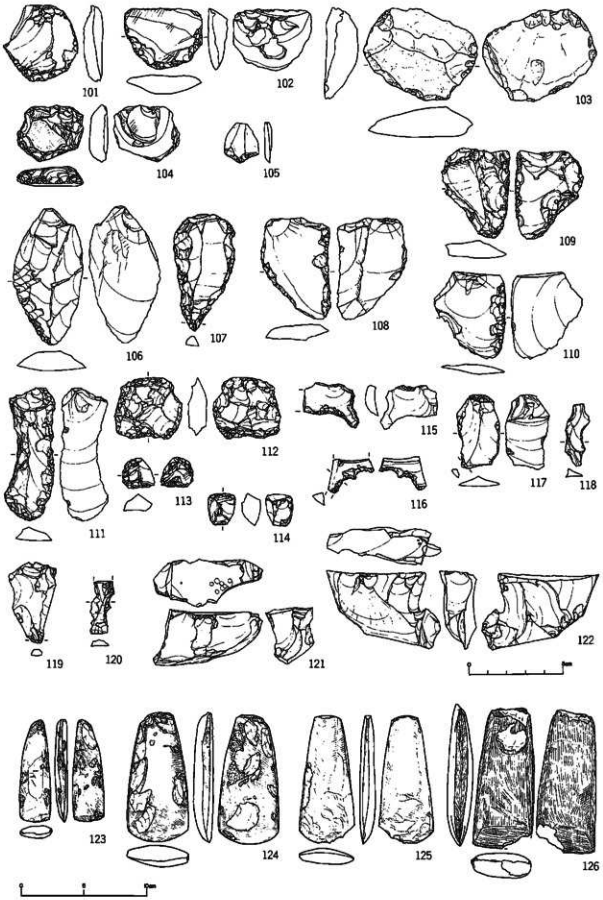
140～142・144は自然礫の長軸の先端を使ったもので、142は両端に使用痕が認められる。143は半割した礫の割れ口を使用したものである。石材は142が泥岩？、他は砂岩である。

すり石（図Ⅲ－85－145～148、図版Ⅲ－40）

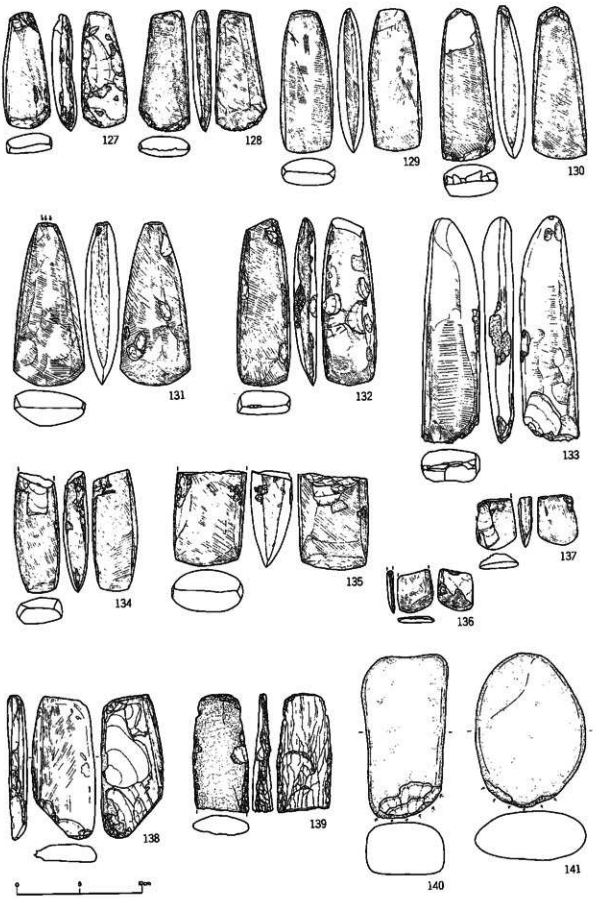
145・146は断面が三角形のもので、稜線の部分が使ってある。147は自然礫の短軸の両側縁を使用し


56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

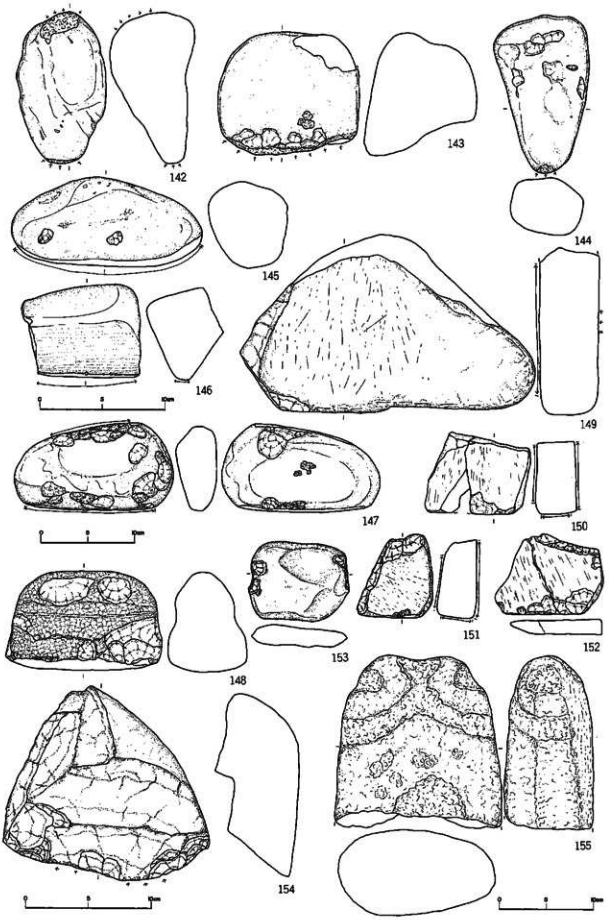
図Ⅲ－78　Ⅴ層石器（1）


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126

図Ⅲ－79　Ⅴ層石器（2）



図Ⅲ－80　Ⅴ層石器（3）



図Ⅲ－81　Ⅴ層石器（4）

たもので、その周辺に剥離が認められる。148は北海道式石冠と呼ばれるもので、すり面の周囲に加工が施され、真ん中にはすり面と平行に浅い溝が回る。石材は148が不明で、残りは砂岩である。

台石（図Ⅲ－85－149、図版Ⅲ－40）

自然礫の一面を平らにして使用したものである。裏面ほぼ中央にも叩いた痕が認められる。石材は砂岩である。

砥石（図Ⅲ－85－150～152、図版Ⅲ－40）

いずれも砂岩製で、2面ないし3面使用している。152は左側縁が尖っており、石鋸的用途も考えられる。

石錘（図Ⅲ－85－153、図版Ⅲ－40）

長軸の両端に片側からの打ち欠きを持つもので、石材は流紋岩である。

礫器（図Ⅲ－85－154、図版Ⅲ－40）

割れた自然礫の下端部に叩いた痕のあるものである。

いかり石（図Ⅲ－85－155、図版Ⅲ－40）

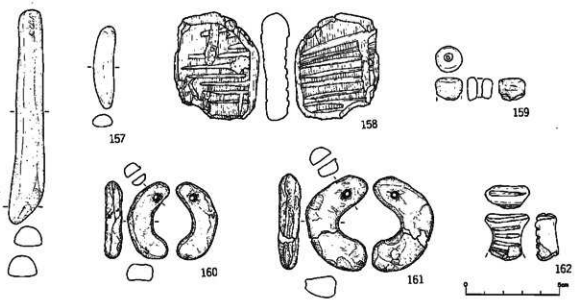
長軸の一端に逆T字型の溝があり、上端の両側縁を左右から敲打して抉りを入れ突起をつくりだしたもの。溝は裏側まで巡らず、上端部裏側は抉れている。下部欠。欠損部近くにも抉りがある。石材は安山岩である。

(3) 土製品・石製品 156～162（図Ⅲ－82、図版Ⅲ－37）

156・157は棒状の原石を磨いたもので、石材は不明である。158は軽石製で、両面に横向きに溝が掘ってある、おろしがね状石製品の破損品か。159は土製の平玉、160・161は土製の勾玉である。162は溝にベンガラを塗った土製品である。

表Ⅲ－11
石製品・土製品一覧

	玉	田玉	その他石製品	土製品
Ⅲ層	0	1	0	8
Ⅴ層	1	1	3	15
Ⅴ-1層	0	0	0	7
Ⅴ-3c層	0	0	1	0
計	1	2	4	30



図Ⅲ－82 土製品・石製品

表Ⅲ－12　包含層別剥片石器一覧

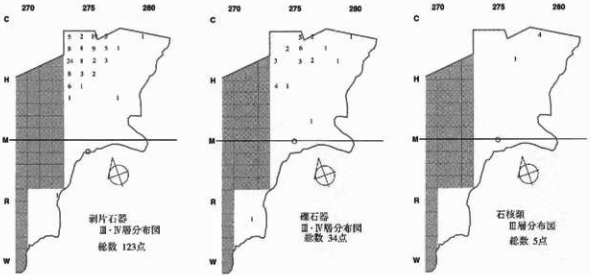
	石鏃			ポイント		ドリル等	つまみ付ナイフ		スクレイパー	くさび形石器	Rフレイク	Uフレイク	その他	計
	破片		未製品		破片			破片						
Ⅰ層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅱ層	18	1	0	0	0	3	0	0	18	3	16	1	0	60
Ⅲ-1層	12	0	0	0	0	0	0	0	6	1	9	0	0	28
Ⅲ-2層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲ-3層	1	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4	0	0	9
Ⅲ-4層	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	6
Ⅲ-5層	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	4
Ⅲ-6層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅳ層	3	0	1	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	16
Ⅴ層	33	1	0	0	0	7	0	1	46	3	38	1	0	130
Ⅴ-1層	8	0	0	0	0	2	0	0	11	2	5	0	0	28
Ⅴ-2層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-3層	4	0	0	0	0	0	2	0	1	1	1	0	0	9
Ⅴ-3a層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-3b層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-3c層	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
Ⅴ-3d層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-4層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5層	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3
Ⅴ-5a層	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	4
Ⅴ-5b層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5b-1層	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
Ⅴ-5b-2層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5b-3層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5b-4層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5c層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5d層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅵ層	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5	0	0	6
Ⅶ層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
排土	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	4
表採	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	4
撹乱	0	6	0	0	0	0	0	1	1	0	8	0	0	15
不明	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	3
計	88	8	1	1	1	14	4	8	104	10	93	2	1	344

表Ⅲ－13　包含層別礫石器一覧

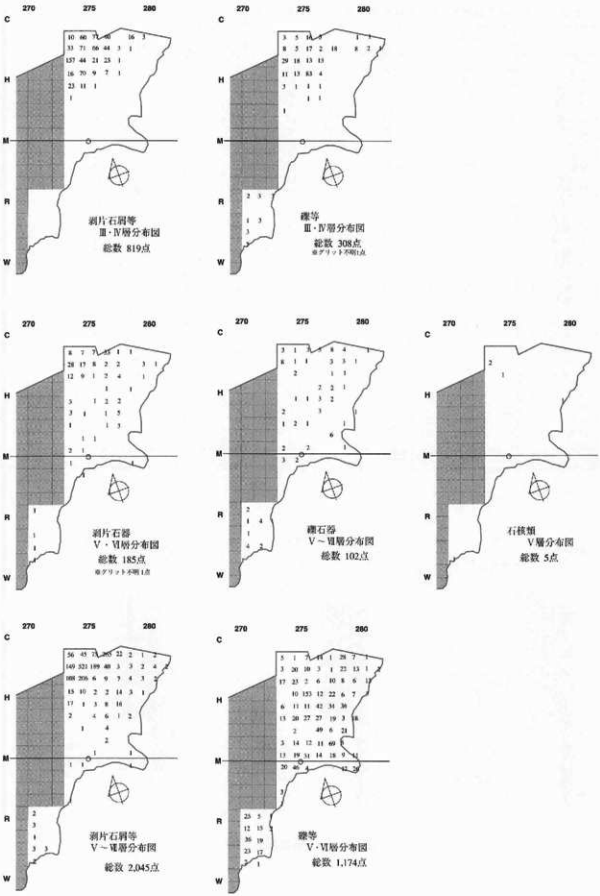
	石斧			いかり石	たたき石	北海道式	断面三角	すり石	くぼみ石	砥石		台石		石錘	磨器	計
	破片	未製品				石冠	すり石				破片		破片			
Ⅰ層	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
Ⅱ層	2	7	0	0	1	0	0	0	3	1	3	0	3	0	0	17
Ⅲ-1層	1	2	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	7
Ⅲ-2層	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
Ⅲ-3層	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	5
Ⅲ-4層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲ-5層	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	3
Ⅲ-6層	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Ⅳ層	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Ⅴ層	5	6	0	0	5	0	0	0	1	0	1	3	1	0	0	22
Ⅴ-1層	3	1	2	1	5	0	0	0	0	0	1	2	2	0	1	17
Ⅴ-2層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-3層	8	1	0	0	5	0	0	0	0	0	2	1	0	0	1	19
Ⅴ-3a層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-3b層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-3c層	5	2	1	0	4	0	0	1	2	0	1	0	1	0	0	17
Ⅴ-3d層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-4層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5層	4	0	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	2	0	0	10
Ⅴ-5a層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	4
Ⅴ-5b層	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
Ⅴ-5b-1層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Ⅴ-5b-2層	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
Ⅴ-5b-3層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5b-4層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ-5c層	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
Ⅴ-5d層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
Ⅵ層	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
Ⅶ層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
排土	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0
表採	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
撹乱	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	32	26	4	2	24	1	2	6	17	12	10	7	8	1	2	137

表Ⅲ－14 包含層層別剥片・石屑類、礫等、石核類一覧

	剥片・石屑類				礫等							石核
	フレイクチップ		不明	計	礫	礫片	軽石	有意の礫	原石	計		
Ⅰ層	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1		0
Ⅱ層	356	142	0	498	52	54	0	0	0	106		0
Ⅲ-1層	88	17	0	105	11	21	0	0	0	32		0
Ⅲ-2層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
Ⅲ-3層	42	18	0	60	22	5	0	0	0	27		0
Ⅲ-4層	34	10	0	44	82	14	0	0	0	96		1
Ⅲ-5層	23	4	0	27	23	1	0	0	0	24		4
Ⅲ-6層	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1		0
Ⅳ層	55	20	0	75	18	3	0	0	1	22		0
Ⅴ層	954	575	0	1,529	86	29	0	0	0	115		4
Ⅴ-1層	53	10	0	63	138	11	1	2	2	154		0
Ⅴ-2層	2	0	0	2	1	0	0	0	0	1		1
Ⅴ-3層	20	8	0	28	106	3	0	0	0	109		0
Ⅴ-3a層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
Ⅴ-3b層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
Ⅴ-3c層	12	0	0	12	155	2	1	0	0	158		0
Ⅴ-3d層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
Ⅴ-4層	0	0	0	0	5	0	0	0	0	5		0
Ⅴ-5層	15	10	0	25	539	0	0	0	0	539		0
Ⅴ-5a層	3	5	0	8	123	0	0	0	0	123		0
Ⅴ-5b層	0	2	0	2	1	0	0	0	0	1		0
Ⅴ-5b-1層	1	1	0	2	6	0	0	0	0	6		0
Ⅴ-5b-2層	2	0	0	2	5	1	0	0	1	7		0
Ⅴ-5b-3層	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1		0
Ⅴ-5b-4層	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3		0
Ⅴ-5c層	3	0	1	4	13	0	0	0	0	13		0
Ⅴ-5d層	0	0	0	0	27	0	0	0	0	27		0
Ⅵ層	84	95	0	179	8	1	0	0	1	10		0
覆層	2	3	0	5	0	0	0	0	0	0		0
排土	6	0	0	6	2	2	0	0	0	4		0
表採	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0		0
攪乱	23	34	0	57	2	0	0	0	0	2		0
不明	11	1	0	12	0	0	1	0	0	1		0
計	1,790	955	1	2,746	1,431	147	3	2	5	1,588		10



図Ⅲ－83 石器類分布図（1）



図Ⅲ－84　石器等分布図（2）

(4) 木製品

挟入付板材（図Ⅲ－88－1、図版Ⅲ－41）

上端部は平らで、両側縁に2カ所の抉りがある。挟入部分に紐擦れ痕らしきものが認められるが、使用痕か後世の水草の根等による侵食かは不明である。下部は欠。樹種はクリ属である。

槌状木製品（図Ⅲ－88－2・89－3・90－5、図版Ⅲ－41・43）

2と3はほぼ同じ形で、2の方が幅が広い。槌を平らにつぶしたような形で片面は年輪にほぼ沿う形で緩やかに曲がっており、もう片面は水平に近い。側面は片方がとがり気味で、もう片方は緩やかな凹面形である。柄は2つともこの凹面の方へ曲がっている。2点とも使用痕は認められず用途ははっきりしない。5はV－3層相当の旧河道出土例で柄は真っ直ぐで身より若干長く、身の部分は枝分かれ部を利用してつくられている。片面はほぼ平らなのは先の2例と同様だがもう一面は枝分かれ部の稜が残ったままで、断面がくさび形に近くなる2・4例とは異なる、未製品か。使用痕は認め難く用途は不明である。樹種は3点ともカエデ属である。

櫂状木製品（図Ⅲ－89－4、図版Ⅲ－42）

上端部欠。先端は平べったく、上に行くにしたがって細くなる。加工痕は不明瞭で、ほぼ全面が炭化している。図中の網掛け部分が炭化部分である。樹種はトネリコ属である。

加工材（図Ⅲ－90－6・91－9、図版Ⅲ－41・42）

6は全周から斧で切った痕の残る材である。9は一面5方向に斧痕が残るものである。杭の未製品か7同様抉を入れようとしたものか。反対側にも1ヵ所斧痕が認められる。樹種は6がカエデ属、9がトネリコ属である。

挟入付丸材（図Ⅲ－91－7、図版Ⅲ－42）

直径13cm程の材の両端を切り、中央やや上の部分に角型の抉りを入れてあるものである。樹皮を残し、左側面は割れている。樹種はカエデ属である。

筒状樹皮巻（図Ⅲ－91－8、図版Ⅲ－41）

筒状に巻かれた帯状の樹皮である。燈火用のものであろうか。

カゴ状繊維製品（図Ⅲ－92－10・11、図版Ⅲ－43）

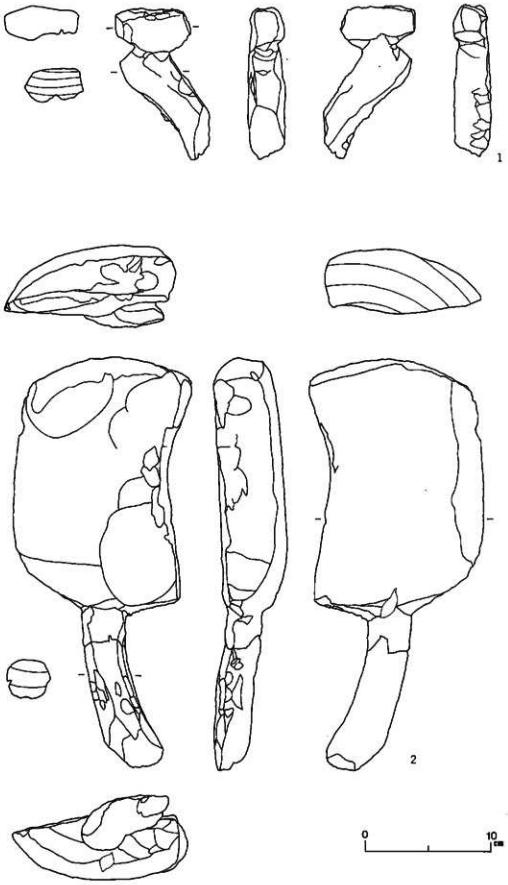
いずれも口縁部がわずかに残るが、断片的で全体形状はつかめない。編み方はともに撚りのないタテ糸を2本の螺旋状に巻いたヨコ糸で編込んでいる「もじり編み」と呼ばれるものである。ともにタテ糸のほうが細いものを使用している。口縁部の編み込み方ははっきりしない。樹種は10が広葉樹材で、11は未同定である。

表Ⅲ－15　木製品一覧

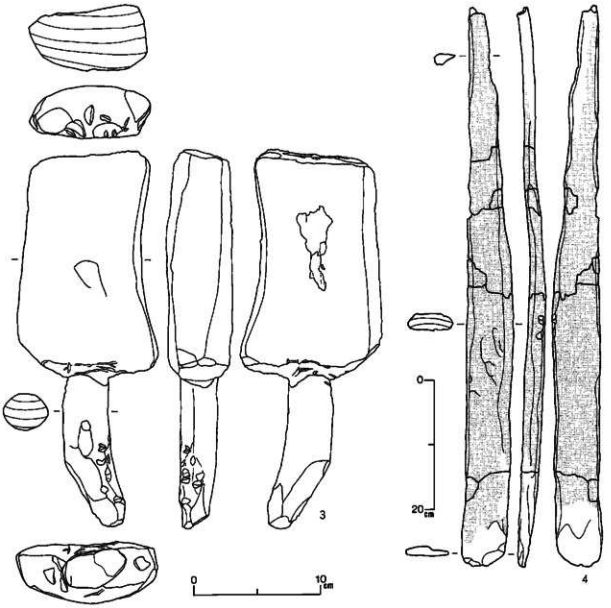
No.	図番号	名称	発掘区	層位	計測値（cm） 長さ	幅	厚さ	湿重量（g）	樹皮	焼	木取り	樹種	点数	備考
1	Ⅲ－84	挟入付板材	J-271-d	Ⅲ-5	12	7.2	2.9	92.6			板目	クリ属	1	表面腐蝕著しい
2	Ⅲ－84	槌状木製品	H-274-d	Ⅲ-5	37.3	17.8	5.2	924			板目	カエデ属	1	
3	Ⅲ－85	槌状木製品	I-275-d	V-4	29.7	11.2	5.1	719			板目	カエデ属	1	"No.2と類似"
4	Ⅲ－85	櫂状木製品	E-277-b	V-4	87.6	7.2	3	451.4（乾燥）		○	板目	トネリコ属	1	先端と中軸に加工痕有
5	Ⅲ－86	槌状木製品	S-270-c	V-3	17.2	13.8	6.4	736			板目	カエデ属	1	枝流れ部分を使用
6	Ⅲ－86	加工材	R-271-e・d	V-3	106	7.4	7.1	3280	○		丸太	カエデ属	1	
7	Ⅲ－87	挟入付丸材	R-270-c	V-3	50.2	13.6	12.3 ※	3900	○		丸太	カエデ属	1	何かの未製品か？
8	Ⅲ－87	筒状樹皮巻	R-271-d	V-3	6.2	4.5	0.2	38.1	○		－	不明	1	樹皮を薄く剥いだもの
9	Ⅲ－87	加工材	Q-270-a・d	V-3	159.2	5.9	5.7	2967.6	○		丸太	トネリコ属	1	加工途中のものか？

表Ⅲ－16　繊維製品一覧

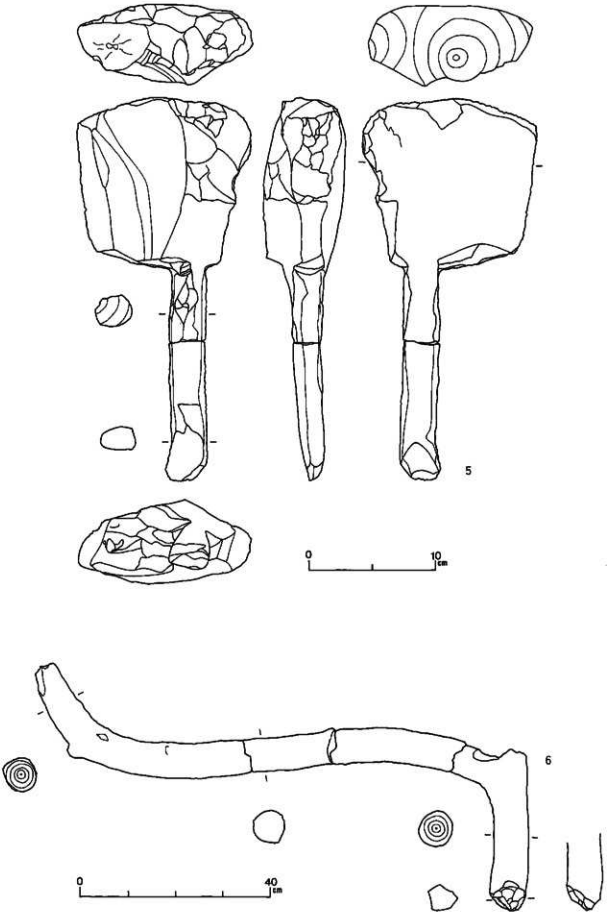
No.	図版番号	名称	発掘区	層位	計測値（cm） 長さ	幅	材料直径（cm） タテ	ヨコ	密度 間（cm）	タテ本	ヨコ本	開拡（cm） タテ	ヨコ	衛 後	点数	備考
10	Ⅲ－88	カゴ状繊維製品	H-277-b	V-5	27	21.2	2.8	1.5	5	8	6	2.9	5.9	広葉樹（未同定）	1	口縁部有
11	Ⅲ－88	カゴ状繊維製品	H-277-b	V-5	31	12.5	3.2	1.3	3	5	4	2.8	3.8	広葉樹（未同定）	1	口縁部有



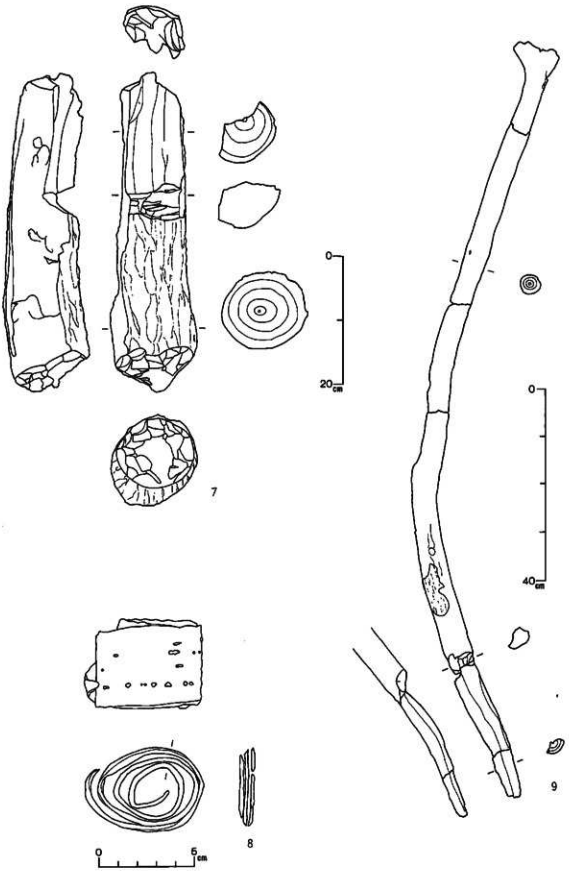
図Ⅲ－85　Ⅲ－5層木製品



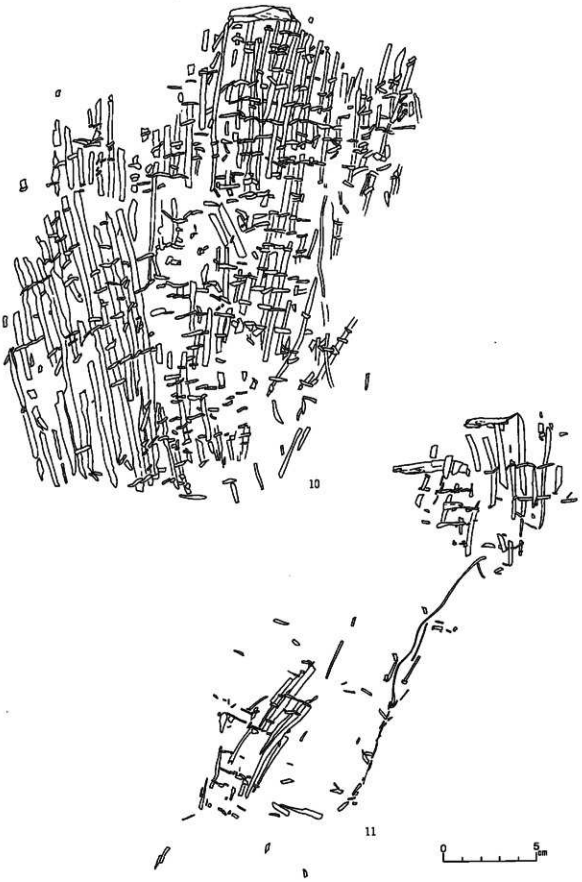
図Ⅲ－86　Ⅴ－1層木製品



図Ⅲ－87　Ⅴ－3層木製品(1)



図III－88 V－3層木製品(2)



図Ⅲ－89　Ⅴ－5層　カゴ状繊維製品

7 まとめ

(1) 遺跡の形成

すでに層序と旧河道の項でも触れたが、本年度の調査範囲の大部分を占めた低位の段丘部分の包含層ないし生活面の形成について、改めて調査の結果を要約してみたいと思う。Ⅴ層下底の地形（図Ⅲ－56）を見ると、現在の段丘面Ⅲ・Ⅳの範囲を激しく蛇行する河道と、北東側からこの氾濫原へ注ぐ直線的な谷の存在が顕著である。現在と同様縄文時代においてもこの付近がキウス川本流とその右岸の丘陵から流れ出る支流との合流点であったことが窺われる。縄文時代早期中葉まではこれらの河川による谷の下刻が進む方向にあったと思われ、段丘面Ⅰ上の住居跡で出土するⅠ群a類土器はⅤ-5層からは確認されていない。Ⅴ-5d層の砂礫から出土する土器の多くがⅠ群b類であることから考えて、谷の下刻が終息して埋積の傾向に転じたのは縄文時代早期後葉以降であると考えられる。この転換は年代的に縄文海進の進行期に一致しており、海進に伴う札幌－苫小牧低地帯の環境変化の一環として捉えられる可能性がある。

とは言え、Ⅴ-5d層上面付近の木材による^{14}C年代は4960±60あるいは4870±70y.B.P.（KSU－2448・2449、Ⅵ章1節）と報告されており、従来知られている早期後葉の年代よりかなり若い。これらの木材はより上位から侵蝕してⅤ-5d層に達した新しい河道内の堆積物である可能性もないわけではないが、Ⅴ-5d層の少し上位に堆積したⅤ-5c層の株による測定もやはり4750±50y.B.P.（KSU－2447）という縄文海進の最盛期よりかなり新しい年代を示している。従って、谷の埋積の傾向が現われたのが早期後葉であるとしても、段丘面Ⅲを構成する堆積物の形成が本格的に進行するのはほぼ縄文時代中期以降であり、早期後葉から前期までの間には、一時的なものにせよⅤ-5d層まで削剥の及んだ時期があったとみるべきであろう。Ⅴ-5d層出土の土器の多くが磨滅していることはそのような意味で理解されるのかも知れない。

Ⅴ-5a～c層は出土遺物と年代測定の結果から、ほぼ縄文時代中期から後期前葉までの期間に形成されたものと考えられる。時に堆積の休止を示唆する埋没土壌らしいもの（Ⅴ-5b3層など）を挟みながらも順次堆積面が上昇し、堆積環境は長期間にわたって安定的であったと考えられる。また逆に言えば段丘面Ⅲ・Ⅳの範囲は純粋な氾濫原であり、人間の活動の場としては不安定であったとみられる。事実一時的な焚き火の跡と考えられる炭化物集中以外の遺構は残されておらず、出土遺物も少ない。

中期を中心とする堆積の進行はⅤ-4層の堆積で終わりを告げる。Ⅴ-4層自体、有機質の部層を挟まず、かなり規模の大きい軽石礫層を挟むなど、Ⅴ-5a～c層とは異なる性格の堆積物であるとみられる。恐らくはかなり短い期間に形成されたものであろう。その後下刻の傾向が顕著になり、それ以前の氾濫原が段丘化して後期後半の遺構・遺物の分布をみること、次いで後期後葉に埋積の進行・水位の上昇による湿原化（Ⅴ-3層）があり、後期末から晩期前半に再び下刻、晩期後葉にⅤ-2/3層・Ⅴ-2層の堆積という激しい変化があることを本章5節で述べた。

Ⅴ-2層の堆積後、段丘面Ⅲの部分に晩期後葉の遺構・遺物が進出する（Ⅴ-1層）様子は、Ⅴ-4層の堆積面に後期後半の生活面が形成される状況とよく似ている。またその後広く段丘面上が冠水するようになる（Ⅲ-4層上部）ことも、Ⅴ-3層上部に認められる水位の上昇と相似的である。このように無機質の厚い堆積物、削剥、水位の上昇と埋積の順で継起する変化は、縄文時代後期以降反復されている一種のサイクルと考えることができるかも知れない。そのような考え方をとるなら、Ta-cの降下やⅢ-4層下部の堆積といった事件のために不明瞭になってはいるが、Ⅲ層下部の堆積は晩期後葉に始まった2回目のサイクルの後半（埋積期）に当たる可能性があるわけで、Ⅲ-5層泥炭の形成（これについては本章

4節でTa-cの降下を直接の原因として挙げた）も、キウス川の属する水系全体の水位の上昇傾向と関連させて理解することが適当であるのかも知れない。

さてそのような一種のサイクルが実在するとして、さらに3回目のサイクルがありうるとすれば、段丘面Ⅳ上に厚くと堆積したとみられるⅢ-2層はその開始を示し、Ⅲ-2層の堆積面よりかなり低い現在の河道・氾濫原はそれに続く下刻期、ないし埋積の初期に当たるものと考えられるだろう。しかし札幌ー苫小牧低地帯の水位は近代以降の人為的な治水・排水によって一般に低下したと考えられるので、今後水位の上昇と埋積の進行がキウス川の谷に訪れる可能性はあまりないのかも知れない。

こうしたサイクルを反復しつつ、巨視的には谷の下刻が進行していることは、縄文時代後期以降に形成された段丘面Ⅲ・Ⅳの存在によって示されていると言えよう。これは縄文海進の終息とその後の海退傾向に関連するものと考えるのが自然であり、この変化にはまた気候の寒冷化が伴った可能性が高い。この間地殻の変動がどのようなものであったか不明であり、キウス川の下刻傾向がどの程度まで純粋に気候的な要因によるものかは不明確である。しかしⅤ-4層やⅤ-2・2/3層など比較的短期間に堆積したとみられる多量の無機質砕屑物が気候の悪化による植生の破壊を反映している可能性は一応考えられてよいのではあるまいか。

改めて言うまでもなく、後期以降の寒冷化が縄文時代の社会にどのような影響を与えたかの問題は道内の考古学上の大きなテーマの一つである（藤本1982など）。今回の調査の結果から言えば、Ⅴ-3層・Ⅴ-1層などの遺構・遺物はむしろ下刻、すなわち恐らく寒冷化の時期に属するもので、気候の悪化が縄文時代人の活動に重大な影響を与えたとの結論を導くことは難しい。しかし同時に、後期末ないし晩期前半に顕著な谷の下刻が生じたらしいこと、従ってこの頃一時的な寒冷化が見られたことも推定されるに至った。後期後葉に多数の周堤墓を残し、大規模で組織的な作業を実現したことで知られている道央地方の縄文社会が晩期前半の間に急激に不明瞭になる理由として、気候の悪化を考慮することは必ずしも空想的とは言えないのかも知れない。今後の調査によってさらに追及されるべき問題であろう。

表Ⅲ－17　浮遊選別試料一覧

遺構名	遺構の種類	採取位置	土壌	時期	試料採取量 (L)	試料体積 (L)	浮遊重量 (0.01g, 0.2-0.25 mm, g)	浮遊重量 (0.01g, 0.25-0.5 mm, g)	浮遊重量 (0.01g, 0.5-1 mm, g)	炭化種子 (焼成2回)	炭化種子 (焼成3回)	炭化種子 (焼成4回)	炭化種子 (焼成5回)	炭化種子 (焼成6回)	炭化種子 (焼成7回)
UR-C1	溝内埋甕	b-3-ニ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	4.3	3.3	18.2	14.9	287.6	あり アワ?炭	あり 炭	あり 炭	なし	なし	多量
UR-C1	溝内埋甕	b-4-ハ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	1.75	2.5	14.7	52.5	396.3	あり 炭	あり 炭	あり 炭	なし	あり 炭	なし
UR-C1	溝内埋甕	c-4-イ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	3.15	4.3	37.7	31.3	666	なし	なし 炭	なし	なし	なし	なし
UR-C1	溝内埋甕	c-4-ニ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	3.25	4.1	23.5	15.8	1132.7	なし	なし	なし	なし	なし	なし
UR-C1	溝内埋甕	c-4-ハ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	3.61	3.4	16.7	26.4	379.2	あり	あり	あり	なし	なし	なし
UR-C1	溝内埋甕	c-5-ロ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	5.2	6.2	46.4	46.4	651.3	なし	あり	なし	なし	なし	なし
UR-C1	溝内埋甕	c-5-ハ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	8.55	11.9	44.7	79.3	817.3	なし	なし	あり	多量 アワ?炭	多量	多量 アワ?炭
UR-C1	溝内埋甕	c-6-ニ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	3.35	5.6	31.3	35.4	975.6	なし 炭	なし 炭	なし 炭	なし	なし	なし
UR-C1	溝内埋甕	c-5-ハ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	3.35	4.2	10.7	18.2	456.3	なし	なし	なし	なし	なし	なし
UR-C1	溝内埋甕	c-5-ホ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	1.45	2.1	18.5	13.3	323.9	あり	あり	なし	なし	なし	なし
UR-J3	廃土		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c上位	4.95	5.6	14.5	11.5	756.2	あり	あり	あり 炭	なし	なし	なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	1.9	3.1			488.2			なし			なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-1	縄文以降? Ta-c上位	0.26				30.2			あり			なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-1	縄文以降? Ta-c上位	1.09				31.1			なし			なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-1	縄文以降? Ta-c上位	1.65		11.4	7.9	16	なし	あり	あり	なし	なし	なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-1	縄文以降? Ta-c上位	0.31				16.1			なし			なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-1	縄文以降? Ta-c上位	1.38				37.9			あり			なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-1	縄文以降? Ta-c上位	0.76		13.2	3.6	11	なし	あり	なし	なし	なし	なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-4	縄文以降? Ta-c上位	0.13				5.3			なし			なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文以降? Ta-c上位	3.7	4.3			34.4			なし			なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	3.74	4.3	108.3	13.1	703.8	なし	あり	あり	なし	なし	なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	0.79				135.1			なし			なし
UR-D3	貯蔵穴埋甕		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅱ-3	縄文晩期 Ta-c上位	3.94	4.4			819.2			なし			あり
UR-J	溝跡帯	HP-1 (LP-1B) Ta-f下b	廃土 (砂質)	Ⅴ	縄文晩期 Ta-c下位	0.65	1.3			35.2			なし			なし
UR-J	溝跡帯	HP-1 (LP-1B) Ta-f下b	廃土 (砂質)	Ⅴ	縄文晩期 Ta-c下位	3.76	5			114.7			なし			なし
UR-J	溝跡帯	HP-1	廃土 (砂質)	Ⅴ	縄文晩期 Ta-c下位	1.67	1.9	13.4	3	36.9	なし	なし	あり アカリ	なし	なし	なし
UR-J	溝跡帯	HP-1	廃土 (砂質)	Ⅴ	縄文晩期 Ta-c下位	1.79	2.4	1	0.7	30.8	なし	なし	なし	なし	なし	なし
UR-J	溝跡帯		廃土 (砂質)	Ⅴ	縄文晩期 Ta-c下位	0.41	0.9			5.4			なし			なし
UR-A	土壙		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	2.14	4	30.2	25.4	172	なし	なし	なし	多量 アワ?炭 1子4粒	あり	あり
UR-F	土壙		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	2.1	3.3	227.7	86.3	66.3	なし	なし	あり	多量 アワ?炭 1子4粒	あり	なし
UR-H	土壙		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3	4.5	113.3	32.5	11.6	なし	なし	あり	あり 1子4粒	多量	あり
UR-J3* 廃土		G-2?b-3-1	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.4	7.2			248.8			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?b-3-2	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	7.88	9.6			307.9			あり			なし
UR-J3* 廃土		G-2?b-3-4	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	8.61	10			438.6			あり			なし
UR-J3* 廃土		G-2?b-3-4	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3	4			203.4			あり			なし
UR-J3* 廃土		G-2?b-3-1	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	4.05	5.9			35			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?b-3-1	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.37	3.9			145.9			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?b-4-1	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.26	4.1			11			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?b-4-ハ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.2	4.1			16.9			あり			なし
UR-J3* 廃土		G-2?b-4-ヘ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	0.95	8			13.2			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-4-イ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	4.35	5.3			236.8			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-4-ニ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	6.05	9.7			368.3			あり			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-4-ハ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	4.35	8.5			32.7			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-4-ホ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	4.4	5.4			30.2			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-4-ヘ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.46	3.1			81.1			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-5-ニ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.76	4.3			168.3			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-5-ハ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.47	4.2			240.3			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-5-ホ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	6.65	9.9			356.8			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-4-イ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	18.64	30.9			291.2			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-4-ニ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	12.42	15.6			456.3			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?c-4-ホ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	9.46	16.6			139.8			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?d-3-1	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	4.3	9			131.9			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?d-3-2	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	10.21	11.1			136.9			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?d-3-ハ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	9.33	11.4			11.3			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?d-3-ホ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	7.19	7.9			468.5			なし			なし
UR-J3* 廃土		G-2?d-3-ヘ	砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	8.26	9.1			43.7			なし			なし
UR-J3	廃土		廃土 (砂質)	Ⅴ	縄文晩期 Ta-c下位	7.49		7.1	11.3	609.3	あり	あり	なし	なし	なし	なし
UR-J3	廃土		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.63		20.9	20.4	131	あり	多量	なし	なし	なし	なし
UR-J4	廃土		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	6.13	8	66.6	41	297.7	あり 炭	あり アワ?炭	あり 炭	なし	なし	なし
UR-J3	廃土		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	3.75	5	18.3	30.4	431.6	なし	あり	あり アカリ	なし	なし	なし
UR-J3	廃土		砂質中の黒褐色 (中や粘質)	Ⅴ-1	縄文晩期 Ta-c下位	6.61	8.3	74.5	49.2	317.8	あり	あり	なし	なし	なし	なし
UR-J3	廃土		廃土 (砂質)	Ⅴ	縄文晩期 Ta-c下位	14.42		18.1	41.3	1788	なし	あり	あり	なし	なし	なし

遺物名	遺跡の種類	採取位置	工名	時代	時期	実測点数 (N)	試料番号	存在濃度 (μg/g, μ)	存在濃度 (μg/g, μ)	熱蛍光法 (1.4±0.μ, μ)	炭化種子 (炭素3.0)	炭化種子 (炭素14.0)	炭化種子 (同位)	炭化種子 (炭素3.0)	炭化種子 (炭素14.0)	炭化種子 (同位)
LP-18	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期手作り Tree TR	2.84		5.2	3.6	188.6	0℃	0℃	0℃	0℃	あり	0℃
LP-19	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期手作り Tree TR	12.56		15	54.3	113.2	0℃	0℃	0℃	0℃	あり	0℃
LP-20	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期手作り Tree TR	1.78		7.5	19.4	848	0℃	あり	あり	0℃	0℃	0℃
LP-21	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期手作り Tree TR	2.71		1	7.2	134.4	0℃	あり	0℃	0℃	0℃	0℃
LP-22	縄文		弥生中代前期（前期）	V-2	縄文時期 Tree TR	3.32	3.2	103.6	15.1	102.1	あり	参照	参照	参照（縄文中期）	参照	あり
LP-23	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	11.74		2.1	14.3	384	0℃	0℃	あり（ナタネ）	0℃	あり	0℃
LP-24	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	2.1		3.7	6.2	386.6	0℃	あり（ナタネ）	0℃	0℃	0℃	0℃
LP-25	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	1.9	5.3	1.3	3.1	125.1	0℃	あり（ナタネ）	0℃	0℃	0℃	0℃
LP-27	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	3.25	6.20	1	6.8	776.4	0℃	あり（ナタネ）	0℃	0℃	0℃	0℃
LP-28	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	3.94	1	0.8	1	356.1	0℃	0℃	あり	0℃	0℃	0℃
LP-29	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	3.66	7	5.1	5.1	738.4	0℃	0℃	0℃	0℃	0℃	0℃
LP-30	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	5.7	4.8	3.8	3.7	201.1	0℃	0℃	あり（ナタネ）	0℃	0℃	0℃
LP-31	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	5.3	4.2			238.4			あり（ナタネ）			0℃
LP-32	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	4.19	3.6			313.7			あり			0℃
LP-34	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	3.1	3.7			486.2			0℃			0℃
LP-35	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	1.75	2			315.4			あり			0℃
LP-36	縄文	竪穴住	縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	4.2	5.3			94.2			0℃			0℃
LP-38	縄文	竪穴住	縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	3.24	6.6			138.1			0℃			0℃
LP-39	縄文	竪穴住	縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	3.3	4.3			488.1			0℃			0℃
LP-39	縄文	竪穴住	縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	3.6	6.6			79.2			0℃			0℃
LP-40	縄文		縄文土（前期）	V	縄文時期 Tree TR	8.94	6.7			8.3			あり			0℃
LC-9	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	6.25	6			484.9			0℃			0℃
LC-10	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	3.4		11.9	9.3	108.4	0℃	0℃	あり	あり	0℃	0℃
LC-14	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	1.83	3.4			151.8			0℃			0℃
LC-22	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	4.35	4.3			96.6			0℃			0℃
LC-26	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	3.04	3.8			34.2			0℃			0℃
LC-28	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	1.85	2			73			0℃			0℃
LC-29	弥生時代 後半	住C-D 17 -ゴ-ム-ム-ム-	弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	1.9	2			309			0℃			0℃
LC-29	弥生時代 後半	住C-D A	弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	0.7				79			0℃			0℃
LC-30	弥生時代 後半	住C-D B	弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	0.6				28.7			0℃			0℃
LC-41	弥生時代 後半		弥生中代前期（前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	4.8	5			318.4			あり			0℃
LC-42	弥生時代 後半		弥生中代前期（前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	5.5	5.5			302			あり			0℃
LC-43	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	3.85	3			319.3			あり			0℃
LC-44	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	4.72	6.5			219.1			0℃			あり
LC-45	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	3.2	2.5	41.5	12.6	33.8	あり（ムギ）	あり	あり（ナタネ）	0℃	0℃	0℃
LC-46	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	1.43	1.9	46.7	23.4	202.9	あり	0℃	0℃	0℃	0℃	0℃
LC-47	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	1.66	3.11	324.8	135.1	104.1	あり	あり（ムギ）	あり（ムギ）	0℃	0℃	0℃
LC-48	弥生時代 後半		弥生中代前期（前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	1.41				42.8			0℃	あり		あり
LC-50	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-4	縄文時期 Tree TR	0.79	0.9			115.1			0℃			0℃
LC-12	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3	縄文時期 弥生	3.09				44.6			0℃			あり
LC-19	弥生時代 後半		弥生中代前期（前期）	V-3	縄文時期 弥生					263.2			0℃			0℃
LC-25	弥生時代 後半		弥生中代前期（前期）	V-3-P	縄文後期前期	4.32				36.8			0℃			0℃
LC-26	弥生時代 後半		弥生中代前期（前期）	V-3-P	縄文後期前期	0.55				8.3			0℃			0℃
LC-27	弥生時代 後半		弥生中代前期（前期）	V-3	縄文時期 弥生	3.4	2.7			221.7			あり			0℃
LC-35	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3	縄文時期 弥生	4.7	3.6			136.9			0℃			0℃
CC-1	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	11.65	11.3			338.7			0℃			0℃
CC-2	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3	縄文中期 弥生中	1.12				33.8			あり			0℃
CC-3	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3-P	縄文後期前期（ヒョウタン）	16.19	36.2			440			0℃			0℃
CC-4	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3-P	縄文後期前期（ヒョウタン）	2.41	4			336.4			0℃			0℃
CC-5	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	1.84				88.1			0℃			0℃
CC-6	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	1.91	2			305.8			0℃			0℃
CC-7	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	0.32	0.2			1.1			0℃			0℃
CC-8	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	3.26	4.6			46.3			あり			あり
CC-9	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	4.31	2.7	146.7	26.1	181.9	0℃	あり	0℃	0℃	参照	0℃
CC-10	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	1.81	1.2			99.9			0℃			あり
CC-11	弥生時代 後半		弥生中代前期（前期）	V-3b	縄文中期 弥生中	2.7	1.2			103.3			あり			あり
CC-12	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	2.05	1.3	27.3	16.3	38.6	0℃	0℃	0℃	あり（ブドウ属）	あり	0℃
CC-13	弥生時代 後半		弥生中代前期（中中前期）	V-3a	縄文中期 弥生中	2.7	4			236.7			あり			0℃

表Ⅲ－18　浮遊選別遺物一覧

遺構名	遺跡の種類	検知区分	等化	時期	面積（標準3.0）	面数（標準0.420）	判定	土器点数	土器平均（土器数を1.0）	剥片石器総点数	剥片石器総重量	剥片石器平均	磨石類総点数	磨石類総重量	磨石類平均	土製品点数	土製品平均
1RC-1	遺跡集中	b-3-二	E-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	1		13	9.0 / 0.7		0			0	
1RC-1	遺跡集中	b-4-八	E-3	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	1	Ⅴ-c	3	9.0 / 0.7		0			0	
1RC-1	遺跡集中	c-4-イ	E-3	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	3	Ⅴ-c	118	9.0 / 0.7		0			0	
1RC-1	遺跡集中	c-3-ハ	E-3	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	4	Ⅴ-c	35	9.0 / 0.7		0			0	
1RC-1	遺跡集中	c-3-ハ	E-3	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	0		64	9.0 / 0.7		0			0	
1RC-1	遺跡集中	c-3-中	E-3	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	1		133	9.0 / 0.7 (3) 石器（土器0）		0			0	
1RC-1	遺跡集中	c-3-イ	E-3	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	0		201	9.0 / 0.7		0			0	
1RC-1	遺跡集中	c-4-イ	E-3	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	3		67	9.0 / 0.7 (4) 石器1		0			0	
1RC-1	遺跡集中	a-3-ハ	E-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	3	Ⅴ-c	16	9.0 / 0.7		0			0	
1RC-1	遺跡集中	a-3-中	E-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	7	Ⅴ-c	22	9.0 / 0.7		0			0	
1P-11	墓土		Y-1	縄文晩期	済	済	済	1	Ⅴ-c	20	9.0 / 0.7		1	磨石		0	
1C-1	遺物集中		E-3	古墳 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1C-2A	遺物集中		E-4	縄文前期末 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1C-2b	遺物集中		E-4	縄文前期末 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1C-2a	遺物集中		E-4	縄文前期末 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	0		0			0			0	
1C-2d	遺物集中		E-4	縄文前期末 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1C-2f	遺物集中		E-3	縄文前期末 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1C-2c	遺物集中		E-3	縄文前期末 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	0		0			0			0	
1C-2i	遺物集中		E-4	縄文前期末 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1C-2j	遺物集中		E-3	縄文前期末 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1C-2l	遺物集中		E-5	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-2	墓土	NP-1 SP-26 Y 97/4 a		縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		1	9.0 / 0.7		0			0	
1J-3	墓土	NP-1 SP-30 Y 97/4 b		縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		16	9.0 / 0.7		0			0	
1J-3	墓跡	NP-1	Y	縄文晩期	済	済	済	3	Ⅴ-c	16	9.0 / 0.7		0			0	
1J-3	墓跡	NP-1	Y	縄文晩期	済	済	済	0		1	9.0 / 0.7		1	磨石		0	
1J-4	墓跡		Y	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-4	土器		Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	0		0			0			0	
1J-7	土器		Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	0		0			0			0	
1J-4	土器		Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-1	Y-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-2-ハ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		3	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-2-ハ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	2		3	9.0 / 0.7		0			2	第1 結合痕土器1
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-3-イ	Y-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-3-ハ	Y-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-イ	Y-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-ハ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		3	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-ロ	Y-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	3	Ⅴ-c	0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-ホ	Y-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-5-イ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		42	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-5-ハ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	3		116	9.0 / 0.7		0			1	縄文晩期土器
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-5-ホ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		206	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-5-ヘ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		32	9.0 / 0.7 (2) 石器1		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-6-イ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-6-ハ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		4	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-7-イ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	1	Ⅴ-c	3	9.0 / 0.7 (1) 石器1		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-3-ハ	Y-2	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-イ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	1		10	9.0 / 0.7		0			1	縄文晩土器
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-ロ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		0			0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-ロ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		11	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-7-イ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		3	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-3-イ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		2	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-ロ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		14	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-ロ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	4		8	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12 墓跡	墓土	G-2 Pit-2-4-ロ	Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	未調	未調	済	0		2	9.0 / 0.7		0			0	
1J-12	墓土		Y	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	3		42	9.0 / 0.7		1	磨石		1	縄文晩土器
1J-13	墓土		Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	44	Ⅴ-c	88	9.0 / 0.7		0			13	縄文晩土器
1J-14	墓土		Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	16		116	9.0 / 0.7		0			28	縄文晩土器
1J-15	墓土		Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	1	Ⅴ-c	268	9.0 / 0.7 (2) 石器1	4	磨石1 石皿1		16	縄文晩土器13 土1
1J-16	墓土		Y-1	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	0		202	9.0 / 0.7 (3) 石器1	149	磨石		1	縄文晩土器
1J-17	墓土		Y	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ	済	済	済	40	Ⅴ-c	424	9.0 / 0.7 (2) 石器1	2	磨石		30	縄文晩土器13 土7
1J-18	墓土		Y	縄文晩期 Ⅴ-Ⅶ 結合Ⅴ-c 7個	済	済	済	0		36	9.0 / 0.7		0			0	

製造番号	品番の種類	成型設置	場所	判断	直前 (許容±40)	直後 (許容±40)	残減	上金点数	上部分数 (±0.2~0.4)	前月初期試点数	前月初部分数	修理部品点数	修理部部分数	上部品点数	上部品分数
LP-19	相王	V	相王相鉄ﾎﾟﾝﾁ 出部Tm7日	鉄	鉄	鉄		33		707	ｳ=0・ｶ=7	3		7	相鉄相王風
LP-20	相王	V	相王相鉄ﾎﾟﾝﾁ 出部Tm7日	鉄	鉄	鉄		38	1 to 1	207	ｳ=0・ｶ=7	1	鉄	2	相鉄相王風
LP-21	相王	V	相王相鉄ﾎﾟﾝﾁ 出部Tm7日	鉄	鉄	鉄		2		83	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-22	相王	V-1	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		1		0		0		0	
LP-23	相王	V	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		4		270	ｳ=0・ｶ=7	1	鉄	4	相鉄相王風
LP-24	相王	V	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		39	ｳ＜	31	ｳ=0・ｶ=7 34 出部	3	鉄	6	
LP-25	相王	V	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		1	0	14	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-27	相王	V	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		34	ｳ＜	44	ｳ=0・ｶ=7	36	鉄	0	
LP-28	相王	V	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		39	ｳ＜	16	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-29	相王	V	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		4	ｳ＜	139	ｳ=0・ｶ=7	13	鉄	34	相鉄相王風
LP-30	相王	V	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		0		20	ｳ=0・ｶ=7	0		1	相鉄相王風
LP-31	相王	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		7		35	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-32	相王	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		4		35	ｳ=0・ｶ=7	0		2	相鉄相王風
LP-34	相王	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		8	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-35	相王	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		4		3	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-36	相王	617 KD	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄	0		23	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-38	相王	617 KD	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄	0		38	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-39	相王	617 KD	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄	0		362	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LP-40	相王	617 KD	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄	0		223	ｳ=0・ｶ=7	1	鉄	0	
LP-41	相王	V	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		1	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LC-9	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
LC-10	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		0		0		0		0	
LC-14	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		1	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LC-22	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
LC-26	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
LC-28	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
LC-29	鉄鉄物 鉄中	鉄CU LF -3L LA1.	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄	0		0		0		0	
LC-39	鉄鉄物 鉄中	鉄鉄用A	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄	0		0		0		0	
LC-39	鉄鉄物 鉄中	鉄鉄用B	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄	0		0		0		0	
LC-41	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
LC-42	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		1	ｳ＜	0		0		0	
LC-43	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		1	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LC-44	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		2	
LC-46	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		4	ｳ＜	3	ｳ=0・ｶ=7	0		3	相鉄相王風
LC-46	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		0		3	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
LC-47	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	鉄	鉄	鉄		0		0		27	鉄	0	
LC-48	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		1		0		0		0	
LC-50	鉄鉄物 鉄中	V-1	相王相鉄 Tm7日	相鉄	相鉄	鉄		9		0		0		0	
BC-13	鉄鉄物 鉄中	V-3	相王相鉄 鉄中	相鉄	相鉄	鉄		0		1594	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
BC-19	鉄鉄物 鉄中	V-3	相王相鉄 鉄中			鉄		2		0		29	鉄	1	相鉄相王風
BC-23	鉄鉄物 鉄中	V-3 ﾎﾟ	相王相鉄ﾎﾟ	相鉄	相鉄	鉄		0		2	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
BC-24	鉄鉄物 鉄中	V-3 ﾎﾟ	相王相鉄ﾎﾟ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
BC-27	鉄鉄物 鉄中	V-3	相王相鉄 鉄中	相鉄	相鉄	鉄		0		1	ｳ=0・ｶ=7	0		0	
BC-28	鉄鉄物 鉄中	V-3	相王相鉄 鉄中	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-1	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-2	鉄鉄物 鉄中	V-3	相王相鉄ﾎﾟ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-3	鉄鉄物 鉄中	V-3 ﾎﾟ	相王相鉄ﾎﾟ ｲﾅﾎﾞﾙ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-4	鉄鉄物 鉄中	V-3 ﾎﾟ	相王相鉄ﾎﾟ ｲﾅﾎﾞﾙ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-5	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-6	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-7	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-8	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-9	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	鉄	鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-10	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	相鉄	相鉄	鉄		1		0		0		0	
CC-11	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-12	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	鉄	鉄	鉄		0		0		0		0	
CC-13	鉄鉄物 鉄中	V-3ｼ	相王相鉄 鉄中ｼ	相鉄	相鉄	鉄		0		0		0		0	

表Ⅲ－18　遺構出土遺物一覧

遺構名 番号	層位	遺物名	分類	数量
UC － 3	覆土	石器類	礫	2
		自然遺物	炭化材	
		合計		2
UC － 4	覆土	自然遺物	土壌試料	
UC － 5	覆土	自然遺物	炭化材試料	
UC － 8	焼土	自然遺物	炭化材試料	
UC － 13	焼土	自然遺物	炭化材	
UC － 15	焼土	自然遺物	炭化材	
LH － 1	覆土２層	土器	Ⅰa	8
			Ⅲb	4
			Ⅳa	2
		合計		14
		石器類	石鏃未製品	1
			ドリル	1
			くさび形石器	1
			フレイク	17
			チップ	3
			石斧	1
			砥石	1
			原石	1
		合計		26
	覆土３層	土器	Ⅰa	13
			Ⅰb-2	2
			Ⅳa	5
			Ⅴc	7
			不明	4
		合計		31
		石器類	石鏃	2
			石鏃未製品	1
			スクレイパー	1
			フレイク	47
			チップ	4
			すり石	1
			原石	1
		合計		57
	覆土	土器	Ⅰa	3
			Ⅰb-4	1
			Ⅲb	2
			Ⅳa	1
			不明	3
		合計		10
		石器類	ポイント	1
			ドリル	1
			スクレイパー	2
			フレイク	21
			チップ	2
		合計		27
合計				165
LH － 2	覆土５層	土器	Ⅰa	5
			Ⅳa	5
			Ⅳc	1
			Ⅴc	227
		合計		238
		石器類	石鏃	6
			Ｒフレイク	1
			フレイク	31
			チップ	34
			たたき石	5
			礫	3
			礫片	1
		合計		81

遺構名 番号	層位	遺物名	分類	数量
	覆土	土器	Ⅰa	5
			Ⅳa	3
			Ⅳb	3
			Ⅳc	1
			Ⅴc	4
		合計		16
		石器類	フレイク	14
			チップ	2
			台石	2
			礫	1
		合計		19
合計				354
LH － 3	覆土１層	土器	Ⅰa	2
			Ⅰb-2	17
		合計		19
		石器類	フレイク	3
			たたき石	1
			礫	2
			砥石	1
		合計		7
	覆土２層	土器	Ⅰa	6
			Ⅰb-2	1
			Ⅰb-3	1
		合計		8
		石器類	つまみ付ナイフ	1
			フレイク	2
			砥石片	1
		合計		4
	覆土４層	土器	Ⅰa	8
	覆土	土器	Ⅰa	188
		石器類	すり石	1
			台石	1
			礫	3
		合計		5
	床面	土器	Ⅰa	38
		石器類	スクレイパー	1
			くさび形石器	1
			Ｒフレイク	1
			フレイク	7
			チップ	2
		合計		12
		石製品	石製品	1
合計				290
LH － 6	覆土２層	土器	Ⅰa	2
	床面	土器	Ⅰa	10
			Ⅳa	2
			Ⅳb	2
		合計		14
		石器類	ドリル	1
			フレイク	33
			チップ	8
			礫	4
			原石	1
		合計		47
	掘上土	土器	Ⅰa	6
			Ⅰb-2	23
			Ⅰb-3	3
			Ⅰb	1
			Ⅳa	4
			Ⅴc	19

遺構名 番号	層位	合計 遺物名	分類	56 数量
		石器類	石鏃	2
			ポイント	1
			スクレイパー	1
			フレイク	44
			チップ	59
			礫	7
		合計		114
		石製品	石製品	1
		自然遺物	炭化物	
合計				234
LP － 10	覆土	土器	Ⅳa	1
		石器類	フレイク	1
			チップ	4
			台石	1
		合計		6
合計				7
LP － 12	覆土	土器	Ⅴc	15
		石器類	石鏃	1
			ドリル	1
		合計		2
合計				17
LP － 13	覆土1層	土器	Ⅴc	46
		石器類	フレイク	2
			チップ	2
		合計		4
	覆土2層	土器	Ⅴc	33
		石器類	フレイク	1
合計				130
LP － 14	覆土	土器	Ⅰb-2	2
			Ⅴc	32
		合計		34
		石器類	石鏃	1
			スクレイパー	3
			Rフレイク	4
			フレイク	18
			チップ	97
			たたき石	1
		合計		124
		自然遺物	炭化物	
合計				158
LP － 16	覆土2層	土器	Ⅴc	2
		石器類	フレイク	1
			チップ	2
		合計		3
	覆土	土器	Ⅳa	4
			Ⅴc	27
		合計		31
		石器類	石鏃	1
			チップ	1
		合計		2
合計				38
LP － 19	覆土	土器	Ⅰa	3
		石器類	フレイク	1
			チップ	2
			礫	1
		合計		4
合計				7
LP － 9	覆土	土器	Ⅴc	27
		石器類	スクレイパー	2
			フレイク	2

遺構名 番号	層位	遺物名	分類	数量
		合計		4
合計				31
LP － 1～2	覆土	土器	Ⅴc	38
		石器類	石鏃	2
			スクレイパー	2
			フレイク	4
			すり石	1
		合計		9
		土製品	土製品	2
合計				49
LP － 12	覆土	土器	Ⅴc	1
		石器（礫）	台石	1
		土製品	玉	8
	焼土	土器	Ⅰa	1
			Ⅴc	13
		合計		14
		石器類	石鏃	1
			フレイク	3
			礫	1
		合計		5
		土製品	玉	12
合計				41
LP －13～14	覆土	土器	Ⅴc	15
		石器類	チップ	3
			礫	1
		合計		4
合計				19
LP －13～16	覆土	土器	Ⅴc	43
		石器類	石鏃	2
			Rフレイク	2
			フレイク	6
			石斧	1
			礫片	3
		合計		14
		自然遺物	骨（動物遺体）	
合計				57
LP －15～16	覆土	土器	Ⅴc	1
		石器類	石鏃	1
			フレイク	2
		合計		3
合計				4
LP － 17	覆土	土器	Ⅴc	10
		石器類	Rフレイク	2
			フレイク	19
		合計		21
		土製品	玉	2
合計				33
LP － 23	覆土	土器	Ⅴc	8
		石器類	石鏃	1
			フレイク	2
		合計		3
合計				11
LP － 24	覆土	土器	Ⅴc	12
		石器類	フレイク	5
			チップ	10
		合計		15
合計				27
LP － 25	焼土	土器	Ⅴc	3
LP － 27	覆土	土器	Ⅲb	1
			Ⅴc	11
		合計		12

遺構名 番号	層位	遺物名	分類	数量
		石器類	フレイク	7
合計				19
LF － 28	覆土	土器	Ｖｃ	65
		石器類	フレイク	2
合計				67
LF － 29	覆土	土器	Ｖｃ	21
		石器類	フレイク	26
			チップ	18
			礫	1
		合計		45
合計				66
LF － 30	覆土	土器	Ｖｃ	6
		石器類	スクレイパー	1
			チップ	1
		合計		2
合計				8
LF － 31	覆土	石器類	フレイク	1
LF － 32	覆土	土器	Ｖｃ	5
		石器類	スクレイパー	2
			フレイク	2
		合計		4
合計				9
LF － 35	覆土	土器	Ｖｃ	2
		石器類	くさび形石器	1
			フレイク	6
		合計		7
合計				9
LF － 38	覆土	石器類	チップ	3
LF － 39	覆土	石器類	フレイク	9
			チップ	42
合計				51
LC － 22	覆土	石器類	線器	1
			礫	1
		合計		2
		石製品	玉	4
合計				6
LC － 31	覆土	石器類	スクレイパー	1

遺構名 番号	層位	遺物名	分類	数量
			Ｒフレイク	1
			フレイク	1
			チップ	4
合計				7
LC － 36	覆土	自然遺物	炭化物	
LC －41～44	覆土	土器	Ｖｃ	52
		自然遺物	集辺炭化材	
合計				52
LC － 46	覆土	石器類	礫	4
LC － 47	覆土	土器	Ｖｃ	9
		石器類	礫	2
			礫片	1
		合計		3
合計				12
KC － 12	Ｖ-3c	石器類	Ｒフレイク	1
			フレイク	6
			チップ	1
合計				8
KC － 19	Ｖ-3c	土器	Ⅳｂ	1,587
		石器類	すり石	1
			台石	5
			台石片	1
			礫	19
			礫片	1
		合計		27
		自然遺物	土壌サンプル	
合計				,614
KC － 27	覆土	自然遺物	炭化サンプル	
KS － 4	覆土	土器	Ⅲｂ-2	1
		石器類	チップ	1
			礫	379
			礫片	1
		合計		381
合計				382
CC － 4	Ｖ-5	土器	Ⅲｂ-2	2
CC － 10	覆土	土器	Ⅲｂ	3
CC － 11	覆土	土器	Ⅰｂ-3	1

表Ⅲ－20　遺構出土掲載土器一覧

図版		遺構名	層位	分類
Ⅲ 22 －	1	LH －1	覆土２層	Ⅰa
	2		覆土２層	Ⅰa
	3		覆土	Ⅰa
	4		覆土	Ⅰb-4
	5		覆土２層	Ⅳa
	6		覆土２層	Ⅳa
	7		覆土	Ⅳa
Ⅲ 24 －	1	LH －2	覆土	Ⅰa
	2		覆土５層	Ⅰa
	3		覆土５層	Ⅰa
	4		覆土５層	Ⅰa
	5		覆土	Ⅳ
	6		覆土	Ⅳc
	7		覆土５層	Ⅳa
	8		覆土５層	Ⅴc
	9		覆土５層	Ⅴc
	10		覆土５層	Ⅴc
	11		覆土５層	Ⅴc
	12		覆土５層	Ⅴc
	13		覆土５層	Ⅴc
Ⅲ 26 －	1	LH －3	HP-2他	Ⅰa
	2		覆土	Ⅰa
	3		覆土４層	Ⅰa
	4		覆土２層	Ⅰa
	5		覆土１層	Ⅰb-2
Ⅲ 28 －	1	LH －6	覆土２層	Ⅰa
	2		床面	Ⅰa
	3		掘上土	Ⅰa
	4		床面	Ⅰa
	5		掘上土	Ⅰa
	6		LP-14	Ⅰb-2
Ⅲ 28 －	7	LH －6	掘上土	Ⅰb-2
	8		掘上土	Ⅰb-2
	9		掘上土	Ⅳa
	10		掘上土	Ⅳa
	11		床面	Ⅳa
	12		床面	Ⅳa
Ⅲ 29 －	1	LP 9	覆土上位	Ⅴc
	2		覆土上位	Ⅴc
	3		覆土	Ⅴc
	4		覆土上位	Ⅴc
Ⅲ 29 －	2	LP －12	覆土	Ⅴc
	3		覆土	Ⅴc
	4a		覆土	Ⅴc
	4b		覆土	Ⅴc
	1	LP －13	覆土１層	Ⅴc
	2		覆土２層	Ⅴc
Ⅲ 30 －	1	LP －14	覆土	Ⅴc
	2		覆土	Ⅴc
	3		覆土	Ⅴc
	9	LP －16	覆土２層	Ⅴc
	10		覆土	Ⅴc
	12	LP －19	覆土	Ⅰa
Ⅲ 32 －	1	LP －1～2	覆土	Ⅴc
	2		覆土	Ⅴc
Ⅲ 33 －	6	LP －13～16	覆土	Ⅴc
Ⅲ 34 －	3	LP －27	覆土	Ⅴc
	4		覆土	Ⅴc
	5	LP －28・29	覆土	Ⅴc
	6		覆土	Ⅴc
	7		覆土	Ⅴc
	8		覆土	Ⅴc
Ⅲ 39 －	1	LC －41～44	覆土	Ⅴc
	2		覆土	Ⅴc
Ⅲ 40 －	1	KC －19	覆土	Ⅳb
	2		覆土	Ⅳb
	3		覆土	Ⅳb
Ⅲ 41 －	1	KC －19	覆土	Ⅳb
	4		覆土	Ⅳb

表Ⅲ－21　遺構出土掲載石器一覧

図版		遺構名	層位	分類	長さ	×	幅	×	厚さ(cm)	重さ (g)	石材
Ⅲ 11 －	1	UFC－1		石鏃	2.1	×	1.0	×	0.2	0.4	黒曜石
	2			石鏃	2.1	×	1.9	×	0.2	0.3	黒曜石
	3			Rフレイク	5.0	×	4.9	×	1.8	25.8	黒曜石
Ⅲ 22	8	LH － 1	覆土３層	石鏃	2.2	×	0.9	×	0.3	0.6	黒曜石
	9		覆土３層	石鏃	3.7	×	1.6	×	0.5	2.3	黒曜石
	10		床面	ポイント	3.8	×	2.4	×	0.7	6.4	黒曜石
	11		覆土２層	ドリル	2.8	×	1.0	×	0.5	1.8	黒曜石
	12		床面	ドリル	2.2	×	1.2	×	0.2	0.7	黒曜石
	13		床面	スクレイパー	4.1	×	2.0	×	0.8	10.6	黒曜石
	14		床面	スクレイパー	2.9	×	2.1	×	0.3	2.3	黒曜石
	15		覆土３層	スクレイパー	3.4	×	2.5	×	0.5	6.9	黒曜石
	16		覆土２層	石斧	13.62	×	4.94	×	2.13	228	砂岩
	17		覆土３層	すり石	5.0	×	4.4	×	1.2	35.3	砂岩
	18		覆土２層	砥石	12.8	×	8.7	×	9.1	1561.7	砂岩
Ⅲ 24	14	LH － 2	覆土５層	石鏃	2.3	×	0.9	×	0.3	0.5	黒曜石
	15		覆土５層	石鏃	2.4	×	0.9	×	0.3	0.5	黒曜石
	16		覆土５層	石鏃	1.9	×	1.1	×	0.2	0.4	黒曜石
	17		覆土５層	石鏃	2.4	×	1.5	×	0.4	1.1	頁岩
	18		覆土５層	石鏃	3.9	×	2.3	×	0.5	3.4	頁岩
	19		覆土５層	石鏃	2.5	×	2.5	×	0.4	3.2	頁岩
	20		覆土５層	Rフレイク	3.0	×	2.6	×	0.8	4.5	黒曜石
	21		覆土５層	たたき石	4.4	×	4.7	×	2.2	62.7	砂岩
	22		覆土	台石	15.0	×	15	×	12.7	4200	花崗斑岩
	23		覆土	台石	26.5	×	23	×	13.8	13000	花崗斑岩
Ⅲ 26	6	LH － 3	覆土２層	つまみ付ナイフ	4.6	×	1.6	×	0.5	4.2	メノウ
	7		床面	Rフレイク	2.2	×	2.2	×	0.6	2.8	黒曜石
	8		床面	くさび形石器	3.4	×	2.6	×	0.8	7.3	メノウ
	9		床面	スクレイパー	7.3	×	5.6	×	1.8	78.0	玄武岩
	10		床面	すり石	9.2	×	7.5	×	5.2	427.7	(緑色) 泥岩
	11		覆土２層	砥石片	2.7	×	3.5	×	1.5	12.0	砂岩
	12		床面	台石	21.9	×	16	×	11.8	7500	チャート

図版		遺構名	層位	分類	長さ	×	幅	×	厚さ	重さ (g)	石材
	13		HP-11	たたき石	6.70	×	6.1	×	5.1	291.5	メノウ
	14		HP-11	軽石	7.30	×	4.9	×	2.8	22.2	軽石
	15		床面	石製品	5.50	×	2.4	×	0.9	18.9	不明
Ⅲ 28	14	LH − 6	掘上土	石鏃	2.30	×	1.1	×	0.2	0.4	黒曜石
	16		掘上土	ポイント	5.60	×	3.5	×	1.1	19.7	黒曜石
	15		床面	ドリル	13.2	×	0.6	×	0.2	0.6	黒曜石
	17		掘上土	スクレイパー	2.50	×	2.6	×	0.9	6.0	黒曜石
	18		掘上土	石製品	2.40	×	3.7	×	0.5	6.6	泥岩
Ⅲ 29	5	LP − 9	覆土	スクレイパー	3.05	×	1.86	×	1.34	8.7	黒曜石
	6		覆土	スクレイパー	3.45	×	2.72	×	0.51	4.6	黒曜石
Ⅲ 30	1	LP − 10	覆土	台石	26.3	×	15.6	×	7.9	3305	安山岩
	5	LP − 12	覆土	石鏃	2.13	×	1.28	×	0.3	5.7	黒曜石
	6		覆土	ドリル	2.24	×	1.54	×	0.9	2.9	黒曜石
Ⅲ 31	4	LP − 14	覆土	石鏃	1.96	×	1.1	×	0.2	0.5	黒曜石
	5		覆土	スクレイパー	2.10	×	2.85	×	6.5	3.6	黒曜石
	6		覆土	スクレイパー	2.19	×	2.39	×	0.77	3.6	黒曜石
	7		覆土	スクレイパー	2.74	×	2.46	×	0.36	2.6	黒曜石
	8		覆土	たたき石	17.25	×	6.85	×	3.8	885.8	砂岩
	11	LP − 16	覆土	石鏃	2.12	×	1.38	×	0.34	0.8	黒曜石
Ⅲ 32	3	LF − 1〜2	覆土	土製品	2.20	×	1.5	×	1.2	3.7	
	4		覆土	土製品	3.60	×	1.5	×	1.1	6.5	
	5		覆土	石鏃	2.00	×	0.9	×	0.4	0.5	黒曜石
	6		覆土	石鏃	1.90	×	0.9	×	0.3	0.4	黒曜石
	7		覆土	スクレイパー	4.00	×	4.4	×	0.9	22.5	黒曜石
	8		覆土	スクレイパー	3.90	×	3.0	×	1.0	13.6	黒曜石
	9		覆土	すり石	14.7	×	4.7	×	2.8	250.2	砂岩
Ⅲ 34	1	LF − 12	焼土	土製品・玉	1.45	×	1.38	×	2.17	4.2	
	2		焼土	土製品・玉	1.06	×	0.95	×	1.03	1.0	
	3		焼土	土製品・玉	1.84	×	1.48	×	1.38	3.3	
	4		焼土	土製品・玉	1.52	×	(0.64)	×	1.36	(1.7)	
	5		焼土	土製品・玉	1.50	×	1.29	×	1.31	2.2	
	6		焼土	土製品・玉	1.38	×	(0.7)	×	1.19	(0.9)	
	8		焼土	土製品	(1.77)	×	0.94	×	0.84	(1.2)	
	9		焼土	土製品	(1.46)	×	0.46	×	0.43	(0.2)	
	10		焼土	石鏃	2.50	×	0.92	×	0.3	0.5	黒曜石
	11		覆土	台石	40.4	×	15.7	×	5.5	4725	安山岩
Ⅲ 33	3	LF − 13〜16	覆土	石鏃	1.92	×	1.23	×	0.28	0.6	黒曜石
	1		覆土	石鏃	1.64	×	0.86	×	0.32	0.3	黒曜石
	5		覆土	Rフレイク	2.63	×	2.58	×	0.8	2.9	黒曜石
	4		覆土	Rフレイク	3.83	×	3.76	×	1.16	12	黒曜石
	7		覆土	石斧	12.23	×	4.66	×	3.44	320.1	チャート
	2	LF − 15〜16	覆土	石鏃	2.10	×	1.0	×	0.33	0.5	黒曜石
Ⅲ 34	12	LF − 17	覆土	土製品・玉	1.51	×	1.10	×	1.10	1.4	
	13		覆土	土製品・玉	1.40	×	1.10	×	1.10	1.3	
	14		覆土	土製品・玉	1.20	×	1.40	×	1.10	1.9	
	15		覆土	土製品・玉	0.80	×	1.40	×	0.80	1.3	
	16		覆土	土製品・玉	1.2	×	(0.6)	×	(0.7)	(0.3)	
	17		覆土	Rフレイク	2.97	×	2.9	×	0.78	5.9	黒曜石
	18		覆土	Rフレイク	4.5	×	2.5	×	0.67	6.2	黒曜石
Ⅲ 35	1	LF − 23	覆土	石鏃	2.3	×	1.05	×	0.25	0.5	黒曜石
	2	LF − 24	覆土	石鏃未製品	1.9	×	1.1	×	0.3	-	
Ⅲ 36	1	LF − 30	覆土	スクレイパー	3.7	×	1.83	×	0.82	4.5	頁岩
	2	LF − 32	覆土	スクレイパー	2.67	×	3.26	×	1.12	9.7	黒曜石
	3		覆土	スクレイパー	2.3	×	3.3	×	0.95	8.9	黒曜石
	4	LF − 35	覆土	くさび形石器	2.44	×	2.55	×	1.53	9.5	黒曜石
Ⅲ 37	1	LC − 22	覆土	縄容	8.26	×	9.88	×	4.84	363.9	チャート
	2		覆土	石製品・玉	1.15	×	1.09	×	0.54	1.1	不明
	3		覆土	石製品・玉	2.30	×	1.36	×	1.04	—	ヒスイ
	4		覆土	石製品・玉	1.20	×	1.10	×	0.60	1.1	不明
	5		覆土	石製品・玉	1.40	×	1.40	×	0.60	1.5	メノウ
Ⅲ 38	1	LC − 31	覆土	Rフレイク	3.96	×	4.34	×	1.44	16.2	黒曜石
Ⅲ 40	1	KC − 19	V -3c	すり石	6.7	×	4.73	×	4.93	262	砂岩
Ⅲ 41	2		V -3c	台石	33.7	×	14	×	28.7	1046	凝灰質砂岩
	3		V -3c	台石	33.7	×	14	×	28.7	1046	凝灰質砂岩
	4		V -3c	台石	33.7	×	14	×	28.7	1046	凝灰質砂岩
	5		V -3c	台石	48	×	27.6	×	5	8179	砂岩
	6		V -3c	台石	48	×	27.6	×	5	8179	砂岩
	7		V -3c	台石片	14.8	×	8.55	×	5.26	982.4	花崗岩

表Ⅲ－22　包含層掲載土器一覧

図版	分類	調査区	層位
Ⅲ 59-1	Ⅰ a	D - 274 - a	Ⅴ
Ⅲ 59-2	Ⅰ a	D - 274 - a	Ⅵ
Ⅲ 59-3	Ⅰ a	D - 274 - c	Ⅴ
Ⅲ 59-4	Ⅰ a	F - 274 - a	Ⅴ
Ⅲ 59-5	Ⅰ a	E - 275 - d	Ⅵ
Ⅲ 59-6	Ⅰ a	D - 274 - c	Ⅴ
Ⅲ 59-7	Ⅰ a	D - 275 - c	Ⅴ
Ⅲ 59-8	Ⅰ a	F - 274 - a	Ⅴ
Ⅲ 59-9	Ⅰ a	E - 275 - a	Ⅴ
Ⅲ 59-10	Ⅰ b-2	H - 274 - a	Ⅴ -1
Ⅲ 59-11	Ⅰ b-2	J - 273 - a	Ⅴ -3
Ⅲ 59-12	Ⅰ b-2	不明 - -	不明
Ⅲ 59-13	Ⅰ b-2	J - 274 - b	Ⅴ -5a
Ⅲ 59-14	Ⅰ b-2	G - 274 - c	Ⅴ
Ⅲ 59-15	Ⅰ b-3	L - 278 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 59-16	Ⅰ b-3	H - 277 - d	Ⅴ -5b-2
Ⅲ 59-17	Ⅰ b-3	F - 279 - c	Ⅴ -5
Ⅲ 59-18	Ⅰ b-3	Q - 270 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 59-19	Ⅰ b-3	K - 276 - c	Ⅴ -5c
Ⅲ 59-20	Ⅰ b-3	S - 271 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 59-21	Ⅰ b-3	L - 276 - b	Ⅴ -5
Ⅲ 59-22	Ⅰ b-3	I - 277 - a	Ⅴ -5a
Ⅲ 59-23	Ⅰ b-3	H - 277 - a	Ⅴ -5b-2
Ⅲ 59-24	Ⅰ b-3	L - 276 - d	Ⅴ -5
Ⅲ 59-25	Ⅰ b-3	K - 276 - c	Ⅴ -5c
Ⅲ 59-26	Ⅰ b-4	F - 276 - b	Ⅴ -5
Ⅲ 59-27	Ⅰ b-4	E - 275 - d	Ⅲ
Ⅲ 59-28	Ⅰ b-4	不明 - -	不明
Ⅲ 59-29	Ⅰ b-4	Q - 270 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 59-30	Ⅱ a	M - 274 - a	Ⅴ -5d
Ⅲ 59-31	Ⅱ a	M - 274 - c	Ⅴ -5
Ⅲ 59-32	Ⅱ a	L - 275 - b	Ⅴ -5
Ⅲ 59-33	Ⅱ a	F - 280 - a	Ⅴ -5b-2
Ⅲ 59-34	Ⅱ a	J - 276 - d	Ⅴ -5
Ⅲ 59-35	Ⅱ a	I - 276 - d	Ⅴ -5b-2
Ⅲ 59-36	Ⅱ a	G - 278 - b	Ⅴ -5
Ⅲ 61-1	Ⅲ a	K - 277 - d	Ⅴ -5b
Ⅲ 61-2	Ⅲ a	Q - 270 - a	Ⅴ -3c
Ⅲ 61-3	Ⅲ a	J - 276 - c	Ⅴ -5b
Ⅲ 61-4	Ⅲ a	G - 279 - c	Ⅴ -5a
Ⅲ 61-5	Ⅲ a	L - 275 - b	Ⅴ -5
Ⅲ 61-6	Ⅲ a	E - 277 - c	Ⅴ -4
Ⅲ 61-7	Ⅲ a	G - 273 - c	Ⅲ
Ⅲ 61-8	Ⅲ a	G - 273 - c	Ⅲ
Ⅲ 62-1	Ⅲ b	E - 280 - d	Ⅴ -5a
Ⅲ 62-2	Ⅲ b-2	H - 274 - b	Ⅴ -1
Ⅲ 62-3	Ⅲ b-2	D - 273 - d	Ⅵ
Ⅲ 62-4	Ⅲ b-2	排土 - -	排土
Ⅲ 62-5	Ⅲ b-2	H - 278 - d	Ⅴ -5a
Ⅲ 62-6	Ⅲ b-2	E - 276 - 不明	攪乱
Ⅲ 62-7	Ⅲ b-2	K - 274 - c	Ⅴ -5a
Ⅲ 62-8	Ⅲ b-2	K - 275 - d	Ⅴ -5a
Ⅲ 62-9	Ⅲ b-2	R - 270 - a	Ⅴ -3c
Ⅲ 62-10	Ⅲ b-2	D - 275 - c	Ⅴ
Ⅲ 62-11	Ⅲ b-2	E - 278 - b	Ⅴ -4
Ⅲ 62-12	Ⅲ b-2	不明 - -	不明
Ⅲ 62-13	Ⅲ b-2	H - 276 - c	Ⅴ -5b
Ⅲ 62-14	Ⅲ b-2	E - 279 - b	Ⅵ
Ⅲ 62-15	Ⅲ b-2	J - 276 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 62-16	Ⅲ b-2	G - 277 - d	Ⅴ -5a
Ⅲ 62-17	Ⅲ b-2	Q - 270 - c	Ⅴ -3c
Ⅲ 62-18	Ⅲ b-2	I - 275 - a	Ⅴ -5a
Ⅲ 62-20	Ⅲ b-2	M - 273 - a	Ⅴ -5
Ⅲ 62-21	Ⅲ b-2	D - 278 - b	Ⅴ -5
Ⅲ 62-21	Ⅲ b-2	H - 273 - c	Ⅴ
Ⅲ 62-23	Ⅲ b-2	E - 278 - a	Ⅴ -5
Ⅲ 64-1	Ⅳ a	E - 278 - a	Ⅴ -5
Ⅲ 64-2	Ⅳ a	D - 276 - b	Ⅴ
Ⅲ 64-4	Ⅳ a	G - 277 - d	Ⅴ -5a
Ⅲ 64-5	Ⅳ a	E - 273 - d	Ⅴ
Ⅲ 64-6	Ⅳ a	F - 274 - c	Ⅲ
Ⅲ 64-7	Ⅳ a	E - 281 - a	Ⅴ -3
Ⅲ 64-8	Ⅳ a	E - 277 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 64-9	Ⅳ a	D - 276 - b	Ⅴ
Ⅲ 64-10	Ⅳ a	E - 279 - b	Ⅵ
Ⅲ 64-11	Ⅳ a	D - 275 - b	Ⅳ
Ⅲ 64-12	Ⅳ a	E - 275 - a	Ⅲ
Ⅲ 64-13	Ⅳ b	T - 270 - d	Ⅴ -3c
Ⅲ 64-14	Ⅳ b	E - 277 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 64-15	Ⅳ b	T - 271 - c	Ⅴ -3c
Ⅲ 64-16	Ⅳ c	H - 273 - a	Ⅴ
Ⅲ 64-17	Ⅳ b	S - 270 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 64-18	Ⅳ b	E - 280 - d	Ⅴ -3
Ⅲ 64-19	Ⅳ b	F - 279 - d	Ⅴ -3
Ⅲ 64-20	Ⅳ b	E - 279 - d	Ⅴ -3
Ⅲ 64-21	Ⅳ b	E - 277 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 64-22	Ⅳ c	G - 277 - d	Ⅴ -3
Ⅲ 64-23	Ⅳ b	D - 281 - b	Ⅴ -3
Ⅲ 64-24	Ⅳ c	H - 275 - c	Ⅴ -3
Ⅲ 64-25	Ⅳ c	表採 - -	表採
Ⅲ 64-26	Ⅳ b	E - 279 - b	Ⅴ -3
Ⅲ 64-27	Ⅳ b	L - 275 - d	Ⅴ -3c
Ⅲ 64-28	Ⅳ b	S - 271 - a	Ⅴ -3c
Ⅲ 64-29	Ⅳ b	E - 279 - c	Ⅴ -3
Ⅲ 64-30	Ⅳ b	G - 272 - d	Ⅲ -1
Ⅲ 64-31	Ⅳ b	G - 278 - d	Ⅴ -3
Ⅲ 64-32	Ⅳ c	I - 274 - a	Ⅴ -1
Ⅲ 64-33	Ⅳ b	E - 278 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 64-34	Ⅳ b	I - 276 - a	Ⅴ -3
Ⅲ 64-35	Ⅳ b	L - 276 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 64-36	Ⅳ b	D - 274 - b	Ⅴ
Ⅲ 64-3f	Ⅳ a	E - 274 - b	Ⅴ
Ⅲ 65-38	Ⅳ b	L - 273 - a	Ⅴ -3c
Ⅲ 65-39	Ⅳ b	F - 277 - a	Ⅴ -1
Ⅲ 65-40	Ⅳ b	I - 276 - a	Ⅴ -3
Ⅲ 65-41	Ⅳ b	I - 276 - b	Ⅴ -3
Ⅲ 65-42	Ⅳ b	E - 280 - b	Ⅴ -3
Ⅲ 65-43	Ⅳ b	R - 271 - a	Ⅴ -3c

図版	分類	調査区	層位
Ⅲ 65-44	Ⅳ b	S - 270 - c	Ⅴ -3c
Ⅲ 65-45	Ⅳ c	O - 273 - a	Ⅴ -3c
Ⅲ 65-46	Ⅳ c	H - 275 - d	Ⅴ -1
Ⅲ 65-47	Ⅳ c	F - 280 - b	Ⅴ -1
Ⅲ 65-48	Ⅳ c	R - 271 - c	Ⅴ -3c
Ⅲ 65-49	Ⅳ c	R - 271 - a	Ⅴ -3c
Ⅲ 65-50	Ⅳ c	Q - 270 - a	Ⅴ -3c
Ⅲ 65-51	Ⅳ c	R - 271 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 65-52	Ⅳ c	E - 275 - a	Ⅴ
Ⅲ 65-53	Ⅳ c	T - 271 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 65-54	Ⅳ c	R - 270 - b	Ⅴ -3c
Ⅲ 68-01	Ⅴ c	E - 273 - a	Ⅴ
Ⅲ 68-02	Ⅴ c	E - 273 - d	Ⅴ
Ⅲ 68-03	Ⅴ c	F - 273 - a	Ⅲ
Ⅲ 68-04	Ⅴ c	F - 273 - a	Ⅲ
Ⅲ 68-05	Ⅴ c	D - 275 - d	Ⅴ
Ⅲ 68-06	Ⅴ c	F - 277 - b	Ⅴ -1
Ⅲ 68-07	Ⅴ c	H - 276 - b	Ⅴ -1
Ⅲ 69-1	Ⅴ c	F - 273 - b	Ⅲ
Ⅲ 69-2	Ⅴ c	E - 274 - d	Ⅲ
Ⅲ 69-3	Ⅴ c	F - 273 - d	Ⅲ
Ⅲ 69-4	Ⅴ c	E - 274 - c	Ⅲ
Ⅲ 69-5	Ⅴ c	D - 275 - a	Ⅲ
Ⅲ 69-6	Ⅴ c	D - 273 - c	Ⅲ
Ⅲ 69-7	Ⅴ c	D - 273 - b	Ⅲ
Ⅲ 69-8	Ⅴ c	F - 275 - d	Ⅲ
Ⅲ 69-9	Ⅴ c	G - 274 - d	Ⅲ -4
Ⅲ 69-10	Ⅴ c	G - 274 - c	Ⅲ -4
Ⅲ 69-11	Ⅴ c	G - 275 - a	Ⅲ -4
Ⅲ 70-12	Ⅴ c	E - 277 - c	Ⅲ -5
Ⅲ 70-13	Ⅴ c	D - 278 - a	Ⅲ -5
Ⅲ 70-14	Ⅴ c	H - 274 - d	Ⅲ -5
Ⅲ 70-15	Ⅴ c	G - 275 - b	Ⅲ -5
Ⅲ 70-16	Ⅴ c	F - 278 - d	Ⅲ -5
Ⅲ 70-17	Ⅴ c	I - 273 - a	Ⅲ -5
Ⅲ 70-18	Ⅴ c	H - 275 - a	Ⅲ -5
Ⅲ 70-19	Ⅴ c	E - 278 - b	Ⅲ -5
Ⅲ 70-20	Ⅴ c	D - 278 - b	Ⅲ -5
Ⅲ 70-21	Ⅴ c	D - 278 - b	Ⅲ -5
Ⅲ 70-22	Ⅴ c	D - 279 - a	Ⅲ -5
Ⅲ 70-23	Ⅴ c	D - 275 - b	Ⅳ
Ⅲ 70-24	Ⅴ c	F - 277 - c	Ⅲ -5
Ⅲ 71-1	Ⅴ c	E - 273 - d	Ⅴ
Ⅲ 71-3	Ⅴ c	E - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 72-4	Ⅴ c	F - 273 - b	Ⅲ
Ⅲ 72-5	Ⅴ c	F - 277 - a	Ⅴ -1
Ⅲ 72-6	Ⅴ c	E - 275 - a	Ⅲ
Ⅲ 72-7	Ⅴ c	E - 274 - a	Ⅴ
Ⅲ 72-8	Ⅴ c	K - 274 - d	Ⅴ -1
Ⅲ 72-9	Ⅴ c	E - 274 - d	Ⅴ
Ⅲ 72-10	Ⅴ c	D - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 72-11	Ⅴ c	E - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 72-12	Ⅴ c	E - 274 - c	Ⅴ
Ⅲ 72-13	Ⅴ c	E - 273 - c	Ⅴ
Ⅲ 72-14	Ⅴ c	E - 274 - b	Ⅴ

図版	分類	調査区	層位
Ⅲ 72-15	Ⅴ c	E - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 72-16	Ⅴ c	H - 274 - a	Ⅴ -1
Ⅲ 72-17	Ⅴ c	M - 273 - b	Ⅴ -1
Ⅲ 72-18	Ⅴ c	I - 274 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 72-19	Ⅴ c	H - 274 - b	Ⅴ -1
Ⅲ 72-20	Ⅴ c	I - 276 - a	Ⅴ -1
Ⅲ 72-21	Ⅴ c	F - 280 - b	Ⅴ -1
Ⅲ 72-22	Ⅴ c	E - 274 - c	Ⅴ
Ⅲ 72-23	Ⅴ c	F - 275 - c	Ⅲ
Ⅲ 73-24	Ⅴ c	E - 277 - d	Ⅴ
Ⅲ 73-25	Ⅴ c	F - 277 - a	Ⅴ -1
Ⅲ 73-26	Ⅴ c	E - 274 - b	Ⅴ
Ⅲ 73-27	Ⅴ c	H - 275 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 73-28	Ⅴ c	E - 274 - d	Ⅴ
Ⅲ 73-29	Ⅴ c	E - 274 - c	Ⅴ
Ⅲ 73-30	Ⅴ c	E - 273 - a	Ⅴ
Ⅲ 73-31	Ⅴ c	D - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 73-32	Ⅴ c	E - 274 - a	Ⅳ
Ⅲ 73-34	Ⅴ c	D - 275 - a	Ⅳ
Ⅲ 73-35	Ⅴ c	E - 274 - a	Ⅴ
Ⅲ 73-36	Ⅴ c	F - 274 - a	Ⅴ
Ⅲ 74-37	Ⅴ c	F - 279 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 74-38	Ⅴ c	E - 274 - a	Ⅴ
Ⅲ 74-39	Ⅴ c	D - 273 - a	Ⅴ
Ⅲ 74-40	Ⅴ c	I - 273 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 74-41	Ⅴ c	I - 275 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 74-42	Ⅴ c	F - 276 - d	Ⅴ
Ⅲ 74-43	Ⅴ c	J - 276 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 74-44	Ⅴ c	J - 273 - c	Ⅴ -1
Ⅲ 74-45	Ⅴ c	F - 275 - b	Ⅴ
Ⅲ 75-46	Ⅴ c	D - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 75-47	Ⅴ c	D - 273 - a	Ⅴ
Ⅲ 75-48	Ⅴ c	E - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 75-49	Ⅴ c	E - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 75-50	Ⅴ c	F - 273 - d	Ⅴ
Ⅲ 75-51	Ⅴ c	E - 273 - b	Ⅴ
Ⅲ 75-52	Ⅴ c	G - 276 - d	Ⅴ -1
Ⅲ 75-53	Ⅴ c	E - 272 - b	Ⅴ -3
Ⅲ 75-54	Ⅴ c	I - 273 - b	Ⅴ -1
Ⅲ 75-55	Ⅴ c	F - 273 - d	Ⅴ
Ⅲ 75-56	Ⅴ c	F - 274 - a	Ⅴ

表Ⅲ－23　包含層掲載石器・石製品・土製品一覧

図版	分類	調査区	層位	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)
Ⅲ 76-01	石鏃	G - 274 - 不明	Ⅲ	1.68 × 1.52 × 0.30	0.6
Ⅲ 76-02	石鏃	E - 274 - a	Ⅲ	2.08 × 1.61 × 0.25	0.7
Ⅲ 76-03	石鏃	D - 276 - b	Ⅲ	1.60 × 0.85 × 0.25	0.1
Ⅲ 76-04	石鏃	G - 275 - b	Ⅲ -4	2.04 × 1.25 × 0.40	0.9
Ⅲ 76-05	石鏃	E - 275 - b	Ⅲ	2.25 × 1.35 × 0.23	0.6
Ⅲ 76-06	石鏃	D - 274 - c	Ⅲ	2.06 × 1.17 × 0.34	0.7
Ⅲ 76-07	石鏃	F - 273 - b	Ⅲ	1.24 × 0.93 × 0.31	0.3
Ⅲ 76-08	石鏃	G - 274 - a	Ⅲ	1.70 × 0.85 × 0.20	0.3
Ⅲ 76-09	石鏃	E - 274 - c	Ⅲ	1.88 × 1.18 × 0.37	0.6
Ⅲ 76-10	石鏃	E - 273 - c	Ⅴ	2.16 × 1.17 × 0.36	0.7
Ⅲ 76-11	石鏃	G - 274 - d	Ⅲ	1.92 × 1.055 × 0.27	0.3
Ⅲ 76-12	石鏃	G - 273 - a	Ⅲ	2.02 × 0.99 × 0.28	0.4
Ⅲ 76-13	石鏃	F - 273 - d	Ⅲ	2.05 × 0.92 × 0.34	0.4
Ⅲ 76-14	石鏃	D - 273 - b	Ⅲ	2.37 × 1.15 × 0.51	0.6
Ⅲ 76-15	石鏃	D - 275 - c	Ⅲ	3.00 × 1.15 × 0.31	0.7
Ⅲ 76-16	石鏃	F - 273 - d	Ⅲ	3.37 × 1.14 × 0.38	0.9
Ⅲ 76-17	石鏃	D - 274 - c	Ⅲ	3.05 × 1.46 × 0.35	1.1
Ⅲ 76-18	石鏃	F - 273 - d	Ⅲ	1.86 × 1.16 × 0.29	0.5
Ⅲ 76-19	石鏃	E - 276 - c	Ⅲ -4	3.08 × 1.28 × 0.29	0.8
Ⅲ 76-20	ドリル	E - 276 - a	Ⅲ	2.45 × 2.30 × 0.70	2.7
Ⅲ 76-21	ドリル	E - 276 - a	Ⅲ	2.45 × 1.02 × 0.29	0.8
Ⅲ 76-22	コンバージェント	E - 276 - b	Ⅲ -4c	2.27 × 0.62 × 0.19	0.2
Ⅲ 76-23	スクレイパー	D - 273 - b	Ⅲ	4.11 × 3.55 × 1.48	20.5
Ⅲ 76-24	スクレイパー	F - 274 - a	Ⅲ	3.34 × 4.23 × 0.99	14.6
Ⅲ 76-25	スクレイパー	E - 275 - d	Ⅲ	2.90 × 3.20 × 0.70	6.8
Ⅲ 76-26	スクレイパー	E - 274 - b	Ⅲ	2.60 × 2.97 × 1.00	8.2
Ⅲ 76-27	スクレイパー	D - 273 - c	Ⅳ	5.18 × 4.94 × 0.70	18.6
Ⅲ 76-28	スクレイパー	E - 274 - a	Ⅳ	2.85 × 3.35 × 1.11	8.8
Ⅲ 76-29	スクレイパー	D - 275 - c	Ⅳ	4.40 × 2.57 × 0.82	7.8
Ⅲ 76-30	スクレイパー	D - 275 - a	Ⅳ	5.20 × 4.56 × 1.16	25.2
Ⅲ 76-31	スクレイパー	D - 275 -	Ⅲ	2.76 × 2.00 × 0.72	4.1
Ⅲ 76-32	スクレイパー	I - 277 - d	Ⅲ -5	3.70 × 2.10 × 0.90	9.0
Ⅲ 76-33	スクレイパー	D - 275 - c	Ⅳ	6.35 × 3.52 × 0.78	16.3
Ⅲ 76-34	スクレイパー	Q - 272 - a	Ⅲ -5	6.94 × 3.05 × 0.8	15.8
Ⅲ 76-35	スクレイパー	E - 273 - c	Ⅲ	4.48 × 1.95 × 0.44	3.7
Ⅲ 76-36	スクレイパー	F - 274 - b	Ⅲ	7.65 × 2.85 × 1.05	23.6
Ⅲ 76-37	スクレイパー	I - 273 - a	Ⅲ -1	5.00 × 2.97 × 0.83	12
Ⅲ 76-38	スクレイパー	D - 275 -	Ⅲ	3.74 × 2.23 × 0.73	6.4
Ⅲ 76-39	スクレイパー	D - 275 - a	Ⅳ	2.83 × 3.55 × 0.9	9.1
Ⅲ 76-40	スクレイパー	F - 273 - a	Ⅲ	7.05 × 5.1 × 1.58	52.1
Ⅲ 76-41	スクレイパー	E - 273 - c	Ⅲ	5.11 × 7.56 × 1.13	59.4
Ⅲ 76-42	くさび型石器	F - 274 - b	Ⅲ	1.77 × 0.965 × 0.74	1.1
Ⅲ 76-43	Rフレイク	F - 274 - d	Ⅲ	1.7 × 2.48 × 0.45	1.8
Ⅲ 77-44	Rフレイク	E - 273 - a	Ⅲ	4.2 × 3.55 × 0.92	12.6
Ⅲ 77-45	スクレイパー	E - 273 - c	Ⅲ	5.8 × 2.72 × 0.84	9.5
Ⅲ 77-46	Rフレイク	H - 273 - a	Ⅲ -1	2.42 × 1.78 × 0.42	1.5
Ⅲ 77-47	Rフレイク	F - 273 - d	Ⅲ	1.36 × 3.1 × 0.42	1.6
Ⅲ 77-48	Rフレイク	F - 273 - d	Ⅲ	2.78 × 2.1 × 0.59	3.8
Ⅲ 77-49	コア	F - 276 - a	Ⅲ -4c	3.26 × 4.01 × 1.93	31.5
Ⅲ 77-50	石斧	E - 274 - d	Ⅲ	8.9 × 4.36 × 1.67	138.9
Ⅲ 77-51	たたき石	F - 273 - d	Ⅲ	11.58 × 8.92 × 3.57	545.8
Ⅲ 77-52	すり石	H - 273 - b	Ⅲ -1	10.9 × 11.5 × 15.7	182.6
Ⅲ 77-53	砥石	E - 274 - d	Ⅲ	5.12 × 5.2 × 2.04	47.7

図版	分類	調査区	層位	長さ	×	幅	×	厚さ (cm)	重量 (g)
Ⅲ 77-54	台石	H - 273 - b	Ⅲ-5	19.7	×	11.4	×	8.3	2280
Ⅲ 77-55	いかり石	F - 278 - d	Ⅲ-5	28	×	19.8	×	12.7	8500
Ⅲ 78-100	スクレイパー	D - 278 - b	Ⅴ-1	3.6	×	3.7	×	1.3	18.1
Ⅲ 78-56	石鏃	H - 277 - b	Ⅴ-5b-1	1.57	×	0.91	×	0.24	0.2
Ⅲ 78-57	石鏃	D - 276 - b	Ⅴ	1.8	×	0.7	×	0.15	0.2
Ⅲ 78-58	石鏃	M - 278 - d	Ⅴ-3c	2.1	×	1	×	0.1	0.3
Ⅲ 78-59	石鏃	D - 277 - b	Ⅴ	2	×	1	×	0.3	0.7
Ⅲ 78-60	石鏃	E - 275 - a	Ⅴ	2.7	×	1.25	×	0.35	1
Ⅲ 78-61	石鏃	F - 274 - a	Ⅴ	2.4	×	1.2	×	0.4	0.9
Ⅲ 78-62	石鏃	E - 274 - c	Ⅴ	2.3	×	1.2	×	0.4	0.9
Ⅲ 78-63	石鏃	H - 277 - a	Ⅴ-5a	3.3	×	1.58	×	0.53	2.4
Ⅲ 78-64	石鏃	E - 274 - a	Ⅴ	1.4	×	1.1	×	0.3	0.4
Ⅲ 78-65	石鏃	F - 273 - d	Ⅴ	1.74	×	1.01	×	0.23	0.3
Ⅲ 78-66	石鏃	E - 274 - b	Ⅴ	2	×	1.1	×	0.3	0.5
Ⅲ 78-67	石鏃	N - 273 - d	Ⅴ-1	2	×	1.2	×	0.4	0.7
Ⅲ 78-68	石鏃	N - 274 - a	Ⅴ-3	1.9	×	1.2	×	0.4	0.7
Ⅲ 78-69	石鏃	F - 277 - c	Ⅴ-1	2	×	1.3	×	0.3	0.6
Ⅲ 78-70	石鏃	E - 273 - c	Ⅲ	2.03	×	0.95	×	0.28	0.4
Ⅲ 78-71	石鏃	F - 273 - c	Ⅴ	2.58	×	1.17	×	0.27	0.6
Ⅲ 78-72	石鏃	E - 273 - c	Ⅴ	2.2	×	1.4	×	0.3	0.6
Ⅲ 78-73	石鏃	E - 279 - c	Ⅴ-3	3	×	1.4	×	0.4	1.2
Ⅲ 78-74	石鏃	H - 277 - d	Ⅴ-1	2.81	×	1.2	×	0.35	0.9
Ⅲ 78-75	石鏃	E - 275 - b	Ⅴ	2.53	×	1.41	×	0.52	1.4
Ⅲ 78-76	石鏃	M - 273 - a	Ⅴ-3	3	×	1.5	×	0.5	1.8
Ⅲ 78-77	石鏃	U - 270 - b	Ⅴ-3c	3.4	×	1.9	×	0.71	3.4
Ⅲ 78-78	石鏃	F - 273 - a	Ⅴ	2.4	×	1	×	0.2	0.4
Ⅲ 78-79	石鏃	I - 273 - c	Ⅴ-1	2.7	×	1.3	×	0.4	1.1
Ⅲ 78-80	石鏃	I - 274 - a	Ⅴ-3	2.4	×	1.2	×	0.4	0.9
Ⅲ 78-81	石鏃	H - 277 - d	Ⅴ-1	2	×	1.3	×	0.4	0.9
Ⅲ 78-82	ドリル	D - 276 - b	Ⅴ	3	×	2.2	×	0.9	3.8
Ⅲ 78-83	ドリル	I - 276 - a	Ⅴ-1	2.355	×	1.68	×	0.65	2
Ⅲ 78-84	ドリル	E - 273 - c	Ⅴ	2.3	×	1.8	×	0.4	2.4
Ⅲ 78-85	ドリル	F - 277 - a	Ⅴ-1	3.31	×	1.72	×	0.7	4.5
Ⅲ 78-86	ドリル	H - 277 - c	Ⅴ-5a	2.4	×	0.65	×	0.3	0.5
Ⅲ 78-87	ポイント	S - 270 - c	Ⅴ-5	4.32	×	1.3	×	0.365	2
Ⅲ 78-88	つまみ付ナイフ	F - 279 - c	Ⅴ-5	5.59	×	1.82	×	0.55	6.2
Ⅲ 78-89	つまみ付ナイフ	L - 274 - a	Ⅴ-3	7.7	×	2.2	×	0.7	11.9
Ⅲ 78-90	つまみ付ナイフ	E - 277 - d	Ⅴ-3	4.3	×	1.5	×	0.7	5.3
Ⅲ 78-91	つまみ付ナイフ	L - 273 - c	Ⅴ-5	9.2	×	4.94	×	0.99	32.9
Ⅲ 78-92	スクレイパー	F - 276 - b	Ⅴ	8.1	×	4.2	×	1.4	49.2
Ⅲ 78-93	スクレイパー	E - 273 - d	Ⅴ	5.2	×	5	×	1.2	36
Ⅲ 78-94	スクレイパー	I - 277 - a	Ⅴ-1	2.3	×	2.4	×	0.5	4.7
Ⅲ 78-95	スクレイパー	Q - 270 - d	Ⅴ-1	2.6	×	2.4	×	0.6	4.2
Ⅲ 78-96	スクレイパー	E - 274 - a	Ⅴ	2.2	×	2.5	×	0.6	3.6
Ⅲ 78-97	スクレイパー	D - 274 - b	Ⅴ	2.3	×	2	×	0.7	3.3
Ⅲ 78-98	スクレイパー	D - 273 - a	Ⅴ	"2.6"	×	3.2	×	0.5	5.9
Ⅲ 78-99	スクレイパー	E - 274 - a	Ⅴ	2.6	×	3.1	×	0.8	8
Ⅲ 79-101	スクレイパー	E - 274 - c	Ⅴ	3.9	×	3.9	×	0.9	12.9
Ⅲ 79-102	スクレイパー	I - 273 - a	Ⅴ-1	3.22	×	4.05	×	1	13.3
Ⅲ 79-103	スクレイパー	F - 273 - d	Ⅴ	4.76	×	6.05	×	1.67	49.9
Ⅲ 79-104	スクレイパー	E - 274 - b	Ⅴ	2.9	×	3.4	×	0.98	11.8
Ⅲ 79-105	スクレイパー	D - 276 - b	Ⅴ	1.1	×	1.8	×	0.4	1.4
Ⅲ 79-106	スクレイパー	F - 277 - b	Ⅴ-1	7.2	×	3.5	×	1.1	27.6
Ⅲ 79-107	スクレイパー	D - 273 - c	Ⅴ	6.1	×	3.2	×	1.3	23.1
Ⅲ 79-108	スクレイパー	E - 275 - b	Ⅴ	5	×	3.5	×	0.7	15.1

図版	分類	調査区	層位	長さ	×	幅	×	厚さ (cm)	重量 (g)
Ⅲ 79-109	スクレイパー	E - 273 - c	V	4.5	×	3.4	×	1.0	16.6
Ⅲ 79-110	スクレイパー	R - 276 - a	V	4.5	×	3.8	×	0.8	
Ⅲ 79-111	スクレイパー	E - 273 - a	V	6.9	×	2.4	×	0.7	15.6
Ⅲ 79-112	くさび形石器	E - 281 - a	V -3	3.0	×	3.6	×	1.0	11.9
Ⅲ 79-113	くさび形石器	E - 274 - d	V	1.5	×	1.67	×	0.81	1.8
Ⅲ 79-114	くさび形石器	E - 274 - c	V	1.6	×	1.4	×	0.9	2.3
Ⅲ 79-115	Rフレイク	G - 278 - d	V -1	4.2	×	2.4	×	0.6	6.7
Ⅲ 79-116	Rフレイク	D - 276 - b	V	1.8	×	2.3	×	0.5	1.5
Ⅲ 79-117	Rフレイク	T - 270 - a	V -3c	3.7	×	2.2	×	0.8	5.5
Ⅲ 79-118	Rフレイク	E - 273 - c	V	3.2	×	1.2	×	0.4	1.2
Ⅲ 79-119	Rフレイク	F - 273 - b	V	1.6	×	2.6	×	0.5	3.0
Ⅲ 79-120	Rフレイク	D - 276 - b	V	2.8	×	1	×	0.3	1.1
Ⅲ 79-121	コア	E - 273 - c	V	3.0	×	5.1	×	2.5	34.6
Ⅲ 79-122	コア	E - 273 - b	V	3.9	×	5.3	×	1.6	31.6
Ⅲ 79-123	石斧	J - 278 - d	V -5	8.1	×	2.5	×	0.9	28.9
Ⅲ 79-124	石斧	I - 273 - b	V -5b-1	10.2	×	4.8	×	1.5	118.4
Ⅲ 79-125	石斧	L - 278 - a	V -3c	10.1	×	4.3	×	1.2	80.2
Ⅲ 79-126	石斧	L - 275 - d	V -5	11.0	×	4.6	×	1.95	156.4
Ⅲ 80-127	石斧	D - 277 - c	V -3	9.2	×	3.6	×	1.5	88.3
Ⅲ 80-128	石斧	D - 277 - c	V -3	9.9	×	4	×	1.4	98.6
Ⅲ 80-129	石斧	D - 277 - c	V -3	11.3	×	4.2	×	1.9	156.0
Ⅲ 80-130	石斧	E - 278 - a	V -1	12.0	×	4.2	×	2.5	186.8
Ⅲ 80-131	石斧	K - 277 - a	V -5	12.9	×	5	×	2.6	287.8
Ⅲ 80-132	石斧	D - 277 - c	V -3	12.9	×	4.2	×	1.7	179.6
Ⅲ 80-133	石斧	T - 271 - a	V -3c	17.6	×	4.6	×	2.2	341.4
Ⅲ 80-134	石斧	E - 273 - c	V	9.3	×	3.5	×	1.9	115.9
Ⅲ 80-135	石斧	H - 275 - a	V -1	7.3	×	5.5	×	3.2	225.8
Ⅲ 80-136	石斧	M - 273 - a	V -5	3.06	×	2.8	×	0.46	700.0
Ⅲ 80-137	石斧	G - 278 - d	V -5a	3.9	×	3.1	×	1.1	19.2
Ⅲ 80-138	石斧	D - 277 - c	V -3	11.0	×	5	×	1.3	149.5
Ⅲ 80-139	石斧	I - 276 - c	V -5b	9.2	×	4.2	×	1.4	71.1
Ⅲ 80-140	たたき石	E - 277 - c	V -1	12.63	×	6.63	×	4.24	281.6
Ⅲ 80-141	たたき石	S - 270 - c	V -3c	12.0	×	8.69	×	3.8	567.5
Ⅲ 81-142	たたき石	D - 278 - b	V -3	11.56	×	6.97	×	6.7	640.5
Ⅲ 81-143	たたき石	I - 276 - c	V -1	9.73	×	11.1	×	8.55	1196.5
Ⅲ 81-144	たたき石	F - 277 - c	V -3	12.5	×	7.55	×	4.5	609.0
Ⅲ 81-145	断面三角すり石	L - 273 - b	V -5	7.0	×	15.1	×	6.3	783.9
Ⅲ 81-146	断面三角すり石	Q - 270 - d	V -3c	7.4	×	9.2	×	5.2	504.1
Ⅲ 81-147	すり石	Q - 270 - b	V -3c	9.2	×	16.8	×	4.3	1076
Ⅲ 81-148	北海道式石冠	M - 274 - d	V -5	7.8	×	12.2	×	6.2	944.6
Ⅲ 81-150	砥石	G - 277 - b	V -5a	6.39	×	7.5	×	3.12	224.8
Ⅲ 81-151	砥石	J - 273 - a	V -3	6.46	×	5.62	×	3.19	158.2
Ⅲ 81-152	砥石	D - 273 - c	Ⅶ	6.2	×	8.23	×	1.3	75.4
Ⅲ 81-153	石錘	H - 276 - a	V -3	7.85	×	6.04	×	1.64	119.6
Ⅲ 81-154	礫器	D - 278 - d	V -1	14.6	×	16.3	×	7.4	1785.2
Ⅲ 81-155	いかり石	H - 276 - b	V -1	18.0	×	17.8	×	9.5	4190
Ⅲ 82-156	石製品	E - 273 - b	V	10.8	×	1.7	×	1.1	36.4
Ⅲ 82-157	石製品	E - 274 - d	V	4.4	×	1.1	×	0.7	5.4
Ⅲ 82-158	石製品	H - 273 - d	V	5.5	×	4.5	×	1.4	14.5
Ⅲ 82-159	玉	E - 275 - d	V	1.1	×	1.4	×	1.3	1.8
Ⅲ 82-160	曲玉	E - 275 - d	V	4.09	×	1.385	×	0.86	6.8
Ⅲ 82-161	曲玉	F - 274 - b	Ⅲ	5.1	×	1.65	×	1.12	14.5

Ⅳ　キウス７遺跡（2）

1. 立地と環境（図Ⅳ－1）

キウス７遺跡は馬追丘陵の西側丘麓に流れるキウス川左岸の標高40.0～46.0mの段丘上に広がっている。昨年度に続き二回目となる今回の調査は遺跡西端部を対象に実施した。

東西に長い調査区域は横断自動車道建設に必要な工事用道路の予定範囲に沿って設けらており、調査に入る前の環境は二次林が主体となる雑木林で、地形は東からのびる舌状台地とそれに続く北と西に向く両斜面からなっている。いずれも、キウス川の流路による浸食が原因で形成された地形であるが、河川に面した部位以外の土層の保存状況は良好である。

遺跡名の「キウス」は、古い地名に由来するもので、明治43年製版の地形図には現在の「中央」あたりの地名を「キウス」、更に明治29年製版の地形図では馬追沼に入るオルイカ川の小支流を「キウシ」と記載している。『北海道蝦夷語地名解』（永田方正　1891）によると、「キウス」は「Kiushi・キウシ＝鬼茅大キ處・川ノ名」、また「オルイカ」は「Oruika・オルイカ・川尻ノ橋」と記載されている。このことから、旧地名の「キウス」の由来もこの川の名称によると考えられる。

2. 調査区の設定（図Ⅳ－2）

昨年度の調査ではセンター杭STA.143+00から143+40を視準した直線と、これに直交しSTA.143+00を通る直線とを基線とする4m間隔の方格（グリッド）割りがおこなわれた。方格の区画線には建設予定の道路の下り車線側から上り車線側へ向かってアルファベット、千歳市側から夕張市側へ向かってアラビア数字による呼称を与え、STA.143+00を通る区画線をＭラインおよび100ラインとした。方格の交点に設置した杭は区画線名の組み合わせによって「M-100」のように呼称し、4m四方の各グリッドにも下り車線側と千歳市側を面する区画線の名称によって杭と同様の呼称を与えた。従ってM-100杭の上り車線側・夕張市側にある区画がM-100グリッドと呼ばれることになる。さらに必要に応じて各グリッドを2m四方の小グリッド４個に区画し、グリッド杭に接するものから反時計回りにａ・ｂ・ｃ・ｄの呼称を与えた（図Ⅳ-2）。

表Ⅲ－1　土層別遺構数

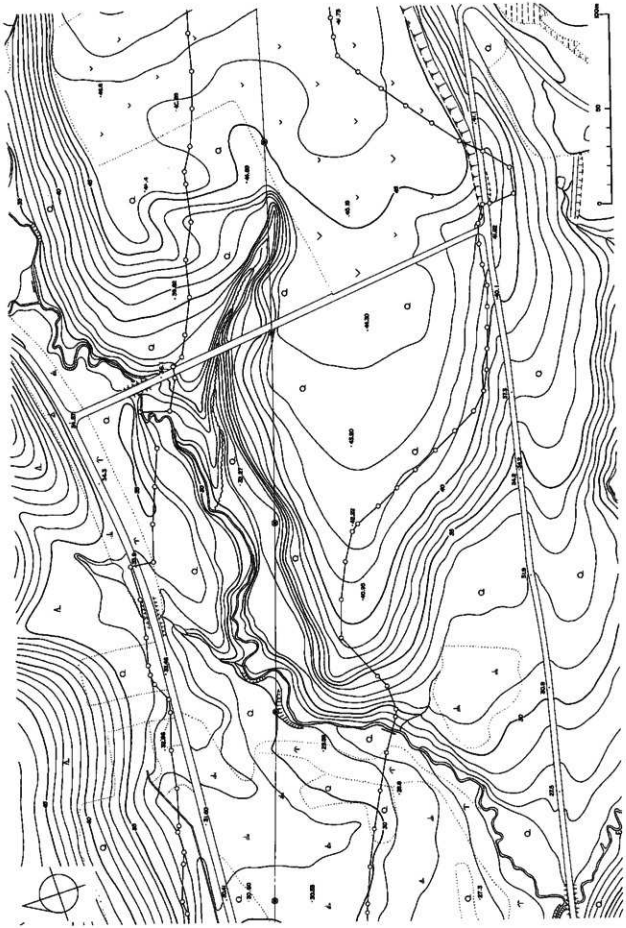
	Ta-c層上位の遺構（U）	Ta-c層下位の遺構（L・K・C）	計
住居跡（H）	0	4	4
土壙（P）	0	6	6
Ｔピット（TP）	0	4	4
焼土（F）	4	10	14
炭化物集中（C）	1	1	2
計	5	25	30

表Ⅲ－2　遺構出土遺物数

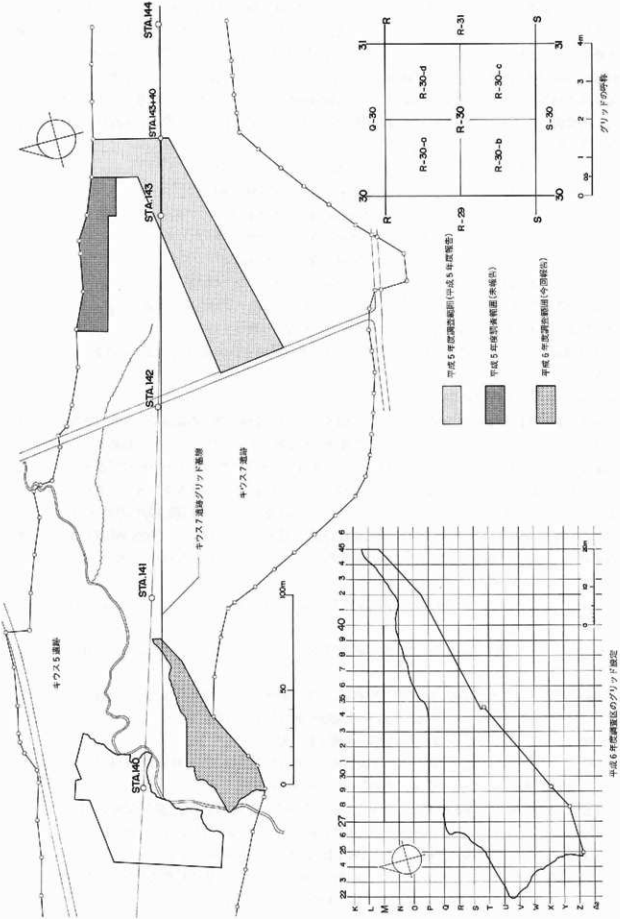
	遺構	土器	石器類	土製品	石製品	自然遺物	計
Ta-c層上位	UF	0	0	0	0	有	0
	UC	0	0	0	0	有	0
Ta-c層下位	LH	31	640	0	0	有	671
	LP	200	34	0	0	有	234
	TP	2	4	0	0	無	6
	LF	1	0	0	0	有	1
	LC	0	0	0	0	有	0
	計	234	678	0	0	－	912

表Ⅳ－3　包含層別出土遺物数

	土器	剥片石器	礫石器	剥片石屑等	礫等	石製品	自然遺物	計
Ⅲ層	216	7	7	25	40	1	有	296
Ⅳ層	6	0	1	0	7	0	無	14
Ⅴ層	1,374	17	14	60	128	1	有	1,594
Ⅵ層	23	3	3	3	19	0	無	51
排土	0	0	0	1	1	0	無	2
不明	7	2	1	2	166	0	無	178
計	1,626	29	26	91	361	2	－	2,135



図Ⅳ－１　遺跡周辺の地形


STA.144
STA.143-40
STA.143
STA.142
STA.141
STA.145
キウス5遺跡
キウス7遺跡グリッド基準
キウス7遺跡
100m
50
0
R-30-a
R-30-b
R-30-c
R-30-d
R-29
R-30
R-31
Q-30
S-30
30
31
R
S
グリッドの呼称
平成5年度調査範囲(平成5年度確認)
平成5年度特殊表土剥離(未確認)
平成6年度調査範囲(今回報告)
平成6年度調査区のグリッド設定

図Ⅳ−2　調査区の設定

本年度の調査でもこの方格を踏襲したが、センター杭STA.143+00および143+40が工事の進行によって撤去されていたので、座標計算によって方格杭M-27とM-40を設置し、前者から後者を視準した直線を基線として方格割りをおこない、これを平面位置の測量の基準とした。センター杭STA.143+00・STA.143+40と方格杭M-27・M-40の座標値、およびM-27・M-40の設置に当たって基準としたセンター杭STA.140+40の座標値とSTA.140+40からSTA.140+60に向かう方向角は下記の通りである。センター杭の座標値と方向角は日本道路公団札幌建設局から提供して頂いた。各座標値は平面直角座標系第ⅩⅡ系（建設省告示第952号）中の数値である。

STA.143+00	X=－124,794.7884 Y=－42,237.2702
STA.143+40	X=－124,805.4335 Y=－42,198.7130
M-27	X=－124,717.0792 Y=－42,518.8838
M-40	X=－124,730.9182 Y=－42,468.7334
STA.140+40	X=－124,716.9471 Y=－42,466.3567
STA.140+40からSTA.140+60への方向角	108° 26′ 08.37″

なお実際の方格杭設置は1㎜・20″単位デジタル表示の光波トランシットによっておこなったので、杭の位置には座標値・方向角入出力の精度に起因する誤差が伴っている。

水準測量については道路公団が工事のためにセンター杭STA.140+80付近に設置した基準点T-17（標高31.975m）を基準とした。

3. 土層（図Ⅳ－３・４）

樺前ｃ降下軽石（Ta-c）を挟むⅢ層とⅤ層の黒色土が主な遺構、遺物の包含層である。基本的には昨年度報告の土層と同じで前回同様千歳周辺で確認される樺前ｂ降下軽石（Ta-b）、樺前ｄ降下スコリア（Ta-d1・2）は見あたらない。今回の調査区では台地縁辺と斜面とではⅤ層の下位層で若干の違いが認められた。斜面の特に下位の堆積は、Ⅵ層の層厚が不均一でⅦ層より下は水等の営力によると考えられる二次堆積の厚いEn-a（En-L＞En-P）が続く。これらの土層の上位からは縄文時代早期（Ⅰ群b-3類土器）の遺構、遺物が見つかっており、それ以前に大きな地形の変化があった可能性がある。また、遺跡西端の河川に面した部分は、図Ⅳ－４の土層断面からⅢ層形成以降に浸食されたと考えられる。

Ⅰ層　：　黒褐（Hue2.5Y3/1）表土層

Ⅱ-1層　：　灰白（Hue10YR7/1）樺前ａ降下軽石　粒径（10～3㎜）で大きく二つに分層した内の上位。

Ⅱ-2層　：　灰褐（Hue10YR4/2）樺前ａ降下軽石　粒径（3～1㎜以下）で大きく二つに分層した内の下位。

Ⅲ層　：　黒（Hue10YR1.7/1）千歳周辺で「第Ⅰ黒色土層」とされるものに相当する。擦文式土器、続縄文式土器、縄文時代晩期後葉の遺構・遺物が見つかっている。

Ⅳ層　：　にぶい黄褐（Hue10YR5/4）樺前ｃ降下軽石

Ⅴ層　：　黒（Hue10yr2/1～3/1）千歳周辺で「第Ⅱ黒色土層」とされるものに相当する。縄文時代後・晩期の遺構、遺物が見つかっている。

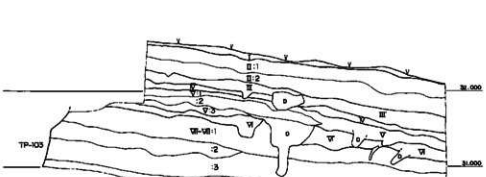
Ⅵ層　：　暗褐（Hue10YR3/3）Ⅴ層とⅦ層の漸移層。縄文時代早期後葉の遺物を含む。

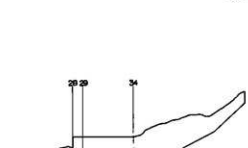
Ⅶ層　：　オリーブ褐（Hue2.5Y4/3）恵庭ａ降下軽石（En-a）の風化ローム層（En-L）。

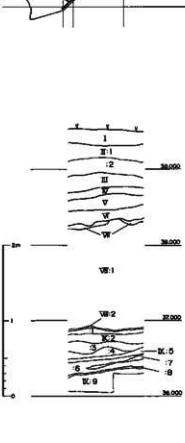
Ⅷ層　：　黄褐（Hue2.5Y4/3）恵庭ａ降下軽石（En-a）。層厚約1.3ｍ。

Ⅸ-1～9層：9枚に分層される火山噴出物起源の堆積層である。各層の起源は現在分析中である。

※土層の色調説明は、『標準土色帖 1994年版』を使用した。

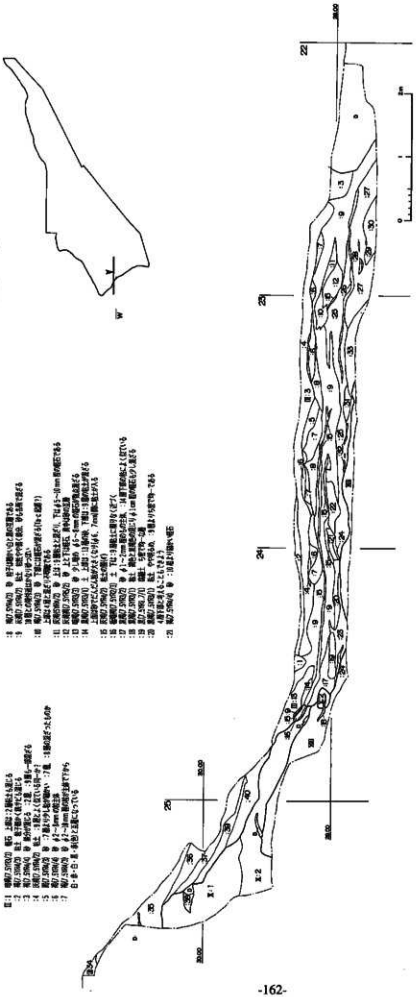






Ⅰ　黒褐(Hue2.5Y3/1)　後土層
Ⅱ:1　灰白(Hue10YR7/1)　粒径 10～3 mm のパミスで構成される
上から下に向かって粒径が小さくなる傾向が認著
:2　粒径 3～1 mm 以下の Ta-a の間に 8～10 枚のフォールユニット
(灰黄褐(Hue10YR4/2)　粒径 1 mm 以下)を含む
Ⅲ　黒(Hue10YR1.7/1)　遺物を含む腐植土層　上部には炭化物の集中が
広い範囲で出土　遺物は縄文・弥縫文・縄文後期のものが少量出土
Ⅳ　にぶい黄褐(Hue10YR5/4)　Ta-c1～2 7　上下層との境界は不明瞭
部分的に土壌化がかなり進んでいる
Ⅴ:1　黒(Hue10YR2/1)～黒褐(Hue10YR3/1)　腐植土層
縄文時代早期・後期～晩期の遺構・遺物を含む
上下層に分かれて上層にはテフラ起源と思われる細片が混入
:2　暗灰黄(Hue2.5Y4/2)　Ⅶ~Ⅶ≫Ⅴ　TP-105 掘り上げ土
:3　:1に同じ
Ⅵ　暗褐(Hue10YR3/3)　海移層　縄文時代早期の遺物を含む
Ⅶ~Ⅶ　二次堆積による層である
:1　暗灰黄(Hue2.5Y4/2)　Ⅶ≫Ⅶ　Ta-d2 に類似した起源不明のパミスをわずかに含む
:2　黄灰(Hue2.5Y5/3)　Ⅶ≪Ⅶ　かたくしまっている
:3　にぶい黄褐(Hue10YR4/3)　Ⅶ≫Ⅶ
:4　にぶい黄褐(Hue10YR5/4)　粘性に乏しい
Ⅶ　オリーブ褐(Hue2.5Y4/3)　En-P ローム層　厚さ約 5 cm
Ⅷ:1　黄褐(Hue2.5Y5/4)　En-P パミス　厚さ約 1.3 m
:2　黒褐(Hue2.5Y3/1)　岩片(径 8 mm 以下)　厚さ 3 cm
Ⅸ:1　にぶい黄褐(Hue10YR5/4)　厚さ 4 cm 程の粘土層　上面に火山灰をのせる
層上位 5 mm 程の厚さで黄褐(Hue10YR5/8)に色調が変化している
この部分はさらに粒子の細かい粘土である
:2　にぶい黄褐(Hue10YR5/3)　粘土＋砂の互層
:3　黒褐(Hue10YR3/1)　砂層
:4　にぶい黄褐(Hue10YR4/3)　コーヒー豆程の角のとれたパミスで構成されている
:5　にぶい黄褐(Hue10YR5/3)　粘土層
:6　にぶい黄褐(Hue10YR4/3)　粘土＋砂
:7　にぶい黄褐(Hue10YR4/3)　小径のパミス(径 5 mm)
:8　:3に同じ
:9　:6に同じ

図Ⅳ－3　土層断面図(1)



図Ⅳ-4　土層断面図(2)

4.Ta-c層上位の遺構（図Ⅳ－5）

上面での地形が現在とほぼ同じであるⅢ層からは焼土と炭化物集中が検出された。分布は両方とも標高の高い地区で大きく広がる傾向にあるようだが、UF-104以外ほとんど遺物を伴わない。特に炭化物集中はⅢ層の上面でのものが多く、人為的な痕跡も薄いことから多くのものはその範囲を記録するに止めた。

(1) 焼土

UF-101（図Ⅳ－6）

位置　T-31-c,U-31-d　規模　0.62×0.59/0.07m

特徴　風倒木による攪乱の上にあるものである。風倒木がTa-cを切っていたのでUFとした。平面形は隅丸方形である。

遺物　出土していない

時期　縄文時代晩期中葉以降

UF-102（図Ⅳ－6）

位置　U-31-c　規模　0.55×0.19/0.04m

特徴　Ⅲ層上面で確認した、風倒木による攪乱の上にある焼土。平面形は長楕円形である。

遺物　出土していない

時期　縄文時代晩期中葉以降。

UF-103（図Ⅳ－6）

位置　R-32-b,S-32-a　規模　0.89×0.66／0.20m

特徴　Ⅴ層の調査中に0.6×0.2m程の焼土を確認した。断ち割りの結果、周囲の落ち込みがⅣ層形成後の倒木痕であることを確認し、層位の上ではⅢ層に属することが判明した。位置・形状は倒木によって変化していると考えられるので確実なことはわからないが、鮮やかな橙色の焼土がかなり厚く堆積している。焼土の下位に比較的整合的にⅢ層由来とみられる土（3層）が認められるので、Ⅴ層の焼土が倒木痕内にもち上げられたのではなく、Ⅲ層の焼土が落ち込んだものと見て問題はないであろう。焼土からその上の腐植質土にかけて細片化しない炭化材が出土した。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代晩期中葉以降。

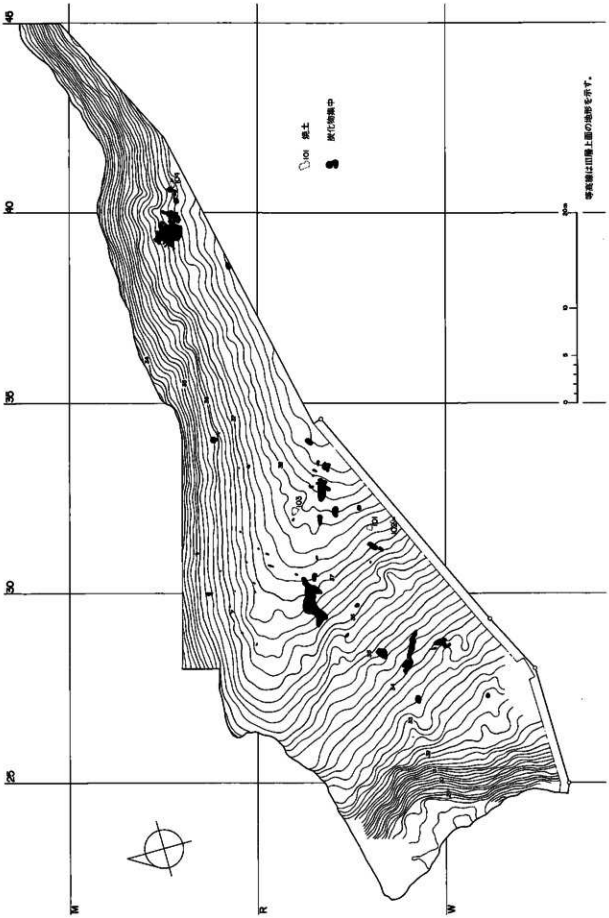
UF-104（図Ⅳ－6）

位置　O-40-c　規模　0.71×0.39m

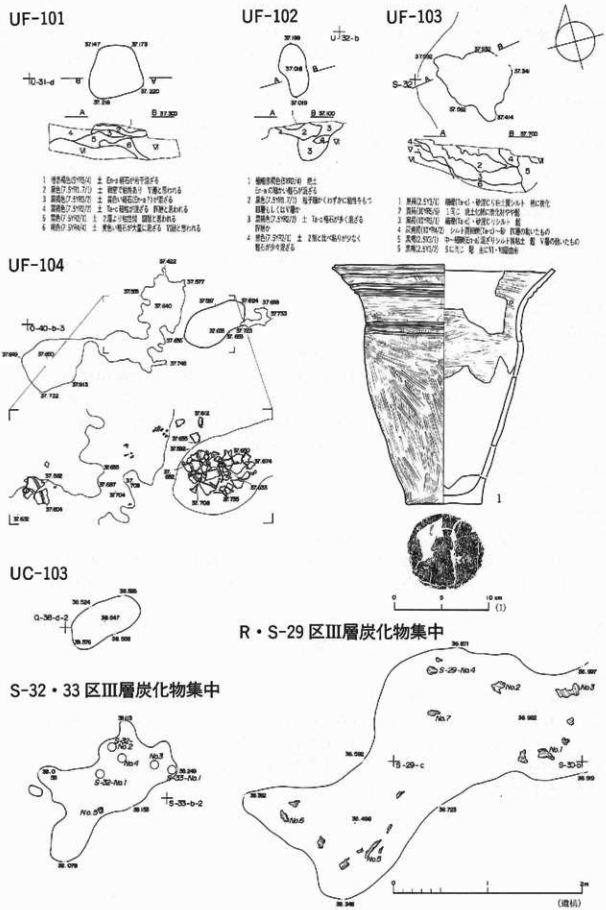
特徴　Ⅲ層下面、平坦面から斜面に変わるところで確認した。上面と周囲には炭化物の範囲が拡がる。Ⅶ群土器がほぼ1個体分、上面から出土した。

遺物　1は復元された深鉢形土器である。外反する口縁部と胴部の上位に沈線を巡らせたもので、表面の調整は上半部が横位、下半部が縦位である。内面は横位の刷毛目調整が施されている。表面は底部を中心に焼成の痕跡が顕著で、内面の上半部には炭化物の厚い付着が認められる。

時期　縁文時代



図Ⅳ－５　Ⅲ層遺構位置図



図Ⅳ－6　Ⅲ層の焼土・炭化物集中

5.Ta-c 層下位の遺構（図Ⅳ－７）

調査の最終面の地形は現在やⅢ層上面のものとほぼ同じである。主に台地上から続く舌状の部分と西向き斜面の下位から住居跡、土壙、Ｔピット、焼土、炭化物集中が見つかっている。

a. 住居跡

LH-101（図Ⅳ－８）

位置　Ｕ－26・27、Ｖ－26・27　　規模　3.44 × 2.13/3.33 × 1.99/0.34 m

特徴　西側斜面の下位に位置する不整楕円形の住居跡である。Ⅳ層を除去した段階で窪みとそれを取り巻く掘り上げ土が確認されている（図左下：網掛けの部分が掘り上げ土）。床の中央やや西よりの位置に炉跡と考えられる焼土が見つかっており、壁際の床面には柱穴と考えられる小径のピットが検出されている。床面の遺物は壁際の位置から石鏃やフレイク・チップが出土しており、土器は出土していない。

遺物　1～3は同一の母岩から作られた石鏃で、南の壁際から纏まって出土した。4～6は黒曜石製で、これらは北の壁際から出土している。

時代　石鏃の形態から縄文時代後期中葉ぐらいと考えられる。

LH-102（図Ⅳ－９）

位置　W-26　　規模　3.43 × 2.72/3.23 × 2.58/0.28 m

特徴　不整の楕円形を呈する住居跡である。掘り込みは浅く、斜面下方向の壁の検出は明確ではない。南の壁に近い床には炉跡と考えられる焼土が検出されており、周囲には黒曜石のフレイク・チップが多数出土している。床面に小径のプラン８箇所が認められ、これらが柱穴の可能性もある。床面には土器がなく、覆土の上位から縄文時代晩期後葉の土器が多数出土している。

遺物　1～4は黒曜石製の石鏃である。

時期　縄文時代後期中葉と思われる。

LH-103（図Ⅳ－10）

位置　U-27　規模　2.23 × 1.55/2.03 × 1.43/0.20 m

特徴　LH-101の斜面上位に近接し小型の楕円形を呈するもので住居跡として扱った。掘り込みは浅く、平坦な床面には炉跡も柱穴も認められない。遺物は北の壁際で台石とその下にすり石と礫が出土している。

遺物　1は砂岩製の台石、2は1の下に画されていたすり石である。

時期　LH-101との位置関係から同じ縄文時代後期中葉と考えられる。

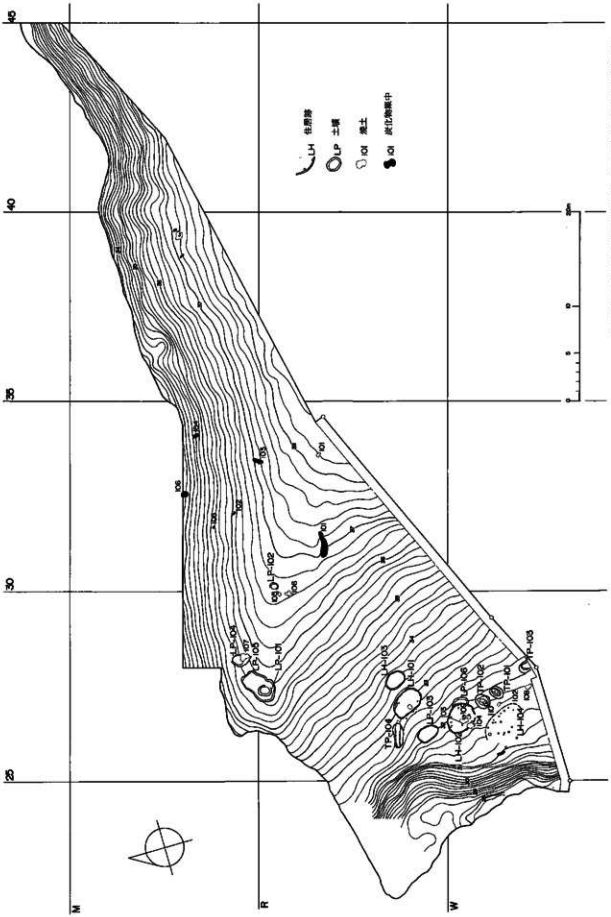
LH-104（図Ⅳ－11）

位置　X-2　　規模（推定：4.00 × 3.00 m）

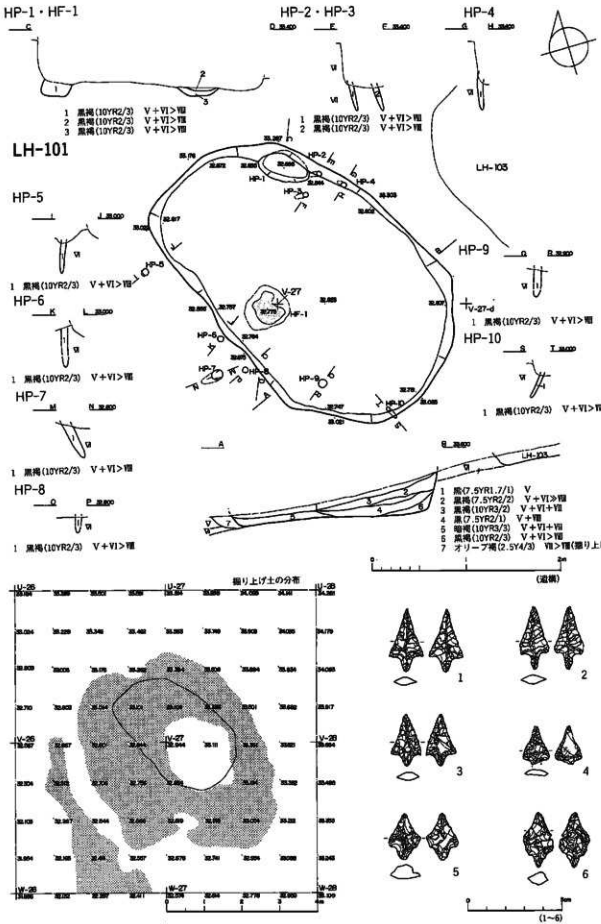
特徴　TP－101・102の掘り上げ土に埋もれていたもので、壁は検出できず柱穴から住居跡と判断した。上位の層からは縄文時代晩期後葉の遺物が多数出土している。

遺物　1は縄文時代早期のポイントである。本遺構には伴わない。

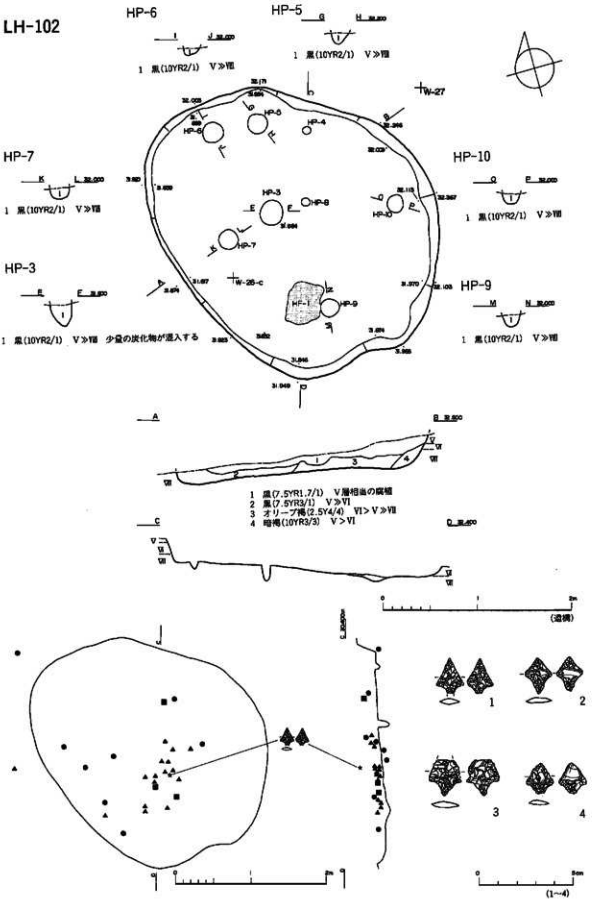
時期　縄文時代晩期後葉の可能性がある。


40
30
20
M
R
W
住居跡
土壙
焼土
炭化物集中
等高線は調査終了面(例図ではVI層下面、泥炭層では旧層下面)の地形を示す。

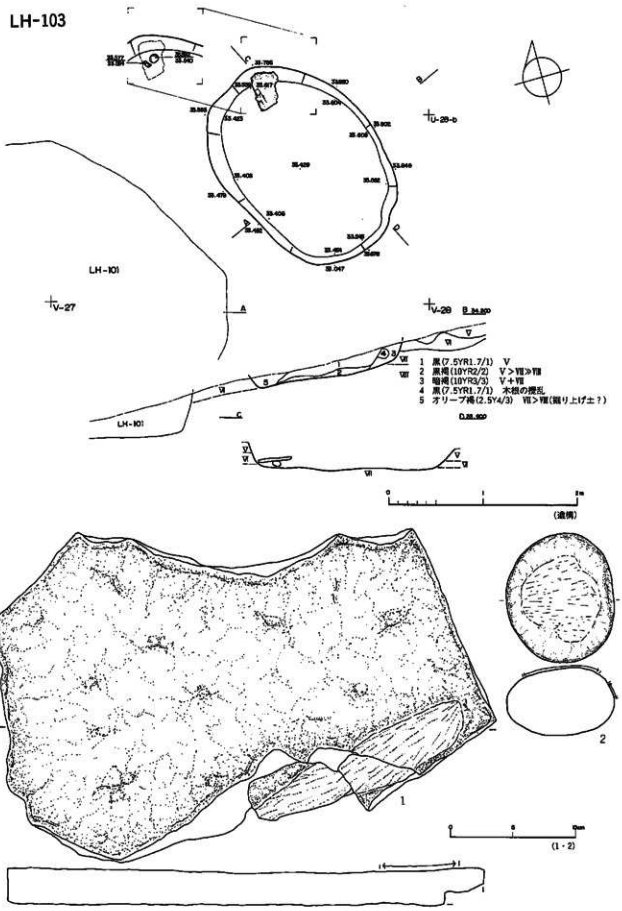
図Ⅳ−7　Ⅴ層遺構位置図



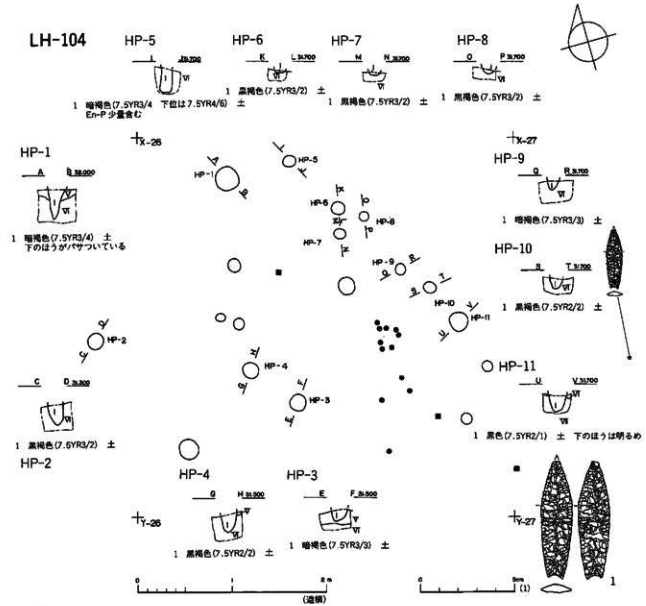
図Ⅳ－8　LH－101と遺物



図Ⅳ－9 LH－102と遺物



図Ⅳ－10　LH－103と遺物



図Ⅳ－11 LH－104と遺物

b. 土壙

LP-101（図Ⅳ－12）

位置　R-27　規模　(1.21) × (1.12) ／ (1.01) × (0.79) ／ (1.25) m

特徴　台地からのびる舌状地形先端の平坦部に位置する楕円形の土壙で、LP-105を切って掘り込んでいる。壙底はⅦ層を掘り抜いたⅧ層の上面に作られている。覆土は埋め戻し土で、埋め土の上面には、一個体の土器と石器を置いている。これらから本遺構は墓と考えられる。

遺物　1は覆土の上に置かれていたⅣ群b類の一括土器である。平縁の深鉢形土器で縄文が施された胴部以外は表裏とも磨消もしくは研磨がなされている。2は黒曜石製のドリルである。

時期　縄文時代後期中葉

LP-102（図Ⅳ－12）

位置　R-30-a-b　　規模　0.87 × (0.70) ／ (0.70) × (0.58) ／ (0.32) m

特徴　Ⅴ層上面でTa-c火山灰の落ち込みを確認した。西北側は自然の攪乱（倒木痕？）を受けていたが、概ね北東―南西方向に長軸をもつ正面楕円形の土壙である。底面はⅧ層の上部まで掘り込まれ、中央がやや窪んで多少凹凸がある。壁面の立ち上がりはかなり急。壁際と下部には地山がら、上部には腐植がちの覆土が堆積する。確実な埋め戻しの形跡はない。性格は不明である。あるいは自然の落ち込みかもしれない。

遺物　なし。

時期　縄文時代晩期中葉以前。

LP-103（図Ⅳ－12）

位置　V-26　　規模　2.36 × 1.97 ／ 2.23 × 1.37 ／ 0.31 m

特徴　LH-101の斜面下位に作られた不整の楕円形を呈する土壙である。LH-101の掘り上げ土と考えられる土で埋没しており、遺物はその埋没土の上から出土しているだけである。

遺物　3はⅣ群b類と考えられる深鉢形土器の口縁部である。

時期　各遺構の配置と遺物の出土状況から縄文時代後期中葉と考えられる。

LP-104（図Ⅳ－13）

位置　P-28-a-b。LF-107の下位にある。　　規模　(1.70) × (1.26) ／ 1.17 × 1.00 ／ (0.70) m

特徴　調査区北西部の北側斜面、LP-101,106などに近い位置にある。Ⅴ層をほぼ掘り終えた時点で焼土LF-107を確認し、そのやや下手周囲に暗色の不整形の落ち込みが認められた。周辺でⅤ層の発達が悪いこともあって掘り込み面は不明であるが、一応LF-107に切られているものとみて調査した。Ⅷ層を掘り抜いてⅨ層の上面で平坦な底面を形成する。底面の平面形は長軸の判然としない不整な楕円ないし隅丸三角形。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが上部ではかなり崩落している模様である。土壙の下部はⅧ層の軽石を主とする締まりの悪い覆土で埋積されるが、土壙の中央部は長径0.5m近くある堅い土塊（7層、Ⅷ層の軽石礫が粘土・砂などと共に固結したもの）で占められていた。このような土塊は遺跡内の別の地点でⅧ層を断ち割った際にも確認されており、自然に形成された構造と考えられる。発掘中に確認できた遺物はなく、性格も不明である。典型的な倒木痕とは異なるものの、自然の攪乱である可能性が残る。上位から及んだ攪乱が締まりの悪いⅧ層下底の岩片層とⅨ層の境の不連続面で停止し、あたかも土壙底面のように見えるという可能性もあるからである。ただ規模や底面の位置、下部の覆土などがLP-101に似ていることも事実である。

遺物　なし。

時期　縄文時代晩期中葉以前。LF-107出土の土器からみて後期中葉以前となる可能性がある。

LP-105（図Ⅳ－13）

位置　Q-27、R-27　　規模　3.93×2.49／3.53×204／0.25 m

特徴　台地からのびる舌状地形先端の平坦部に位置する不整形の土壙である。同じ立地に作られたLP-101に床を壊されている。南の壁際の床よりやや高い地点から1の遺物だけが出土している。

遺物　1はⅢ群b-3類の口縁近くの胴部である。裏面は剥落しており、全体的に崩れが著しいが、口縁近くと思われる刻みの入った貼付帯とその下位に沿って入る刺突（OI）が認められる。

時期　Ⅲ群b-3類の資料は遺跡内ではこの遺構に限り出土したもので、これから縄文時代中期後葉と思われる。

LP-106（図Ⅳ－14）

位置　W-26・27　　規模　(1.60) × (0.70) ／ (1.33) × (0.45) ／ (0.20) m

特徴　西向き斜面の下位に位置するもので、大半をLH-102と試掘孔によって壊されている。覆土からは同一個体の土器片が出土している。

遺物　1～3はⅠ群b-3類の深鉢形土器である。1は口縁部、2は胴部、3は底部の内面である。表面には微粒起線と短縄文が施される。内面の底には縄の押圧文が施されている。

時期　縄文時代早期後葉

c. Tピット

TP-101（図Ⅳ－14）

位置　X-27　　規模　(1.52) × (1.13) ／ (0.98) × (0.37) ／ (1.31) m

特徴　平面が小判形を呈すもので、壙底には二本の杭跡が認められる。

遺物　なし

時期　縄文時代後期中葉以降と考えられる。

TP-102（図Ⅳ－14）

位置　W-26・27　　規模　(1.63) × (1.43) ／ (0.96) × (0.40) ／ (1.46) m

特徴　平面が不整の小判形を呈するもので、壙底に認められる二本の杭跡はやや南西側に寄った位置に設けられている。

遺物　なし

時期　縄文時代後期中葉以降と考えられる。

TP-103（図Ⅳ－15）

位置　X-27・28、Y-27・28　　規模　(1.05) × (1.10) ／ (0.71) × (0.67) ／ (1.35) m

特徴　調査区の境界で半分が確認されたもので、平面が小判形を呈すと推定される。壙底には近接する二カ所の杭跡が検出されているが、これは再度杭を設けたためと考えられる。

遺物　なし

時期　縄文時代後期中葉以降と考えられる。

TP-104（図Ⅳ－15）

位置　U-26　　規模　(2.62) × (1.06) ／ (2.79) × (0.37) ／ (1.46) m

特徴　平面が溝形を呈すもので、壙底にはなにも確認されない。

遺物　なし

時期　縄文時代後期中葉以降と考えられる。

d. 焼土

LF-101（図Ⅳ－16）

位置　S-33-c　　規模　0.49×0.36／0.16m

特徴　Ⅴ層の調査中に炭化材の集中箇所を確認し、断ち割ったところ炭化材より10cmほど下位、Ⅵ層の上面に接するように小規模な焼土が確認された。炭化材はほぼ同一の面をなすように出土し、焼土までの間は稀に炭片を含む腐植質の土が堆積している。焼土化した範囲がごく狭いこと、炭化材の位置する落ち込みが不整形であることなどから、通常の焼土とは性格の違うもの（株の燃え跡など）、もしくは倒木等で攪乱された焼土ではないかと考えられる。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代晩期中葉以降。

LF-102（図Ⅳ－16）

位置　X-26-d,X-27-a　規模　0.21×0.12m

特徴　Ⅴ層上面で確認した。不整楕円形で厚さは1～2cm程である。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代

LF-103（図Ⅳ-16）

位置　W-26-d　規模　0.22×0.19m

特徴　Ⅴ層下位で確認した不整形の焼土である。直下にLH-102を確認したのでLH-102の焼土の可能性もある。発掘時に黒曜石製チップが数点見受けられた。LF-104と近接する。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代

LF-104（図Ⅳ-16）

位置　W-26-b・c　規模　0.40×0.26m

特徴　Ⅴ層下位で確認。不整形。LH-102の焼土の可能性もある。LF-103と近接する。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代

LF-105（図Ⅳ-16）

位置　R-29-c,R-30-b　規模　0.30×0.18/0.02m

特徴　Ⅴ層上面で確認した不整形の焼土である。粒はやや荒く、En-a軽石を少量含む。LF-106と近接する。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代

LF-106（図Ⅳ-16）

位置　R-29-c,R-30-b　規模　0.48×0.28/0.04m

特徴　Ⅴ層上面で確認した不整形の焼土である。粒は細かく乾燥している。LF-105と近接。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代

無番焼土（図Ⅳ-16）

位置　O-39-b　規模　0.47×0.40m

特徴　Ⅴ層で確認した。不整形で周りに炭化物の範囲2カ所あり。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代

LF-107 (図Ⅳ-16)　LP-104の上位にある。

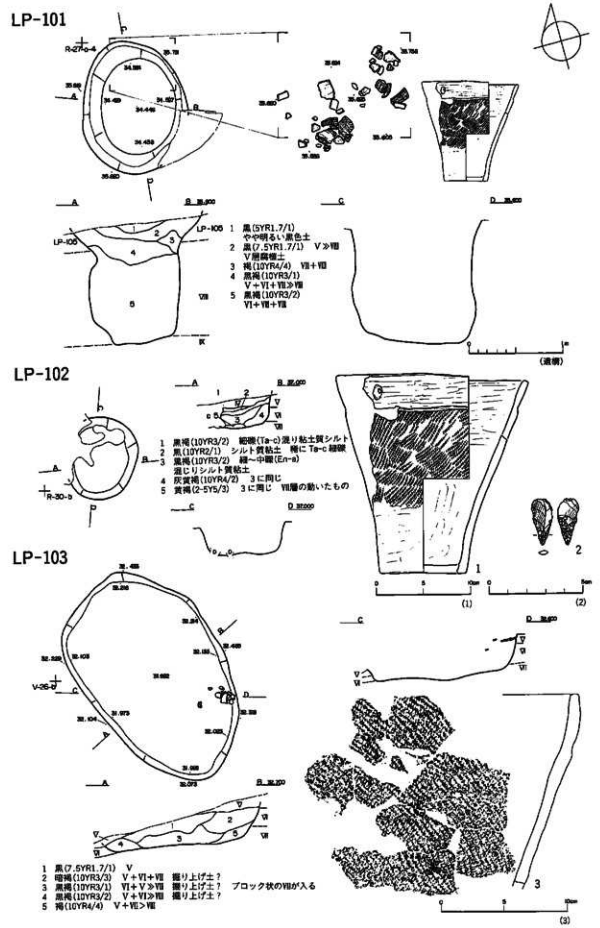
位置　P-28-b

規模　1.28×0.71／0.08m

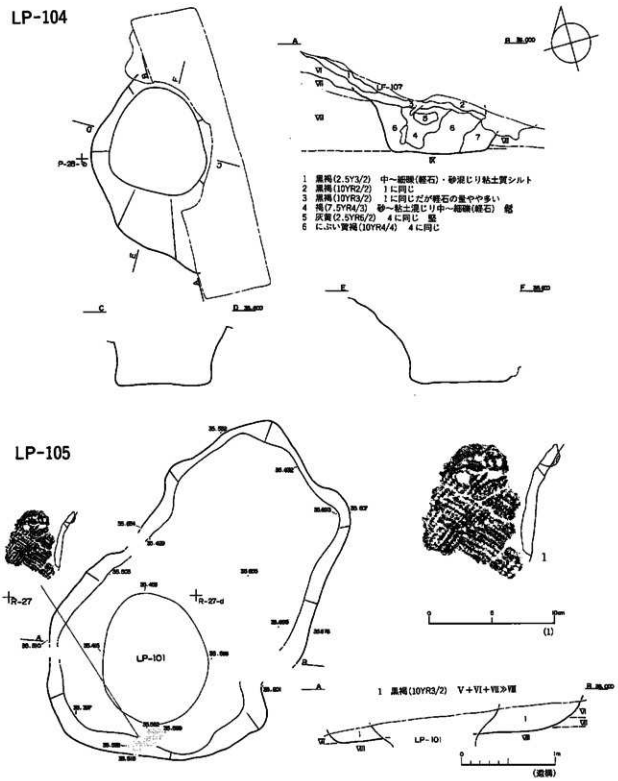
特徴　Ⅴ層の調査をほぼ終えた時点で不整形の暗色落ち込み(LP-104)の中に位置する焼土を確認した。上面がやや盛り上がり、中央部の厚い堆積を見せる。下位のLP-104覆土との境界が画然としており、焼土には腐植質の土が斑状に混ざっていることなどから、別の場所で形成された焼土が廃棄されたもののように思われる。焼土の上手に接して炭化材を多く含む腐植質土の堆積が見られる。

遺物　炭化材混じりの腐植質土の中からⅣ群b類土器が1点だけ出土している。

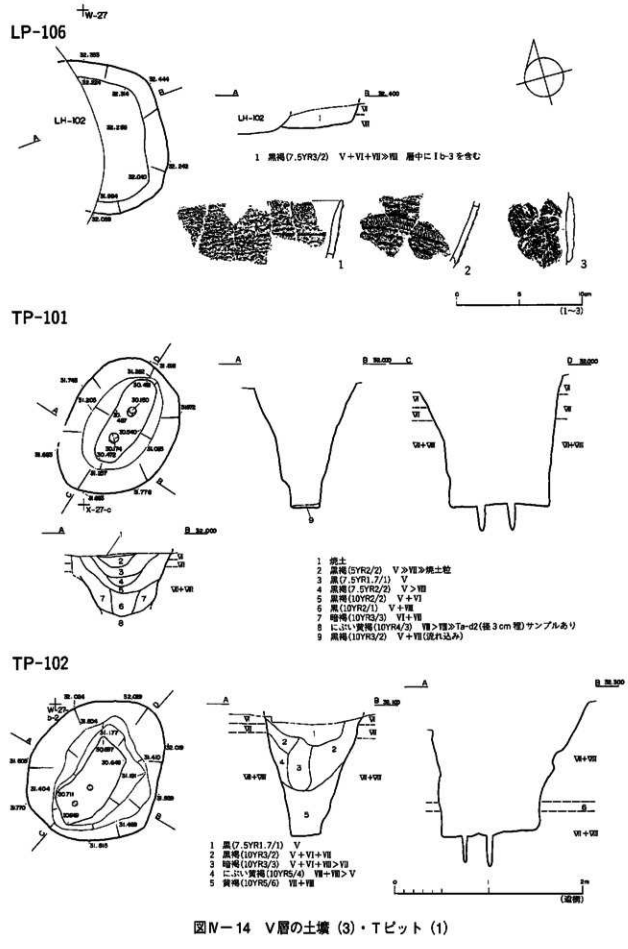
時期　縄文時代晩期中葉以前の遺構であり、同後期中葉以降のものの可能性が高い。


LP-101
LP-102
LP-103
1　黒(5YR1.7/1)
やや明るい黒色土
2　黒(7.5YR1.7/1)　V≫Ⅶ
V層腐植土
3　褐(10YR4/4)　Ⅶ＋Ⅷ
4　黒褐(10YR3/1)
V＋Ⅵ＋Ⅶ≫Ⅷ
5　黒褐(10YR3/2)
Ⅵ＋Ⅶ＋Ⅷ
(遺構)
1　黒褐(10YR3/2)　姶良(Ta-c)混り粘土質シルト
2　黒(10YR2/1)　シルト質粘土　褐に Ta-c 細礫
3　黒褐(10YR3/2)　縄～中礫(Em-a)
混じりシルト質粘土
4　灰黄褐(10YR4/2)　3に同じ
5　黄褐(2.5Y5/3)　3に同じ　Ⅶ層の動いたもの
1　黒(7.5YR1.7/1)　V
2　暗褐(10YR3/3)　V＋Ⅵ＋Ⅶ　掘り上げ土？
3　黒褐(10YR3/1)　Ⅵ＋V≫Ⅶ　掘り上げ土？　ブロック状のⅦが入る
4　黒褐(10YR3/2)　V＋Ⅵ≫Ⅶ　掘り上げ土？
5　褐(10YR4/4)　V＋Ⅶ＞Ⅷ

図Ⅳ－12　V層の土壙 (1)

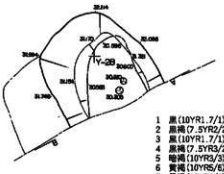

LP-104
LP-105
LP-101
P-28-b
R-27
R-27-d
F-107
1 黒褐(2.5Y3/2) 中～細礫(軽石)・砂混じり粘土質シルト
2 黒褐(10YR2/2) 1に同じ
3 黒褐(10YR3/2) 1に同じだが軽石の量やや多い
4 褐(7.5YR4/3) 砂～粘土混じり中～細礫(軽石) 鉛
5 灰黄(2.5YR6/2) 4に同じ 堅
6 にぶい黄褐(10YR4/4) 4に同じ
1 黒褐(10YR3/2) V＋VI＋VII≫VIII
(1)
(縮尺)

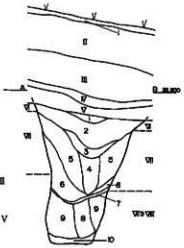
図Ⅳ－13 Ⅴ層の土壙 (2)



図Ⅳ－14　Ⅴ層の土壌（3）・Ｔピット（1）

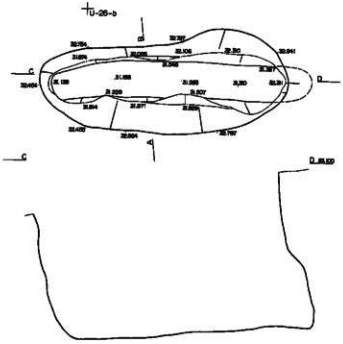
TP-103

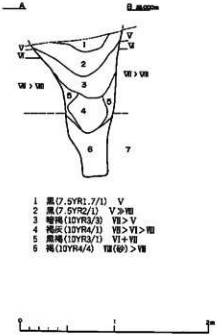




1 黒(10YR1.7/1) V
2 黒褐(7.5YR2/2) V≫VI
3 黒(10YR1.7/1) V
4 黒褐(7.5YR3/2) VI>VII≫VIII
5 暗褐(10YR3/3) VI≫VII
6 黄褐(10YR5/6) VII
7 黒褐(10YR3/1) V
8 にぶい黄褐(10YR5/3) VII≫V
9 6と同じ
10 7と同じ

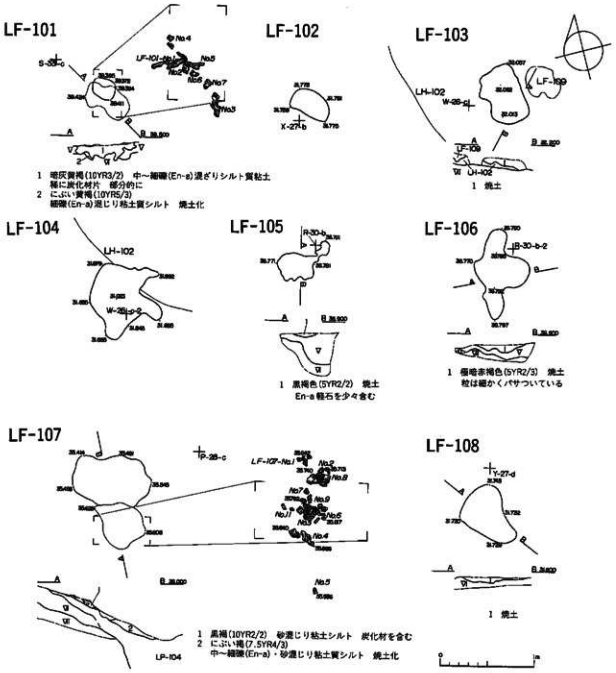
TP-104





1 黒(7.5YR1.7/1) V
2 黒(7.5YR2/1) V≫VII
3 暗褐(10YR3/3) VII>V
4 褐灰(10YR4/1) VII>VI>VIII
5 黒褐(10YR3/1) VI+VII
6 褐(10YR4/4) VII(砂)>VII

図Ⅳ－15 V層のTピット (2)



図Ⅳ－16　Ⅴ層の焼土・炭化物集中

6　遺物

(1) 土器（図Ⅳ－18・19）

Ⅰ群b-3類、Ⅲ群b-3類、Ⅳ群a類、Ⅳ群b類、Ⅳ群c類、Ⅴ群c類、Ⅵ群、Ⅶ群の各土器が出土しているが、この内Ⅰ群b-3類、Ⅲ群b-3類、Ⅶ群土器は遺構に伴うものでこれ以外では出土していない。主体となるのはⅣ群b類土器とⅤ群c類土器で、いずれも遺跡西側の緩斜面に集中して分布しており、ほぼ同じ地点に位置する各遺構と関連するものと考えられる。

Ⅰ群b-3類土器

中茶路式土器に相当するもので、LP－106の壙底から出土した。

Ⅲ群b-3類土器

北筒式土器に相当するもので、LP－105から出土した。

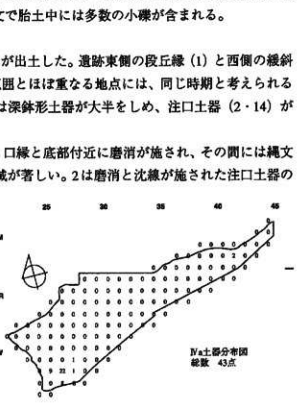
Ⅳ群a類土器（3・4）

余市式土器と仮称「手稲砂山式土器」に相当するものである。43点が出土しており、すべて小破片である。3は器壁の厚い胴部の破片で、表面には半裁竹管状の施文具の半裁した面による沈線と縄文が施されている。4は底部に近い胴部の破片である。無文で胎土中には多数の小礫が含まれる。

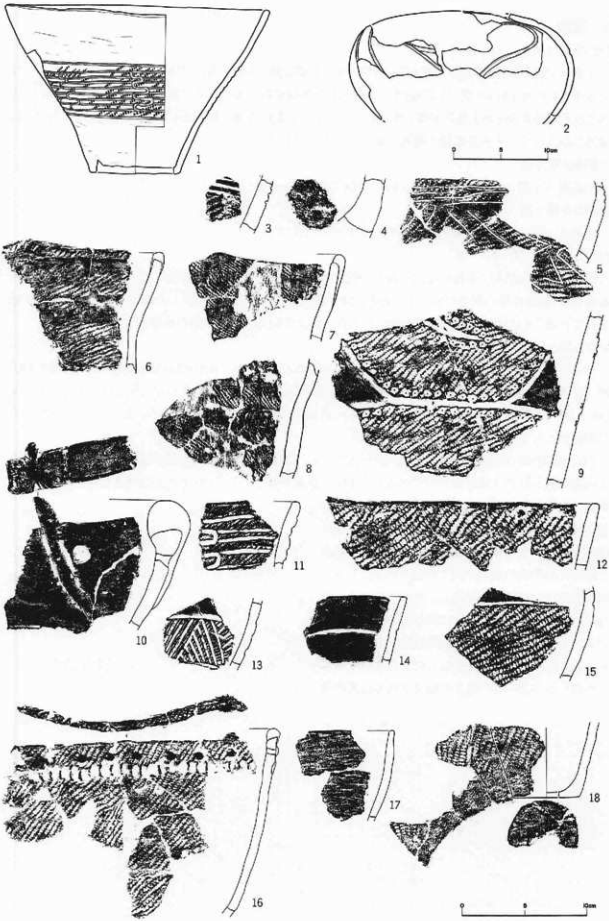
Ⅳ群b類土器（1・2・6～15・18）

ウサクマイC式、手稲式に相当するもので、754点が出土した。遺跡東側の段丘縁（1）と西側の緩斜面（2・6～15・18）とで出土しており、後者の分布範囲とほぼ重なる地点には、同じ時期と考えられるLH－101・103、LP－103が検出されている。器形は深鉢形土器が大半をしめ、注口土器（2・14）が2個体出土している。

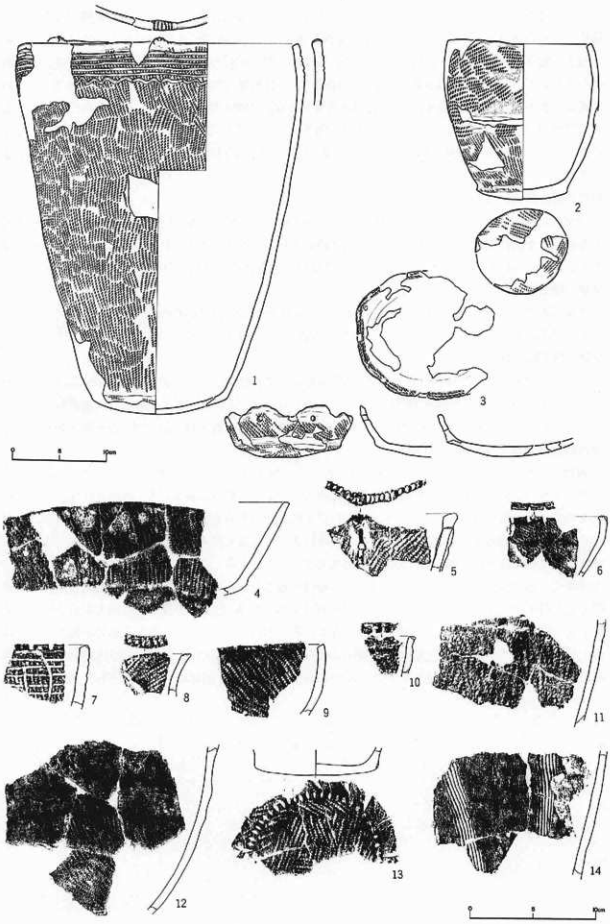
1は遺跡東側の段丘縁で出土した一括土器である。口縁と底部付近に磨消が施され、その間には縄文と沈線が施された文様帯が巡っている。全体的に磨滅が著しい。2は磨消と沈線が施された注口土器の胴部である。口縁、底部、注口部分は欠失しており、胴部のみが一括で出土した。6～8は低い波状口縁を有するやや小型の深鉢形土器である。表面と口唇上面に粒の細かい縄文が施される。7・8は同一個体の口縁と胴部である。キウス川を挟んだ対岸のキウス5遺跡でもほぼ同じものが出土している。9は器壁の厚い大型深鉢形土器の胴部片である。表面の文様は縄文を施した後に沈線で区画し磨消を行っている。縄文の施文される区画の縁



図Ⅳ－17　Ⅳ群土器分布図



図Ⅳ－18　Ⅳ群土器・Ⅴ群ａ類土器



図Ⅳ－19 Ⅴ群c類・Ⅵ群土器

に沿って竹管状の施文具で刺突を施している。千歳周辺では類例に乏しく、探し得た範囲では青森県の後期に同種の資料を確認している。6～9は後期中葉のやや古い時期の可能性がある。10は口唇から続く粘土の貼り付けが施された波状口縁の一部で、全面に磨消が行われている。器面のほぼ中央には補修孔が穿たれている。11・12は深鉢形土器の口縁部で、11は沈線と縄文、12は縄文が施文されている。13は縄文と斜めの太い沈線とが施される文様体を有する胴部の破片である。沈線で区切られた文様体の上下には磨消が施されている。14は全面に研磨が施された口縁部で、器形は注口もしくは壺形を呈すると考えられる。15は縄文の施された胴部片で沈線上位には磨消が行われる。18は小型の深鉢形土器底部である。

Ⅳ群c類土器（5・17）

堂林式に相当するものである。西側斜面の中位で14点が出土した。5は縄文と沈線が施された深鉢形土器胴部のくびれ部破片である。細目の沈線は器面上位に平行するもの、中～下位にはジグザグ様を呈すると思われる斜めのものがほどこされる。17は無文で表面には整形時の横位の撫でが見られる。

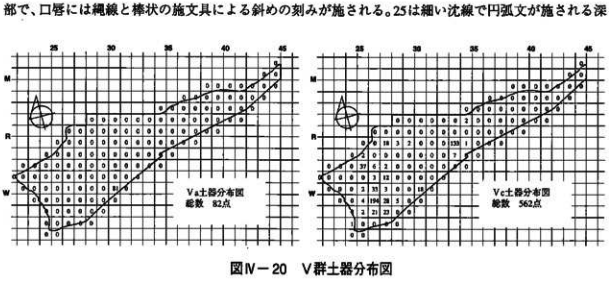
Ⅴ群a類土器（16）

西側斜面の上位で16の小破片が82点出土した。深鉢形土器の口縁部である。山形の小突起を有する口唇には表面と同じ縄文が施文される。口縁には横冠する爪の刻みの列とIOの刺突を施している。

Ⅴ群c類土器（19～31）

タンネトウL式土器に相当するもので、Ⅳ群b類に次ぐ562点が出土している。分布するのは遺跡東側の段丘縁（20・30）と西側の緩斜面（19・21～29・31）で、後者の範囲とほぼ重なる地点には、同じ時期と考えられるLH－104が検出されている。器形は深鉢形土器（19・20・23・25・26・29～31）と浅鉢形土器（21・22・24・27）がある。

19は口縁がやや内側に入る大型の深鉢形土器で分布域はLH－104とほぼ重なる。口縁には縄を押捺した三カ所の小突起が見られ、口縁には平行沈線とその下位に蛇行沈線が巡り、表面と底部には条が縦気味の縄文が全面に施されている。20は東側の段丘縁で出土した小型の深鉢形土器である。口縁は内側にやや入り込み胴部は円みを帯びる。直前で絞り込まれた底部も円みを帯びて不安定である。表面に施される縄文の条は上位で横、下位で縦に走るもので、これはⅤ群c類の文様構成とやや異なり、Ⅵ群の大狩部式土器に通じるものがある。21は口唇に縄線が施された小型の浅鉢形土器で、俯瞰した器形は楕円を呈し長径の口縁には対になる二つの貫通孔が穿たれている。22は条が縦に走る縄文が施された浅鉢形土器の破片である。胎土中には砂粒が多く含まれる。23は山形突起から下垂する貼付が施された深鉢形土器の口縁部である。口唇上には縄の押圧による刻みが施されている。24は小型の浅鉢形土器の口縁部で、口唇には縄線と棒状の施文具による斜めの刻みが施される。25は細い沈線で円弧文が施される深

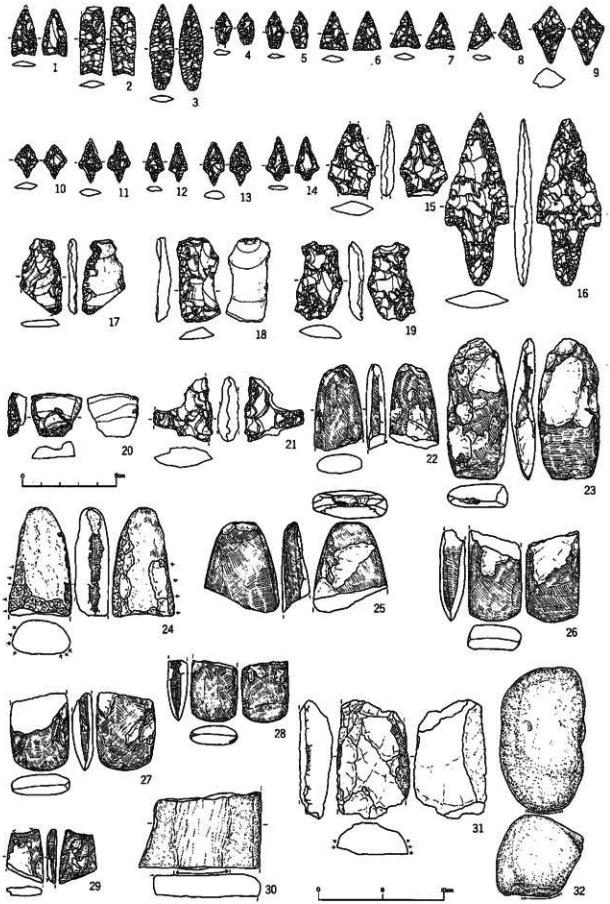


図Ⅳ－20　Ⅴ群土器分布図

鉢形土器の口縁部である。26は口唇が外側にやや張り出す口縁部で口唇には縄の押圧が連続して施されている。27は縄文の施された浅鉢形土器の口縁部である。28・29は同じ深鉢形土器の口縁部と胴部である。表面の縄文に使われた撚りの緩い原体で、口唇には刻み、口縁には縄線文を施している。30は器壁の断面が僅かに窪む無文帯の横走がⅢ段見られる深鉢形土器の胴部片である。亀ヶ岡式土器系の影響を受けたものの可能性がある。31は底部の下端に棒状の施文具で刻みを施している。

Ⅵ群土器（32）

後北C2--D式土器に相当する。遺跡東側の段丘縁で同じ個体のものが出土している。32は縞状の縄文が施された胴部の破片である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

図Ⅳ－22　石器

(2) 石器（図Ⅳ－22）

全般的に石器の点数は少ない。石鏃、石斧類がしめる割合が比較的高いが、石鏃は異なる形態のもので構成されており、石斧もまた破損品が多い。出土の傾向も広く散点的であることから外部から持ち込まれたものと考えられる。これに反して、フレイク・チップ類は西側緩斜面のⅣ群b類・Ⅴ群c類土器が集中的に出土した範囲で多く出土する。

石鏃（1～14）

1～9は無茎のもので、3は柳葉形、4・5は五角形を呈する。2は長身の五角形と推定されこれらは縄文時代早期のものである。1・6～8は三角形を呈するもので、6は平基、1・7はやや抉りの入る平基である。8は基部が欠失している。9は尖基のもので中央の剥片の厚みが取り切れていない。10～14は有茎のもので、10は基部の作出が不明瞭である。主剥離面を残すものも多く、粗雑な作りのものが目に付く。

ポイントもしくは両面加工のナイフ（15・16・21）

15は基部と尖頭部が欠失するもので、全体の整形や基部の作出が粗雑である。16は比較的形の整った刃部と茎部を有するポイントである。縄文時代中期のものと考えられる。21は上下端が欠失している。全て黒曜石製である。

スクレイパー（17～20）

17・19は僅かにつまみ部を作出したもので、17は剥片の刃部に沿った側縁に、19は表裏の面に剥離を施している。18は表面の左側縁に剥離を施した縦長のスクレイパーである。20は短くやや肉厚の剥片の一辺に鈍角な刃部を作出した掻器状のものである。

石斧（22～29・31）

22・24・25・29は刃部を含む下半部に、26・27・28は上半部にそれぞれ欠失が認められる。23は整形時の剥離を多くの部分に残す。24は断面の円い肉厚のもので整形は細かい敲打によった後に磨いている。31は僅かに両側縁の整形を施してた未製品と考えられる。

すり石（32）

32は縦長の円礫の長軸の一端を使用している。

砥石（30）

30は砂岩の片面を砥石として使用したもので、特に中央部の使用が著しい。

7　資料一覧

表Ⅳ－４　遺構出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	数量
UF－103		自然遺物	炭化材	
UC－103		自然遺物	炭化材	
LH－101	覆土	剥片石屑等	フレイク	1
			チップ	54
		礫等	礫	14
		自然遺物	炭化物	
			計	69
	床面	剥片石器	石鏃	6
		剥片石屑等	フレイク	6
			計	12
計				81
LH－102	覆土	土器	Ⅰb-3	2
			Ⅳb	6
			Ⅴc	1
		剥片石器	石鏃	4
			Rフレイク	1
		剥片石屑等	フレイク	49
			チップ	448
		礫等	礫	30
		自然遺物	炭化物	
計				541
LH－103	覆土	礫石器	すり石	1
		剥片石屑等	フレイク	1
			チップ	1
		礫等	礫	10
			礫片	1
		自然遺物	炭化物	
			計	14
	床面	礫石器	台石	8
計				22
LH－104	覆土	土器	Ⅳa	1
			Ⅳb	21
		剥片石器	石鏃	1
		礫石器	石斧片	1
		礫等	礫	3
計				27
LP－101	覆土	土器	Ⅳb	7
		剥片石器	ドリル	1
	覆土２層	土器	Ⅳb	68
計				76
LP－103	覆土	土器	Ⅳb	46
		剥片石屑等	フレイク	15
			チップ	16
		礫等	礫	2
			火山灰	
計				79
LP－105	覆土	土器	Ⅳa	67
LP－106	床面	土器	Ⅰb-3	12
TP－102	覆土	礫等	礫	2
TP－103	覆土	土器	Ⅴc	2
TP－104	覆土	礫等	礫	2
LF－101		自然遺物	炭化材	
LF－105	焼土５層	自然遺物	炭化物	
LF－107		自然遺物	炭化材	
	焼土	土器	Ⅳb	1
LC－102		自然遺物	炭化材	
LC－104		自然遺物	炭化材	
LC－105		自然遺物	炭化物	
LC－106	覆土５層	自然遺物	炭化物	
計				845

表Ⅳ－５　遺構掲載遺物一覧

図版	遺構	層位	遺物名	分類	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	石材
Ⅳ　6 - 1	UF - 104		土器	Ⅶ			
Ⅳ　8 - 1	LH - 101	床面	剥片石器	石鏃	3.27 × 1.51 × 0.44	1.30	メノウ
Ⅳ　8 - 2	LH - 101	床面	剥片石器	石鏃	3.29 × 1.75 × 0.44	1.30	メノウ
Ⅳ　8 - 3	LH - 101	床面	剥片石器	石鏃	2.73 × 1.56 × 0.45	1.30	メノウ
Ⅳ　8 - 4	LH - 101	床面	剥片石器	石鏃	1.96 × 1.39 × 0.36	0.70	黒曜石
Ⅳ　8 - 5	LH - 101	床面	剥片石器	石鏃	2.44 × 1.68 × 0.76	1.70	黒曜石
Ⅳ　8 - 6	LH - 101	床面	剥片石器	石鏃	2.92 × 1.58 × 0.83	2.10	黒曜石
Ⅳ　9 - 1	LH - 102	覆土	剥片石器	石鏃	1.76 × 1.38 × 0.25	0.50	黒曜石
Ⅳ　9 - 2	LH - 102	覆土	剥片石器	石鏃	1.89 × 1.67 × 0.31	0.80	黒曜石
Ⅳ　9 - 3	LH - 102	覆土	剥片石器	石鏃	1.82 × 1.32 × 0.29	0.50	黒曜石
Ⅳ　9 - 4	LH - 102	覆土	剥片石器	石鏃	1.64 × 1.32 × 0.33	0.60	黒曜石
Ⅳ　10 - 1	LH - 103	床面	礫石器	台石	38.5 × 25.00× 3.23	4,000.00	砂岩
Ⅳ　10 - 2	LH - 103	覆土	礫石器	すり石	11.14 × 8.46 × 5.24	629.30	砂岩
Ⅳ　11 - 1	LH - 104	覆土	剥片石器	石鏃	6.04 × 1.68 × 5.10	4.40	黒曜石
Ⅳ　12 - 1	LP - 101	覆土	土器	Ⅳb			
Ⅳ　12 - 2	LP - 101	覆土	剥片石器	ドリル	2.41 × 1.14 × 2.70	0.50	黒曜石
Ⅳ　12 - 3	LP - 103	覆土	土器	Ⅳb			
Ⅳ　13 - 1	LP - 105	覆土	土器	Ⅲb-3			
Ⅳ　14 - 1	LP - 106	床面	土器	Ⅰb-3			

表Ⅳ－6 包含層掲載土器一覧

図版	分類	調査区	層位	図版	分類	調査区	層位
Ⅳ 18 - 1	Ⅳb	P - 37	Ⅴ層	Ⅳ 18 - 17	Ⅳc	T - 25	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 2	Ⅳb	U - 26	Ⅴ層	Ⅳ 18 - 18	Ⅳb	V - 27	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 3	Ⅳa	V - 26	Ⅵ層	Ⅳ 19 - 1	Ⅴc	W - 26	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 4	Ⅳa	X - 25	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 2	Ⅴc	R - 33	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 5	Ⅳb	X - 26	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 3	Ⅴc	U - 27	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 6	Ⅳb	W - 25	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 4	Ⅴc	V - 26	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 7	Ⅳb	X - 26	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 5	Ⅴc	T - 25	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 8	Ⅳb	X - 26	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 6	Ⅴc	W - 26	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 9	Ⅳb	W - 28	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 7	Ⅴc	T - 25	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 10	Ⅳb	P - 36	Ⅵ層	Ⅳ 19 - 8	Ⅴc	S - 25	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 11	Ⅳb	W - 25	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 9	Ⅴc	R - 28	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 12	Ⅳb	X - 26	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 10	Ⅴc	V - 27	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 13	Ⅳb	P - 40	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 11	Ⅴc	W - 26	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 14	Ⅳb	W - 27	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 12	Ⅴc	S - 33	Ⅲ層
Ⅳ 18 - 15	Ⅳb	X - 27	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 13	Ⅴc	U - 27	Ⅴ層
Ⅳ 18 - 16	Ⅴa	V - 30	Ⅴ層	Ⅳ 19 - 14	Ⅵ	Q - 37	Ⅲ層

表Ⅳ－7 包含層掲載石器一覧

図版	分類	調査区	層位	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	石材
Ⅳ 22 - 1	石鏃	U - 32	不明	2.33 × 1.30 × 0.29	0.90	黒曜石
Ⅳ 22 - 2	石鏃	P - 29	不明	(3.41) × 1.31 × 0.34	(1.8)	黒曜石
Ⅳ 22 - 3	石鏃	U - 29	Ⅴ	3.49 × 1.26 × 0.34	1.80	黒曜石
Ⅳ 22 - 4	石鏃	O - 40	Ⅲ	1.64 × 0.89 × 0.26	0.30	黒曜石
Ⅳ 22 - 5	石鏃	X - 25	Ⅴ	1.93 × 0.88 × 0.18	0.20	黒曜石
Ⅳ 22 - 6	石鏃	R - 29	Ⅴ	2.00 × 1.47 × 0.31	0.70	黒曜石
Ⅳ 22 - 7	石鏃	T - 31	Ⅲ	1.83 × 1.57 × 0.29	0.50	黒曜石
Ⅳ 22 - 8	石鏃	S - 31	Ⅲ	(1.70) × 1.02 × 0.27	(0.4)	黒曜石
Ⅳ 22 - 9	石鏃	V - 26	Ⅴ	2.97 × 1.69 × 1.08	2.80	黒曜石
Ⅳ 22 - 10	石鏃	U - 26	Ⅴ	1.73 × 1.22 × 0.32	0.40	黒曜石
Ⅳ 22 - 11	石鏃	U - 26	Ⅴ	2.13 × 1.25 × 0.34	0.60	黒曜石
Ⅳ 22 - 12	石鏃	X - 28	Ⅲ	2.01 × 0.95 × 0.22	0.40	黒曜石
Ⅳ 22 - 13	石鏃	U - 26	Ⅴ	2.27 × 1.09 × 0.39	0.70	黒曜石
Ⅳ 22 - 14	石鏃	Q - 31	Ⅴ	2.26 × 1.22 × 0.22	0.50	黒曜石
Ⅳ 22 - 15	ポイント	X - 27	Ⅴ	(3.75) × 2.43 × 0.68	(5.6)	黒曜石
Ⅳ 22 - 16	ポイント	U - 27	Ⅴ	8.73 × 3.36 × 9.20	17.00	黒曜石
Ⅳ 22 - 17	つまみ付ナイフ	V - 30	Ⅵ	3.31 × 2.20 × 0.39	4.10	黒曜石
Ⅳ 22 - 18	スクレイパー	X - 27	Ⅴ	4.41 × 2.12 × 0.66	5.40	黒曜石
Ⅳ 22 - 19	スクレイパー	P - 35	Ⅲ	4.12 × 2.27 × 0.70	7.60	黒曜石
Ⅳ 22 - 20	スクレイパー	W - 29	Ⅵ	2.19 × 2.47 × 0.91	5.10	黒曜石
Ⅳ 22 - 21	ポイント片	X - 25	Ⅴ	3.19 × 3.24 × 1.11	7.70	黒曜石
Ⅳ 22 - 22	石斧	S - 26	Ⅴ	(6.22) × 3.78 × 1.50	(62.1)	緑色泥岩
Ⅳ 22 - 23	石斧	W - 28	Ⅲ	10.95 × 4.71 × 1.65	135.90	緑色泥岩
Ⅳ 22 - 24	石斧	U - 29	Ⅴ	(8.26) × 4.79 × 2.54	(177.1)	緑色泥岩
Ⅳ 22 - 25	石斧	P - 38	Ⅲ	(6.70) × 5.62 × 2.05	(111.9)	緑色泥岩
Ⅳ 22 - 26	石斧	Q - 33	Ⅴ	(6.70) × 4.08 × 1.84	(95.8)	片岩
Ⅳ 22 - 27	石斧	P - 33	Ⅴ	(5.86) × 4.48 × 1.58	(61.0)	片岩
Ⅳ 22 - 28	石斧	U - 29	Ⅴ	(4.63) × 3.12 × 1.50	(44.4)	緑色泥岩
Ⅳ 22 - 29	石斧片	X - 25	Ⅴ	3.48 × 2.85 × 0.73	14.20	緑色泥岩
Ⅳ 22 - 30	砥石	W - 26	Ⅴ	5.82 × 9.46 × 1.74	170.30	砂岩
Ⅳ 22 - 31	石斧未製品	V - 27	不明	8.89 × 5.65 × 2.52	186.90	緑色泥岩
Ⅳ 22 - 32	すり石	T - 26	Ⅴ	11.30 × 6.63 × 6.30	812.80	緑色泥岩

Ⅴ　ケネフチ８遺跡

１　立地と環境（図Ⅴ－１）

馬追丘陵は、石狩平野東部を南北に連なるなだらかな丘陵である。ケネフチ８遺跡はこの丘陵中に源をもつ幌淵（けぬふち）川の上流部左岸の尾根上にある。幌淵川の両岸は幅100～200mほどの氾濫源になっている。氾濫源の幅は遺跡付近で約200m、川はほぼ中央を流れている。遺跡が立地する尾根は、南方の山間から氾濫源に向かって広がる谷地形に張り出している。千歳市の東に隣接する追分町市街地から北西に約２km、キウス５・キウス７遺跡から東方５kmほどの位置にあたる。

幌淵川は丘陵地帯を横断した後、長沼町南部の平野部を北西に流れて千歳川に合流している。流路延長は約20m、下流域の平野や山間部の氾濫源は水田や畑に利用され、川に沿って道々舞鶴追分線が通っている。下流の平野部は、かつて長都沼（オサットー）や馬追沼（マオイトー）などの湖沼が広がる湿地で、幌淵川は馬追沼に注いでいた。これらの沼地は、昭和26年から44年にかけて行われた国営灌漑排水事業によって干拓され、今は広大な耕地に変貌している。現在の幌淵川下流部はこの事業に伴って、掘削された人工河川である。

丘陵や沼の名称に用いられている「馬追」は、馬追沼に注いでいたマオイ川（明治29年の假製五万分一図にマオイ川、同42年の修正図に馬追川とある）に由来している。幌淵川は永田方正『北海道蝦夷語地名解』に「Kene-ush-pet　ケ子 ウシュペツ　赤楊川」と説明されている。遺跡が所在する協和は、昭和26年にそれまでのコムカラ（「kom-kar　コムはドングリ、カルはつくるの意味…」『増補 千歳市史』）を改称した地名である。

調査区は東方の山地から続く尾根の先端部である。調査範囲は東西約80　、東端は山に入る道で切られている。横断自動車道の用地外にあたる尾根の北半部は、かつて行われた土取りによって削られ平坦地になっている。調査区南部の尾根の裾部も地山まで撹乱されている。

２　発掘区の設定（図Ⅴ－２）

横断自動車道建設用地の二本のセンター杭（ＳＴＡ189＋00・ＳＴＡ190＋00）を結ぶ線と、この線上においてＳＴＡ189＋00から東に70mの点で、これと直交する線を基準として、４×４ｍグリッドを設定した。南北の線を西からアラビア数字で、東西の線を北からアルファベットで表し、各グリッドの呼称は、それぞれ北西角の交点を表すアラビア数字とアルファベットの組合せで表示した。発掘作業はこのグリッドを単位として行ったが、遺構の位置、遺物の出土位置を表示する際には、さらに２×２

表Ⅴ－１　層別遺構数

遺構名	Ⅲ層	Ⅴ層
Ｔピット	0	5
焼土	0	3
計	0	8

表Ⅴ－２　遺構出土遺物数

遺構名	土器	石器類	総数
Ｔピット	3	0	3
焼土	0	4	4
計	3	4	7

表Ⅴ－３　層別出土遺物数

層位	土器	石器類	石製品	土製品	鉄製品	自然遺物	計
Ⅲ層	515	96	2	0	0	有	613
Ⅴ層	675	143	0	0	0	無	818
表採	13	3	0	0	0	無	16
撹乱	7	1	0	0	1	有	9
排土	1	0	0	0	0	無	1
計	1,211	243	2	0	1		1,457

図Ⅴ－1　遺跡周辺の地形

mに4分割して、北西から反時計回りにa・b・c・dの記号を付した。

基準としたセンター杭の座標値は次のとおりである。

ＳＴＡ 189＋00　　Ｘ＝－ 123,440.5564　Ｙ＝－ 38,013.6513

ＳＴＡ 190＋00　　Ｘ＝－ 123,402.4098　Ｙ＝－ 37,921.2158

標高の測定にあたっては、下記のベンチマークを用いた。

ケヌフチ川第六農道橋　ＢＥＮＣＨ－ＭＡＲＫ　Ｈ＝28.718m

3　土層（図Ｖ－3）

Ⅰ　　表土層（黒色腐植土）

Ⅱ　　灰白色軽石層（Ｔａ-ａ　樽前ａ降下軽石層）

Ⅲ－１　黒褐色腐植土層（美沢川流域遺跡群の「第Ⅰ黒色土層」に対応する）

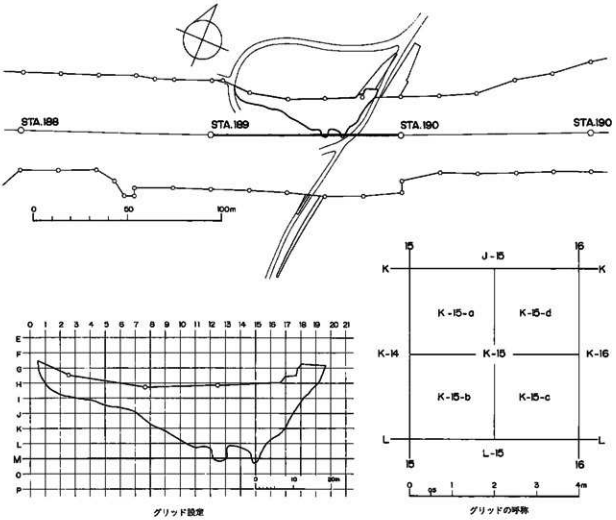
Ⅲ－２　黒色腐植土層（同上下位）

Ⅳ－１　灰白色軽石層（Ｔａ-ｃ　樽前ｃ降下軽石層）

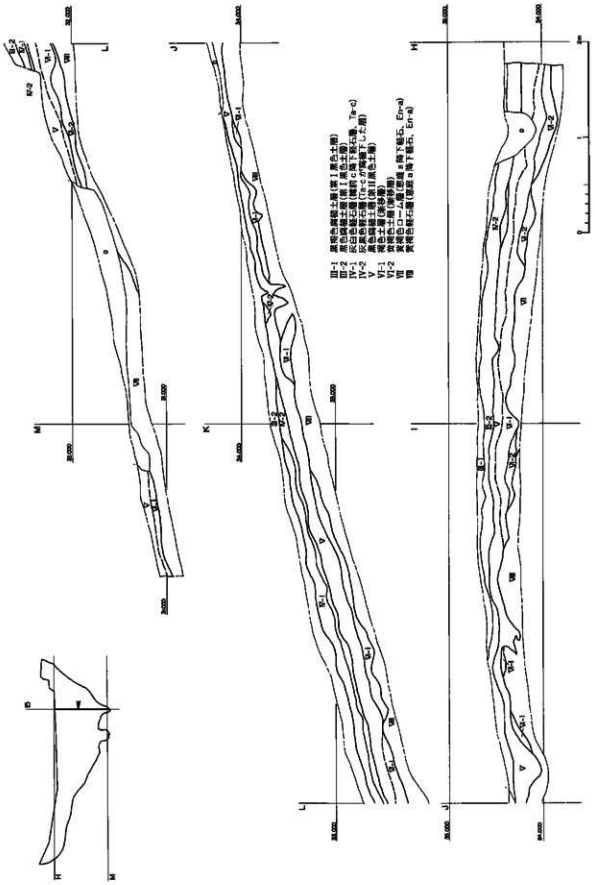
Ⅳ－２　灰黒色軽石層（同上下位　樽前ｃ降下軽石層が腐植化したもの）

Ⅴ　　黒褐色腐植土層（美沢川流域遺跡群の「第Ⅱ黒色土層」に対応する）

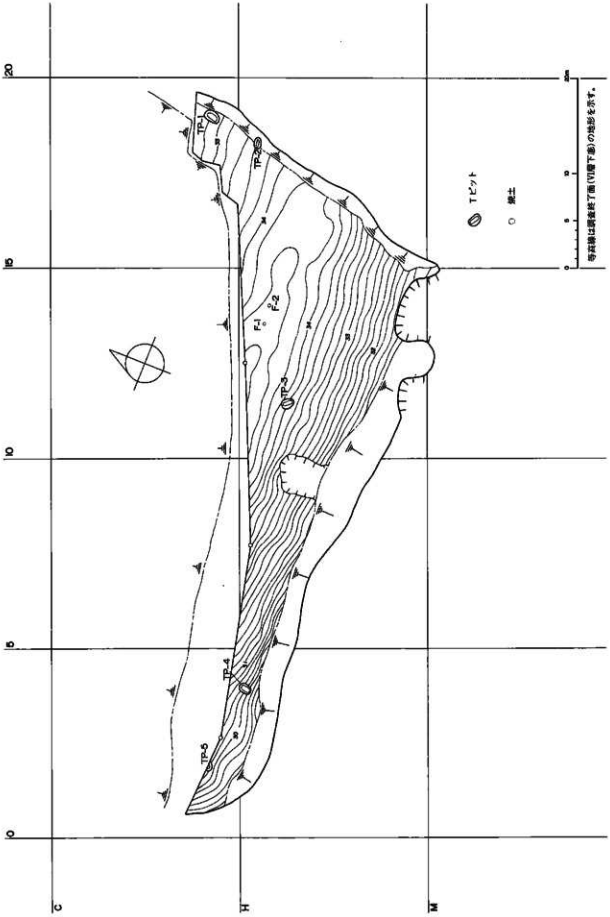
Ⅵ－１　褐色土層（Ⅴ～Ⅶの漸移層上位）



図Ｖ－２　調査区の設定


III-1 黒色海成土層(第1黒色土層)
III-2 黒色海成土層(第2黒色土層)
IV-1 灰色海成土層(縄文海下粘土層, Ta-c)
IV-2 灰色海成土層(Ta-c下部砂層, Ta-c)
V 黒色陸成土層(Ta-c上の黒色土層)
VI-1 褐色土層(砂質)
VI-2 褐色土層(粘質)
VII 黄褐色土層(関東ローム層)
VIII 黄褐色粘土層(関東ローム層)
Ta-c
Ta-1
Ta-2
Ta-3
Ta-4
Ta-5
Ta-6
Ta-7
Ta-8
Ta-9
Ta-10
Ta-11
Ta-12
Ta-13
Ta-14
Ta-15
Ta-16
Ta-17
Ta-18
Ta-19
Ta-20
Ta-21
Ta-22
Ta-23
Ta-24
Ta-25
Ta-26
Ta-27
Ta-28
Ta-29
Ta-30
Ta-31
Ta-32
Ta-33
Ta-34
Ta-35
Ta-36
Ta-37
Ta-38
Ta-39
Ta-40
Ta-41
Ta-42
Ta-43
Ta-44
Ta-45
Ta-46
Ta-47
Ta-48
Ta-49
Ta-50
Ta-51
Ta-52
Ta-53
Ta-54
Ta-55
Ta-56
Ta-57
Ta-58
Ta-59
Ta-60
Ta-61
Ta-62
Ta-63
Ta-64
Ta-65
Ta-66
Ta-67
Ta-68
Ta-69
Ta-70
Ta-71
Ta-72
Ta-73
Ta-74
Ta-75
Ta-76
Ta-77
Ta-78
Ta-79
Ta-80
Ta-81
Ta-82
Ta-83
Ta-84
Ta-85
Ta-86
Ta-87
Ta-88
Ta-89
Ta-90
Ta-91
Ta-92
Ta-93
Ta-94
Ta-95
Ta-96
Ta-97
Ta-98
Ta-99
Ta-100
Ta-101
Ta-102
Ta-103
Ta-104
Ta-105
Ta-106
Ta-107
Ta-108
Ta-109
Ta-110
Ta-111
Ta-112
Ta-113
Ta-114
Ta-115
Ta-116
Ta-117
Ta-118
Ta-119
Ta-120
Ta-121
Ta-122
Ta-123
Ta-124
Ta-125
Ta-126
Ta-127
Ta-128
Ta-129
Ta-130
Ta-131
Ta-132
Ta-133
Ta-134
Ta-135
Ta-136
Ta-137
Ta-138
Ta-139
Ta-140
Ta-141
Ta-142
Ta-143
Ta-144
Ta-145
Ta-146
Ta-147
Ta-148
Ta-149
Ta-150
Ta-151
Ta-152
Ta-153
Ta-154
Ta-155
Ta-156
Ta-157
Ta-158
Ta-159
Ta-160
Ta-161
Ta-162
Ta-163
Ta-164
Ta-165
Ta-166
Ta-167
Ta-168
Ta-169
Ta-170
Ta-171
Ta-172
Ta-173
Ta-174
Ta-175
Ta-176
Ta-177
Ta-178
Ta-179
Ta-180
Ta-181
Ta-182
Ta-183
Ta-184
Ta-185
Ta-186
Ta-187
Ta-188
Ta-189
Ta-190
Ta-191
Ta-192
Ta-193
Ta-194
Ta-195
Ta-196
Ta-197
Ta-198
Ta-199
Ta-200
Ta-201
Ta-202
Ta-203
Ta-204
Ta-205
Ta-206
Ta-207
Ta-208
Ta-209
Ta-210
Ta-211
Ta-212
Ta-213
Ta-214
Ta-215
Ta-216
Ta-217
Ta-218
Ta-219
Ta-220
Ta-221
Ta-222
Ta-223
Ta-224
Ta-225
Ta-226
Ta-227
Ta-228
Ta-229
Ta-230
Ta-231
Ta-232
Ta-233
Ta-234
Ta-235
Ta-236
Ta-237
Ta-238
Ta-239
Ta-240
Ta-241
Ta-242
Ta-243
Ta-244
Ta-245
Ta-246
Ta-247
Ta-248
Ta-249
Ta-250
Ta-251
Ta-252
Ta-253
Ta-254
Ta-255
Ta-256
Ta-257
Ta-258
Ta-259
Ta-260
Ta-261
Ta-262
Ta-263
Ta-264
Ta-265
Ta-266
Ta-267
Ta-268
Ta-269
Ta-270
Ta-271
Ta-272
Ta-273
Ta-274
Ta-275
Ta-276
Ta-277
Ta-278
Ta-279
Ta-280
Ta-281
Ta-282
Ta-283
Ta-284
Ta-285
Ta-286
Ta-287
Ta-288
Ta-289
Ta-290
Ta-291
Ta-292
Ta-293
Ta-294
Ta-295
Ta-296
Ta-297
Ta-298
Ta-299
Ta-300
Ta-301
Ta-302
Ta-303
Ta-304
Ta-305
Ta-306
Ta-307
Ta-308
Ta-309
Ta-310
Ta-311
Ta-312
Ta-313
Ta-314
Ta-315
Ta-316
Ta-317
Ta-318
Ta-319
Ta-320
Ta-321
Ta-322
Ta-323
Ta-324
Ta-325
Ta-326
Ta-327
Ta-328
Ta-329
Ta-330
Ta-331
Ta-332
Ta-333
Ta-334
Ta-335
Ta-336
Ta-337
Ta-338
Ta-339
Ta-340
Ta-341
Ta-342
Ta-343
Ta-344
Ta-345
Ta-346
Ta-347
Ta-348
Ta-349
Ta-350
Ta-351
Ta-352
Ta-353
Ta-354
Ta-355
Ta-356
Ta-357
Ta-358
Ta-359
Ta-360
Ta-361
Ta-362
Ta-363
Ta-364
Ta-365
Ta-366
Ta-367
Ta-368
Ta-369
Ta-370
Ta-371
Ta-372
Ta-373
Ta-374
Ta-375
Ta-376
Ta-377
Ta-378
Ta-379
Ta-380
Ta-381
Ta-382
Ta-383
Ta-384
Ta-385
Ta-386
Ta-387
Ta-388
Ta-389
Ta-390
Ta-391
Ta-392
Ta-393
Ta-394
Ta-395
Ta-396
Ta-397
Ta-398
Ta-399
Ta-400
Ta-401
Ta-402
Ta-403
Ta-404
Ta-405
Ta-406
Ta-407
Ta-408
Ta-409
Ta-410
Ta-411
Ta-412
Ta-413
Ta-414
Ta-415
Ta-416
Ta-417
Ta-418
Ta-419
Ta-420
Ta-421
Ta-422
Ta-423
Ta-424
Ta-425
Ta-426
Ta-427
Ta-428
Ta-429
Ta-430
Ta-431
Ta-432
Ta-433
Ta-434
Ta-435
Ta-436
Ta-437
Ta-438
Ta-439
Ta-440
Ta-441
Ta-442
Ta-443
Ta-444
Ta-445
Ta-446
Ta-447
Ta-448
Ta-449
Ta-450
Ta-451
Ta-452
Ta-453
Ta-454
Ta-455
Ta-456
Ta-457
Ta-458
Ta-459
Ta-460
Ta-461
Ta-462
Ta-463
Ta-464
Ta-465
Ta-466
Ta-467
Ta-468
Ta-469
Ta-470
Ta-471
Ta-472
Ta-473
Ta-474
Ta-475
Ta-476
Ta-477
Ta-478
Ta-479
Ta-480
Ta-481
Ta-482
Ta-483
Ta-484
Ta-485
Ta-486
Ta-487
Ta-488
Ta-489
Ta-490
Ta-491
Ta-492
Ta-493
Ta-494
Ta-495
Ta-496
Ta-497
Ta-498
Ta-499
Ta-500
Ta-501
Ta-502
Ta-503
Ta-504
Ta-505
Ta-506
Ta-507
Ta-508
Ta-509
Ta-510
Ta-511
Ta-512
Ta-513
Ta-514
Ta-515
Ta-516
Ta-517
Ta-518
Ta-519
Ta-520
Ta-521
Ta-522
Ta-523
Ta-524
Ta-525
Ta-526
Ta-527
Ta-528
Ta-529
Ta-530
Ta-531
Ta-532
Ta-533
Ta-534
Ta-535
Ta-536
Ta-537
Ta-538
Ta-539
Ta-540
Ta-541
Ta-542
Ta-543
Ta-544
Ta-545
Ta-546
Ta-547
Ta-548
Ta-549
Ta-550
Ta-551
Ta-552
Ta-553
Ta-554
Ta-555
Ta-556
Ta-557
Ta-558
Ta-559
Ta-560
Ta-561
Ta-562
Ta-563
Ta-564
Ta-565
Ta-566
Ta-567
Ta-568
Ta-569
Ta-570
Ta-571
Ta-572
Ta-573
Ta-574
Ta-575
Ta-576
Ta-577
Ta-578
Ta-579
Ta-580
Ta-581
Ta-582
Ta-583
Ta-584
Ta-585
Ta-586
Ta-587
Ta-588
Ta-589
Ta-590
Ta-591
Ta-592
Ta-593
Ta-594
Ta-595
Ta-596
Ta-597
Ta-598
Ta-599
Ta-600
Ta-601
Ta-602
Ta-603
Ta-604
Ta-605
Ta-606
Ta-607
Ta-608
Ta-609
Ta-610
Ta-611
Ta-612
Ta-613
Ta-614
Ta-615
Ta-616
Ta-617
Ta-618
Ta-619
Ta-620
Ta-621
Ta-622
Ta-623
Ta-624
Ta-625
Ta-626
Ta-627
Ta-628
Ta-629
Ta-630
Ta-631
Ta-632
Ta-633
Ta-634
Ta-635
Ta-636
Ta-637
Ta-638
Ta-639
Ta-640
Ta-641
Ta-642
Ta-643
Ta-644
Ta-645
Ta-646
Ta-647
Ta-648
Ta-649
Ta-650
Ta-651
Ta-652
Ta-653
Ta-654
Ta-655
Ta-656
Ta-657
Ta-658
Ta-659
Ta-660
Ta-661
Ta-662
Ta-663
Ta-664
Ta-665
Ta-666
Ta-667
Ta-668
Ta-669
Ta-670
Ta-671
Ta-672
Ta-673
Ta-674
Ta-675
Ta-676
Ta-677
Ta-678
Ta-679
Ta-680
Ta-681
Ta-682
Ta-683
Ta-684
Ta-685
Ta-686
Ta-687
Ta-688
Ta-689
Ta-690
Ta-691
Ta-692
Ta-693
Ta-694
Ta-695
Ta-696
Ta-697
Ta-698
Ta-699
Ta-700
Ta-701
Ta-702
Ta-703
Ta-704
Ta-705
Ta-706
Ta-707
Ta-708
Ta-709
Ta-710
Ta-711
Ta-712
Ta-713
Ta-714
Ta-715
Ta-716
Ta-717
Ta-718
Ta-719
Ta-720
Ta-721
Ta-722
Ta-723
Ta-724
Ta-725
Ta-726
Ta-727
Ta-728
Ta-729
Ta-730
Ta-731
Ta-732
Ta-733
Ta-734
Ta-735
Ta-736
Ta-737
Ta-738
Ta-739
Ta-740
Ta-741
Ta-742
Ta-743
Ta-744
Ta-745
Ta-746
Ta-747
Ta-748
Ta-749
Ta-750
Ta-751
Ta-752
Ta-753
Ta-754
Ta-755
Ta-756
Ta-757
Ta-758
Ta-759
Ta-760
Ta-761
Ta-762
Ta-763
Ta-764
Ta-765
Ta-766
Ta-767
Ta-768
Ta-769
Ta-770
Ta-771
Ta-772
Ta-773
Ta-774
Ta-775
Ta-776
Ta-777
Ta-778
Ta-779
Ta-780
Ta-781
Ta-782
Ta-783
Ta-784
Ta-785
Ta-786
Ta-787
Ta-788
Ta-789
Ta-790
Ta-791
Ta-792
Ta-793
Ta-794
Ta-795
Ta-796
Ta-797
Ta-798
Ta-799
Ta-800
Ta-801
Ta-802
Ta-803
Ta-804
Ta-805
Ta-806
Ta-807
Ta-808
Ta-809
Ta-810
Ta-811
Ta-812
Ta-813
Ta-814
Ta-815
Ta-816
Ta-817
Ta-818
Ta-819
Ta-820
Ta-821
Ta-822
Ta-823
Ta-824
Ta-825
Ta-826
Ta-827
Ta-828
Ta-829
Ta-830
Ta-831
Ta-832
Ta-833
Ta-834
Ta-835
Ta-836
Ta-837
Ta-838
Ta-839
Ta-840
Ta-841
Ta-842
Ta-843
Ta-844
Ta-845
Ta-846
Ta-847
Ta-848
Ta-849
Ta-850
Ta-851
Ta-852
Ta-853
Ta-854
Ta-855
Ta-856
Ta-857
Ta-858
Ta-859
Ta-860
Ta-861
Ta-862
Ta-863
Ta-864
Ta-865
Ta-866
Ta-867
Ta-868
Ta-869
Ta-870
Ta-871
Ta-872
Ta-873
Ta-874
Ta-875
Ta-876
Ta-877
Ta-878
Ta-879
Ta-880
Ta-881
Ta-882
Ta-883
Ta-884
Ta-885
Ta-886
Ta-887
Ta-888
Ta-889
Ta-890
Ta-891
Ta-892
Ta-893
Ta-894
Ta-895
Ta-896
Ta-897
Ta-898
Ta-899
Ta-900
Ta-901
Ta-902
Ta-903
Ta-904
Ta-905
Ta-906
Ta-907
Ta-908
Ta-909
Ta-910
Ta-911
Ta-912
Ta-913
Ta-914
Ta-915
Ta-916
Ta-917
Ta-918
Ta-919
Ta-920
Ta-921
Ta-922
Ta-923
Ta-924
Ta-925
Ta-926
Ta-927
Ta-928
Ta-929
Ta-930
Ta-931
Ta-932
Ta-933
Ta-934
Ta-935
Ta-936
Ta-937
Ta-938
Ta-939
Ta-940
Ta-941
Ta-942
Ta-943
Ta-944
Ta-945
Ta-946
Ta-947
Ta-948
Ta-949
Ta-950
Ta-951
Ta-952
Ta-953
Ta-954
Ta-955
Ta-956
Ta-957
Ta-958
Ta-959
Ta-960
Ta-961
Ta-962
Ta-963
Ta-964
Ta-965
Ta-966
Ta-967
Ta-968
Ta-969
Ta-970
Ta-971
Ta-972
Ta-973
Ta-974
Ta-975
Ta-976
Ta-977
Ta-978
Ta-979
Ta-980
Ta-981
Ta-982
Ta-983
Ta-984
Ta-985
Ta-986
Ta-987
Ta-988
Ta-989
Ta-990
Ta-991
Ta-992
Ta-993
Ta-994
Ta-995
Ta-996
Ta-997
Ta-998
Ta-999
Ta-1000

図V−3 土層断面図


20
15
10
5
0
C
H
M
TP-1
TP-2
TP-3
TP-4
TP-5
F-1
F-2
Tピット
黒土
等高線は調査終了面(VI層下面)の地形を示す。
0
5
10
m

図V－4　遺構位置図

Ⅵ－2　黄褐色土層（同上下位）

Ⅶ　黄褐色ローム層（Ｅｎ－ａ　恵庭ａ降下軽石層の風化したもの）

Ⅷ　黄褐色軽石層（Ｅｎ－ａ　恵庭ａ降下軽石層）

4　遺構（図Ⅴ－4～7）

（1）Ｔピット

ＴＰ－１（図Ⅴ－5）

位置　Ｇ－18－ｄ，Ｇ－19－ａ

規模　1.70×1.13／1.20×0.50／1.44m

特徴　調査区北東隅のⅥ層下部で黒色土の落ちこみを発見、覆土を掘り下げてＴピットであることを確認した。東端部は道路の法面で上部を削られており、西辺には電柱の埋設孔があるが、壙底には達していない。壙底のプランは隅丸長方形状である。覆土最下層の黒色土はⅤ層が落ちこんだもの、17～20層はⅦ層が崩落したものとみられる粗い砂礫である。覆土上部はⅤ層（黒色腐植土）とⅥ・Ⅶ層が混じりあっている。構築直後に表土が落ちこみ、つづいて壁の上部が崩落、上半部が大きく開いたものと推定される。壙底には２つの小穴の跡があった。径は約４㎝、断面をみるといずれも先端を鋭く尖がらせた杭を打ち込んだものと推定される。

時期　周辺の出土遺物、確認層位などから、縄文時代中期以後の遺構と推定される。

ＴＰ－２（図Ⅴ－5）

位置　Ｈ－18－ａ

規模　1.03×0.73／0.80×0.25／0.98m

特徴　調査区東端のⅤ層下部で確認した。東半部は確認された深さの中ほどまで、道路法面で削平されている。確認されたプランは小判型である。壙底は一端が角ばる長方形状をなしている。覆土下部には黒色腐食土（17層）を挟んで、Ⅶ層の崩落したものとみられる粗い砂が堆積している。壙底に杭跡が一つ確認された。深さは約24㎝、先端を尖がらせた木を打ち込んだものである。

時期　確認層位、周辺から出土した土器片などから、縄文時代中期以後の遺構とみられる。

ＴＰ－３（図Ⅴ－6）

位置　Ｉ－11－ｃ

規模　1.38×1.50／1.10×0.50／1.10m

特徴　調査区中央部の南向き斜面に位置する。Ⅴ層下部で黒色土の落ちこみを発見、覆土を掘り下げて、Ｔピットであることを確認した。確認したプランは小判型、壙底は幅が広くほぼ水平、壙底のプランは隅丸長方形状である。壙底面に二つの杭跡がある。ＴＰ－１の３つの杭の位置関係と比較すると、さらに一つの杭跡があるとも考えられるが、検出されなかった。覆土２層は折りたたまれたような状態に堆積している。斜面上部から流れ込んだ土が埋まりきっていない窪みに入り、褶曲したものと推定される。覆土下部には壁上位の漸移層が崩落したものとみられる、灰色ないし褐色の粘質土が堆積している。

遺物　覆土３層より　Ⅲ群ｂ－１類の土器片が２点出土した。

時期　確認した層位、周辺および覆土３層中から出土した土器片などから、縄文時代中期以後の遺構と推定される。

ＴＰ－４（図Ⅴ－6）

位置　Ｈ－４－ｄ，Ｈ－４－ａ，Ｈ－３－ｃ，Ｈ－４－ｂ

規模　1.27×0.98／0.98×0.48／1.46m

特徴　調査区西部斜面のⅤ層下部で発見した。確認面のプランは小判型、壙底は長方形をなしている。確認面は大きく傾斜しているが、壙底ははぼ水平である。壙底面に三つの杭跡を確認、いずれも先端が尖がった木を打ち込んだものと推定される。3ヵ所とも上部が東に傾いている。覆土下部には壁の崩落土とみられる砂礫が堆積しているが、他のTピットに比べて崩れかたが少なく、この遺構は構築当初の形態を比較的よく留めているものと考えられる。壁下位の灰色砂質土は、非常によく締まっており硬い。

ＴＰ－5（図Ⅴ－7）

位置　Ｇ－1－ｄ，Ｇ－2－ａ

規模　－×（0.85）／－×0.33／0.88m

特徴　調査区西端部の斜面にある。確認されたのは南西端部のみで、大部分は調査区外にある。確認面のプランはＴＰ－4と同様に小判型をなすものと思われる。調査区外の壙底に杭跡がある可能性がある。検出された範囲に杭跡はない。土層断面をみると、北西側の壁が動いている様子が分かる。

（2）焼土

Ｆ－1（図Ⅴ－7）

位置　Ｈ－13－ｄ

規模　0.25×0.22／0.08m

特徴　調査区で最も高い平坦部にある。確認面はⅤ層中である。1・2層はⅤ層に灰が混入したもの。3層は焼けていない。

遺物　遺物は出土していない。

時期　検出層位および周辺の出土遺物などから、縄文時代中期の遺構と推定される。

Ｆ－2（図Ⅴ－7）

位置　Ｈ－13－ｃ，Ｈ－14－ｂ

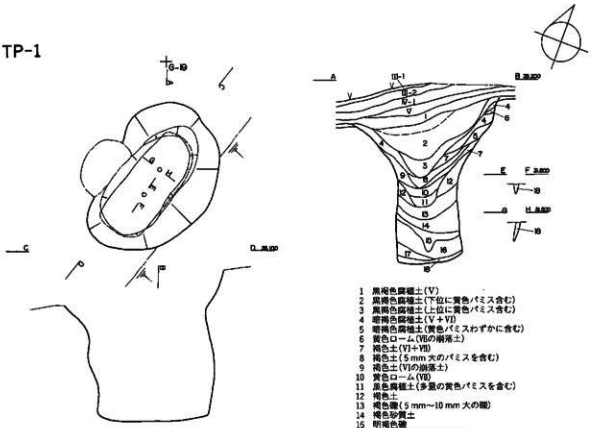
規模　0.28×（0.24）／0.07m

特徴　調査区で最も高い平坦部、Ｆ－1の東約2mのところにある。確認面はⅤ層下部。1～3層は焼けたⅤ層に灰が混入したもの。

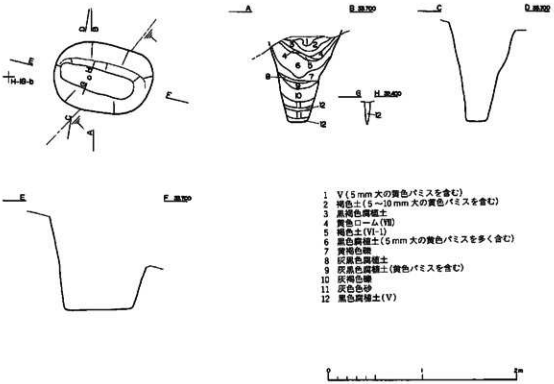
遺物　内部から焼けた黒曜石剥片が4点出土した。

時期　検出層位、周辺の出土層位などから、縄文時代中期の遺構と推定される。

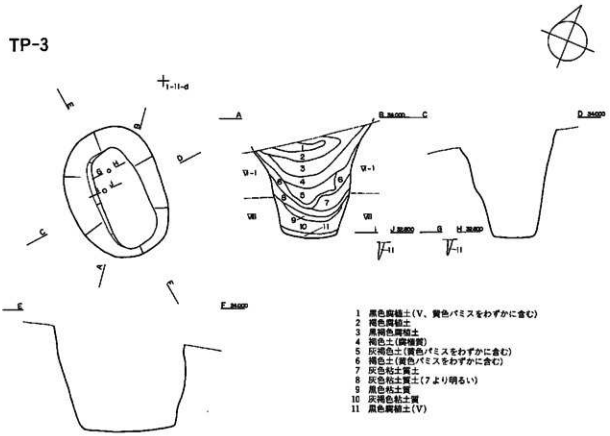
TP-1

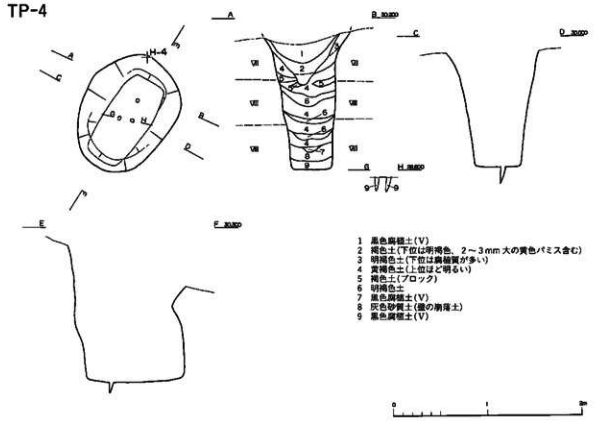


TP-2



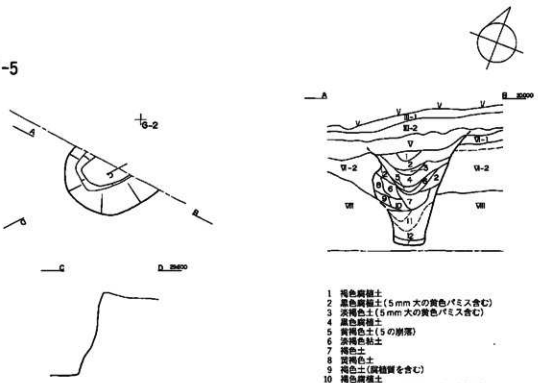
図V−5 Tピット (1)


TP-3
1　黒色腐植土(V、黄色パミスをわずかに含む)
2　褐色腐植土
3　黒褐色腐植土
4　褐色土(腐植質)
5　灰褐色土(黄色パミスをわずかに含む)
6　褐色土(黄色パミスをわずかに含む)
7　灰色粘土質土
8　灰色粘土質土(7より明るい)
9　黒色粘土質
10　灰褐色粘土質
11　黒色腐植土(V)

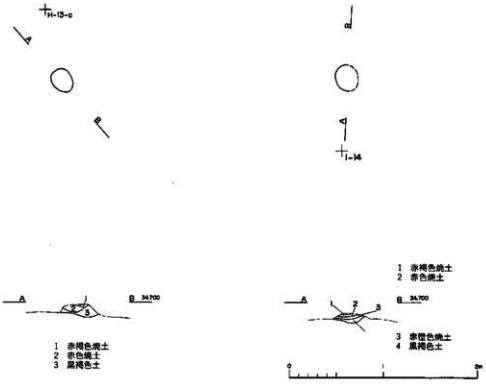

TP-4
1　黒色腐植土(V)
2　褐色土(下位は明褐色、2～3mm大の黄色パミス含む)
3　明褐色土(下位は鉄結質が多い)
4　黄褐色土(上位ほど明るい)
5　褐色土(ブロック)
6　明褐色土
7　黒色腐植土(V)
8　灰色砂質土(樹の倒伏土)
9　黒色腐植土(V)

図V－6　Tピット(2)

TP-5



F-1



図V－7 Tピット(3)・焼土

5　遺物

(1) 土器（図Ⅴ－９・10）

Ⅰ群b-4類、Ⅲ群a類、Ⅲ群b-1類、Ⅴ群c類、Ⅵ群土器が出土している。主体はⅤ群c類土器でⅢ群b-1類土器がこれに次ぐ。

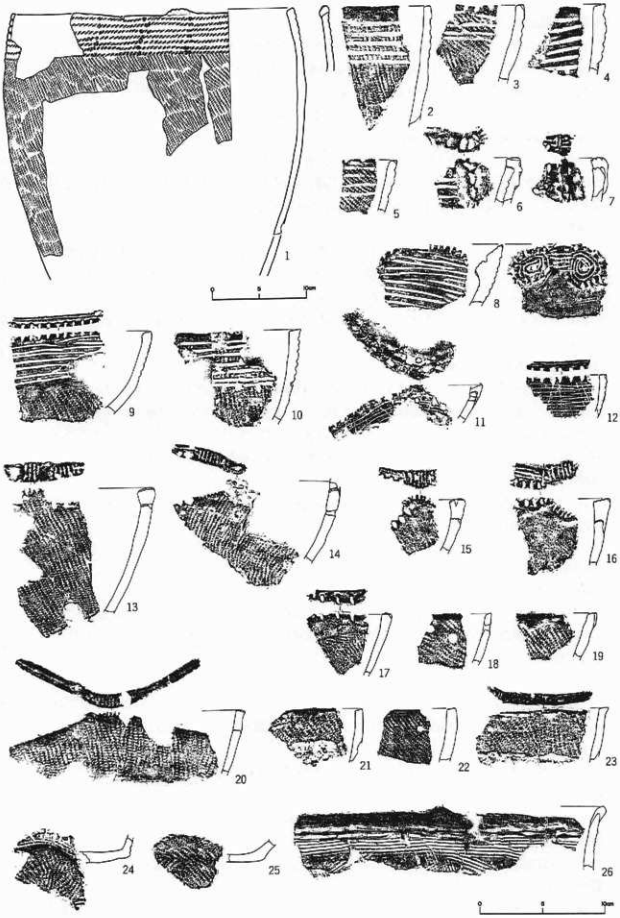
Ⅰ群b-4類土器（図Ⅴ－９－１・２）

１・２は撚糸文風の羽状縄文が施されたもので同一個体と考えられる。

Ⅲ群a類土器（8）

太い原体で明瞭な斜行縄文を施文した破片が散点的に出土している。8は口縁に付けられた突起の肩部分である。表面には斜行縄文が施され、内面は磨かれている。胎土中には「繊維」が認められる。

図Ⅴ－８　Ⅰ群・Ⅲ群土器



図Ⅴ－9　Ⅴ群・Ⅵ群土器

Ⅲ群b-1類土器（3～7・9～13）

口縁の貼付帯に半裁した竹管状の施文具で刻みや沈線を施し地紋に結束の羽状縄文を施したものが調査区のほぼ全域から出土した。3～7・9・10は口縁部である。3～6は突起を有するもので、貼付帯の上に半裁した竹管状の道具で刻みや沈線を施している。3は貼付帯の間に刺突を施している。7の口唇上面に施されるのは縄の刻みで、9は貼付帯の上に縄を押捺している。11～13は底部である。

Ⅴ群c類土器（図Ⅴ－10－1～25）

主体となるものでⅢ～Ⅴ層から出土している。器形は深鉢形と浅鉢形のものが見られ、口縁部の点数では後者がやや多いようである。文様は口縁部等に縄線文、沈線文が施され、口唇付近に縄や棒状の施文具による刻みが施されるものが多い。地文には縄文が施されている。

深鉢形土器（1～7・10）

1は唯一復元が可能であった深鉢形土器である。口唇には縄の刻みが施された低い突起部を有し、やや内側に湾曲する口縁部には6～7本の縄線文が横冠している。縄線の軌道上には縄端を止めた結び目も押圧されている。2～6・10は平行する数条の沈線が施文されるもので、4・5・10は口唇の表面側がやや張り出す。6・7は口唇の突起から下垂する貼付帯がつく。4・10の沈線下位には竹管もしくは縄の端部で刺突が施される。

浅鉢形土器（8・9・11～25）

8・9・11・12は細目の不安定な沈線と口唇に刻みが施される口縁部である。8・9は同一個体で8には内側を向く口唇の面には螺旋状に押捺された縄が二つ並ぶ装飾性の強い文様が施されている。13～16・20は縄の刻みが入る突起部を有するものである。20の俯瞰した器形はラグビーボール形を呈する。17～23は縄文が施された口縁部である。24・25は底部で、24の胴部には細目の沈線が描かれている。

Ⅵ群土器（26）

同じ個体の破片が出土している。26は口唇に小突起を有す深鉢形の土器である。表面には横冠する微隆起線と縞状の縄文が施されている。

(2) 石器（図Ⅴ－10・11、図版Ⅴ－5）

石鏃（1～13）

1～3は無茎のもので、1,2は基部が内湾する。3は若干基部が外湾する。4～13は有茎のもので、4～9,11は主要剥離面を残し、周辺だけを加工したものである。12,13は基部先端を欠く。石材はいずれも黒曜石である。

スクレイパー（14,16）

14は剥片の下部に浅い抉があるもので、ドリル的な用途を持つものと思われる。16は尖頭部を持つもので先端部を欠く。右側縁に刃が付く。石材は14が黒曜石、16が安山岩である。

くさび型石器（15）

上下両端が使用によりつぶれたものである、石材は黒曜石である。

Ｒフレイク（17）

黒曜石製で、両側縁のほぼ中央付近と右側縁の中央やや上部に浅い抉が入るものである。

石核（18）

メノウ質頁岩製のものである。

石斧（19）

細長い原石の周辺を加工したもので、片面はまったく磨かれていない。石材は粘板岩である。

たたき石（20～22）

いずれも自然礫を利用したもので、20は左側縁と真ん中付近に敲打痕を残すもの、21はほぼ全面に敲打痕を残すもの、22は先端部の一端に敲打痕を残すものである。石材は20,22が砂岩、21が安山岩である。

くぼみ石（23）

表裏面に凹みを有するもので、石材は安山岩である。

台石（24～26）

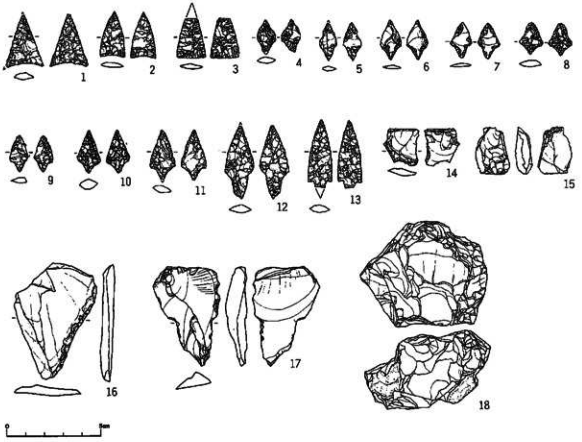
24は破損品で、表面に敲打痕が認められる。25は偏平な礫を利用したものでわずかに使用痕が認められる。26は方形の自然礫の3面に敲打痕の残るものである。石材は25が砂岩、26が安山岩で、24は安山岩かと思われる。

すり石（27）

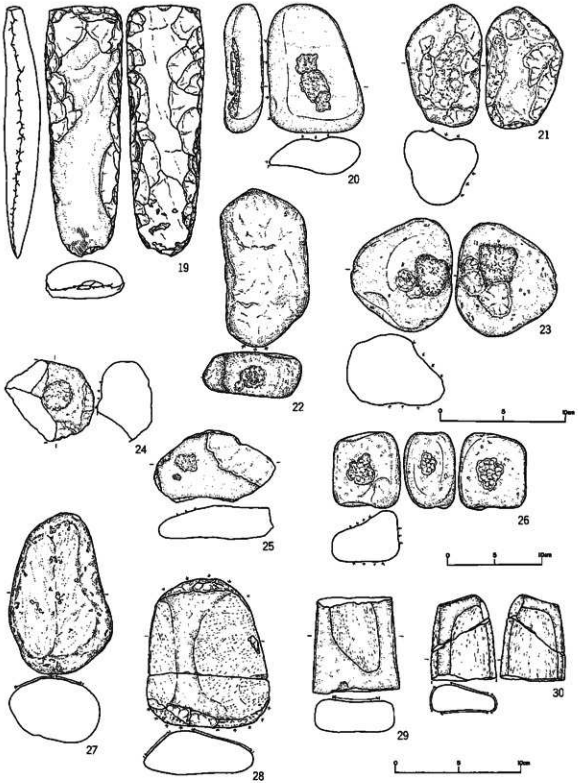
荒い安山岩の自然礫の片面を擦ったものである。

砥石（28～30）

28はたたき石の転用品で上下端に敲打痕がある。29,30はともに棒状の原石の2面に研いだ痕のあるものである。石材はすべて砂岩である。



図Ⅴ－10　包含層石器（1）



図V－11　包含層石器（2）

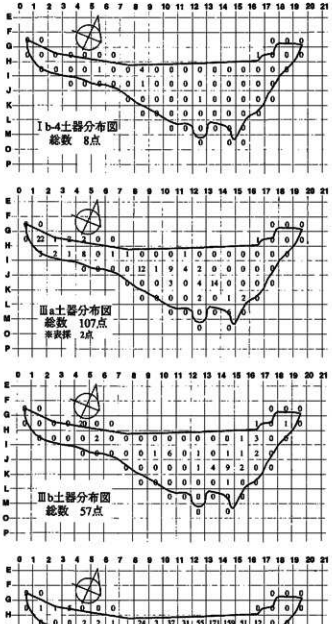
6 まとめ

出土した土器片1,200点余りのうち、約2割がⅢ群（縄文時代中期）、8割ちかくがⅤ群c類（晩期）に属するものである。ほかに早期や後期のものもわずかにある。器形を復元できたものはない。遺物の分布傾向をみると、 群土器は調査区のうち最も高い標高約34mの平坦部を中心に周辺の緩斜面に広がっている。石斧やたたき石などの礫石器も緩斜面に多い。Ⅴ群c類土器（縄文晩期後葉）は大部分が頂上部に集中している。

遺跡が立地する尾根は北半部が土取りで失われているが、以前の地形図を見ると、頂上の比較的平坦な面は北西方向に続いており、20×30mほどの面積があったらしい。本来の地形と遺物の分布状態からみて、縄文時代中期・晩期ともにこの平坦部が遺跡の主体部であった可能性が強い。平坦部で見つかった2ヵ所の焼土は、縄文時代中期頃に人が居住していたことを示唆している。晩期の遺構は検出されていないが、遺物の出土状態からこの時期にも尾根上が利用されたものと推定される。

Tピットは調査区の東西に2基ずつ、中央部に1基が位置している。いずれもⅤ層中ほどから掘り込まれており、構築時期には大きな差異はないものと考えられる。規模には多少の差異があるが形態はよく似ている。調査区外に張り出しているTP－5を除く他の4基の壙底には、1～3ヵ所の杭跡が検出された。Tピットは列をなして分布することが知られている。しかし、今回調査した5基からそのような列を読み取ることはできない。また遺物の分布状態とも直接に関連づけることもできない。

遺物包含層は調査区から、さらに南方の平地まで延びていた可能性がある。平地部は畑や住宅地に利用されていたところで、トレンチ調査を行ったところ、地山まで削平された状態であった。前述したように、遺物の分布は尾根の頂部から南斜面下位に向かって少なくなっており、本遺跡が平地部までつづいていた可能性は少ない。



図Ⅴ－12 土器分布図

7　資料一覧

表Ⅴ－4　遺構出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	数量
ＴＰ－３	覆土３層	土器	Ⅲｂ	3
			計	3
Ｆ－２	覆土	石器類	フレイク	4
			計	4
計				7

表Ⅴ－5　包含層出土分類別土器一覧

	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	表採	撹乱	排土	計
Ⅰｂ－２				1					1
Ⅰｂ－４				8					8
Ⅲａ		3		102		2			107
Ⅲｂ-1		9		63					72
Ⅲｂ		3		53			1		57
Ⅲ				6					6
Ⅳａ				2					2
Ⅳｂ		1							1
Ⅴｃ		499		438		10	6	1	954
分類不明土器				2					2
陶磁器						1			1
計	0	515	0	675	0	13	7	1	1,211

表Ⅴ－6　包含層出土石器等機種別一覧

	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	表採	撹乱	排土	計
石鏃		6		8					14
スクレイパー		1		1					2
くさび型石器				1					1
Ｒフレイク		1		1					2
石斧		1							1
石斧片				1					1
たたき石		2		3			1		6
すり石		1							1
くぼみ石		1							1
砥石		3		3					6
砥石片				4					4
台石		1		1					2
台石片		1		1					2
フレイク		38		39		3			80
チップ		8		5					13
石核				3					3
原石				1					1
礫		28		53					81
礫片		4		18					22
計	0	96	0	143	0	3	1	0	243

表Ⅴ－7 包含層出土掲載土器一覧

図版	番号	分類	出土区	層位
Ⅴ－8	1	Ⅰb-4	J -12- a	Ⅴ
Ⅴ－8	2	Ⅰb-4	H -8- c	Ⅴ
Ⅴ－8	3	Ⅲa	G -1- c	Ⅴ
Ⅴ－8	4	Ⅲb-1	H -14- a	Ⅲ
Ⅴ－8	4	Ⅲb-1	H -14- d	Ⅲ
Ⅴ－8	5	Ⅲb-1	I -8- c	Ⅴ
Ⅴ－8	6	Ⅲb-1	K -14- c	Ⅴ
Ⅴ－8	7	Ⅲb-1	K -13- b	Ⅴ
Ⅴ－8	7	Ⅲb-1	K -14- a	Ⅴ
Ⅴ－8	8	Ⅲa	L -14- d	Ⅴ
Ⅴ－8	9	Ⅲb-1	H -12- a	Ⅴ
Ⅴ－8	10	Ⅲa	G -3- b	Ⅴ
Ⅴ－8	11	Ⅲb-1	J -15- d	Ⅴ
Ⅴ－8	12	Ⅲa	I -8- a	Ⅴ
Ⅴ－8	13	Ⅲa	I -10- c	Ⅴ
Ⅴ－9	1	Ⅴc	H -13- a・b	Ⅲ
Ⅴ－9	2	Ⅴc	H -13- b	Ⅲ
Ⅴ－9	3	Ⅴc	I -13- d	Ⅲ
Ⅴ－9	4	Ⅴc	H -14- a	Ⅴ
Ⅴ－9	5	Ⅴc	I -14- 不明	攪乱
Ⅴ－9	6	Ⅴc	H -15- b	Ⅴ

図	番号	分類	出土区	層位
Ⅴ－9	7	Ⅴc	H -14- a	Ⅲ
Ⅴ－9	8	Ⅴc	H -7- a	Ⅴ
Ⅴ－9	9	Ⅴc	H -10- d	Ⅲ
Ⅴ－9	10	Ⅴc	H -13- d	Ⅲ
Ⅴ－9	11	Ⅴc	H -14- b	Ⅴ
Ⅴ－9	12	Ⅴc	H -14- c	Ⅲ
Ⅴ－9	13	Ⅴc	J -14- c	Ⅲ
Ⅴ－9	14	Ⅴc	H -8- a	Ⅴ
Ⅴ－9	15	Ⅴc	H -11- a	Ⅲ
Ⅴ－9	16	Ⅴc	I -14- a	Ⅲ
Ⅴ－9	17	Ⅴc	H -14- a	Ⅴ
Ⅴ－9	18	Ⅴc	H -15- b	Ⅴ
Ⅴ－9	19	Ⅴc		表採
Ⅴ－9	20	Ⅴc	H -13- a	Ⅲ
Ⅴ－9	21	Ⅴc	H -15- b	Ⅴ
Ⅴ－9	22	Ⅴc	H -11- b	Ⅲ
Ⅴ－9	23	Ⅴc	H -14- a	Ⅲ
Ⅴ－9	24	Ⅴc	H -8- b	Ⅴ
Ⅴ－9	25	Ⅴc	H -10- a	Ⅲ
Ⅴ－9	26	Ⅴc	H -13- d	Ⅲ

表Ⅴ－8 包含層出土掲載石器等一覧

図版	番号	器種	出土区	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	石材
Ⅴ－10	1	石鏃	I -7- d	Ⅴ	2.50 × 2.00 × 0.40	1.1	黒曜石
Ⅴ－10	2	石鏃	G -18- c	Ⅴ	2.30 × 1.20 × 0.20	0.6	黒曜石
Ⅴ－10	3	石鏃	H -14- c	Ⅲ	2.05 × 1.47 × 0.25	0.8	黒曜石
Ⅴ－10	4	石鏃	I -14- a	Ⅲ	1.67 × 0.99 × 0.31	0.5	黒曜石
Ⅴ－10	5	石鏃	I -14- a	Ⅴ	1.90 × 0.90 × 0.30	0.3	黒曜石
Ⅴ－10	6	石鏃	H -14- a	Ⅴ	1.90 × 1.00 × 3.00	0.3	黒曜石
Ⅴ－10	7	石鏃	H -13- c	Ⅲ	1.83 × 1.15 × 0.19	0.3	黒曜石
Ⅴ－10	8	石鏃	H -14- b	Ⅲ	1.63 × 1.22 × 0.36	0.5	黒曜石
Ⅴ－10	9	石鏃	H -10- a	Ⅲ	2.50 × 1.10 × 0.13	0.3	黒曜石
Ⅴ－10	10	石鏃	H -11- d	Ⅲ	2.28 × 1.22 × 0.49	1.0	黒曜石
Ⅴ－10	11	石鏃	H -8- a	Ⅴ	2.60 × 1.30 × 0.30	0.8	黒曜石
Ⅴ－10	12	石鏃	I -16- d	Ⅴ	3.80 × 1.50 × 0.40	1.9	黒曜石
Ⅴ－10	13	石鏃	K -13- b	Ⅴ	3.50 × 1.30 × 0.40	1.7	黒曜石
Ⅴ－10	14	スクレイパー	J -10- d	Ⅴ	1.70 × 1.70 × 0.40	1.6	黒曜石
Ⅴ－10	15	くさび型石器	H -14- a	Ⅴ	2.40 × 1.60 × 0.70	3.3	黒曜石
Ⅴ－10	16	スクレイパー	I -14- c	Ⅲ	6.14 × 4.26 × 0.63	13.4	安山岩
Ⅴ－10	17	Rフレイク	I -14- a	Ⅲ	5.25 × 3.51 × 0.97	1.8	黒曜石
Ⅴ－10	18	石核	I -8- a	Ⅴ	5.53 × 6.70 × 3.62	146.9	珪岩
Ⅴ－11	19	石斧	H -14- a	Ⅲ	19.70 × 6.12 × 2.80	498.4	粘板岩
Ⅴ－11	20	たたき石	H -7- a	Ⅴ	9.96 × 7.43 × 2.93	304.5	砂岩
Ⅴ－11	21	たたき石	I -15- b	Ⅲ	9.62 × 5.87 × 5.70	375.7	安山岩
Ⅴ－11	22	たたき石	I -15- d	Ⅲ	11.98 × 6.75 × 3.62	487.4	砂岩
Ⅴ－11	23	くぼみ石	H -11- b	Ⅲ	8.81 × 7.85 × 5.60	385.8	安山岩
Ⅴ－11	24	台石片	I -8- c	Ⅴ	9.05 × 8.34 × 5.77	437.6	安山岩
Ⅴ－11	25	台石	I -7- d	Ⅴ	12.45 × 6.98 × 3.38	335.9	砂岩
Ⅴ－11	26	台石	I -12- a	Ⅲ	7.92 × 7.12 × 5.35	417.0	安山岩
Ⅴ－11	27	すり石	H -11- b	Ⅲ	12.40 × 8.10 × 4.98	660.1	安山岩
Ⅴ－11	28	砥石	H -10- d	Ⅲ	11.57 × 9.70 × 3.74	629.4	砂岩
Ⅴ－11	28	砥石	H -15- b	Ⅲ	11.57 × 9.70 × 3.74	629.4	砂岩
Ⅴ－11	28	砥石片	H -10- d	Ⅴ	11.57 × 9.70 × 3.74	629.4	砂岩
Ⅴ－11	29	砥石	H -11- c	Ⅲ	7.58 × 6.67 × 2.68	271.5	砂岩
Ⅴ－11	30	砥石	J -14- c	Ⅴ	6.68 × 5.14 × 2.20	97.0	砂岩
Ⅴ－11	30	砥石片	K -14- b	Ⅴ	6.68 × 5.14 × 2.20	97.0	砂岩

Ⅵ　自然科学分析

1 「キウス５遺跡：放射性炭素年代測定」

京都産業大学理学部　山田　治

測定番号	試料番号	遺構・層位	試料の名称	取上番号	^{14}C 年代 (BP)
KSU-2438	No.1	焼土 UF-13	炭化木材		2200 ± 80
KSU-2439	No.2	焼土 LF-14	炭化木材		2350 ± 60
KSU-2440	No.3	炭化物集中 KC-28	炭化木材		3480 ± 90
KSU-2441	No.4	炭化物集中 KC-23	炭化木材		2560 ± 60
KSU-2442	No.5	Ⅲ -5 層	自然木	No.389-1	2340 ± 50
KSU-2443	No.6	Ⅴ -1 層	自然木	No.829	2180 ± 60
KSU-2444	No.7	Ⅴ -1 層	自然木	No.484	2360 ± 35
KSU-2445	No.8	Ⅴ -5b 1 層	自然木	C-46	4020 ± 40
KSU-2446	No.9	Ⅴ -5b1 層	自然木	C-70	4500 ± 60
KSU-2447	No.10	Ⅴ -5c 層	自然木	C-136	4750 ± 50
KSU-2448	No.11	Ⅴ -5d 層	自然木	C-58	4840 ± 70
KSU-2449	No.12	Ⅴ -5d 層	自然木	C-25	4960 ± 60

2「千歳市キウス５遺跡出土動物遺存体」

千歳市教育委員会埋蔵文化財センター　高　橋　　理

はじめに

北海道埋蔵文化財センターによる千歳市キウス５遺跡の発掘調査において、上下２つのレベルを異にする焼土遺構が検出された。これらの焼土は上下いずれも縄文時代晩期に属する遺構で、剥片などの遺物の他に、貝殻や骨片などが含まれていることが判明した。そこで、これらの焼土の全サンプリングが行われ、フローテーション法による炭化種実の回収プロセスに組み込むことによって、少量ではあるが動物遺存体が検出された。

同定されたのは、皮のみを残す淡水産貝類（カワシンジュガイ　*Margaritifera laevis.* など）、サケ科魚類、イヌ科の哺乳類およびシカ（エゾシカ　*Cervus nippon yesoensis*）などである。全体に細片化が進んでいる。

上層の焼土、下層の焼土の遺構番号順に結果を記載した。種（あるいは科まで）および部位が判明しているものについては破片の大小にかかわらず、点数記載法を採り、部位の明確でない種不明遺物については点数記載法とともに原則として重量記載法を併用した。なお重量の測定は0.1gまでとした。

また他の記号は以下の意味を示す。

fr.　破片　　per.　完形

p.e.　近位端　　d.e.　遠位端　　st.　骨幹

なお、学名は奥谷・波部 (1987)，阿部 (1981)，中村 (1982)，関口ほか (1974)，林 (1982) によった。

出土動物遺存体

出土した動物遺存体は次のとおりである。

軟体動物門　Mollusca

二枚貝綱　Pelecypoda

古異歯目　Paleoheterodonta　fam. indet.

カワシンジュガイ科？　Margaritiferidae？

イシガイ科？　Unionidae？

脊椎動物門　Vertebrata

硬骨魚綱　Osteichthyes

サケ科　Salmonidae　gen. et sp. indet.

サケ？　*Oncorynchus keta* (Walbaum)　？

哺乳綱　Mammalia

イヌ科　Canidae　gen. et sp. indet.

シカ科　Cervidae

シカ（エゾシカ）*Cervus nippon yesoensis*

表Ⅳ－1　キウス５遺跡出土動物遺存体

遺構名サンプル個所	動物遺存体	部位	遺存部位	数量	重量	備考
Ⅲ-5層 UF-13 焼土	イヌ科	第Ⅰ中手骨 (r)	per.	1		
		第Ⅱ中手骨 (l)	d.e.	1		
		指 (趾) 骨基節骨	per.	1		
		指 (趾) 骨基節骨	p.e.	1		
		指 (趾) 骨基節骨	d.e.	1		
		指 (趾) 骨中節骨	fr.	3		
	哺乳類			274	12.6g	
V-1層 LF-13 焼土	サケ科	椎骨	fr.	137		
	他魚類			28	0.9g	含サケ
LF-14 焼土	貝類	皮				
	サケ科	椎骨	fr.	69		
	他魚類				0.7g	含サケ
						クルミ？片
LF-15 焼土	貝類	皮				
	サケ科	椎骨	fr.	16		
	他魚類				微量	含サケ
	シカ	中手・中足骨	fr.	3		
	哺乳類			136	10.2g	
LF-16 焼土	貝類	皮				
	サケ科	椎骨	fr.	1		
	シカ	中手・中足骨	fr.	4		
	哺乳類			60	5.6g	

引用文献

阿部宗明　1981 『原色魚類検索図鑑』 9版　北隆館

奥谷喬司, 波部忠重　1987 『学研生物図鑑　貝　Ⅱ』 5刷　学習研究社

関口晃一ほか　1974 『アニマルライフ　動物分類表』NO.152

中村守純　1982 『原色淡水魚類検索図鑑』 7版　北隆館

林　壽郎　1982 「動物　Ⅱ」『標準原色図鑑全集』20　19刷　保育社

3 「北海道千歳市キウス5遺跡で検出された植物種子」

北海道大学文学部　吉崎　昌一
同　上　　椿坂　恭代

(1) 遺跡に関する情報

遺跡の所在：千歳市　中央　852－18　ほか
調査　機関：(財) 北海道埋蔵文化財センター
調査担当者：鬼柳彰ほか
調査　日時：平成6年5月6日～平成6年10月29日
掲載報告書：北海道埋蔵文化財センター報告　第　集
資料の年代：サンプル土壌を採集した遺構によって縄文時代晩期から擦紋時代以降に及ぶ。遺構LF-18～LF-21は縄文時代晩期かそれ以前。UC-26,30はおそらく擦紋時代以降。その他の資料は縄文時代晩期中葉と考えられている。

(2) あつかった資料の性格

抽出された種子には、泥炭質の地層から出土したものによく見られる黒ずんだ色彩を持つ酸化した種子と、明らかに炭化した種子の2種類が認められる。炭化した種子は、おそらく直接の人間生活との関わりのなかで加熱されたもので、酸化した種子は、当時の集落をとりまく環境の中で加熱を受けない状況下で残存、時間経過で酸化したと思われる。したがって、ともにこの遺跡に居住していた人間集団の周辺環境に存在していたものであろう。検出された炭化植物種子は総数で107粒、このうち分類のできなかった種子が42粒、ほかにクルミの堅果破片が0.6g抽出された。また炭化した冬芽が5個みつかったが、どの樹種にものか不明である。酸化した種子は約900粒、分類できなかったものが7粒ある。これらの資料の出土遺構と同定結果をまとめて表Ⅳ－2に示しておく。

(3) 同定結果

炭化した状態で出土した資料は、不明種子42粒を除き5属判明した。タデ属 *Polygonum* L.、マタタビ属 *Actinidia* Lindl.、ブドウ属 *Vitis* L.、ミズキ属 *Cornus* L.、クルミ属 *Juglans* L. である。

酸化した状態で出土した資料は、雑草や開地性の木本種子が多い。ナス科 SOLANACEAE, ヒユ科 AMARANATHACEAE, カヤツリグサ科 CYPERUS, ナデシコ科 CARYOPHYLLACEAE, マタタビ属 *Actinidia* Lindl., ニワトコ属 *Sambucus* L., タラノキ属 *Aralia* L., ミツバウツギ属 *Staphylea* L., キハダ属 *Phellodendron* Rupr., ブドウ属 *Vitis* L., ミズキ属 *Cornus* L. などが含まれる。

これらの植物は北海道の遺跡から一般的に出土するものばかりであるといってよい。マタタビ属として分類したものは、サルナシ *Actinidia arguta* である可能性が高く、北海道ではコクワとしてよく知られるもの。ブドウ属はおそらくヤマブドウ *Vitis coignatiae*, クルミ属はオニグルミ *Juglans ailanthifolia* としてよい。タラノキ属としたものは、種子の形態から見てウド *Aralia cordata* ではなく、むしろタラノキ *Aralia elata* であろう。表層の攪乱された土壌によく見られる植物で、樹皮や根は薬用として、新芽は山菜として利用されている。コクワやブドウはいまでも食用としての利用度が高い。クルミ堅果破片は炭化しており、加熱の痕跡のないものは殆ど見られない。この様な出土状態が一般的であることを考えると、クルミを利用するのには加熱して破砕するプロセスが用いられていたのであろう。

表Ⅳ－２　キウス５遺跡出土種子　[未炭化種子]

遺構名	サンプル採取位置	層位	ナス科（粒）	ヒユ科（粒）	カヤツリグサ科（粒）	ナデシコ科（粒）	マタタビ属（粒）	ニワトコ属（粒）	クラノキ属（粒）	ミツバウツギ属（粒）	キハダ属（粒）	キハダ属（片）	ブドウ属（粒）	ブドウ属（片）	ミズキ属（粒）	ミズキ属（片）	不明種子（粒）
LF-14	焼土	Ⅴ-1											1				
LF-18	焼土	Ⅴ					1										
LF-19	焼土	Ⅴ					1	1									
LF-22	焼土	Ⅴ-1	4	71	49	14	13		3	1		2	1	1	3	2	7
LF-23	焼土	Ⅴ					1	1									
LF-24	焼土	Ⅴ					1										
UFC-1	剥片集中 b-3-ニ	Ⅲ-5											3	34			
UFC-1	剥片集中 c-3-イ	Ⅲ-5					2						5	71			
UFC-1	剥片集中 c-3-ロ	Ⅲ-5					2										
LF-6	土壌	Ⅴ-1					2				1		2	1	14	3	
LF-7	土壌	Ⅴ-1		6			3						3	1	5	4	
LF-8	土壌	Ⅴ-1		31	119		4		6			2	1	2	2		
LC-10	炭化物集中	Ⅴ-1											1	1			
LC-45	炭化物集中	Ⅴ-1					2						1				
LC-47	炭化物集中	Ⅴ-1					2							1			
CC-9	炭化物集中	Ⅲ-5a					137		306								
CC-12	炭化物集中	Ⅲ-5a					3		55				1		1		
計			4	108	168	14	176	2	307	1	1	4	19	112	25	9	7

表Ⅳ－３　キウス５遺跡出土炭化種子

遺構名	サンプル採取位置	層位	クワ属（粒）	マタタビ属（粒）	ブドウ属（片）	ミズキ属（粒）	クルミ属（g）	不明種子（粒）	
UF-13	焼土	Ⅲ-1	11	1					冬芽（2）
LF-13	焼土	Ⅴ-1	1	32		1		27	冬芽（1）
LF-14	焼土	Ⅴ-1					0.10		
LF-15	焼土	Ⅴ-1	1	3			＜0.01	2	
LF-16	焼土	Ⅴ-1	3	1				3	
LF-17	焼土	Ⅴ					0.12		
LF-21	焼土	Ⅴ	1						
LF-22	焼土	Ⅴ-1	2	3				9	
LF-25	焼土	Ⅴ					＜0.01		
LF-28	焼土	Ⅴ					0.02		
LF-30	焼土	Ⅴ					0.15		
LF-31	焼土	Ⅴ					0.16		
UC-35	炭化物集中	Ⅲ-1	1	1	1				
UFC-1	剥片集中 c-1-イ	Ⅲ-5	1						
LH-3	住居跡	Ⅴ					＜0.01		
LC-45	炭化物集中	Ⅴ-1		2			0.05		
			21	43	1	1	0.60	41	

4. 千歳市キウス5遺跡出土炭化木材の電子顕微鏡観察

(財) 北海道埋蔵文化財センター　西脇対名夫

1. はじめに

本年度のキウス5遺跡の調査では、低位の段丘を構成する堆積物中で多くの焼土・炭化物集中が確認され、遺構数の大半を占めている。しかしこれらは一般に規模の違いなどを除けば特徴に乏しく、特に炭化物集中は遺物の出土も稀であるために、発掘時の観察のみからその性格を窺うことは難しい。そこで遺構から炭化木材の試料を採取してその観察から焼土や炭化物集中の特徴を明らかにする可能性について検討した。具体的には組織の観察から樹木の分類について推定するにとどまったが、一応その結果を示して今後の調査方法の検討に備えたいと思う。

木材の組織については農林水産省森林総合研究所の平川泰彦先生に多くの御教示を頂いた。また電子顕微鏡を用いての観察には当センター花岡主任の懇切な指導があった。特記して感謝申し上げたい。もとより観察・同定の内容における誤りは筆者のものである。

2. 試料の採取・観察方法

試料とした炭化木材は、発掘中に木材の原形をある程度保っていると判断して形状や採取位置を記録し番号を付けて取り上げたものと、遺構土壌の浮遊選別によって得られた炭化木材片の中から無作為に選び出したものとがある。

いずれも風乾後、一塊の材片から安全カミソリ刃を用いて一辺3～5㎜の立方体3個を切り出し、径10㎜の試料載せ台に3個を並べて実体顕微鏡で観察しながらそれぞれ木口面・柾目面・板目面を上に向けて接着した。取り上げ番号のあるものは基本的に同一の木材に由来する材片と考えられるので試料1件について1組の検鏡用試料を製作した。また浮遊選別で得たものは1箇所の遺構につき3～5塊の材片を無作為に選び、それぞれ1組の検鏡用試料に加工した。

試料はイオンスパッタリング装置で金被覆 (被膜厚300～500Å程度) し、走査型電子顕微鏡 (日本電子製JSM-T200型) を用いて観察した (加速電圧25kV、WD=20㎜)。また必要に応じて6×7判の写真撮影をおこなって組織細部の検討材料とした。

ここでは遺構13箇所から採取した60件の試料を観察した結果について述べる。

3. 属名の推定

木材の樹種同定を目的として各試料を観察した結果を表1に示す。概ね問題なく推定できると思われたものとしてカエデ・カツラ・トネリコ・ハリギリ・モクレン・クワ・コナラ・サクラの各属があり、疑問が残るが可能性のあるものとしてマタタビ・ハンノキ・クリ・ミズキ・アサダ・ニガキ・ニワトコ・ブドウの各属が数えられた。

属名推定の作業上主に問題となったのはコナラ属とクリ属の弁別であった。コナラ属には広放射組織という大きな特徴があるが、小さな検鏡用試料の中には現われない場合があり、組織のよく似たクリ材との区別に迷う場合が多かった。佐伯浩 (1982) はクリの道管放射組織間壁孔は不揃いな卵円形、ミズナラでは横に連なる傾向があることを指摘している。今回観察した範囲では道管放射組織間壁孔は横に連なった例が多く (写真4)、卵円形に近いもの (写真2) は稀であった。いずれにしても検鏡用試料製作の時点で、実体顕微鏡下で広放射組織の有無を確認しておくべきであった。ハンノキ属と推定したもの

の集合放射組織が確認できず疑問の残った試料 (LC-41～44 の No.7) についても同様な反省をしているところである。

4. 推定結果からみた遺構の性格

1 遺構あたりの検鏡試料数は多くないが、UC-3・CC-9 のようにその全てが、また KC-27 のように比較的多くの試料のほとんどが同じ属と推定された遺構については、通常の焼き火跡というより 1 個の株が燃えた際の産物である可能性を考える必要が必要があるかも知れない。明らかに焼き火の跡とみられる LF-15・22 などでも同様な結果が出ているので、樹種同定のみからこうした推定をおこなうことはできないのであるが、発掘中に確認された特徴と併せて判断の材料となることは事実であろう。特に UC-3 や KC-27 など現場で炭化木材の出土位置ないし個体の区別をしながら取り上げた例については無視できない結果であると言える。今後こうした観察例を増やすことによって、さまざまな燃え跡の類型を区別できるようになることが期待される。

推定された属名から実際に木材が由来した可能性の高い樹種を考えてみると、ミズナラまたはカシワ・コナラ、ヤチダモまたはアオダモ、イタヤカエデなどのカエデ類、カツラ、ヤマグワなどが考えられる。いずれも道央地方の森林にごく普通の樹種であり、遺跡付近の林や河畔で無作為に落ち枝や流木を集めた場合にこのような構成になることは十分ありうるであろう。今回の結果をみる限り、燃やされた木材に意識的な選択が加わっていたとは言いにくい。

5. 今後の課題

今回観察した試料の多くは通常の地上部分の木材とみられるもので、その組織について解説した文献を幾つか参照することができたが、株の燃え跡などを考える上では今後模の組織についても標本を集めながら樹種の識別を試みていく必要があろう。

同定結果からは縄文時代中期以降、現在と大差のない樹種構成の森林が遺跡の周囲にみられたものと推定された。しかし現在かなり普遍的に見られるにもかかわらず、炭化木材として確認されなかったものもある。例えばシラカンバなどのカバ属、オニグルミ属、チョウセンヤマナラシなどのハコヤナギ属、ヤナギ属、シナノキ属、ハルニレ・オヒョウなどのニレ属、そして針葉樹は全く欠落している。これらがいずれもどちらかと言えば軽軟で耐朽性に乏しい木材であることは注意される点で、おそらく燃料として使われていても大きな炭化材片として残る確率が低いとみられる。また先に述べたように落ち枝や流木を主な燃料とした場合には腐朽のためにこれらの樹種の割合が低下することも考えられる。ある程度腐った木材が一般に生木より乾燥しやすく点火しやすいことは我々もよく経験するところで、当時も朽ち木が燃料として好まれていたとすると、耐朽性の低い木材が組織を保って炭化する機会は少なくなるであろう。今回観察した例では KC-27 出土のカツラ材の多くで柔細胞が形状を失っており、やや腐ってから燃えた可能性を示しているほか、他の遺構の試料でも組織の中に菌核・菌糸らしいものが見られる例もあった。今後こうした腐朽の状態について体系的に観察する作業、また炭化していない木材の樹種同定を進め、炭化木材による結果と比較する手続きが必要となってくるものと思われる。

同定される樹種の内容に上記のような制約がある可能性を考慮しても、今回の結果からは遺跡の形成当時クリやトチノキが付近に豊富に存在したとは考えにくい。縄文時代以降の本州では重要な食料であったと考えられるこの 2 種の樹木が積極的に北海道、特に現在自生の北限とされている道央やそれ以東へ移入されていたかどうかは興味深い問題である (山田 1993)。今回の調査で出土した縄文時代晩期の木製品の 1 点がクリ材製とされているが (図Ⅲ -88 の 1)、こういったものの意味を考える上でも今後

とも種子や花粉とともに木材によってその有無を確認していく必要があろう。

引用文献

佐伯浩 1982『走査電子顕微鏡図説木材の構造』日本林業技術協会

山田悟郎 1993「北海道の遺跡から出土した植物遺体について－堅果類を中心として」『古代文化』第45巻第4号 pp.13-22

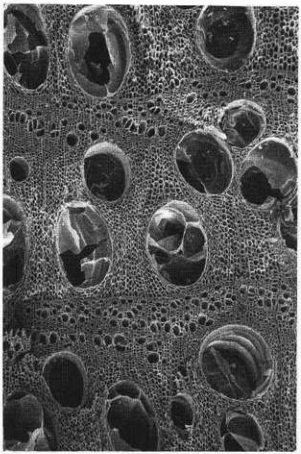


写真１　LF-15　prp.2　木口面　50倍

写真２　LF-15　prp.2　柾目面　750倍

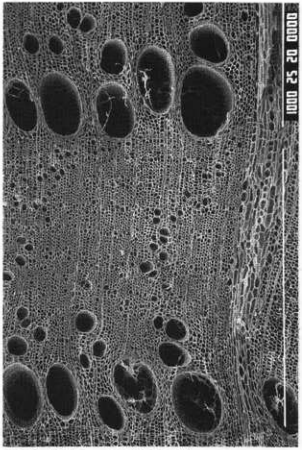


写真３　LC-45　prp.4　木口面　75倍

写真４　LF-14　prp.5　柾目面　350倍

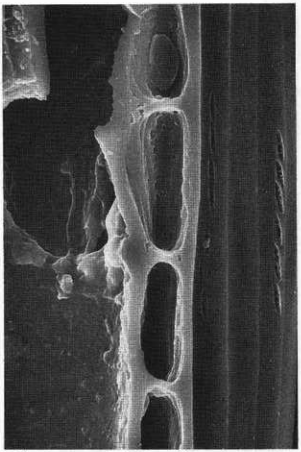


写真5　UC-3　No. 1　柾目面　1000倍

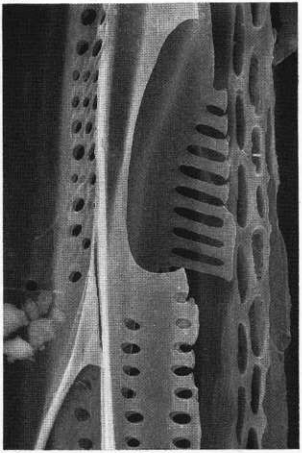


写真6　UC-8　No. 2　柾目面　1000倍

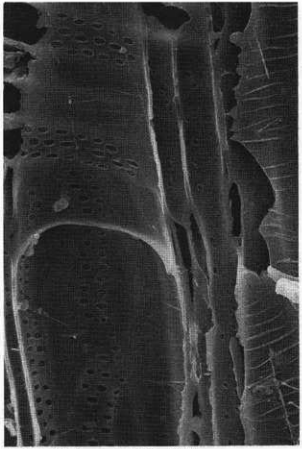


写真7　KC-19　prp. 4　柾目面　750倍

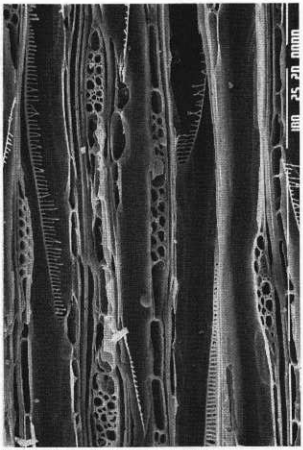


写真8　LC-41～44　No. 5　柾目面　200倍

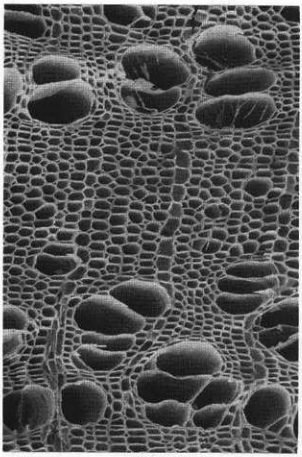


写真9　LF-14　prp.3　柾目面　200倍

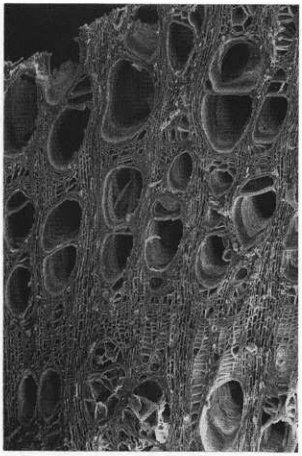


写真10　LC-41～44　No.6　柾目面　75倍

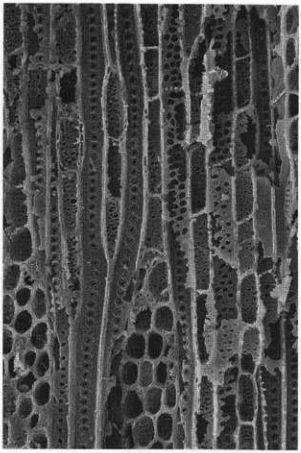


写真11　KC-19　prp.5　柾目面　350倍

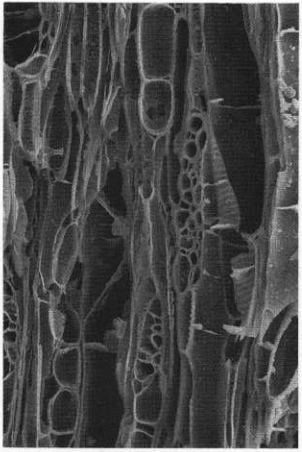


写真12　LC-45　prp.1　柾目面　100倍

表Ⅵ－4　炭化材組織観察表

遺構名	層名	取上番号	試料名	道管	放射組織	軸方向柔組織ほか	鑑定属名	年代	備考
UC-3		No.1	pp.1	環孔材。孔圧道管1~2列。小道管単独ないし2個放射方向に複合。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	ほぼ同性、上下端に方形細胞。1~3細胞幅。数~40細胞高。単壁孔。	ターミナル柔組織。単壁孔。	トネリコ属	縄文以降？	
		No.2	pp.1	環孔材。孔圧道管1~3列。小道管単独ないし2個放射方向に複合。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。1~3細胞幅。高くない。単壁孔。	ターミナル柔組織3~7細胞幅。横断に有縁壁孔。	トネリコ属		写真5
		No.3	pp.1	環孔材。孔圧道管1~3列。小道管単独。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。1~3細胞幅。高くない。	ターミナル柔組織3~5細胞幅。単壁孔。周囲柔組織顕著。横断に有縁壁孔。	トネリコ属		
		No.4	pp.1	環孔材。孔圧道管1~2列。小道管単独。単せん孔。らせん肥厚なし。道管放射組織周壁孔小さい。チロース。	同性。1~3細胞幅。高くない。	ターミナル柔組織5~6細胞幅。周囲柔組織顕著。横断に有縁壁孔。横材にビスフレック。	トネリコ属		
		No.5	pp.1	環孔材。孔圧道管1~2列。小道管単独ないし2個放射方向に複合。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。1~3細胞幅。数~10数細胞高。	ターミナル柔組織9~11細胞幅。	トネリコ属		
UC-8		No.1	pp.1	環孔材。孔圧道管1~3列。小道管火炎状配列。単せん孔。らせん肥厚なし。道管壁互壁孔は対列状・階段状。　壁孔材。小	同性。単列。高くない。広放射組織は見られない。	周囲仮道管発達。	コナラ属　（クリ属）	縄文以降？	
		No.2	pp.1	散孔材。2~3個が放射状に複合。単せん孔。らせん肥厚なし。道管壁互壁孔は対列状・階段状。　壁孔材。小	直立細胞を含む同性。1~2細胞幅。かなり高い。	ターミナル柔組織3~4細胞幅。	モクレン属		写真6
		No.3	pp.1	道管火炎状配列。単せん孔。らせん肥厚なし。道管放射組織周壁孔横に連なる。チロース。	同性。1~2細胞幅。高くない。広放射組織見られない。		コナラ属　（クリ属）		
		No.4	pp.1	同上。孔圧道管1~2列。	同性。1~2細胞幅。10細胞高未満。広放射組織は見られない。	周囲仮道管発達。	コナラ属　（クリ属）		
		No.5	pp.1	環孔材。孔圧外へ向かって急激に小型化、火炎状配列。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。1~2細胞幅。10細胞高。広放射組織あり。		コナラ属		
UC-26		なし	pp.1	環孔材。単せん孔。らせん肥厚なし。多数の交互壁孔。内孔レンズ状。	同性。1~4細胞幅。		トネリコ属		
UF-13	Ⅱ-5	なし	pp.1	環孔材。単せん孔。らせん肥厚なし。	同性。1~2細胞幅。数~10数細胞高。広放射組織あり。		コナラ属	縄文晩期中葉	
		なし	pp.2	散孔材。単独ないし2~3個が放射・横・斜め方向に複合。単せん孔。らせん肥厚あり。	同性。1~5細胞幅。10数~20数細胞高。	ターミナル柔組織2~3細胞幅。	カエデ属		
		なし	pp.3	痕れて不明瞭。環孔材か。単せん孔。らせん肥厚あり。	確認できない。		不明		樹木でない？
LF-14	V-1	なし	pp.1	環孔材。孔圧道管1列。小道管単独。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。1~3細胞幅、単列多い。	ターミナル柔組織10細胞幅。	トネリコ属	縄文晩期中葉	
		なし	pp.2	散孔材。単独ないし2~3個放射方向に複合。単せん孔。らせん肥厚あり。	ほぼ同性、上下端に方形細胞あり。1~3細胞幅。	ターミナル柔組織顕著でない。	サクラ属　（カエデ属）		

遺跡名	層名	取上番号	試料名	道管	放射組織	軸方向柔組織ほか	推定属名		年代	備考
		なし	ppp.3	環孔材に近い。年輪後半部の道管小。単独ないし2~4個放射・斜方向に複合。階段セン孔。らせん肥厚なし。	直立細胞が5~4層敷高に達する異質な異性。1~4細胞幅。20~40細胞高。		ミズキ属			写真9
		なし	ppp.4	散孔材。単独ないし2~4個放射方向に複合。単セン孔。らせん肥厚あり。道管放射組織開壁孔は楕円形。2列に横へ連なる。	同性。1~3細胞幅。数~20 数細胞高。		(アサダ属)			
		なし	ppp.5	環孔材。単セン孔。らせん肥厚なし。道管放射組織壁孔線に連なる。チロース。	同性。1~2細胞幅。単列多い。数~20細胞高。広放射組織は見られない。		コナラ属	(クリ属)		写真4
LJ-15	V-1	なし	ppp.1	環孔材。孔圏道管1~2列。孔圏外急激に小型化。火炎状。単セン孔。らせん肥厚なし。道管放射組織開壁孔線長。チロース。	同性。1~2細胞幅。広放射組織見られない。	周囲仮道管散在。	コナラ属	(クリ属)	縄文晩期中葉	
		なし	ppp.2	環孔材。孔圏道管1~3列。小道管火炎状。単セン孔。らせん肥厚なし。道管放射組織開壁孔形。チロース。	同性。1~2細胞幅。広放射組織見られない。	周囲仮道管発達。	クリ属	(コナラ属)		写真1・2
		なし	ppp.3	環孔材。孔圏道管1~2列。孔圏外急激に小型化。火炎状。単セン孔。らせん肥厚なし。道管放射組織開壁孔線長。チロース。	ほぼ同性。方形細胞含む？ 1~2細胞幅。広放射組織見られない。	周囲仮道管発達。	コナラ属	(クリ属)		
		なし	ppp.4	環孔材。孔圏道管1列。単セン孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。単列。数~10数細胞高。広放射組織あり。	年輪幅きわめて狭い。	コナラ属			
		なし	ppp.5	環孔材。孔圏道管1~2列。孔圏外急激に小型化。単セン孔。らせん肥厚なし。道管放射組織壁孔横に連なる。チロース。	ほぼ同性。方形細胞含む？ 単列。広放射組織見られない。	年輪幅狭い。周囲仮道管発達。	コナラ属	(クリ属)		
LJ-22	V-1	なし	ppp.1	環孔材。孔圏道管1~2列。小道管火炎状？ 単セン孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。単列。広放射組織見られない。	年輪幅きわめて狭い。周囲仮道管発達。	コナラ属	(クリ属)	縄文晩期中葉	
		なし	ppp.2	環孔材。孔圏道管1~2列。孔圏外急激に小型化。火炎状。単セン孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。単列。広放射組織あり。	周囲仮道管発達。	コナラ属			
		なし	ppp.3	環孔材。孔圏道管2~4列。単独ないし放射方向に2~3個複合。小道管単独できわめて厚壁。単セン孔。らせん肥厚なし。	異性。幅に上下端に方形・直立細胞を含む。1~3細胞幅。単列多い。数~20数細胞高。	道管放射組織開壁孔と道管相互壁孔はほぼ同形。	(ニガキ属)			
		なし	ppp.4	環孔材。孔圏外急激に小型化。火炎状。単セン孔。らせん肥厚なし。道管放射組織開壁孔横長。チロース。	同性。単列。数~10数細胞高。広放射組織あり。	周囲仮道管発達。	コナラ属			
		なし	ppp.5	環孔材。孔圏道管1列。小道管火炎状？ 単セン孔。らせん肥厚なし。道管放射組織開壁孔横長？ チロース。	同性。1~2細胞幅。広放射組織あり。	年輪幅きわめて狭い。周囲仮道管発達。	コナラ属			

遺構名	層名	取上番号	試料名	道管	放射組織	軸方向柔組織ほか	推定属名	年代	備考
LC-41	V-1 '44	No.1	prp.1	環孔材。孔圏道管1~2列。ほぼ単独。道管放射組織開壁孔は他の壁孔と同形。単せん孔。らせん肥厚なし。	ほぼ異性、方形細胞あり。1~2細胞幅。10数細胞高。	周囲柔細胞発達。	トネリコ属	縄文晩期中葉	
		No.2	prp.1	散孔材。道管数少なく単独。年輪の秋手部で小型化。単せん孔。壁に階段せん孔。らせん肥厚なし。	ほぼ異性。1~3細胞幅。30細胞高以上のものあり。	個あり。直系繊維。道管壁孔流れてらせん肥厚状に見える。	不明		
		No.3	prp.1	環孔材。孔圏道管1列。小道管火炎状？ 単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。単列。低い。広放射組織見られない。	年輪幅きわめて狭い。道管放射組織開壁孔は不規則な網形？	クリ属	(コナラ属)	
		No.4	prp.1	環孔材。孔圏道管1~2列。小道管火炎状？ 単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	異性。単列。ほぼ10細胞高未満。広放射組織あり。		コナラ属		
		No.5	prp.1	散孔材。径小さく多数。単独のもの多く、2~3個複合もあり。階段せん孔。らせん肥厚なし。	直立細胞が散細胞高におよぶ。広放射組織。1~2細胞幅。	道管放射組織開壁孔横に長く、階段状ないし対列状。	カツラ属		写真8
		No.6	prp.1	環孔材。孔圏道管1~3列。単独ないし2~3個放射方向に複合。単せん孔。らせん肥厚なし。壁孔対列状。	不明。ほぼ同性できわめて高い広放射組織が目立つ。	ターミナル柔組織発達。	(ブドウ属)		写真10
		No.7	prp.1	散孔材。2~5個が放射方向に複合。階段せん孔。らせん肥厚なし。	同性。1~2細胞幅、ほとんど単列。5~10細胞高。集合放射組織は見られない。		(ハンノキ属)		
LC-43	V-1	なし	pp.1	散孔材。単独ないし2~3個が放射・横方向に複合。階段ないし単せん孔。らせん肥厚なし。チロース？	紡錘状異性。1~4細胞幅。10数細胞高。	道管放射組織開壁孔は対列状・階段状。	(エゾトコ属)	縄文晩期中葉	写真12
		なし	prp.2	環孔材。孔圏道管1~2列。孔圏外急激に小型化。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。1~2細胞幅。広放射組織あり。	周囲仮道管発達。	コナラ属		
		なし	prp.3	環孔材。孔圏道管1列。孔圏外では接線状に長く連なる複合管孔を形成。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性、あるいは直立細胞を含む異性。2~4細胞幅。数30細胞高。		ハリギリ属		
		なし	prp.4	環孔材。孔圏道管1~2列。孔圏外急激に小型化。火炎状。単せん孔。らせん肥厚なし。道管放射組織開壁孔横に連なる。	同性。単列。広放射組織あり。	周囲仮道管発達。	コナラ属		写真3
		なし	prp.5	環孔材。孔圏外急激に小型化。火炎状。単せん孔。らせん肥厚なし。道管放射組織開壁孔横に連なる。	同性。1~2細胞幅。広放射組織あり。		コナラ属		
KC-19	V-3	なし	prp.1	環孔材。孔圏道管1~2列。孔圏外小規状に複合。単せん孔。らせん肥厚あり。チロース。	異性、上下端に直立細胞。1~5細胞幅。数10細胞高のものあり。	道管壁のらせん肥厚はかなり著。	クワ属	縄文後期後葉	
		なし	prp.2	同上。	異性、上下端に方形細胞。1~4細胞幅。かなり高いものあり。		クワ属		
		なし	prp.3	散孔材。単独ないし2~4個が放射・斜め方向に複合。単せん孔。らせん肥厚あり。	同性。1~4細胞幅。きわめて高いものあり。	道管放射組織開壁孔は1~2列ずつ横に並ぶ。	カエデ属		
		なし	prp.4	散孔材。単独ないし2~3個が放射方向に複合。単せん孔。らせん肥厚あり。	同性。1~3細胞幅。30細胞高以上のものあり。	道管放射組織開壁孔は2~3列ずつ横に並ぶ。	カエデ属		写真7
		なし	prp.5	環孔材。孔圏道管1~2列。単独ないし2~3個が方向に複合。単せん孔。らせん肥厚なし。	異性、単列異部が長い。1~5細胞幅。10数~20数細胞高。	道管壁孔が流れてらせん肥厚状に見える部分あり。	(マタタビ属)		写真11

遺構名	層名	取上番号	試料名	道管	放射組織	軸方向柔組織ほか	推定属名	年代	備考
KC-27	V-3	No.1	ppp.1	散孔材。径小さく多数。単独多く、2~3個不規則に複合するものも。階段せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	柔細胞異行して不明。	道管放射組織開放孔は横長で対列状・階段状。菌核らしいもの。	カツラ属	縄文後期後葉	
		No.2	ppp.1	散孔材。径小さく多数。階段せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	異性、直立細胞あり。		カツラ属		
		No.3	ppp.1	散孔材。径小さく多数。ほぼ単独。2個軸方向に複合するものも。階段せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	柔細胞異行して不明。	菌核らしいもの。	カツラ属		
		No.5	ppp.1	散孔材。径小さく多数。単独多く、2~3個不規則に複合するものも。階段せん孔。らせん肥厚にあり？ チロース。	異性。1~2細胞幅。高くない。	柔組織はかなり異行。	カツラ属		
		No.7	ppp.1	同上。らせん肥厚はない。	異性、直立細胞あり。1~2細胞幅。高くない。	同上。菌核らしいもの。	カツラ属		
		No.9	ppp.1	散孔材。径小さく多数。ほぼ単独。階段せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	柔細胞異行して不明。	菌核らしいもの。	カツラ属		
		No.11	ppp.1	散孔材。径不揃い。単独ないし2~数個不規則に複合。階段せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	細胞な異性、単列異部長い(4細胞高以上)。1~4細胞幅。10数細胞高以上。			(ニワトコ属)	
		No.13	ppp.1	散孔材。径小さく多数。単独多く、2~数個不規則に複合するものも。階段せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	異性、上下端に直立・方形細胞数細胞高。柔組織の異行ですね。	道管放射組織開放孔は横長で対列状・階段状。	カツラ属		
CC-9	V-5a	なし	ppp.1	散孔材。単独ないし2~3個が放射方向に複合。単せん孔。らせん肥厚あり。	同性。1~4細胞幅。30細胞高程度のものあり。	道管放射組織開放孔は2~3列ずつ横に並ぶ。	カエデ属	縄文中期後半	
		なし	ppp.2	同上。	同性。1~4細胞幅。25細胞高に達する。	道管放射組織開放孔は2列ずつ横に並ぶ。	カエデ属		
		なし	ppp.3	同上。	同性。1~3、稀に4細胞幅。20数細胞幅。	同上。	カエデ属		
		なし	ppp.4	同上。	同性。1~3細胞幅。20数細胞高。	道管放射組織開放孔は2~3列ずつ横に並ぶ。	カエデ属		
CC-12	V-5a	なし	ppp.1	環孔材。孔圏道管1~2列。孔圏外急激に小径化、火炎状。単せん孔。らせん肥厚なし。チロース。	同性。単列、稀に2細胞幅。広放射組織あり。		コナラ属	縄文中期後半	
		なし	ppp.2	散孔材。単独ないし2~4個が放射方向に複合。単せん孔。らせん肥厚あり。	ほぼ同性、方形細胞別にある？ 1~3細胞幅。40細胞高に達する。	道管放射組織開放孔は2~3列ずつ横に並ぶ。	カエデ属		

報告書抄録

ふ り が な	ちとせし きうす5いせき・きうす7いせき (2) ・けねふち8いせき
書 名	千歳市 キウス5遺跡・キウス7遺跡（2）・ケネフチ8遺跡
副 書 名	北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第92集
編 著 者 名	皆川洋一、西脇対名夫、花岡正光、中山昭大、鬼柳 彰
編 集 機 関	財団法人北海道埋蔵文化財センター
所 在 地	〒064 札幌市中央区南26条西11丁目 (011) 561-3131
発 行 年 月 日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
キウス5	ちとせしちゅうおう 千歳市中央 852-18他	01224	93	42度 52分 33秒	141度 43分 45秒	19940506 ～19951029	3,000	道路（北海道横断自動車道）建設に伴う事前調査
キウス7	ちとせしちゅうおう 千歳市中央 852-31他	01224	265	42度 52分 32秒	141度 43分 48秒	19940506 ～19941029	1,600	同上
ケネフチ8	ちとせしきょうわ 千歳市協和 1172-1他	01224	264	42度 53分 16秒	141度 47分 5秒	19940919 ～19941029	830	同上

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
キウス5	集落 散布地	縄文 続縄文 擦文	竪穴住居 7軒 土壙 19基 焼土 57カ所 集石 6カ所	縄文早～晩期の土器、続縄文土器、須恵器、縄文・続縄文の各種石器、翡翠製玉、土製玉、縄文の柄付木製品、カゴ状繊維製品	キウス川右岸の低湿地性遺跡、縄文期の河道を調査 段丘上にて縄文早中～後期・晩期の住居跡を発掘
キウス7	集落 散布地	縄文 続縄文 擦文	竪穴住居 4軒 土壙 6基 Tピット 4基 焼土 14カ所	縄文土器、続縄文土器、擦文土器、縄文時代の各種石器	キウス川左岸の段丘上。住居跡は縄文後期と晩期。土壙の一つは縄文後期の墓。
ケネフチ8	散布地	縄文	焼土 2カ所 Tピット 5基	縄文中・晩期の土器・石器	剣淵川左岸の尾根上。集落跡の縁辺部（?）。

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第92集

キウス５遺跡
キウス７遺跡(2)
ケネフチ８遺跡

―北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成７年３月31日　発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター

〒064　札幌市中央区南26条西11丁目

TEL　(011) 561―3131

印刷　　興国印刷株式会社

〒063　札幌市西区西町南13丁目１―40

TEL　(011) 661―2221

この報告書は、日本道路公団札幌建設局の御了解を得て増刷したものです。